

Radia を使用する HP OpenView Administrator Workstation

Radia System Explorer ガイド

バージョン: 4.0i

Windows オペレーティング システム用



製造パート番号: T3420-90028

2005 年 7 月

© Copyright 2004 Hewlett-Packard Development Company, L.P.

ご注意

1. 本書に記載した内容は、予告なしに変更することがあります。
2. 当社は、本書に関して特定目的の市場性と適合性に対する保証を含む一切の保証をいたしかねます。
3. 当社は、本書の記載事項の誤り、またはマテリアルの提供、性能、使用により発生した直接損害、間接損害、特別損害、付随的損害または結果損害については責任を負いかねますのでご了承ください。
4. 本製品パッケージとして提供した本書、**CD-ROM**などの媒体は本製品用だけにお使いください。プログラムをコピーする場合はバックアップ用だけにしてください。プログラムをそのままの形で、あるいは変更を加えて第三者に販売することは固く禁じられています。

本書には著作権によって保護される内容が含まれています。本書の内容の一部または全部を著作者の許諾なしに複製、改変、および翻訳することは、著作権法下での許可事項を除き、禁止されています。

権利の制限

合衆国政府が使用、複製、または開示を行う場合、国防総省については **DFARS 252.227-7013** の "Rights in Technical Data and Computer Software" の (c) (1) (ii) に記載されている制限が適用されます。

Hewlett-Packard Company
United States of America

その他の機関については **FAR 52.227-19** の (c) (1) および (c) (2) に記載されている制限が適用されます。

著作権

© Copyright 2004 Hewlett-Packard Development Company, L.P.

商標

Linux は、Linus Torvalds の登録商標です。

OpenLDAP は、OpenLDAP Foundation の登録商標です。

謝辞

PREBOOT EXECUTION ENVIRONMENT (PXE) SERVER
Copyright © 1996-1999 Intel Corporation.

TFTP SERVER
Copyright © 1983, 1993
The Regents of the University of California.

OpenLDAP

Copyright ©1999-2001 The OpenLDAP Foundation, Redwood City, California, USA.

Portions Copyright © 1992-1996 Regents of the University of Michigan.

OpenSSL License

Copyright © 1998-2001 The OpenSSLProject.

Original SSLeay License

Copyright © 1995-1998 Eric Young (eay@cryptsoft.com)

DHTML Calendar

Copyright © Mihai Bazon, 2002, 2003

テクニカル サポート

<http://www.hp.com/managementsoftware/services> のサイトをご覧ください。

ここでは、HP OpenView の製品、サービス、サポートに関するお問い合わせ情報が掲載されています。

サポート専用サイトから、次の内容を参照することができます。

- ドキュメントのダウンロード
- 不具合修正情報
- パッチと更新情報
- 不具合のレポート
- トレーニングの情報
- サポート プログラムの情報

このマニュアルについて

対象読者

このマニュアルは、企業の配布モデルを作成および管理するシステム管理者を対象にしています。

このマニュアルの内容

このマニュアルでは、企業のデスクトップ環境の設定および管理に使用する **Radia ツール**、**Radia System Explorer** について説明します。**Radia** データベースにある配布モデルの管理の概念と、**Radia** 環境を管理する場合に実行するアクションについて説明します。

変更内容の要約

Radia 4.0 で使用する、この版の『Radia System Explorer ガイド (Windows 用)』では、以下の章の情報と手順に対して以下の点が変更されています。

4.0 に関する項目

4.0 と記 4.0 載されている項目は、バージョン 4.0 固有の情報です。

第 2 章: 基本的な使用方法

- 4.0 32 ページの「**[オプション] ダイアログ ボックスを使用して設定を行う**」: **[通知]** が **[ビュー]** メニューの **[オプション] ダイアログ ボックス** のタブのリストに追加されました。
- 4.0 33 ページの「**表 2.7 ~ [全般] タブの設定とその機能**」: 新しいウィンドウ サイズ変更オプション **[分割バーを画面右側に固定]** に関する行が追加されました。
- 4.0 41 ページの「**[通知] タブ**」: 新しい節です。 **[オプション] ダイアログ ボックス** の **[通知]** タブを使用すると、通知サブスクライバに対して生成されるコマンドラインの UID 値と STARTDIR 値をカスタマイズすることができます。マシン名でクライアントに通知する場合や、開始ディレクトリを指定する場合には、 **[カスタム]** をクリックしてください。

第 5 章: Radia System Explorer の追加機能

- 4.0 185 ページの「**通知の詳細を設定する**」: このダイアログ ボックスに、通知コマンドで使用される UID 値と STARTDIR 値が表示されるようになりました。これらの値は、 **[オプション] ダイアログ ボックス** の **[通知]** タブで変更することができます。

編集上の改善点

このバージョンでは、上の表に示した変更点に加え、各章、節、および索引の編集やスタイルを改善しています。

表記について

このマニュアルは、以下の表記に従って記述されています。

表 P.1 ~ スタイル

構成要素	スタイル	例
参照先	斜体	このマニュアルの「 <i>Publishing Applications and Content</i> 」の章を参照してください。
ダイアログ ボックス、ウィンドウ	太字	[Radia System Explorer のセキュリティ情報] ダイアログ ボックスが表示されます。
コード	Andale Mono	radia_am.exe
選択する対象	太字	インストール CD-ROM の Admin ディレクトリを開きます。

表 P.2 ~ 用法

構成要素	スタイル	例
ドライブ (システム ドライブ、マップされたドライブ、CD ドライブ)	斜体のプレースホルダ	<i>SystemDrive</i> :%Program Files%HP は、使用しているコンピュータのシステム ドライブが C: であれば C:%Program Files%HP を意味します。 <i>CDDrive</i> :%client%radia_am.exe は、使用しているコンピュータの CD ドライブが D: であれば D:%client%radia_am.exe を意味します。
ファイル (Radia データベース内)	すべて大文字	PRIMARY
ドメイン (Radia データベース内)	すべて大文字	PRIMARY.SOFTWARE PRIMARY ファイル内の SOFTWARE ドメイン、と表現する場合があります。
クラス (Radia データベース内)	すべて大文字	PRIMARY.SOFTWARE.ZSERVICE PRIMARY ファイル内の SOFTWARE ドメインの ZSERVICE クラス、と表現する場合があります。

次の表は、このマニュアル全体を通して同じ意味で使用される用語を示しています。

表 P.3 ~ 用語 *

* 文脈によっては、同義にならない場合もあります。

用語	別の呼称
アプリケーション	ソフトウェア、サービス
クライアント	Radia Application Manager、Radia Software Manager
コンピュータ	ワークステーション、サーバー
NOVADIGM ドメイン	PRDMAINT ドメイン 注意: Radia データベースのリリース 4.0 からは、NOVADIGM ドメインから PRDMAINT ドメインに名称変更されています。そのため、それ以前のバージョンを使用している場合には、データベース内で NOVADIGM ドメインと表示されます。
Radia Configuration Server	マネージャ、アクティブ コンポーネント サーバー
Radia データベース	Radia Configuration Server データベース

目次

まえがき	5
このマニュアルについて	5
対象読者	5
このマニュアルの内容	5
変更内容の要約	6
表記について	7
1 はじめに	15
Radia System Explorer について	16
配布モデル	17
Radia の用語	18
組織固有の要件の取り扱いについて	19
まとめ	20
2 基本的な使用方法	21
マウスを使用してウィンドウ内の要素を操作する	22
Radia System Explorer を開く	23
[Radia System Explorer] ウィンドウ	25
基本的なウィンドウの操作	25
[Radia System Explorer] ウィンドウをカスタマイズする	26
[Radia System Explorer] ウィンドウのメニュー	26
[Radia System Explorer] ツール バー	31

[オプション] ダイアログ ボックスを使用して設定を行う	32
[全般] タブ	33
[インスタンス オプション] タブ	35
[詳細] タブ	38
[KB AutoImport] タブ	39
[通知] タブ	41
まとめ	43
3 Radia データベースの概要	45
Radia データベース	46
Radia データベースのコンテンツを表示する	48
ナビゲーション履歴	50
複合名	52
Radia データベースにおける継承	54
Radia System Explorer のショートカット メニュー	55
ドメインを操作する	55
ドメインを追加する	55
クラスを操作する	56
クラスを追加する	56
クラスをコピーする	56
クラスを新規作成する	59
クラスを編集する	62
クライアント プロパティ	66
マネージャ プロパティ	66
クラスに属性を追加する	68
オプションの属性編集コントロール	69
クラスを削除する	73
インスタンスを操作する	73
インスタンスを追加する	73
インスタンスをコピーする	74
インスタンスを新規作成して追加する	75
インスタンスを編集する	76
複数のインスタンスを編集する	78
インスタンスの名前を変更する	83
インスタンスを削除する	84
まとめ	85

4 Radia データベースに配布モデルをビルドする	87
配布モデルをビルドする	88
POLICY ドメイン	88
SOFTWARE ドメイン	94
パッケージ間の関係	97
ポリシーを決定する	98
接続のタイプ	101
手動接続	101
ドラッグ アンド ドロップ接続	101
接続の表示	104
コンポーネント クラスのインスタンスをドラッグ アンド ドロップする	112
サービスをポリシーに接続する	114
Radia Policy Server について	118
5 Radia System Explorer の追加機能	121
新規アプリケーション ウィザードを実行する	122
新規アプリケーション ウィザードで MSI の基本的な動作を定義する	135
バージョン グループ エディタ	136
バージョン グループ インスタンスを作成する	137
バージョン グループの割り当て	146
サービスの最適化	149
[サービスの最適化] オプションを使用する	152
Radia サービス グループ	169
コンポーネントの機能拡張	169
サービス グループを設定する際の前提条件	170
マスター グループを作成する	171
Radia Notify	178
通知のダイアログ ボックス	180
通知機能で電子メールを送信する	183
通知機能でアプリケーションを更新する	184
通知機能でアプリケーションを削除する	184
通知の詳細を設定する	185
NOTIFY ファイルの構造	191
通知処理を再試行する	191
Wake-On-LAN クライアントに対するドラッグ アンド ドロップ通知	192

フィルタで Radia データベースの表示内容を指定する.....	193
パーマネント フィルタ	194
テンポラリ フィルタ	197
ベース インスタンスまたは null インスタンスを表示する	197
フィルタ結果を追加する.....	198
コンポーネント クラスのインスタンスをフィルタする	198
高速フィルタ	199
高速フィルタをカスタマイズする.....	200
まとめ.....	203
6 解決プロセスについて理解する	205
解決プロセス	206
ヒープとオブジェクト.....	206
解決プロセスの開始	209
解決の例.....	211
解決プロセスとシンボリック置換	212
まとめ.....	215
7 Radia データベース内の接続規則を管理する	217
はじめに.....	218
接続規則の概要.....	218
新たに追加したクラスで接続を有効にする.....	222
まとめ.....	228
8 機能セット エディタ	229
機能セット エディタの概要.....	230
機能セット エディタにアクセスする	231
Radia MSI 機能セット エディタについて.....	232
ツリー ビュー	233
機能メニュー.....	235
機能の現在の設定	240
Hide と Disable 機能.....	242
機能セット エディタのボタン.....	245

パッケージ情報.....	245
[最大サイズ]	245
[合計サイズ]	245
[選択したサイズ].....	246
Windows の "プログラムの追加と削除" アプレット	246
Windows インストーラ対応パッケージ	248
機能セットをネイティブ モードで管理する	252
まとめ.....	253
9 レジストリ ファイル エディタ	255
レジストリ ファイル エディタ	256
レジストリ ファイル エディタにアクセスする	256
ツリーの展開と折りたたみ.....	258
プロパティ設定コンテキスト メニュー	259
レジストリ キーを編集する.....	261
レジストリ ファイル エディタを閉じる	265
まとめ.....	266
10 Radia Inventory Manager のサポート	267
Radia Inventory Manager について	268
概要	268
Radia と WBEM.....	269
Radia Integration Server	269
まとめ.....	270
A Radia System Explorer のショートカット メニュー.....	271
Radia System Explorer のショートカット メニュー.....	271

B コンポーネント インスタンスを修正する (非プロダクション環境限定) .. 289

コマンドの使用例	291
コンポーネントの追加、編集、置換コマンドにアクセスする	292
コンポーネントを編集する	294
[エディタ セレクタ] ダイアログ ボックスを使用する.....	298
コンポーネント データを置換する	300
コンポーネントを追加する	303
まとめ.....	307

リスト..... 309

図	309
表	317
手順	319

索引..... 321

はじめに

この章は以下を目的としています。

- Radia System Explorer とその用途に理解する。
- Radia 配布モデルについて理解する。
- Radia の用語に理解する。

Radia System Explorer について

Radia System Explorer は、Radia Configuration Server データベースのコンテンツを操作および検査するための対話型グラフィカル ツールです。

Radia System Explorer を使用して、管理者は以下のタスクを実行することができます。

- Radia データベースのユーザーを定義 (つまり、Radia で管理されるデスクトップ コンピュータを特定) することができます。
- 個々のユーザーやワークグループにアプリケーションを割り当てられます。
- アプリケーションとそのファイルを定義することができます。
- 特別なファイルプロパティを定義することができます。
- 実際のポリシーに基づいてアプリケーションをグループ化することができます。
- アプリケーションまたはアプリケーションのグループへのユーザー アクセスを許可することができます。
- ユーザーのデスクトップの設定を管理することができます。

Radia を使用すると、企業全体のデスクトップ コンピュータに対して、アプリケーションの設定、ユーザーのアプリケーションへの接続、およびハードウェアとソフトウェアの監査要件の定義ができるようになります。これらは、目標とすべき設定に対して組織で設定されるポリシーに基づいて行われます。

配布モデル

配布モデルは、Radia で関係が管理されるデスクトップ コンピュータを特定するための情報と、そのコンピュータの目標とすべき設定を記録したものです。配布モデルは、必要に応じて単純にも高機能にもできます。Radia 配布モデルには、少なくとも以下の 5 つの要素が含まれます。

- **ユーザー**
管理するデスクトップを特定するための ID。
例: ユーザーのユーザー ID
- **アプリケーション**
管理するソフトウェア。
例: Microsoft Office
- **アプリケーション ファイル**
アプリケーションを構成するコンポーネント。
例: Microsoft Office には、数百ものレジストリ更新に加えて、約 800 のファイル、DLL、EXE、HLP、ICO が含まれます。
- **配布元**
ユーザーに配布するためにアプリケーション コンポーネントを格納するロケーション。
例: Radia データベース、ローカルの Radia Staging Server
- **配布先**
アプリケーションおよびそのファイルの配布先となる、デスクトップまたは LAN (ローカル エリア ネットワーク) 上のロケーション。
例: C:¥MSOFFICE¥、C:¥WINDOWS

このマニュアルの以降の章では、Radia System Explorer を使用して、アプリケーションの配布モデルを設定および管理する方法について説明します。

Radia の経験を積み、上級のユーザーになってくると、配布モデルにこれら以外の要素を含めることもできるようになります。追加できる要素の例としては、配布スケジュール、エラー処理、セキュリティ、デスクトップからの監査情報の収集などがあります。これらの概念と機能については、Radia ライブラリを参照してください。

Radia の用語

以下の用語については後で詳細に説明されますが、これらの主要な概念についてはここで十分理解しておいてください。

Radia データベースには配布モデルとその配布に関する情報が記録されます。Radia データベースは階層構造になっており、**ファイル**、**ドメイン**、**クラス**、**インスタンス**、および**属性**で構成されます。詳細については、下の表 1.1 を参照してください。

表 1.1 ~ 主要な Radia 用語

用語	簡潔な説明
ファイル 例: PRIMARY ファイル	Radia データベースの階層内で最上位のレベルです。類似するドメインをグループ化します。 PRIMARY ファイルは、配布モデルの定義および管理に使用されます。このファイルは、Radia にあらかじめ設定されているファイルの 1 つで、Radia の初回インストール時にインストールされます。
ドメイン 例: SYSTEM ドメイン	Radia ファイルの論理パーティションです。類似するクラスをグループ化します。 SYSTEM ドメインには、アプリケーションの配布に必要なクラスが含まれます。
クラス 例: USER クラス	配布モデルのカテゴリです。クラスは、クラスのインスタンスの作成に必要な属性 (プロパティまたはフィールドともいう) のテンプレートです。概念的には、リレーショナル データベース構造でのスキーマ、または従来のフラット ファイルでのファイル レイアウトに似ています。配布モデルの 5 つの必須要素 (ユーザー、アプリケーション、アプリケーション ファイル、配布元、および配布先) はそれぞれ、そのクラスで Radia データベースに定義されます。Radia クラスの構造および使用方法については、『Radia Database Reference』を参照してください。 USER クラスでは、Radia 管理対象アプリケーションのユーザーが定義されません。このクラスでは、デスクトップ (クライアント) コンピュータを特定するために必要なすべての属性が定義されます。
クラス インスタンスまたはインスタンス 例: John Doe のコンピュータを定義する USER クラス インスタンス	クラスの特定のオカレンスを保持するオブジェクトです。リレーショナル データ テーブルでの行、または従来のフラット ファイルでのレコードに相当します。クラス インスタンス オブジェクトの属性は、そのクラスの特定のエンティティを記述するデータを保持します。 USER インスタンスは USER クラスから作成されたオブジェクトで、John Doe の Radia 管理対象コンピュータを特定するために必要な情報を保持します。

表 1.1 ~ 主要な Radia 用語

用語	簡潔な説明
属性 属性値	属性は、クラスのデータ要素であり、フィールドまたはプロパティとも呼ばれます。クラスには、そのクラスを構成する各属性の定義(名前、データタイプ、説明、長さなど)が含まれます。クラスから生成された各クラスインスタンスは、クラス内で定義される各属性の値を保持します。
例: John Doe のコンピュータを定義する USER クラス インスタンスの NAME 属性および USERID 属性	USER クラスの NAME 属性はユーザーの名前を、USER ID 属性はユーザー ID を保持します。これらは Radia 管理者が指定します。この例では、NAME 属性には値 "John Doe" が、USER ID 属性には "JDOE" が保持されます。

組織固有の要件の取り扱いについて

Radia には Radia データベースが付属しています。このデータベースは、企業全体にわたるデスクトップコンピュータの設定管理に使用できる一連のコンポーネントであらかじめ設定されています。これらのコンポーネントを使用して、高機能で複雑な配布モデルをビルドおよび管理することができます。

ただし、Radia には柔軟にカスタマイズできるフレームワークが用意されており、それを修正および拡張して組織の個別の要件を満たすことができます。たとえば、独自のコンポーネントを Radia データベースに追加したり、Radia 提供のコンポーネントを拡張したり、社内で独自に開発した実行可能ファイルやサードパーティ提供の実行可能ファイルを統合したりすることで、Radia の基本機能を簡単に拡張することができます。

このマニュアルでは、HP 出荷時の設定状態にある Radia データベースを使用して、Radia System Explorer について説明します。組織で Radia をカスタマイズした場合でも、Radia System Explorer はこのマニュアルで説明するとおりに使用することができますが、マニュアル内に表示される画面のサンプルは実際の環境で表示されるものと異なる場合があります。

管理しやすくするためには、Radia のカスタマイズについては詳細に記録しておき、集中管理を行う場所で常に最新の状態にしておく必要があります。すべての Radia 管理者がアクセスできるプロジェクトフォルダを作成することもできます。

まとめ

- **Radia System Explorer** は、**Radia** データベースのコンテンツを操作および検査するための対話型グラフィカル ツールです。
- **Radia** データベースには配布モデルとその配布に関する情報が記録されます。
- 配布モデルは、**Radia** で関係が管理されるデスクトップ コンピュータを特定するための情報と、そのコンピュータの目標とすべき設定を記録したものです。
- **Radia** にはあらかじめ設定されているデータベースが付属していますが、フレームワークを柔軟にカスタマイズができます。

基本的な使用方法

この章は以下を目的としています。

- マウスを使用して、Radia System Explorer の要素を操作する方法を習得する。
- Radia System Explorer を開く方法を習得する。
- 開いている [**Radia System Explorer**] ウィンドウの表示を操作する。
- Radia System Explorer のメニューを理解する。
- 個人的な設定を行う方法を習得する。
- Radia アプリケーションナレッジベースにインポートする状態ファイルをビルドするためのデフォルトを設定する方法を習得する。

マウスを使用してウィンドウ内の要素を操作する

Radia System Explorer のオブジェクトを操作するには、マウスなどのポインティング デバイスを使用します。Radia System Explorer では、その親しみやすいグラフィカル ユーザー インターフェイスに加え、マウスの左ボタンをクリックまたはダブルクリックすることでアクティブになる、標準的なマウス アクションがサポートされています。また、マウスの右ボタンをクリックすることでアクティブになる、状況に応じたショートカット メニューも用意されています。

次の表は、実行できるマウス アクションについての簡単な説明を示しています。

表 2.1 ~ マウス アクションの概要

マウス アクション	結果
マウスの左ボタンをクリックする。 (左クリック、または単にクリックとも呼びます。)	アイコンが強調表示されます、ドロップダウン メニュー コマンドが選択されます、またはボタンが押されます。
マウスの左ボタンを使用してアイテムをダブルクリックする。(アイテムの選択とも呼びます。)	マウスがポイントしているアイテムに応じて、次のレベルのウィンドウまたはダイアログ ボックスが表示されます。
マウスの右ボタンをクリックする。 (右クリックとも呼びます。)	右クリックされたアイテムに適したオプションが含まれたショートカット メニューが表示されます。
ポイントする。	画面に表示されるポインタが目的のアイテム上で静止するようにマウスを動かします。
ドラッグ アンド ドロップ操作を行う。(マウスの左ボタンでオブジェクトをクリックし、マウス ボタンを押したまま目的のターゲットまでマウス ポインタを動かしてからマウス ボタンを離す)	接続可能なクラスの 2 つのインスタンス間で接続が作成されます、または通知アクションが開始されます。

Radia System Explorer を使用して企業のデスクトップ環境を設定する場合には、ウィンドウ、ドロップダウン メニュー、ショートカット メニュー、メニュー コマンド、ダイアログ ボックスなど、多くの使い慣れたデスクトップ要素が使用されます。

Radia System Explorer を開く

Radia System Explorer を開くには

1. [スタート] ボタンをクリックし、[プログラム] をポイントします。次に、[Radia Administrator Workstation] をポイントし、メニューから [Radia System Explorer] をクリックします。



図 2.1 ~ Radia System Explorer の起動

ログオン ダイアログ ボックスが表示されます。

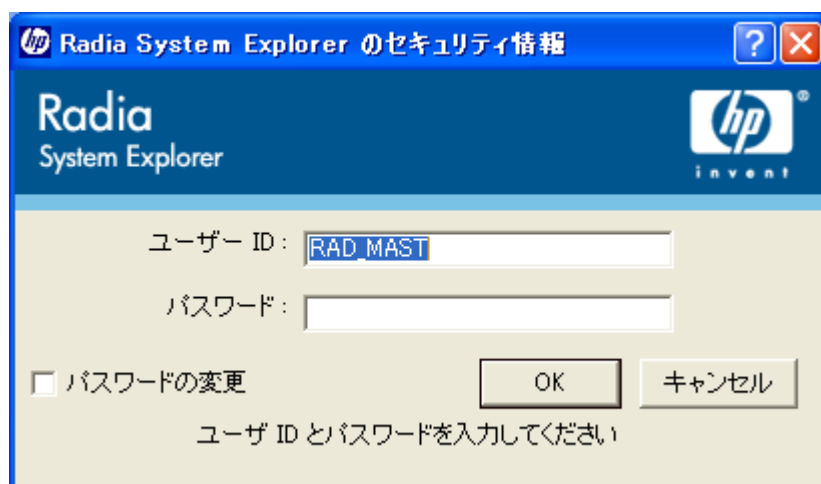


図 2.2 ~ [Radia System Explorer のセキュリティ情報] ダイアログ ボックス

注意

ユーザー ID は、HP から出荷された状態では **RAD_MAST** です。パスワードは必要ありません。この設定は、インストールの過程で変更されている場合があります。この設定は、**[パスワードの変更]** チェック ボックスをオンにして、**[新しいパスワード]** と **[新しいパスワードの確認]** の両テキスト ボックスに新しいパスワードが入力しても変更することができます。

2. **[OK]** をクリックします。**[Radia System Explorer]** ウィンドウが表示されます。

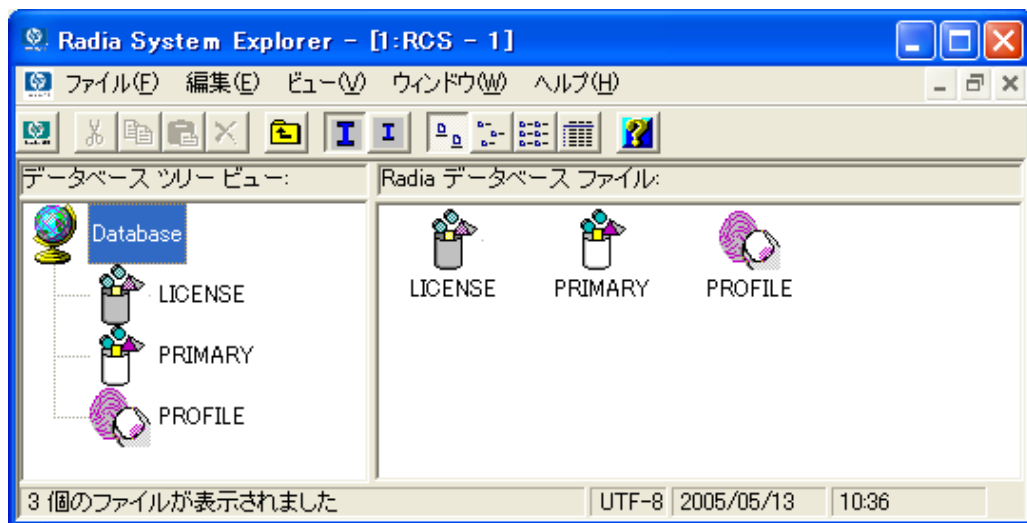


図 2.3 ~ [Radia System Explorer] ウィンドウ

Radia System Explorer は、複数のドキュメント インターフェイスが使用できる、つまり、複数の **[Radia System Explorer]** ウィンドウを同時に開く、親しみやすい表示になっています。タイトル バーの下には、ドロップダウン メニュー、ツール バー、複数の **[Radia System Explorer]** ウィンドウを保持するワークスペースがあります。各 **[Radia System Explorer]** ウィンドウの左側には Radia データベース の階層的なツリー ビューが表示され、右側にはツリー ビューで現在選択されている Radia データベース コンポーネントのコンテンツが表示されます。ステータス バーはウィンドウの下部に表示されます。

Radia System Explorer を初めて起動すると、ツリー ビューには Radia データベースを構成するファイルをリストする最上位のビューが表示されます。48 ページの「*Radia* データベースのコンテンツを表示する」で説明されているように、ツリー ビューを展開して Radia データベースの下位レベルのコンポーネントを表示することも、折りたたんでそれらを表示しないでおくこともできます。

ツリー ビューで **[Database]** アイコンが選択されると、**[Radia System Explorer]** ウィンドウのリスト ビューには Radia データベースを構成するファイルのリストが表示されます。

Radia System Explorer には、Windows エクスプローラのユーザーにとっては使い慣れた、数多くの親しみやすい機能があります。たとえば、ウィンドウ内のいくつかのアイテムにはツールチップが用意されています。ツールチップとは、**[Radia System Explorer]** ウィンドウ内の該当するアイテム上にマウス ポインタを移動すると自発的に表示される役立つ情報のことです。

[Radia System Explorer] ウィンドウ

使い慣れた Windows の操作を使用して、**[Radia System Explorer]** ウィンドウの表示やそのコンテンツを操作することができます。

基本的なウィンドウの操作

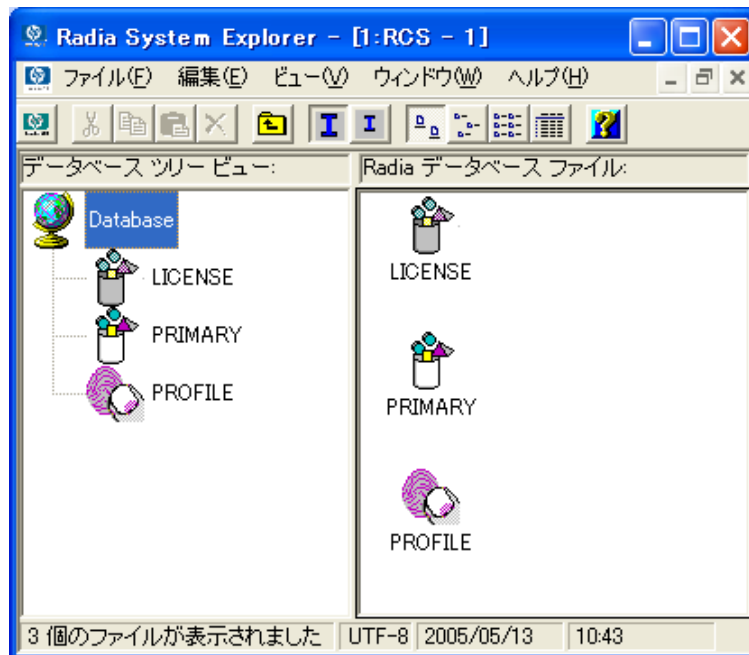


図 2.4 ~ 枠のクリック アンド ドラッグによるウィンドウの表示の操作

基本的な使用方法

- ウィンドウの枠または角をクリック アンド ドラッグすると、ウィンドウのサイズを変更することができます。
- **[Radia System Explorer]** ウィンドウのツリー ビューとリスト ビューの間のフレームをクリック アンド ドラッグすると、ツリー ビューとリスト ビューの相対的な幅を変更することができます。

[Radia System Explorer] ウィンドウをカスタマイズする

さまざまなショートカット メニューのオプションを使用して、**Radia System Explorer** の表示方法やその機能を操作したりカスタマイズしたりすることができます。頻繁に使用される一般的な機能は、**[Radia System Explorer]** ツール バーから使用することができます。これらの機能の詳細については、31 ページの「*[Radia System Explorer]* ツールバー」を参照してください。

[Radia System Explorer] ウィンドウのメニュー

- **[ファイル] メニュー**
このメニューのオプションを使用すると、追加の **[Radia System Explorer]** ウィンドウが開いたり、現在のウィンドウを閉じたりすることができます。複数のウィンドウを同時に開くことができます。複数のウィンドウ間でアイテムをドラッグすることができます。

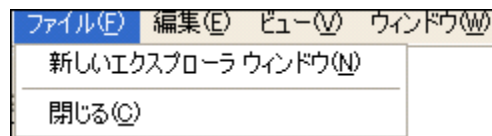


図 2.5 ~ [ファイル] メニュー

■ [編集] メニュー

このメニューのオプションを使用すると、Radia データベースを編集することができます。先頭から 6 番目までのオプションは、アクティブなペインまたはダイアログ ボックスで選択されているアイテムに適用されます。

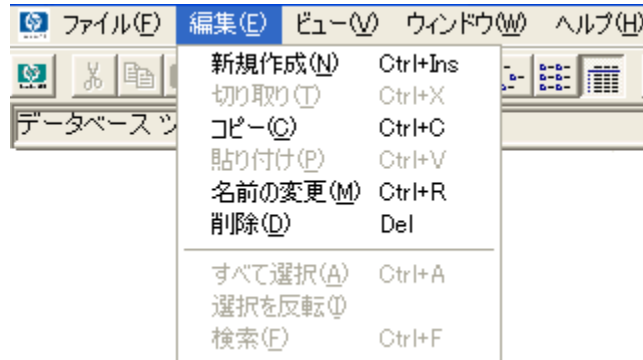


図 2.6 ~ [編集] メニュー

表 2.2 ~ [編集] メニュー

操作	説明
[新規作成]	ドメイン、クラス、インスタンスなど、選択したアイテムの新しいオカレンスが作成できます。
[切り取り]	選択したテキストを削除して、Windows クリップボードにコピーすることができます。
[コピー]	選択したテキストをレプリケートして、Windows クリップボードにコピーできます。
[貼り付け]	Windows クリップボードのコンテンツが、現在のカーソル位置にコピーできます。
[名前の変更]	選択したアイテムの簡略名や内部名が変更できます。
[削除]	現在選択しているアイテムが、Radia データベースから削除できます。
[すべて選択]	[Radia System Explorer] ウィンドウのリスト ビューにあるすべてのインスタンスが選択できます。
[選択を反転]	リスト ビューにあるすべてのインスタンスの選択ステータスを切り替えられます。選択されていたインスタンスが選択解除され、選択されていなかったインスタンスが選択されます。
[検索]	指定したテキストを含むインスタンスが、選択したクラスの [名前] カラムおよび [インスタンス名] カラムで検索できます。検索結果は、リスト ビューのリストの最上部にソートされて強調表示されます。

■ [ビュー] メニュー

このメニューのオプションを使用すると、Radia データベースの表示が管理できます。このメニューから、ツール バーとステータス バーの表示設定の変更、アイコンのサイズと表示の管理、ウィンドウのリフレッシュ、表示オプションや操作オプションの設定などを行うことができます。



図 2.7 ~ [ビュー] メニュー

表 2.3 ~ [ビュー] メニュー

オプション	説明
[ツール バー]	[ツール バー] をクリックすると、ツール バーを表示するかどうかを切り替えられます。
[ステータス バー]	[ステータス バー] をクリックすると、ステータス バーを表示するかどうかを切り替えられます。
[ツールアイコン]	アイコンを大きいアイコンと小さいアイコンのいずれで表示するかを切り替えられます。
[リスト ビュー]	リスト ビューの表示を 4 種類の表示 ([大きいアイコン]、[小さいアイコン]、[リスト]、および [詳細]) の中から選択することができます。
[アイコンの整列]	アイコンの配列を縦並びまたは横並びにして、リスト ビューを再表示することができます。
[リフレッシュ]	選択した [Radia System Explorer] ウィンドウを見やすくするためにすべての要素を整列して、リスト ビューを再表示することができます。
[オプション]	[Radia System Explorer オプション] ダイアログ ボックスが表示されます。詳細については、32 ページの「[オプション] ダイアログ ボックスを使用して設定を行う」を参照してください。
[フォント]	[Radia System Explorer] ウィンドウでテキストの表示に使用されるフォントを変更することができるダイアログ ボックスが表示されます。

■ [ウィンドウ] メニュー

このメニューのオプションは、複数の [Radia System Explorer] ウィンドウを開いている場合に使用します。

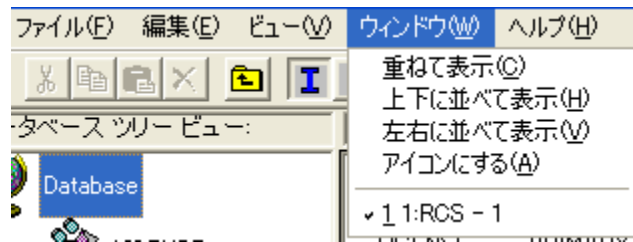


図 2.8 ~ [ウィンドウ] メニュー

表 2.4 ~ [ウィンドウ]メニュー

アイテム	説明
[重ねて表示]	Radia System Explorer インターフェイスの左上隅を起点にして、複数のウィンドウを少しずつずらしながら重ねて表示することができます。
[上下に並べて表示]	開いている複数のウィンドウを重ねないように縦並びに表示することができます。ウィンドウの幅は自動的に Radia System Explorer インターフェイスの幅になり、高さはインターフェイスの高さを等分したものになります。
[左右に並べて表示]	開いている複数のウィンドウを重ねないように横並びに表示することができます。ウィンドウの高さは自動的に Radia System Explorer インターフェイスの高さになり、幅はインターフェイスの幅を等分したものになります。
[アイコンにする]	複数の [Radia System Explorer] ウィンドウを最小化して、インターフェイスの左下隅に表示することができます。
[1 1:RCS - 1]	複数のセッションが表示されます。ここで管理者は、開いている複数の Radia System Explorer セッションを切り替えられます。セッションの横にあるチェックマークは、現在アクティブなウィンドウを示します。

■ [ヘルプ] メニュー

このメニューのオプションを使用すると、Radia System Explorer に関する詳細情報を取得したり、HP OpenView の Web サイトに接続したりすることができます。

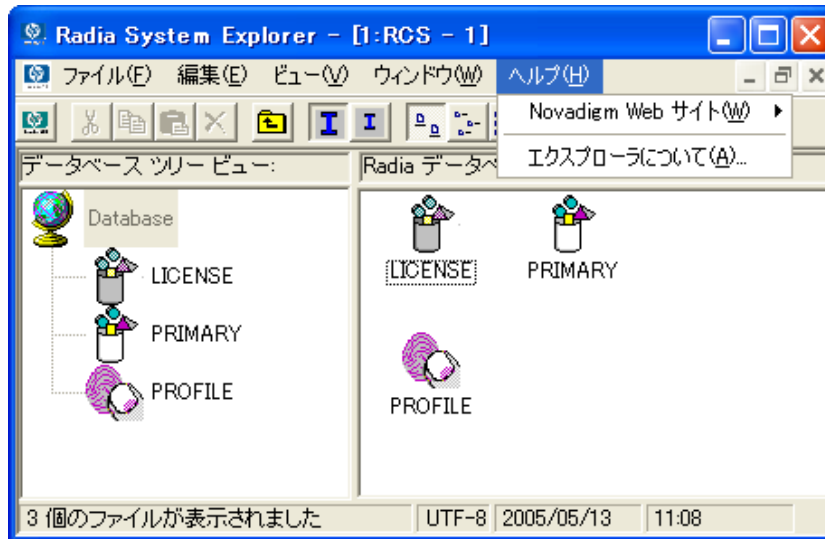


図 2.9 ~ [ヘルプ] メニュー

表 2.5 ~ [ヘルプ] メニュー

アイテム	説明
[内容]	従来の Windows スタイルのヘルプ インターフェイスが表示されます。『Radia System Explorer のヘルプを使用する』を参照してください。
[ヘルプを検索]	このオプションは、[内容] オプションと機能も表示も同じです。
[Hewlett-Packard Web ページ]	Hewlett-Packard の Web サイトにある、 テクニカル サポート ページや ホームページ に接続するためのサブメニューが表示されます。これらのリンクのいずれかを選択すると、デフォルトの Web ブラウザが起動し、インターネットを通じて選択したページに接続されます。
[エクスプローラについて]	現在の Radia System Explorer に関する情報が表示されます。バージョン番号、Radia Configuration Server (マネージャ) の情報などは、ここで確認できます。 [システム情報] をクリックすると、標準的な Microsoft の [システム情報] ウィンドウが表示されます。このウィンドウでは、使用しているマシンが分析され、操作しやすい形式で結果が表示されます。

[Radia System Explorer] ツールバー














[Radia System Explorer] ツールバーを使用すると、頻繁に使用する機能に簡単にアクセスできます。



図 2.10 ~ [Radia System Explorer] ツールバー

次の表は、ツールバーのボタンとその機能についての説明を示しています。

表 2.6 ~ [Radia System Explorer] ツールバー

アイコン	アクション
	新しい [Radia System Explorer] ウィンドウを開きます。
	使用できません。
	選択されたアイテムをコピーします。
	使用できません。
	選択されたアイテムを削除します。
	1 つ上のデータベース レベルを表示します。
	大きいアイコンでツリー ビューを表示します。数の少ないリストの場合に、選択しやすくなります。
	小さいアイコンでツリー ビューを表示します。[Radia System Explorer] ウィンドウのリスト ビューに一度に表示できるアイテムの数を最大限に増やせます。数の多いリストの場合に、選択しやすくなります。
	大きいアイコンでリスト ビューを表示します。数の少ないリストの場合に、選択しやすくなります。
	小さいアイコンでリスト ビューを表示します。[Radia System Explorer] ウィンドウのリスト ビューに一度に表示できるアイテムの数を最大限に増やせます。数の多いリストの場合に、選択しやすくなります。
	縦並びにしてリスト ビューを表示します。[Radia System Explorer] ウィンドウのリスト ビューに一度に表示できるアイテムの数を最大限に増やせます。
	縦並びにし、クラス、インスタンスなどの TYPE のカラムを追加してリスト ビューを表示します。リスト ビューのアイテム数を最大限に増やすだけでなく、詳細な説明も表示します。
	状況に応じたヘルプを提供します。ヘルプを表示しようとしている場合は、カーソルの形状が変わります。ヘルプが必要なコントロールや画面領域上でカーソルをクリックしてください。

[オプション] ダイアログ ボックスを使用して設定を行う

Radia System Explorer には、[オプション] ダイアログ ボックスが用意されています。このダイアログ ボックスを使用して、Radia System Explorer の機能の一部を管理することができます。

1. [オプション] ダイアログ ボックスを開くには、[ビュー] メニューの [オプション] をクリックします。次のダイアログ ボックスが表示されます。

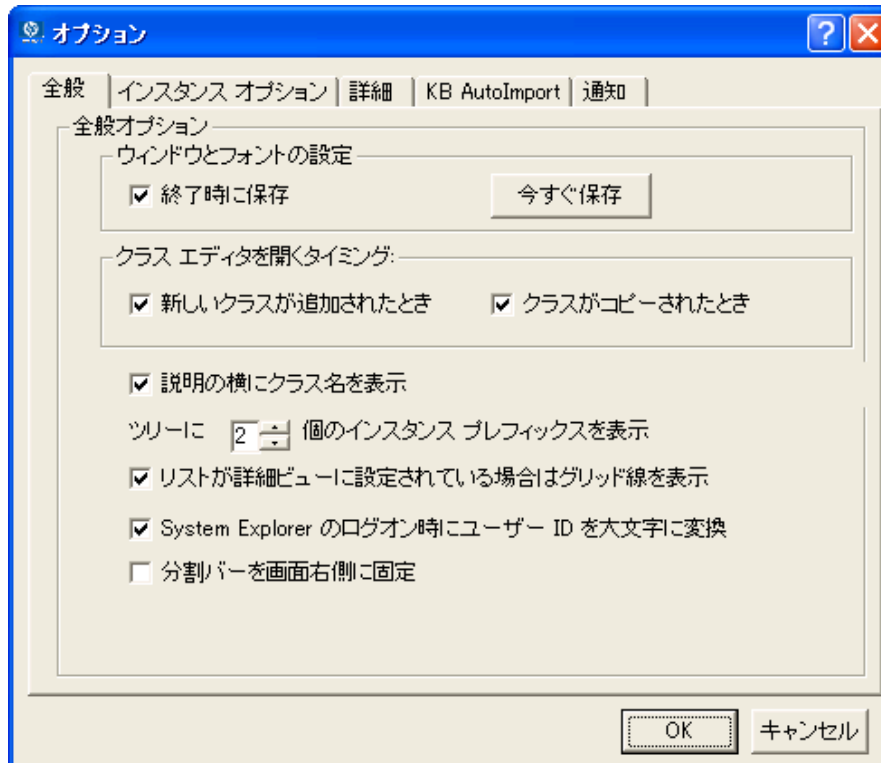


図 2.11 ~ Radia System Explorer の [オプション] ダイアログ ボックスの [全般] タブ

[オプション] ダイアログ ボックスには、以下の 5 つのタブがあります。

- [全般]
- [インスタンス オプション]
- [詳細]
- [KB AutoImport]
- [通知]

2. 各タブに関連付けられた設定を表示するには、そのタブをクリックします。

[全般] タブ

表 2.7 ~ [全般] タブの設定とその機能

[全般] タブ	機能と使用方法
[ウィンドウとフォントの設定]	<p>[終了時に保存] チェック ボックスをオンにすると、Radia System Explorer セッションの終了時に、その時点のウィンドウの設定とテキストの表示に使用されているフォントを記録することができます。</p> <p>保持されるウィンドウの設定には、[Radia System Explorer] ウィンドウのツリービューおよびリストビューに対する表示設定 ([大きいアイコン]、[小さいアイコン]、[リスト]、または [詳細])、各ペインの相対的な幅などがあります。ウィンドウの設定は、Radia データベースのレベルごとに別々に保存されます。</p> <p>[今すぐ保存] をクリックすると、現在使用しているウィンドウの設定とフォントを保存することができます。</p> <p>[Radia System Explorer] ウィンドウでテキストの表示に使用されるフォントは、[ビュー] メニューの [フォント] をクリックすると表示されるダイアログボックスからフォントを選択して変更することができます。</p>
[クラス エディタを開くタイミング]	<ul style="list-style-type: none"> • [新しいクラスが追加されたとき] チェック ボックスをオンにすると、クラスの追加時に [クラス編集] ダイアログ ボックスを表示することができます。 • [クラスがコピーされたとき] チェック ボックスをオンにすると、クラスのコピー時に [クラス編集] ダイアログ ボックスを表示することができます。 <p>新しくコピーされたクラスに対しても追加されたクラスに対しても編集ができるように、これらのチェック ボックスを2 つともオンにしておくこともできます。</p>
[説明の横にクラス名を表示]	<p>このチェック ボックスをオンにすると、[Radia System Explorer] ウィンドウのツリービューおよびリストビューで、クラスの簡略名の横にその Radia 内部名を表示することができます。内部名は簡略名の横にかっこ付きで表示されます。</p> <p>この機能は、通常 [Radia System Explorer] ウィンドウのリストビューで [詳細] ビューを使用しない場合に便利です。[Radia System Explorer] ウィンドウのリストビューの [詳細] ビューでは、常に [タイプ] カラムにクラスの内部名が表示されます。</p>

表 2.7 ~ [全般] タブの設定とその機能

[全般] タブ	機能と使用方法
[ツリーに n 個のインスタンス プレフィックスを表示]	このオプションは、0、1、2、または 3 に設定できます。これにより、ツリービューで折りたたんだり展開したりすることができる、インスタンス名のプレフィックスのレベル数を指定することができます。プレフィックスはアンダースコア文字で区切られます。48 ページの「 <i>Radia</i> データベースのコンテンツを表示する」を参照してください。
[リストが詳細ビューに設定されている場合はグリッド線を表示]	このチェック ボックスをオンにすると、表示オプションが [詳細] の場合にリスト ビューにグリッド線を表示することができます。このチェック ボックスをオフにすると、グリッド線が削除されます。どちらの設定が読みやすいかは、個人の好みの問題です。
[System Explorer のログオン時にユーザー ID を大文字に変換]	このチェック ボックスをオンにすると、ユーザー ID が自動的にすべて大文字に変換されます。
[分割バーを画面右側に固定]	このチェック ボックスをオンにすると、[Radia System Explorer] ウィンドウのサイズ変更時に右側の幅を固定することができます。この機能は、[Radia System Explorer] ウィンドウの右側の情報に重点をおいて操作する場合に便利です。左側はウィンドウのサイズ変更に応じて、サイズが大きくなったり小さくなったりします。 このチェック ボックスがオフになっている場合にウィンドウのサイズを変更すると、ウィンドウの左側の幅が固定され、右側の幅が変化します。

[インスタンス オプション] タブ

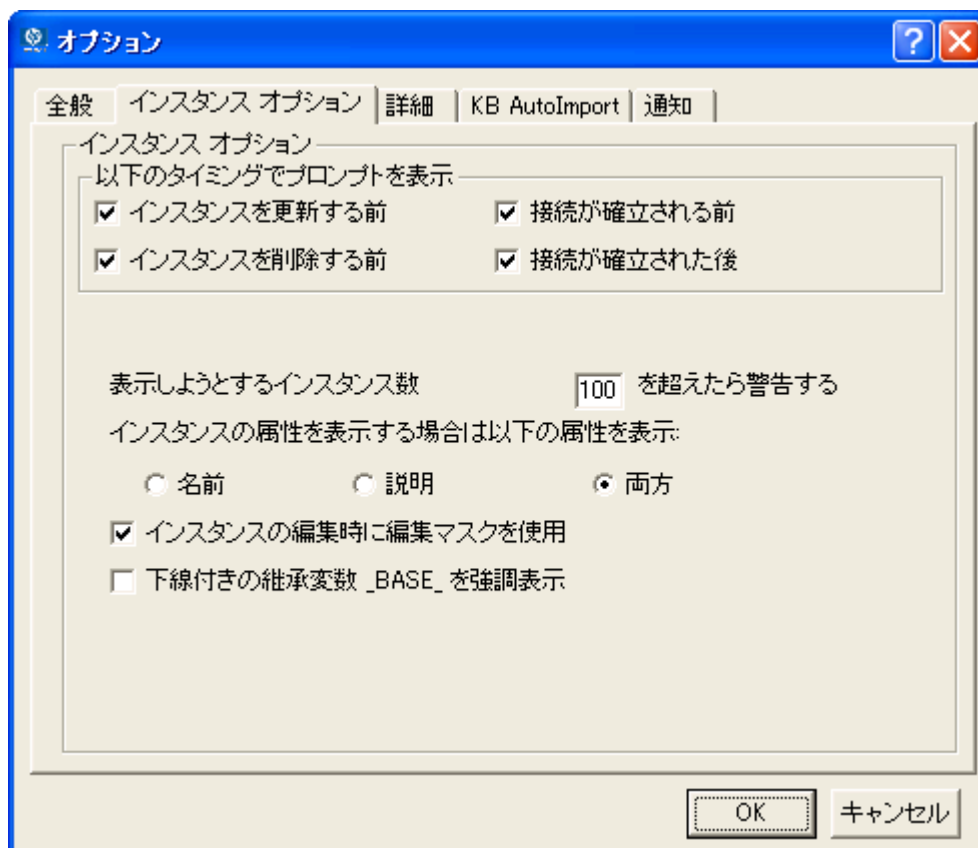
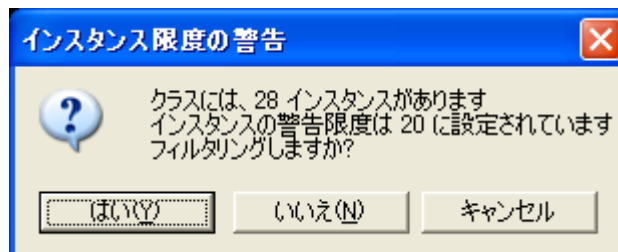


図 2.12 ~ [オプション] ダイアログ ボックスの [インスタンス オプション] タブ

[インスタンス オプション] タブでは、以下の設定を使用することができます。

表 2.8 ~ [インスタンス オプション] タブの設定

[インスタンス オプション] タブ	機能と使用方法
[以下のタイミングでプロンプトを表示]	これら 4 つのチェック ボックスを使用して、その説明で示されているアクションを完了する前に確認のメッセージを表示するかどうか指定できます。表示されるのは、Radia データベースに何らかの永続的な変更が行われる前に、そのアクションを完了するかどうかを確認するメッセージです。これらのチェック ボックスをオンにするかどうかは、個人の好みの問題です。
[表示しようとするインスタンス数 n を超えたら警告する]	規模の大きい配布モデルでは、FILE や USER などの特定のクラスに多くのインスタンスが含まれることがあります。このオプションの設定数より多いインスタンスを含むクラスのインスタンスを表示しようとすると、次のような警告が表示されます。



この警告により、クラス インスタンスが表示される前にそれらをフィルタすることができます。インスタンスの表示数はパフォーマンスに関連していません。あまりに多くのインスタンスを表示しようとすると、Radia System Explorer が Radia データベースからインスタンスを取得する間待つこととなります。また、操作対象のインスタンスを見つけるのに長いリストをスクロールしなければならなくなり不便です。

- [クラスをフィルタ] ダイアログ ボックスを表示して、適切なフィルタを入力するには、[はい] をクリックします。
- すべてのインスタンスを表示するには、[いいえ] をクリックします。
- インスタンスを表示せずに警告を閉じるには、[キャンセル] をクリックします。

表 2.8 ~ [インスタンス オプション] タブの設定

[インスタンス オプション] タブ	機能と使用方法
[インスタンスの属性を表示する場合は以下の属性を表示]	この設定を使用して、ツリー ビューでインスタンス名をダブルクリックしてインスタンスを表示する場合に [Radia System Explorer] ウィンドウのリスト ビューの [詳細] ビューで表示されるカラム ([名前]、[説明]、または [両方]) が指定できます。
[インスタンスの編集時に編集マスクを使用]	<p>この設定を使用して、[クラス編集] ダイアログ ボックスのデータ入力領域で属性のタイプを区別するかどうか指定できます。</p> <p>このチェック ボックスをオンにすると、論理的な (Yes/No) データを保持する属性の場合、データ入力領域にチェック ボックスが表示されます。指定された複数のオプションがある属性の場合、データ入力領域にドロップダウン リストが表示されます。フラグ セットは、データ入力領域に一連のチェック ボックスとして表示されます。</p> <p>クラス定義で属性の説明の最後にある角かっこ内に属性の有効なオプションを入力することで、目的のマスクを設定することができます。</p> <p>このチェック ボックスをオフにすると、[インスタンス編集] ダイアログ ボックスのデータ入力はすべてプレーン テキストで行うことになります。</p> <p>この機能の詳細については、69 ページの「オプションの属性編集コントロール」を参照してください。</p>
[下線付きの継承変数 <code>_BASE_</code> を強調表示]	この設定は、インスタンスのどの値がクラスの <code>_BASE_INSTANCE_</code> から継承されているかを確認する場合に使用します。継承されたインスタンスは、赤色の下線付きで表示されます。



[詳細] タブ

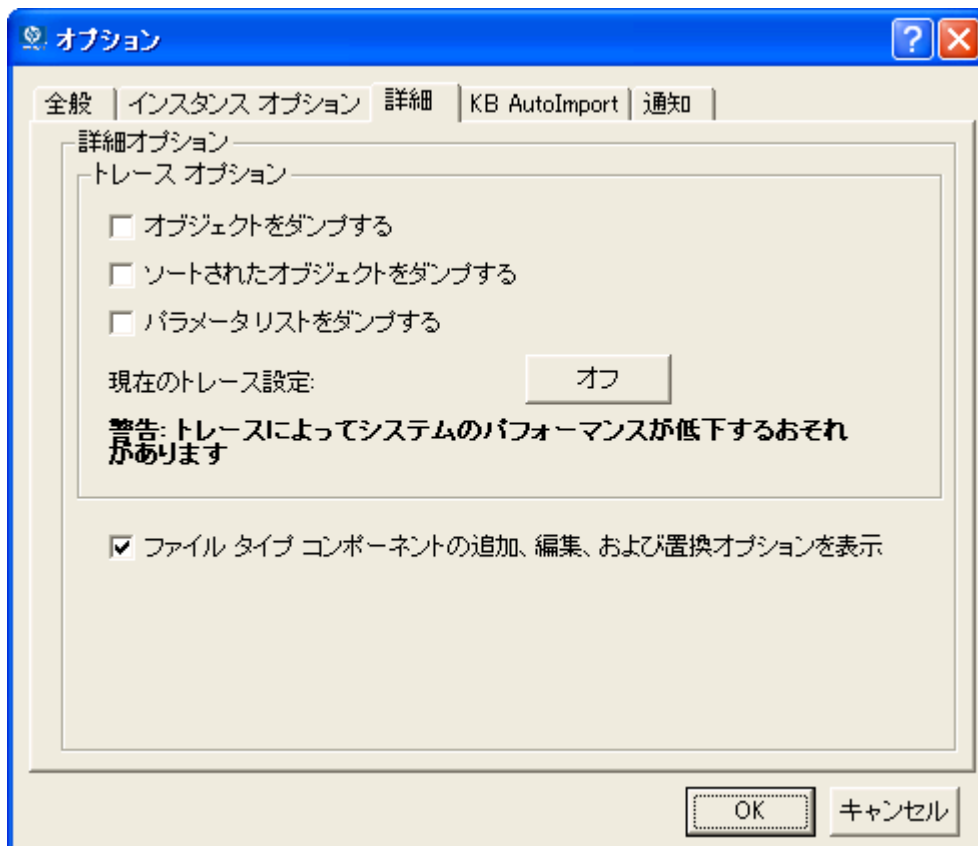


図 2.13 ~ [オプション] ダイアログ ボックスの [詳細] タブ

表 2.9 ~ [詳細] タブの設定

[詳細] タブ	機能と使用方法
[トレース オプション]	これらの設定は、Radia System Explorer のトラブルシューティングを行う場合にのみ使用します。これらの設定を変更する場合は、HP テクニカル サポートに相談してください。
[ファイル タイプコンポーネントの追加、編集、および置換オプションを表示]	<p>警告: この設定は、必ず非プロダクション環境で使用してください。</p> <p>この設定を使用して、ファイルタイプ コンポーネントに対するショートカット メニューで以下のコマンドを表示するかどうかを指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [このコンポーネントを編集] • [コンポーネント データを置換] • [コンポーネントの追加] <p>詳細については、付録 B「コンポーネント インスタンスを修正する (非プロダクション環境限定)」を参照してください。</p>

[KB AutoImport] タブ

[KB AutoImport] タブを使用すると、Radia ナレッジベース マネージャのデフォルトの自動インポート ディレクトリを定義することができます。Radia ナレッジベース マネージャは、Radia Extensions for Windows Installer のコンポーネントです。詳細については、『Radia Extensions for Windows Installer Guide』を参照してください。

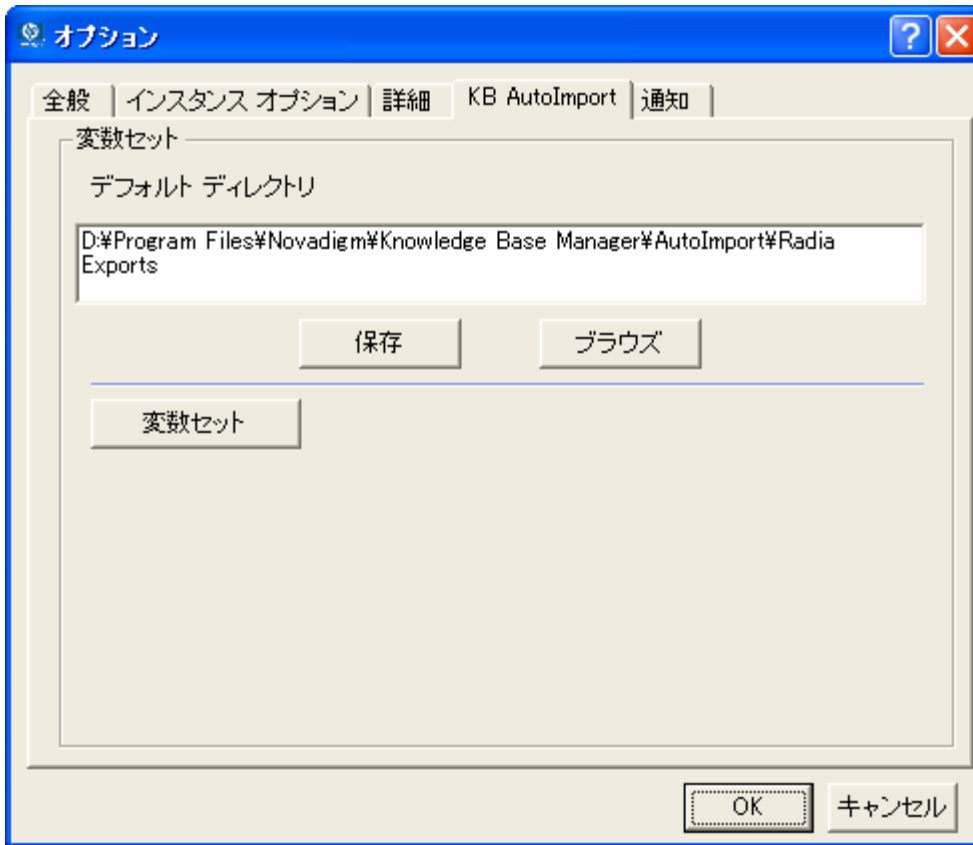


図 2.14 ~ [オプション] ダイアログ ボックスの [KB AutoImport] タブ

[サポート情報管理 AutoImport のオプション] を指定するには

1. Radia ナレッジベースにインポートする状態ファイルをビルドするときにエクスポートディレクトリとして使用されるデフォルトのディレクトリを [デフォルト ディレクトリ] に指定するか、または [ブラウズ] ボタンをクリックして選択します。デフォルトのロケーションは、Radia ナレッジベース マネージャによってインストールされる **¥Radia Exports** ディレクトリです。このディレクトリには、必要な変数セットのサブディレクトリ **¥VarSets** が含まれます。

警告

エクスポート ディレクトリとして使用されるディレクトリには、**¥VarSets** という名前のサブディレクトリが含まれている必要があります。

2. [KB AutoImport] タブの [保存] をクリックすると、指定したデフォルトのディレクトリが Radia ナレッジベース マネージャのデフォルトの自動インポート ディレクトリに設定できます。

[通知] タブ

[通知] タブを使用すると、通知時にクライアントに送信される、**radskman.exe** コマンドラインの UID 値と STARDIR 値が指定できます。UID は現在のセッションを特定するために使用される ID であり、STARTDIR は IDMLIB 開始ディレクトリを指定します。たとえば、[UID/STARTDIR をカスタマイズする] をクリックすると、現在ログオンしているユーザーの名前ではなく、マシン名でクライアントに通知するための値を入力したり、そのまま使用したりすることができます。

ここで設定される通知オプションは、Radia 通知マネージャによって使用され、[通知の詳細] ダイアログ ボックスに表示されます。詳細については、178 ページの「*Radia Notify*」、180 ページの「*通知のダイアログ ボックス*」、および 185 ページの「*通知の詳細を設定する*」を参照してください。

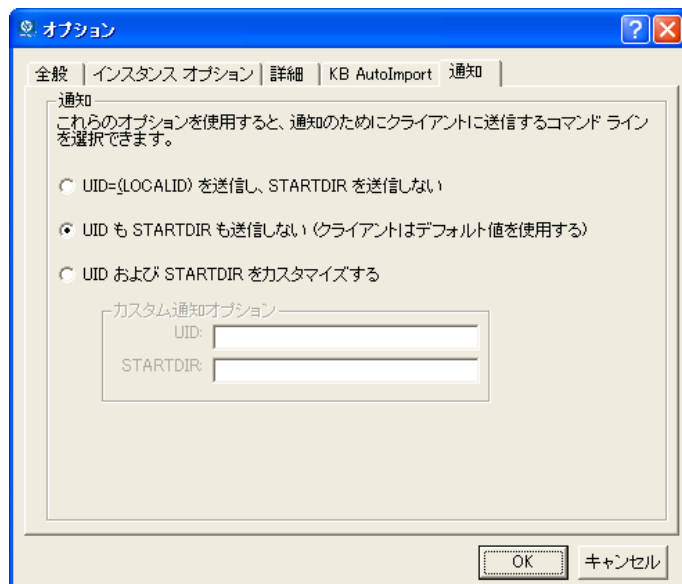


図 2.15 ~ [オプション] ダイアログ ボックスの [通知] タブ

表 2.10 ~ [通知] タブの設定

[通知] タブのオプション	機能と使用方法
[UID=[LOCALID] を送信し、STARTDIR を送信しない]	UID=[LOCALID] を使用する通知コマンドを作成することができます。このコマンドは、現在ログオンしているユーザーの名前でクライアントに通知します。マシンの名前でクライアントに通知するには、下の [UID および STARTDIR をカスタマイズする] オプションを使用します。
[UID も STARTDIR を送信しない (クライアントはデフォルト値を使用する)]	UID の値も STARTDIR の値も使用しない通知コマンドを作成することができます。クライアントは、UID および STARTDIR のデフォルト値を使用します。デフォルト値以外の値を指定するには、下の [UID と STARTDIR をカスタマイズする] オプションを使用します。
[UID および STARTDIR をカスタマイズする]	<p>[カスタム通知オプション] のそれぞれのテキスト ボックスに入力された UID 値および STARTDIR 値を使用する通知コマンドを作成することができます。このオプションを使用すると、マシン名でクライアントに通知したり、適切な開始ディレクトリを指定したりすることができます。</p> <ul style="list-style-type: none"> マシン名でクライアントに通知するには、\$MACHINE のカスタム UID 値をそのまま使用します。カスタム値を使用している現在のセッションを特定するために別の UID 値を入力することもできます。 マシン コンテキストでアプリケーションに通知したり、アプリケーションをインストールするには、SYSTEM のカスタム STARTDIR 値をそのまま使用します。別の STARTDIR 値を入力することもできます。

まとめ

- マウスなどのポインティング デバイスを使用して、**Radia System Explorer** のオブジェクトを操作することができます。
- 使い慣れた **Windows** の操作を使用して、**[Radia System Explorer]** ウィンドウの表示やそのコンテンツを操作することができます。
- **[Radia System Explorer]** ウィンドウの頻繁に使用される機能は、**[Radia System Explorer]** ツール バーから使用できます。
- **Radia System Explorer** では、管理者が **Radia System Explorer** の機能およびオプションの一部を管理することができます。

Radia データベースの概要

この章は以下を目的としています。

- Radia データベースのスキーマ、および Radia データベースのコンテンツを表示する方法について理解する。
- インスタンスのデフォルト値、および継承のしくみについて理解する。
- ショートカットメニューから利用できる、Radia System Explorer のさまざまなオプションに理解する。
- Radia のドメイン、クラス、およびインスタンスの操作方法を習得する。

Radia データベース

Radia Configuration Server 上にある Radia データベースには、配布モデルが格納されます。このデータベースには、クライアント コンピュータのアプリケーションを管理するために Radia で使用する、以下のような情報が含まれています。

- Radia によって配布されるソフトウェアまたはデータ。
- 各クライアント コンピュータの配布モデル。
- 各サブスクリバをどのパッケージに割り当てるかを決定するポリシー。
- Radia 管理者用セキュリティおよびアクセス規則。

Radia データベースの表示と操作には Radia System Explorer を使用します。

Radia Configuration Server のインストール時に使用可能なファイルは、**LICENSE** と **PRIMARY** の 2 つのみです。Radia を使用すると、Radia データベースが変更されます。

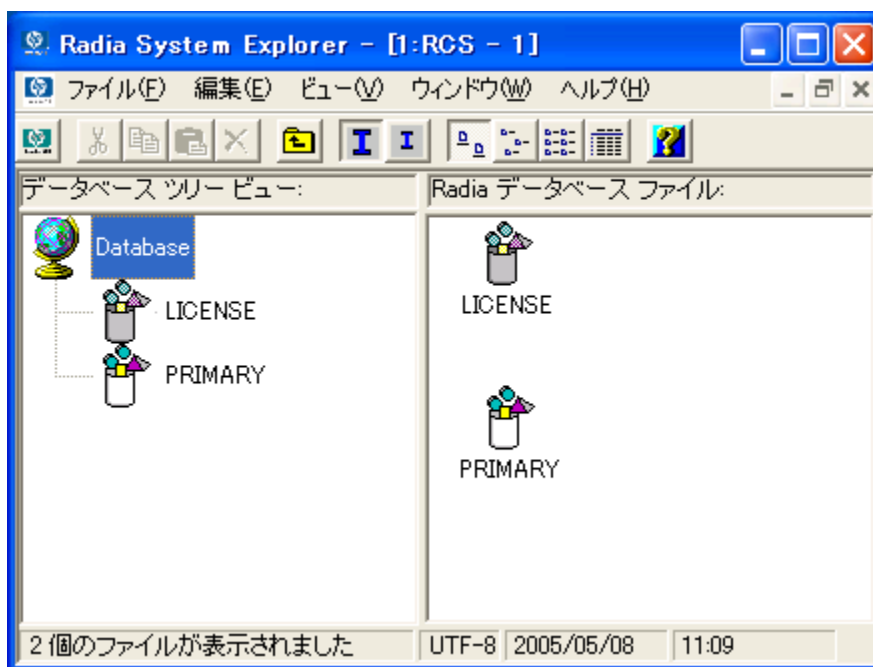


図 3.1 ~ Radia データベースの LICENSE ファイルと PRIMARY ファイル

- **LICENSE** ファイルは読み取り専用で、**Radia Configuration Server** の処理で使用します。このファイルは **HP** が使用するものですので、変更しないでください。
- **PRIMARY** ファイルには、ソフトウェア管理に関する大部分の情報が含まれます。**PRIMARY** ファイル内には、デフォルトで以下の7つのドメインがあります。
 - **ADMIN** ドメイン。**Radia** データベースへの管理アクセス権を制限し、クラスを接続するための規則を指定します。
 - **AUDIT** ドメイン。クライアント コンピュータの資産のインベントリを作成するタスクを設定します。詳細については、『**Radia Inventory Manager Guide**』を参照してください。
 - **NOVADIGM** ドメイン。セルフ メンテナンス用のパッケージを格納します。詳細については、『**Radia Software Manager ガイド**』の「*Publishing Applications and Content*」の章の「*Radia Software Manager Self Maintenance*」を参照してください。
 - **PATCH** ドメイン。**PATCH** クラス内の利用可能なパッチのリストを格納します。このドメインの詳細については、149 ページの「サービスの最適化」を参照してください。
 - **POLICY** ドメイン。サブスクリバを論理的なグループにまとめます。**Radia** で管理される各クライアント コンピュータは、**POLICY** ドメインの **USER** クラスのインスタンスによって表されます。詳細については、『**Radia Software Manager ガイド**』の「エンタイトルメントポリシーを実装する」の章を参照してください。
 - **SOFTWARE** ドメイン。管理対象のソフトウェアや、ソフトウェアの配布に使用するメソッドについての情報を格納します。各 **ZSERVICE** インスタンスは、クライアント コンピュータで管理される1つのソフトウェア アプリケーションまたはその他のコンテンツの単一のユニットを表します。
 - **SYSTEM** ドメイン。管理制御およびプロセス制御の定義を格納します。
- **Radia** の使用を開始すると、**PROFILE** ファイルおよび **NOTIFY** ファイルが作成されます。
 - **PROFILE** ファイルは、最初のクライアント コンピュータが **Radia Configuration Server** に登録された後に作成されます。**PROFILE** ファイルには、クライアント コンピュータから収集される情報が格納されます。これらの情報は、**Radia** 管理対象ソフトウェアを配布するためにコンピュータに接続する際、およびクライアント コンピュータの設定を確認する際に使用されます。
 - **NOTIFY** ファイルは、最初の通知が開始されたときに作成されます。**NOTIFY** ファイルは複数のドメインで構成され、それぞれが1つの通知処理となります。**NOTIFY** ファイルの各ドメインには1つの **NOTIFY** クラスがあります。各 **NOTIFY** クラスには、通知処理のオーディエンス リストから選択された各メンバーのインスタンスが格納されます。詳細については、178 ページの「*Radia Notify*」を参照してください。

Radia データベースのコンテンツを表示する

Radia データベースは階層構造になっており、ファイル、ドメイン、クラス、およびインスタンスで構成されています。ツリー ビューによって階層内の下位のレベルまで見やすく表示され、個別の Radia データベース コンポーネントの特定と操作が容易になります。

ツリー構造を表示するには

1. Radia System Explorer を開いて、ツリー ビューの PRIMARY ファイルをダブルクリックします。次のような [Radia System Explorer] ウィンドウが表示されます。

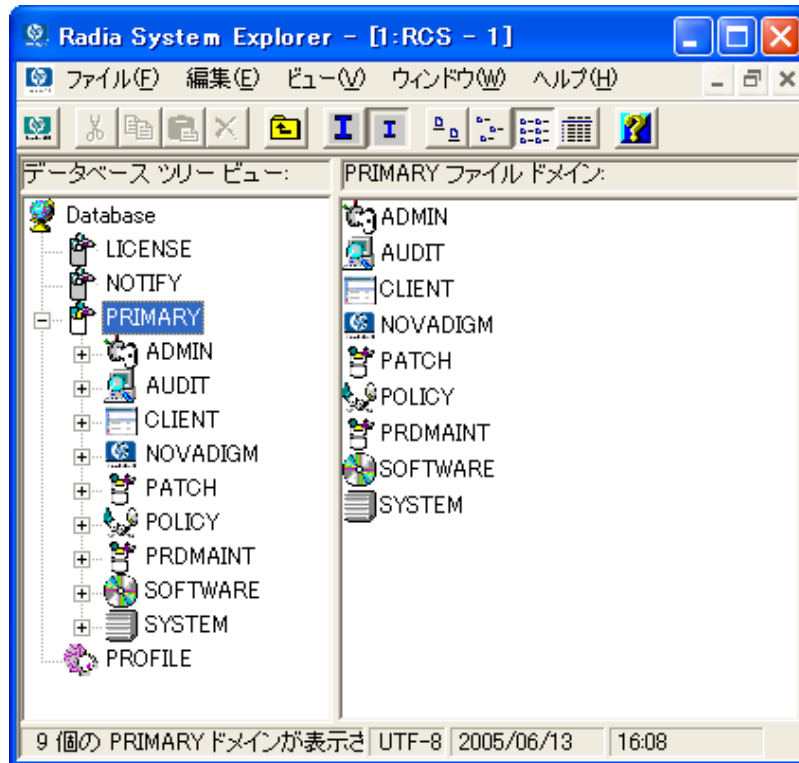


図 3.2 ~ ツリー ビュー構造の表示

PRIMARY ファイルの7つのドメインが、ツリービューの PRIMARY ファイルのアイコンの下に下位ノードとして表示されます。同時に、リストビューにはそれぞれのアイコンが表示されます。ツリー構造の PRIMARY ファイルアイコンの横にあるマイナス記号 (-) は、PRIMARY ファイルの下に Radia データベース階層の次のレベルが表示されていることを表します。マイナス記号をクリックすると、そのレベルより下位のツリーを閉じることができます。この操作により、ツリーが折りたたまれてマイナス記号 (-) がプラス記号 (+) に変わります。

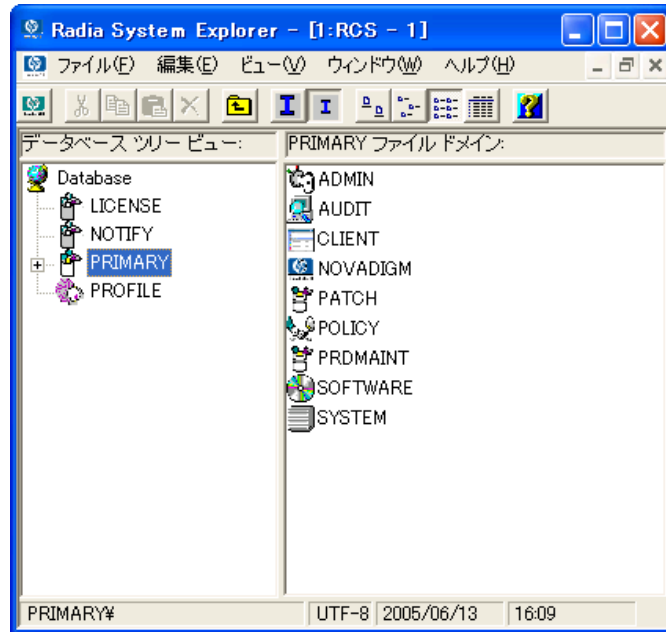


図 3.3 ~ マイナス記号をクリックして下位レベルのツリーを閉じたところ

2. プラス記号をクリックすると、クリックする前のツリービューに戻ります。
3. Radia データベース コンポーネントを開くには、そのコンポーネントのアイコンをダブルクリックします。

たとえば、[Radia System Explorer] ウィンドウのツリービューまたはリストビューで SOFTWARE ドメインのアイコンをダブルクリックして、階層の次のレベルのコンポーネントを表示します。[Radia System Explorer] ウィンドウのリストビューに、SOFTWARE ドメインのクラスが表示されます。

ツリービューで SOFTWARE ドメインアイコンをダブルクリックすると、そのアイコンの下に SOFTWARE ドメインのクラスが表示されます。リストビューの SOFTWARE ドメインアイコンをダブルクリックした場合、ツリービューの SOFTWARE ドメインアイコンの横にプラス記号が表示されますが、クラスはその下に表示されません。

ナビゲーション履歴

Radia System Explorer でコンポーネントを開いたり閉じたりすると、ツリービューに、この操作が行われたノードの履歴が残されます。操作を行ったノードには、非要素レベル (要素の 1 つ上のレベル) でコンポーネントのアイコンの横にプラスまたはマイナス記号が表示されます。プラス記号をクリックすると、現在の Radia System Explorer セッション中に開かれた最下位のレベルまでノードが展開されます。マイナス記号をクリックすると、クリックしたノードより下位のツリーが折りたたまれます。特定のコンポーネントの下の、以前に開いたノードの履歴を破棄するには、**Prune Below** 機能を使用します。

下位ノードの取り除く機能を使用するには

1. ツリービューで SOFTWARE ドメインのアイコンを右クリックします。
ショートカットメニューが表示されます。

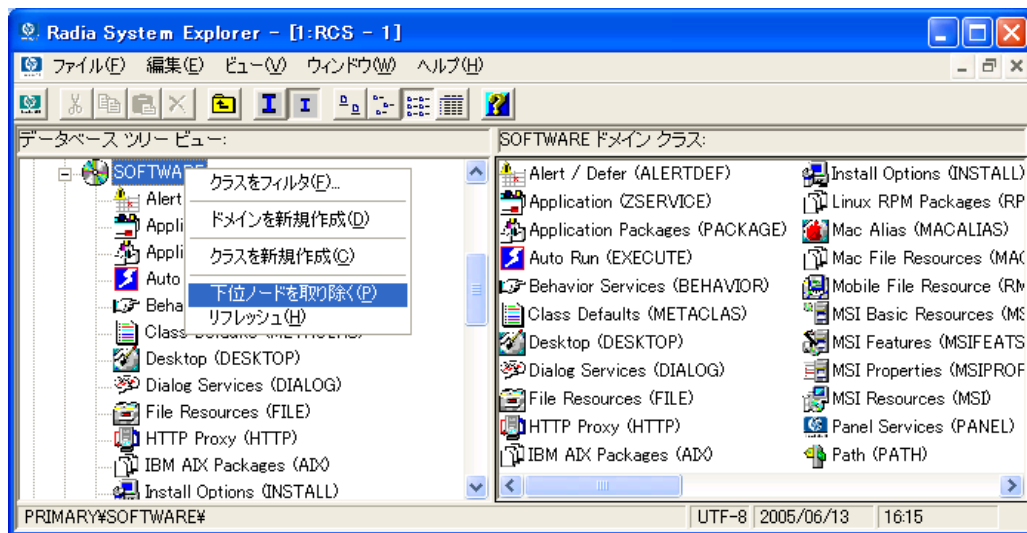


図 3.4 ~ コンポーネントの下の、下位ノードを取り除く機能 (以前に開いたノードの履歴を破棄する)

2. [下位ノードを取り除く] をクリックします。
ツリービューの SOFTWARE ドメインの下に展開されているすべてのノードが折りたたまれ、それらのノードが開かれていたことを示す履歴が破棄されます。

ツリービューでノードとその下位ノードを再ビルドするには

Radia データベースの現在のデータから、リフレッシュ機能を使用します。

1. ツリービューで **SOFTWARE** ドメインのアイコンを右クリックします。
ショートカットメニューが表示されます。

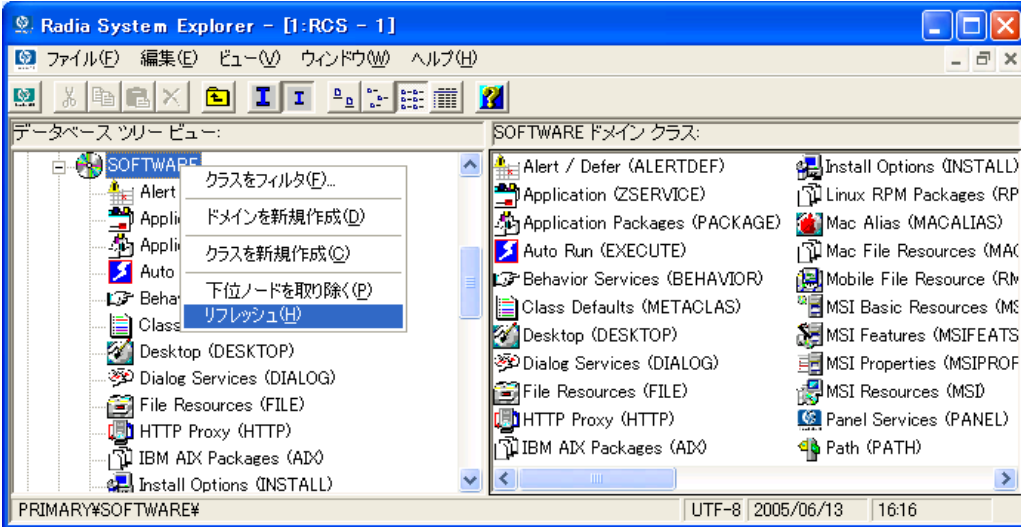


図 3.5 ~ ツリービューのノードとその下位ノードの表示を再ビルドするリフレッシュ機能

2. [リフレッシュ] をクリックします。
3. **SOFTWARE** ドメインの下に展開されているノードが折りたたまれ、**SOFTWARE** ドメインのすべてのデータが **Radia** データベースから取得されます。その後、**SOFTWARE** ドメインのツリーが再び展開されて、ドメインに含まれるクラスが表示されます。この表示には、現在のセッションの間に **Radia** データベースに加えられたすべての変更が反映されています。

ツリービューのノードに [リフレッシュ] を実行すると、そのノード (およびその下位ノード) のデータが **Radia** データベースから取得され、リフレッシュされたノードがツリービューで展開されます。

この [リフレッシュ] 操作を、[下位ノードを取り除く] 操作、およびノードの横にあるプラス記号またはマイナス記号をクリックして下位ノードの展開/折りたたみを行う操作と比較してみます。後者 2 つの操作では、どちらもデータは **Radia** データベースから取得されません。既に取得されているデータの表示が変更されるだけです。

複合名

設定するデスクトップの数が増え、それに伴いアプリケーションの数も増大すると、**Radia** データベースの規模が非常に大きくなる可能性があります。たとえば、管理対象の各デスクトップに対応して **USER** クラスのインスタンスを作成し、デスクトップに配布される各ファイルに対応して **FILE** クラスのインスタンスを作成するとします。この場合、企業の規模によっては、ばく大な数のインスタンスが作成されることも想定されます。

インスタンスの数があまりにも多いと、ツリー ビューが操作しづらくなる可能性があります。**Radia** では、フィルタ機能を使って多数のインスタンスが管理できます (193 ページの「フィルタで **Radia** データベースの表示内容を指定する」を参照)。さらに、インスタンス名の 1 ~ 3 つの高位修飾子に基づいて、折りたたみ可能な追加のレベルを 3 つまでツリー ビューに表示することができます。

ツリー ビューで折りたたみ可能な追加のレベルを利用するには、複合名に従ってインスタンスの名前を付ける必要があります。複合名には 1 ~ 3 つのプレフィックスが付き、各プレフィックスはアンダースコア文字で区切られています。

たとえば、ユーザーがいるビルを基準にして、ユーザーのグループを作成するとします。これらのユーザーのインスタンス名に、ビルを識別するプレフィックスを付けます。エンパイア ステート ビルにユーザーがいる場合、そのユーザーを識別するためのインスタンス名のプレフィックスとして “**ESB_**” を割り当てます。エンパイア ステート ビルにいる各ユーザーには、**ESB_** で始まるインスタンス名が割り当てられます。ツリー ビューによって、自動的にレベルが追加されます。

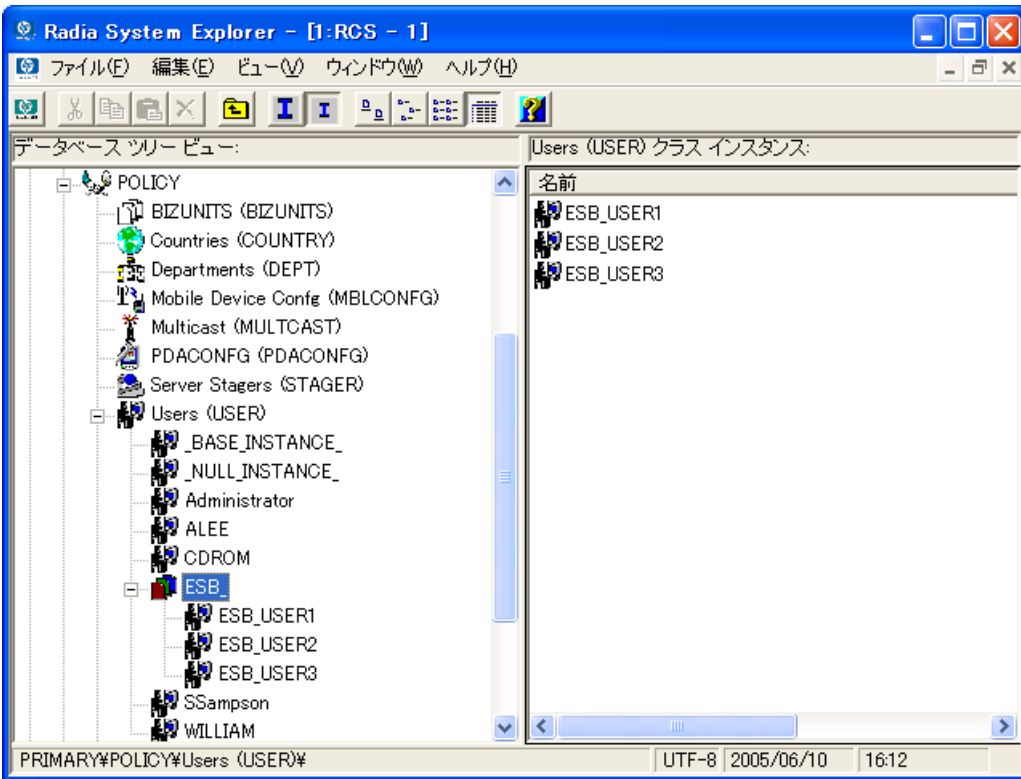


図 3.6 ~ 複合名を使用した多数のインスタンスの管理

この場合も他の非要素レベルと同様に、マイナス記号をクリックすると、その下のレベルがツリービューで折りたたまれます。

ツリービューに表示されるインスタンス名のプレフィックスのレベル数(0～3)は、[ツリーに n 個のインスタンスプレフィックスを表示] オプションで指定します。このオプションは、[ビュー]メニューの[オプション]ダイアログボックスの[全般]タブにあります。[オプション]ダイアログボックスについては、32 ページの「[オプション]ダイアログボックスを使用して設定を行う」を参照してください。

ツリービューのレベルは、インスタンス名の各アンダースコアに対応して区切られます。したがって、インスタンス名 **ESB_FLOOR10_USER1** の場合、プレフィックスのレベル数は 2 となります。[ツリーに n 個のインスタンスプレフィックスを表示] が 2 または 3 に設定されていれば、このインスタンスは 2 つの折りたたみ可能な非要素レベル (ESB およびその下位の FLOOR10) 内に表示されます。

Radia データベースにおける継承

Radia データベースの各クラスには、_BASE_INSTANCE_ というベース インスタンスがあります。

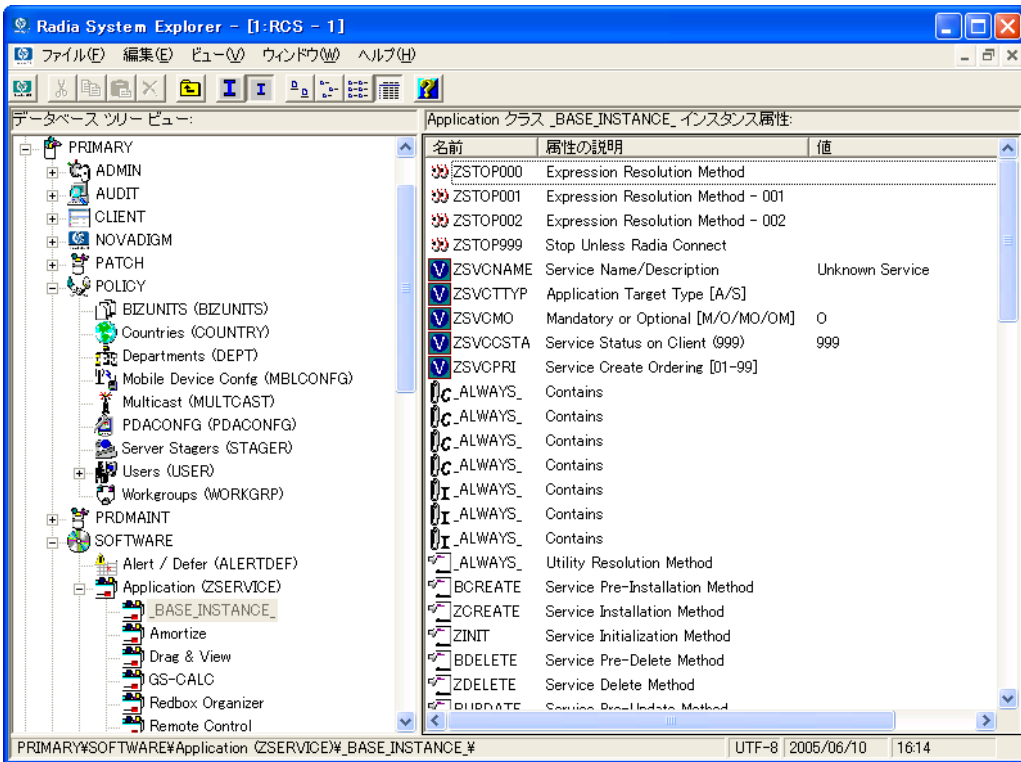


図 3.7 ~ Application クラスの BASE_INSTANCE_ の例

ベース インスタンスの用途は、クラスの他のインスタンスにデフォルト値を提供することです。インスタンスの属性には、特定の値を入力した場合を除き、通常はクラスのベース インスタンスで指定されているその属性の値が設定されます。

インスタンスに継承された値と、インスタンスに直接入力した値の表示に区別はありません。ベース インスタンスを調べることにより、変数の値がベース インスタンスから継承されたかどうかを判別できます。また、変数から値を削除した後（値を削除する方法については、56 ページの「クラスを操作する」を参照）、値が自動的にインスタンスに再表示された場合、その値はベース インスタンスから継承されています。

Radia System Explorer のショートカット メニュー

Radia System Explorer では、Radia データベース コンポーネント (ドメイン、クラス、インスタンス) の追加、コピー、編集、名前の変更、および削除を行うことができます。また、インスタンス間を適切に接続するための機能も充実しています。

これらの機能は、[Radia System Explorer] ウィンドウで操作対象を右クリックしたときに表示されるショートカット メニューからアクセスできます。表示されるメニューの内容は、右クリックした対象によって異なります。

ショートカット メニューの詳細なリストについては、271 ページの「Radia System Explorer のショートカット メニュー」を参照してください。

ドメインを操作する

ドメインを追加する

ファイルにドメインを追加するには

1. PRIMARY ファイルまたは任意のドメインを右クリックし、表示されたショートカット メニューの [新しいドメイン] をクリックします。

次のダイアログ ボックスが表示されます。

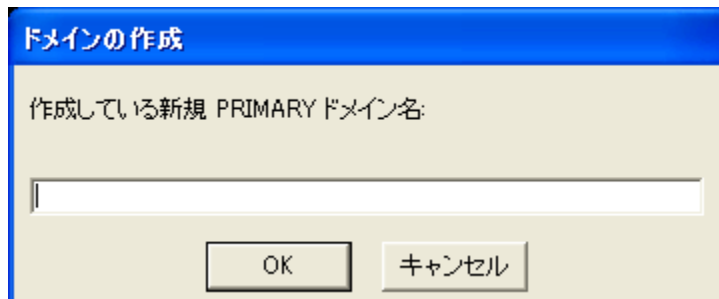


図 3.8 ~ [ドメインの作成] ダイアログ ボックス

2. 新しいドメインの名前を入力し、[OK] をクリックします。
ドメイン名に入力できる文字数は、半角で 8 文字までです (数字も使用可)。

クラスを操作する

クラスを追加する

新しいクラスの追加方法は、次のいずれかとなります。

- 既存のクラスをコピーする、
または
- クラスを新規作成して追加する。

追加するクラスと実質的に類似する属性を持つクラスが存在するかどうかによって、どちらを選択するかが決まります。該当するクラスがあればそのクラスをコピーし、ない場合はクラスを新規作成してから追加します。

クラスをコピーすると、コピーされたクラスと同じ属性を持つ新しいクラスが作成されます。新しいクラスのベース インスタンスには、コピーされたクラスのベース インスタンスの属性値が設定されます。

クラスをコピーする

既存のクラスをコピーするには

1. コピーするクラスを強調表示します。
2. クラスを右クリックします。
3. ショートカットメニューの [クラスのコピー] をクリックします。

次のダイアログ ボックスが表示されます。

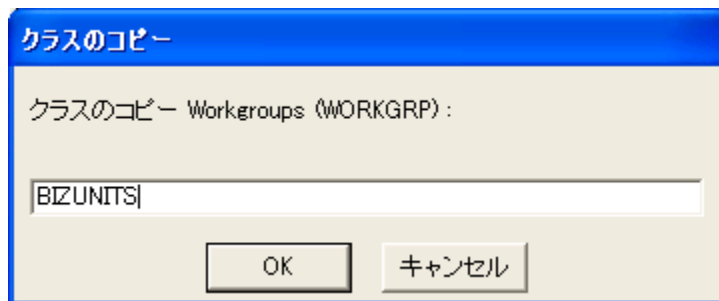


図 3.9 ~ [クラスのコピー] ダイアログ ボックス

4. 新しいクラスの名前 (BIZUNITS など) を入力し、[OK] をクリックします。
- クラスのコピー時にクラス エディタを開くオプションが選択されている場合 (詳細については、32 ページの「[オプション] ダイアログ ボックスを使用して設定を行う」を参照)、次の [クラス編集] ダイアログ ボックスが表示されます。62 ページの「クラスを編集する」を参照してください。

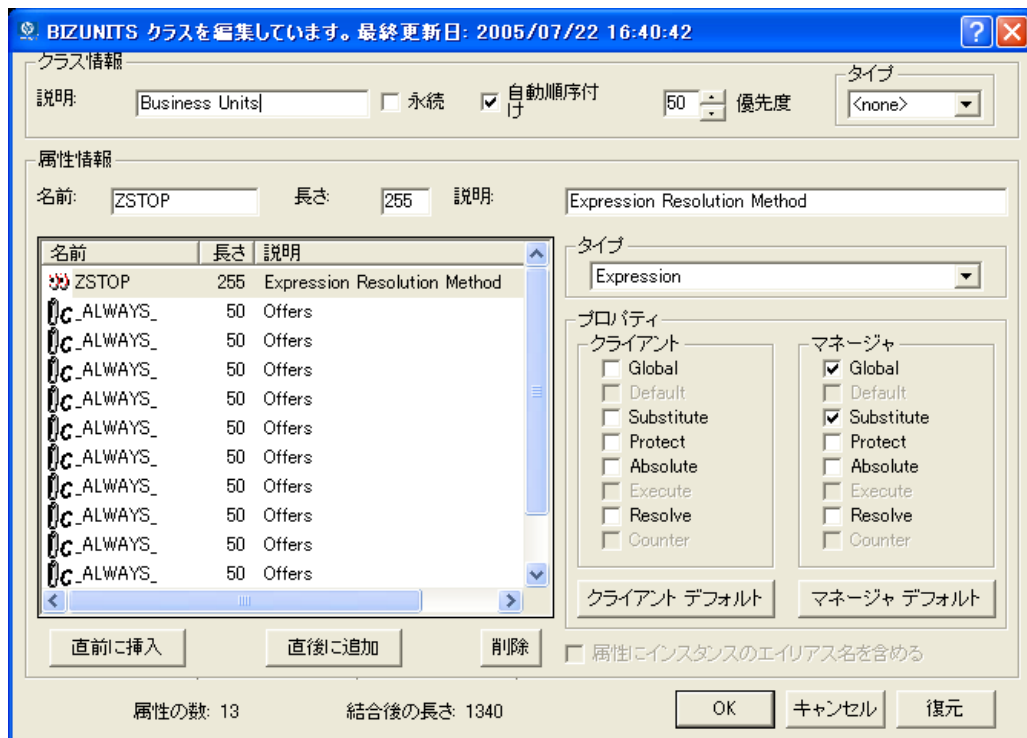


図 3.10 ~ [クラスのコピー時にクラス エディタを開く] オプション選択時に表示される [クラス編集] ダイアログ ボックス

- クラスのコピー時にクラス エディタを開くオプションが選択されていない場合は、コピー元のクラスが新しい名前でもコピーされ、クラス エディタは表示されません。また、警告 (次の手順を参照) も表示されません。新しくコピーしたクラスを編集するには、クラス エディタを手動で開く必要があります。

5. コピーしたクラスの追加を完了するには、[説明] フィールドを変更して新しく追加したクラスが特定できるようにし、クラスを編集して新しいクラスの要件を反映してから **[OK]** をクリックします。
次のメッセージが表示されます。

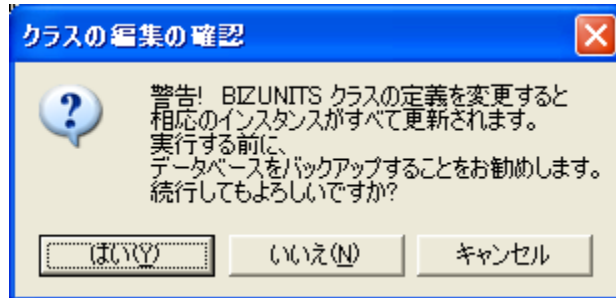


図 3.11 ~ [クラスの編集の確認] ダイアログ ボックス

6. **[はい]** をクリックして、新しいクラスの追加を完了します。

注意

図 3.11 のメッセージに対して **[いいえ]** または **[キャンセル]** をクリックすると、クラスのコピー プロセスは完了しません。**[クラス編集]** ダイアログ ボックスが閉じるだけです。作成したクラスを削除する場合は、73 ページの「**クラスを削除する**」を参照してください。

クラスを作成したら、そのクラスにドラッグ アンド ドロップ規則を設定するかどうかを指定する、`MASTER_CONNECTION_RULES` 変数を確認する必要があります。接続規則およびドラッグ アンド ドロップ接続の詳細については、217 ページの「**Radia データベース内の接続規則を管理する**」を参照してください。

クラスを新規作成する

クラスを新規作成して追加するには

1. 新しいクラスを挿入するドメインを強調表示します。
2. ドメイン名を右クリックします。
3. ショートカットメニューの **[新しいクラス]** をクリックします。
次のダイアログボックスが表示されます。

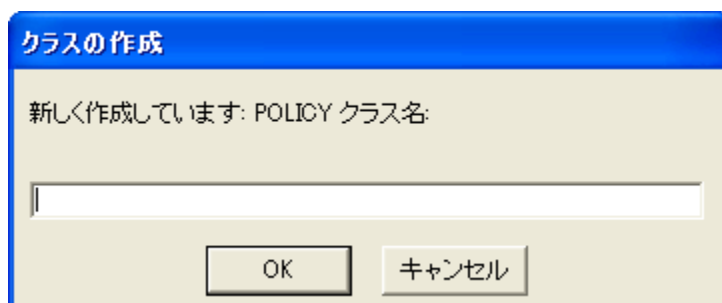


図3.12 ~ [クラスの作成] ダイアログボックス

4. 新しいクラスの名前 (BIZUNITS など) を入力し、[OK] をクリックします。
 - 新しいクラスの追加時にクラス エディタを開くオプションが選択されている場合 (詳細については、32 ページの「[オプション] ダイアログ ボックスを使用して設定を行う」を参照)、次の [クラス編集] ダイアログ ボックスが表示されます。[クラス編集] ダイアログ ボックスについては、62 ページの「クラスを編集する」を参照してください。

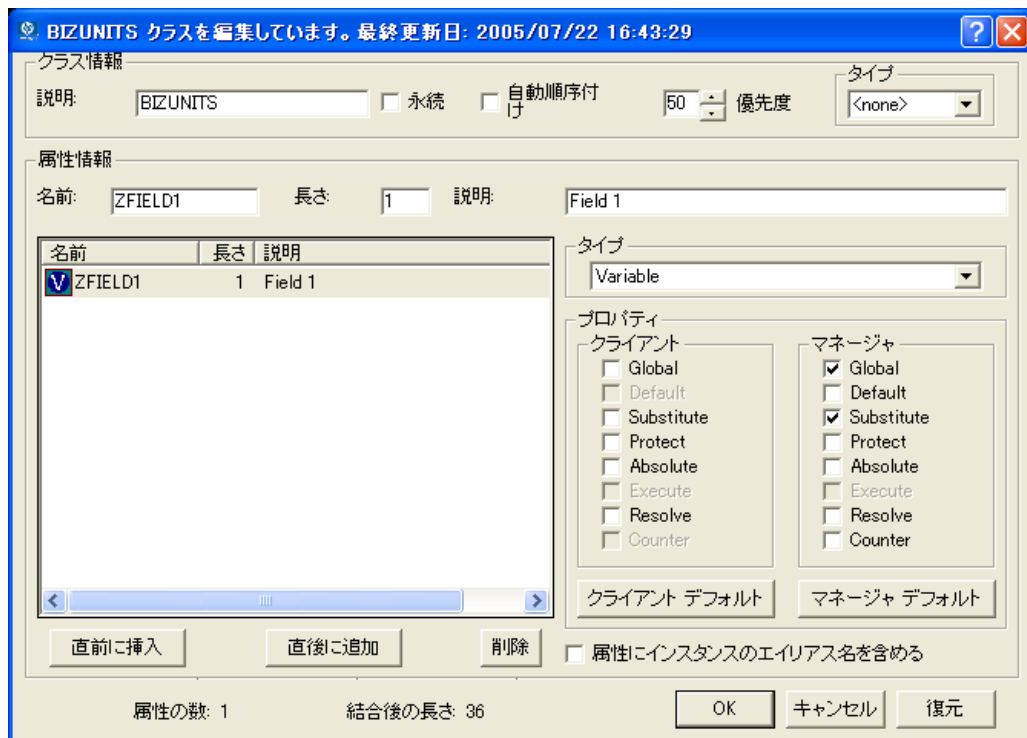


図 3.13 ~ [クラス編集] ダイアログ ボックス

- 新しいクラスの追加時にクラス エディタを開くオプションが選択されていない場合は、指定した名前でも新しいクラスが追加され、クラス エディタは表示されません。また、警告 (次の手順を参照) も表示されません。新しく追加したクラスを編集するには、クラス エディタを手動で開く必要があります。

- 新しいクラスの追加を完了するには、[説明] フィールドを変更して新しく追加したクラスが特定できるようにし、クラスを編集して新しいクラスの要件を反映してから [OK] をクリックします。次のメッセージが表示されます。

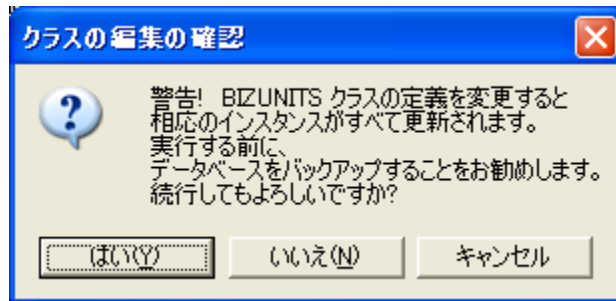


図 3.14 ~ [クラスの編集の確認] ダイアログ ボックス

- [はい] をクリックして、新しいクラスの追加を完了します。

注意

図 3.14 のメッセージに対して [いいえ] または [キャンセル] をクリックすると、クラスの作成プロセスは完了しません。[クラス編集] ダイアログ ボックスが閉じるだけです。作成したクラスを削除する場合は、73 ページの「クラスを削除する」を参照してください。

クラスを作成したら、そのクラスにドラッグアンドドロップ規則を設定するかどうかを指定する、MASTER_CONNECTION_RULES 変数を確認する必要があります。接続規則およびドラッグアンドドロップ接続の詳細については、217 ページの「*Radia* データベース内の接続規則を管理する」を参照してください。

クラスを編集する

ショートカットメニューの [クラス編集] を選択したとき、または新しいクラスを追加したとき (56 ページの「クラスを追加する」を参照) に、[クラス編集] ダイアログ ボックスが表示されます。

クラスを編集するには

1. ツリー ビューで Departments クラスを右クリックし、表示されたショートカットメニューの [クラス編集] をクリックします。
[クラス編集] ダイアログ ボックスが表示されます。



図 3.15 ~ [クラス編集] ダイアログ ボックス

2. ダイアログ ボックスの上部にある [クラス情報] の各プロパティを、次の表に従って設定します。

表 3.1 ~ [クラス情報] のプロパティ	
[クラス情報] のプロパティ	意味および設定
[説明]	クラスおよびその用途を説明する簡略名です。ツリー ビューで、クラスのアイコンの横にこの名前が表示されます。
[永続]	<p>このプロパティは、Radia の解決プロセスを十分に理解している Radia 管理者が使用します。</p> <p>永続クラスとは、解決プロセスの実行中、その属性およびオブジェクトがグローバルメモリに保持されるクラスです。永続クラスから作成されたインスタンスは、Radia Client のデスクトップに保存できます。</p> <p>永続クラスでないクラスは、一時クラスといいます。一時オブジェクトは、解決の過程で処理されるときにしか存在しません。一時クラスから作成されたインスタンスは、Radia Client のデスクトップに保存できません。</p> <p>永続オブジェクトと一時オブジェクト、およびこれらのオブジェクトが解決プロセスに組み込まれるしくみの詳細については、205 ページの「解決プロセスについて理解する」を参照してください。</p>
[自動順序付け]	<p>属性の解決は通常、属性リストでの表示順に従って実行されます。205 ページの「解決プロセスについて理解する」を参照してください。</p> <p>このチェック ボックスをオンにするとクラスの属性が以下のようにグループ化され、解決時の処理順が決まります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 式 • 変数 • クラス (接続) • メソッド <p>グループは上に示した順序で処理が行われます。各グループの属性は、属性リストの表示順で処理されます。</p> <p>解決の実行時に、属性の通常の処理順序を変更する必要があるければ、このチェック ボックスはオフにしてください。</p>






表 3.1 ~ [クラス情報] のプロパティ

[クラス情報] のプロパティ	意味および設定																
[優先度]	<p>このフィールドには、00 ~ 99 の半角 2 文字の値が設定できます。オブジェクトの解決時に、Radia Configuration Server によって ZOPJPRI 変数にこの値が代入されます。このフィールドの値がゼロに設定されている場合、または値が設定されていない場合は、そのクラスに対して指定されているデフォルト値が代入されます。各クラスのデフォルト値は以下のとおりです。</p> <table border="0" data-bbox="505 438 711 716"> <tr><td>PATH</td><td>5</td></tr> <tr><td>REGISTRY</td><td>60</td></tr> <tr><td>DESKTOP</td><td>70</td></tr> <tr><td>FILE</td><td>50</td></tr> <tr><td>METACLAS</td><td>10</td></tr> <tr><td>ZSERVICE</td><td>50</td></tr> <tr><td>MACALIAS</td><td>70</td></tr> <tr><td>その他すべて</td><td>50</td></tr> </table>	PATH	5	REGISTRY	60	DESKTOP	70	FILE	50	METACLAS	10	ZSERVICE	50	MACALIAS	70	その他すべて	50
PATH	5																
REGISTRY	60																
DESKTOP	70																
FILE	50																
METACLAS	10																
ZSERVICE	50																
MACALIAS	70																
その他すべて	50																
[タイプ]	<p>クラスを用途と目的に従って分類します。この分類は、解決プロセスに影響を与えます。たとえば、クライアント コンピュータに Radia サービスリストを格納するための解決では、[コンポーネント] に分類されたクラスは処理されません。ドロップダウン リストから選択できる値は以下のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [<none>] — このクラスは分類されません。 • [設定] — Radia で管理されるクライアント コンピュータのコンテンツを集計レベルで特定します。通常、このクラスのインスタンスには配布可能なデータは格納されません。このクラスのインスタンスは、1 つまたは複数のコンポーネント クラスのインスタンスに接続されます。設定 クラスとしては、ZSERVICE、PACKAGE、VGROUP、VERSION があります。 • [コンポーネント] — 設定 クラス インスタンスによって指定されるコンテンツの構成アイテム (ファイル、レジストリ エントリ、リンク、アイコンなど) を特定します。通常、このクラスのインスタンスには配布可能なデータが格納されます。コンポーネント クラスとしては、FILE、REGISTRY、DESKTOP があります。 • [ポリシー] — 単独またはグループのクライアント コンピュータを特定します。通常、ポリシー クラスのインスタンスは、別のポリシー クラスのインスタンス、または設定 クラスのインスタンスのいずれかに接続されます。 																

3. 属性の定義を変更するには、**属性リスト**でその属性の名前をクリックして強調表示します。**[属性情報]**の各テキストボックスに、強調表示されている属性の名前、長さ、および説明が表示されます。**[タイプ]**ボックスには、その属性のタイプが表示されます。

4. [属性情報] データ入力フィールドに変更内容を入力し、[タイプ] オプションで該当する属性のタイプをクリックします。クラスの属性は、下の表 3.2 で説明する 4 つのタイプのいずれかとなります。

表 3.2 ~ クラスの属性のタイプとその機能

属性のタイプ	使用方法
式 	解決時に実行される 1 行の REXX コマンドが格納されます。ZSTOP という属性の式は、“true” と評価されると現在のインスタンスの解決を終了します。
変数 	変数の値を格納する領域に名前を付けたものです。変数の値は、クライアントの解決済み配布モデルの一部であり、メッセージングやシンボリック置換を介して解決プロセスに影響を与えます。
接続 (使用可能) 	クラス接続によって、クライアント接続プロセスにおいて、クライアントの配布モデルの解決に使用するパスが特定されます。 使用可能な接続とは、別のクラスへの接続が設定できる属性のことです。設定済みの接続とは、別のクラスへの接続が既に指定されている属性のことです。
接続 (設定済み) 	クラス接続は、実際には解決プロセスの一部です。205 ページの「 解決プロセス 」について理解する」を参照してください。
注意: アイコン内の文字は、以下の接続タイプを意味します。 A – 常時 C – クラス I – インクルード R – 必須	<ul style="list-style-type: none"> • 常時接続は、属性の名前に関係なく常に解決されます。 • クラス接続は、属性の名前が <code>_ALWAYS_</code> の場合、またはシステム メッセージの現在の値と一致する場合に解決されます。 • インクルード接続は、属性の名前に関係なく常に解決されます。 • 必須接続では、必須のインスタンスおよびその子のインスタンス名が、それを必要とするインスタンスおよびその子のインスタンス名と一致する場合、前者のインスタンスの解決は行われません。 必須接続タイプとインクルード接続タイプは、パッケージ間の関係を表し、PACKAGE クラスのインスタンスを接続する場合に、他の接続タイプよりも便利に使用できます。 あるパッケージが別のパッケージを必要とする場合、必須のパッケージのコンポーネントはそれを必要としているパッケージのコンポーネントに上書きされます。 あるパッケージが別のパッケージをインクルードする場合は、どちらも単独のエンティティとして配布されます。
メソッド 	メソッドは、解決プロセスの一部として実行されるプログラムです。メソッド属性によって、実行するプログラムが特定されます。

変更を行うと、その変更が直ちに属性リストに反映されます。

5. [プロパティ] の各チェック ボックスは、属性のタイプに応じてオンまたはオフにできます。

クライアント プロパティ

警告

Radia Client のプロパティは、**保護**と**実行**以外はすべて将来の拡張用に予約済みです。デフォルト値以外に設定しないでください。

- Radia クライアント プロパティの [**保護**] を選択すると、クライアント コンピュータのオブジェクトに格納された属性の値が暗号化されます。
- Radia クライアント プロパティの [**実行**] を選択すると、実行対象のメソッドはクライアント コンピュータで実行されます。このプロパティはメソッド属性にのみ適用されます。

マネージャ プロパティ

次の表は、マネージャ プロパティの意味を示しています。

表 3.3 ~ マネージャ プロパティとその機能

プロパティ	意味および設定
[グローバル]	一時クラスの変数に設定した場合、解決の過程で一時オブジェクトが消滅する前に、子オブジェクトから親オブジェクトへのその変数の移動 (フロー) が許可されます。
[デフォルト]	Radia 内部で使用され、Radia 管理者は設定できません。このチェック ボックスがオンの場合、一時クラス オブジェクトのデフォルト値は、親の永続クラス オブジェクトに反映されません。
[置換]	このチェック ボックスをオンにすると、変数の値のシンボル (他の変数への参照で、アンパサンドで始まる) に対しシンボリック置換が行われます。このチェック ボックスをオフにすると、変数の値はリテラル テキストとして扱われ、シンボリック置換は行われません。 マネージャの置換プロパティは、Radia Configuration Server の GET オペレーション (たとえば、REXX プログラムによる EDMGET 関数の呼び出し) の結果として変数が作成された場合に、シンボリック置換を行うかどうかを指定します。EDMGET によって取得されたオブジェクトの変数にシンボルが含まれ、オブジェクトが作成されたときにマネージャの [置換] チェック ボックスがオンになっていると、その変数が領域内に作成されるときに置換が行われます。 シンボルの例: &(ZMASTER.ZUSERID) 置換後: WILLIAM 上の例は、ZMASTER オブジェクトの ZUSERID 属性の値が WILLIAM の場合の、シンボリック置換の実行結果です。
[保護]	このチェック ボックスをオンにすると、解決の実行時に属性の値が暗号化されます。解決の実行中、属性値は暗号化形式でメモリに格納されますが、Radia データベースにはプレーンテキストとして格納されます。

表 3.3 ~ マネージャ プロパティとその機能

プロパティ	意味および設定
[絶対]	永続クラスの変数に設定した場合、一時クラスからインスタンス化された子オブジェクトの変数は、親オブジェクトの同じ名前の変数の値を上書きしません。
[実行]	このチェック ボックスをオンにすると、属性の値によって、Radia Configuration Server で実行されるメソッドが特定されます。
[解決]	<p>このチェック ボックスをオンにすると、変数の値のシンボル (他の変数への参照で、アンパサンドで始まる) に対しシンボリック置換が行われます。このプロパティのチェック ボックスをオフにすると、変数の値はリテラル テキストとして扱われ、シンボリック置換は行われません。</p> <p>マネージャの Resolve プロパティは、オブジェクトに変数が格納される時 (たとえば、クラス インスタンスが Radia データベースから取得され、オブジェクトとして領域内でインスタンス化される時) に、シンボリック置換を行うかどうかを指定します。</p>
[カウンタ]	<p>このチェック ボックスをオンにすると、変数に Radia Configuration Server で累積される整数が格納されます。累積合計は、すべての親永続オブジェクトの変数と同じ名前の変数に格納されます。</p> <p>たとえば、あるサービス用に配布するすべてのリソースの非圧縮サイズの合計を計算し、その結果を ZSERVICE オブジェクトに格納するタスクにこのプロパティを使用すると、FILE クラスの ZRSCSIZE 変数に対してこのチェック ボックスをオンにすると、ZSERVICE オブジェクトに ZRSCSIZE 変数が追加されます。この変数は、サービスのすべての FILE インスタンスの ZRSCSIZE 値の合計を保持します。ユーザーに対する全サービスのリソースの合計サイズが、そのユーザーの ZMASTER オブジェクトの ZRSCSIZE 変数に自動的に格納されます。FILE クラス テンプレートの ZRSCSIZE 変数に対して、マネージャの [カウンタ] チェック ボックスをオンにすると、ZSERVICE オブジェクトと ZMASTER オブジェクトの ZRSCSIZE 変数が、Radia Configuration Server によって自動的に作成および管理されます。</p> <p>クラス テンプレートの変数の定義でこのプロパティを選択することにより、整数を格納する変数は累積の対象となり、親永続オブジェクトに格納されます。たとえば、FILE クラスの ZCMPSIZE 変数でこのチェック ボックスをオンにすると、サービス用に配布されるリソースの圧縮サイズの合計が計算されます。</p>

[プロパティ] グループ ボックスの下部にあるデフォルト ボタンをクリックすると、選択した (強調表示された) 属性のプロパティの設定がデフォルト値にリセットできます。

クラスに属性を追加する

1. 新しい属性を追加するには、その属性を属性リストのどこに挿入するかを最初に決定します。上記で説明したように、[自動順序付け] チェック ボックスがオンになっていない場合、解決の実行時に、属性は属性リストでの表示順に処理されます。

2. 挿入先の前または後となる属性をクリックし、強調表示します。強調表示されている属性の直前に新しい属性を挿入する場合は [直前に挿入] を、直後に挿入する場合は [直後に追加] をクリックします。指定した場所に空の属性 (デフォルトでは変数属性) が挿入されます。

3. [属性情報] データ入力フィールドに、名前、長さ、説明を入力し、[タイプ] ボックスの一覧から目的の属性のタイプを選択します。属性名に入力できる文字数は、半角で 8 文字までです。

属性名によっては、解決プロセスに影響を与える場合があります。一時クラスからインスタンス化された子オブジェクトの変数の値は、永続クラス内で表される、親オブジェクトの同じ名前の変数の値に取って代わることができます。メソッド属性またはクラス接続属性の名前に応じて、メソッドおよびクラス接続が条件付きで実行される場合と無視される場合があります。属性の名前が **_ALWAYS_** であれば、メソッドまたはクラス接続は無条件に実行されます。それ以外の場合でメソッドまたはクラス接続が実行されるのは、属性の名前がシステム メッセージの現在の値と同じ場合のみです。205 ページの「[解決プロセスについて理解する](#)」を参照してください。

属性の長さは文字数で指定します。属性の値の最大文字数と同じかまたはそれ以上の数を入力します。接続属性およびメソッド属性に設定する値は、通常は 50 で十分です。変数属性に必要な長さは、その変数に格納されるデータによって異なります。

入力した説明は、このクラスのインスタンスを編集するときに [インスタンス編集] ダイアログ ボックスの [属性の説明] カラムに表示されます。明確な説明を入力しておけば、後でクラスのインスタンスを編集する人にとってわかりやすくなります。変数属性には、その変数属性に格納されるデータを明確に特定する説明を入力します。クラス接続には、「Connect to」と入力するか、または目的を表す説明を入力します。メソッドおよび式の場合は、そのメソッドまたは式の目的を表す説明にします。

4. 属性の値を Radia System Explorer での表示名として設定するには、属性を選択してから [属性にインスタンスのエイリアス名を含める] チェック ボックスをオンにします。これは通常 Name (簡略名) 属性に設定されます。この設定が可能な属性は、各インスタンスにつき 1 つのみです。

オプションの属性編集コントロール

変数属性の [属性の説明] を利用して、[インスタンス編集] ダイアログ ボックスでその変数属性を入力または編集する場合に表示されるコントロールが指定できます。通常、変数属性はテキスト ボックスにフリー テキストで入力または編集します。これは、単独のフラグ (yes/no フィールド) を示すチェック ボックス、フラグセット (複数の単一文字で構成されるフィールド) を示すチェック ボックスのセット、または事前に定義された値のリストから任意の値を選択する、変数のドロップダウン リストに変更できます。

この機能を有効にするには、[オプション] ダイアログ ボックスの [インスタンス オプション] タブで、[インスタンスの編集時に編集マスクを使用] チェック ボックスをオンにする必要があります。詳細については、36 ページの表 2.8 を参照してください。

フラグ属性

フラグ属性は 1 文字のフィールドで、値は **Y** または **N** です。インスタンスのフラグ属性を入力または編集する場合にチェック ボックスが表示されるようにするには、クラス テンプレートで属性の説明の最後に [Y/N] を付ける必要があります。次に例を示します。

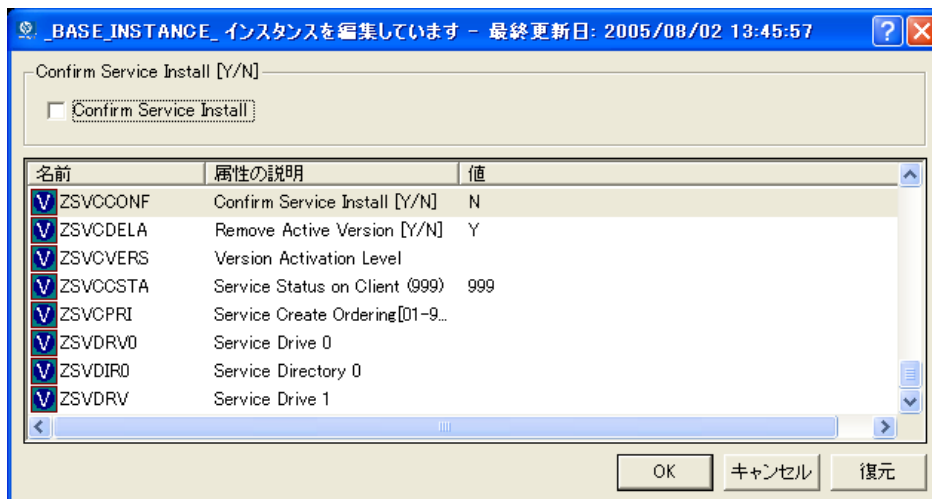


図 3.16 ~ [Y/N] が最後に付加された ZSVCCONF 変数の [属性の説明] (フラグ属性であることが示される)

ZSVCCONF 属性の長さは 1 文字で、[属性の説明] には、最後に [Y/N] が付いた “**Confirm Service Install [Y/N]**” が表示されています。したがって、この変数の入力または編集を行う場合にはチェック ボックスが表示されます。

フラグセット属性

フラグセット属性は 2 文字以上のフィールドで、ゼロまたは 1 つ以上の単一文字フラグで構成される値を格納します。フラグセット属性のフラグがオンの場合、そのフラグに関連付けられた文字値がフラグセット文字列に表示されます。フラグセット属性のフラグがオフの場合、そのフラグに関連付けられた文字値はフラグセット文字列に表示されません。フラグセット文字列に何も表示されない場合は、そのフラグセットにオンのフラグがないことを意味します。

たとえば、特定のファイルの DOS ファイル属性のフラグセットは、FILE クラスの ZRSCRASH 属性に格納されています。この 4 文字長の属性は、ファイルをユーザーのデスクトップに配布するとき、FILE インスタンスに関連付けられたそのファイルの DOS ファイル属性 (R = 読み取り専用、A = アーカイブ、S = システム、H = 非表示) のうちどれをオンにするかを示す文字列を格納します。インスタンスのこの属性を編集するときは、次のように表示されます。

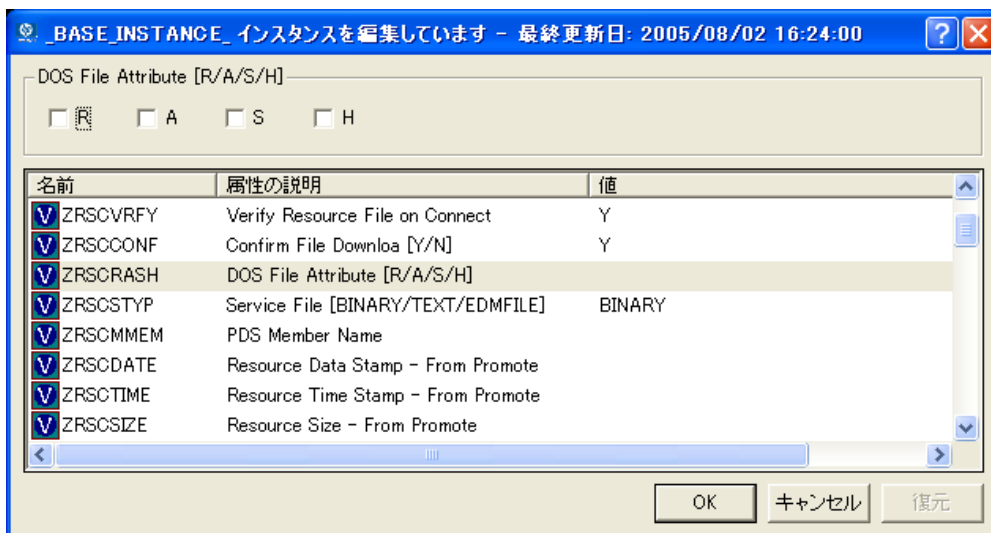


図 3.17 ~ 角かっこで囲まれたスラッシュ区切りの複数の単一文字オプションが最後に付加された [属性の説明] (フラグセットが表示される)

長さが 2 文字以上の属性で、[属性の説明] の最後に角かっこで囲まれたスラッシュ区切りの複数の単一文字オプションが入力されていて、オプションの数が属性の長さと同じである場合 (上の ZRSCRASH 属性を参照)、その属性はフラグセットとして扱われます。[インスタンス編集] ダイアログボックスには、フラグセットの使用可能な各値に対応するチェックボックスが表示されます。任意のチェックボックスをオンにすると、それに関連付けられた値が属性に挿入されます。

ドロップダウン リスト

クラス テンプレートで属性の説明の最後に、角かっこで囲まれたスラッシュ区切りの複数のオプションが入力されている場合、属性の入力または編集にドロップダウン リストが使用できます。

たとえば次に示すように、FILE クラスの ZRSCSTYP 属性では、ドロップダウン リスト コントロールをクリックすると [属性の説明] にある 3 つのオプションが表示されます。



図 3.18 ~ 角かっこで囲まれたスラッシュ区切りの複数のオプションが最後に付加された [属性の説明] (属性の編集にドロップダウン リストが表示される)

5. クラスに変更を加えるときに、変更をやり直したくなる場合も想定されます。クラスの編集中に変更が行われると、[復元] が選択可能になります。このボタンをクリックすると、[クラス編集] ダイアログ ボックスが表示されてからそのクラスに対して行った変更が破棄できます。

次のメッセージが表示されます。

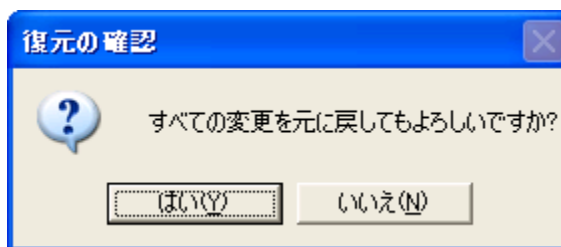


図 3.19 ~ [復元の確認] ダイアログ ボックス

- 変更を破棄し、クラスの編集を最初からやり直す場合は **[はい]** をクリックします。
 - 変更を破棄せずに確認ダイアログ ボックスを閉じる場合は **[いいえ]** をクリックします。
6. クラスの編集が完了したら、**[OK]** をクリックして変更を保存し、**[クラス編集]** ダイアログ ボックスを閉じます。
 7. クラスの属性名または説明が入力されていない場合や、属性の長さがゼロの場合には、次の警告が表示されます。

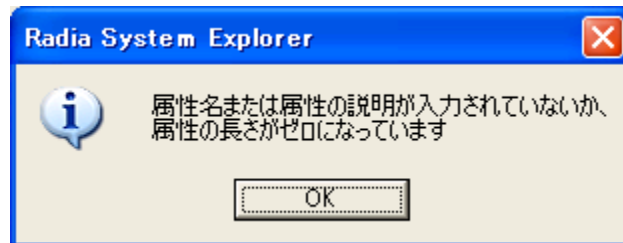


図 3.20 ~ 空の属性フィールドに対する警告のダイアログ ボックス

8. 属性名および説明が入力されていて、属性の長さがゼロでなければ、変更の確認メッセージが表示されます。

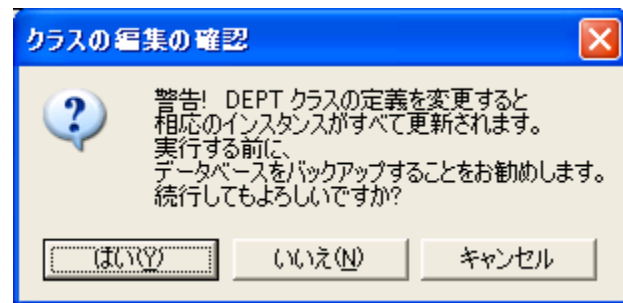


図 3.21 ~ [クラスの編集の確認] ダイアログ ボックス

9. **[はい]** をクリックすると、クラスの既存のインスタンスがすべて更新されます。
[いいえ] をクリックすると、クラスに対する変更が破棄され、インスタンスの更新は行われません。
[キャンセル] をクリックすると、**[クラス編集]** ダイアログ ボックスに戻ります。

クラスを削除する

クラスとそのすべてのインスタンスを削除するには

1. Radia System Explorer のツリー ビューで、クラスを右クリックします。
2. 表示されたショートカット メニューの [クラスの削除] をクリックします。
確認のダイアログ ボックスが表示されます。

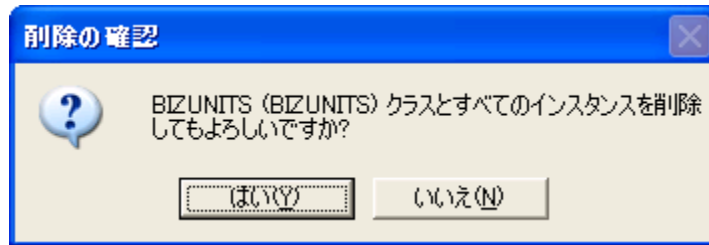


図 3.22 ~ クラスを削除するときの [削除の確認] ダイアログ ボックス

3. クラスおよびそのすべてのインスタンスを削除する場合は、[OK] をクリックします。
削除を行わずにメッセージを閉じる場合は [キャンセル] をクリックします。

インスタンスを操作する

Radia 管理者が行う操作の大部分は、さまざまなクラスのインスタンスの追加、編集、削除、およびインスタンスの接続の設定や削除です。

インスタンスを追加する

新しいインスタンスは、既存のインスタンスをコピーするか、またはインスタンスを新規作成してから追加することができます。追加するクラスと実質的に類似する属性を持つクラスが存在するかどうかによって、どちらを選択するかが決まります。該当するインスタンスがあればそのインスタンスをコピーし、ない場合はインスタンスを新規作成してから追加します。

インスタンスをコピーする

インスタンスをコピーすると、コピーされたインスタンスと同じ属性値を持つ新しいインスタンスが作成されます。

既存のインスタンスをコピーするには

1. ショートカットメニューの [インスタンスのコピー] をクリックします。
[インスタンスのコピー] ダイアログ ボックスが表示されます。

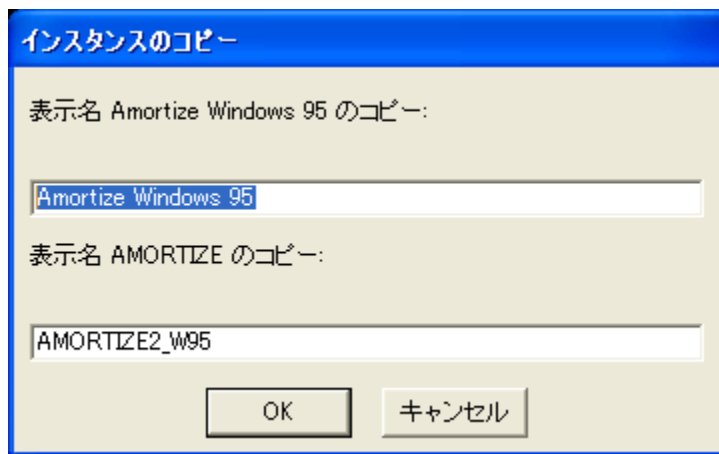


図 3.23 ~ [インスタンスのコピー] ダイアログ ボックス

2. 新しいインスタンスの表示名 (簡略名) およびインスタンス名を入力し、[OK] をクリックします。
インスタンスが作成され、[Radia System Explorer] ウィンドウのツリー ビューとリスト ビューの両方に表示されます。
作成されたインスタンスをツリー ビューで選択して開いたときに、簡略名はツリー ビューに、インスタンス名 (内部名) はリスト ビューのタイトル バーに表示されます。

インスタンスを新規作成して追加する

インスタンスを新規作成して追加すると、クラスのベース インスタンスで設定されている属性値を持つ新しいインスタンスが作成されます。

インスタンスを新規作成して追加するには

1. ショートカット メニューの [インスタンスを新規作成] をクリックします。
[インスタンスの作成] ダイアログ ボックスが表示されます。

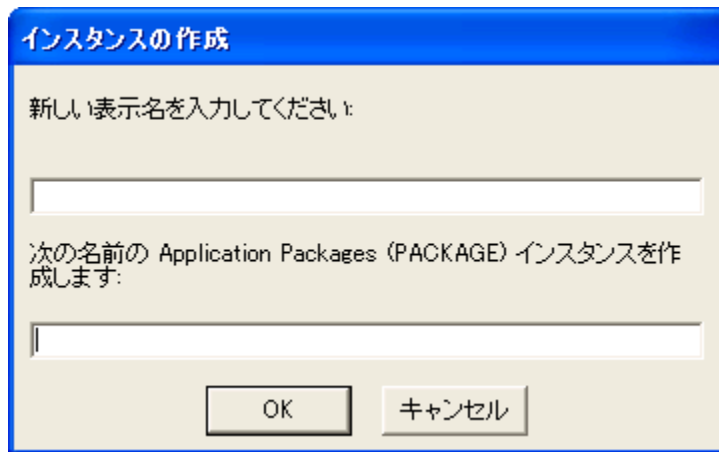


図 3.24 ~ [インスタンスの作成] ダイアログ ボックス

2. 表示名 (簡略名) およびインスタンス名を入力し、[OK] をクリックします。
インスタンスが作成され、[Radia System Explorer] ウィンドウのツリー ビューとリスト ビューの両方に表示されます。
簡略名はツリー ビューに、インスタンス名 (内部名) はリスト ビューのタイトル バーに表示されます。
この新しいインスタンスを編集して属性値が設定できます。

インスタンスを編集する

インスタンスを編集するには

1. ショートカットメニューの [インスタンス編集] をクリックするか、または [Radia System Explorer] ウィンドウのリスト ビューで属性の名前をダブルクリックします。

[インスタンス編集] ダイアログ ボックスが表示されます。

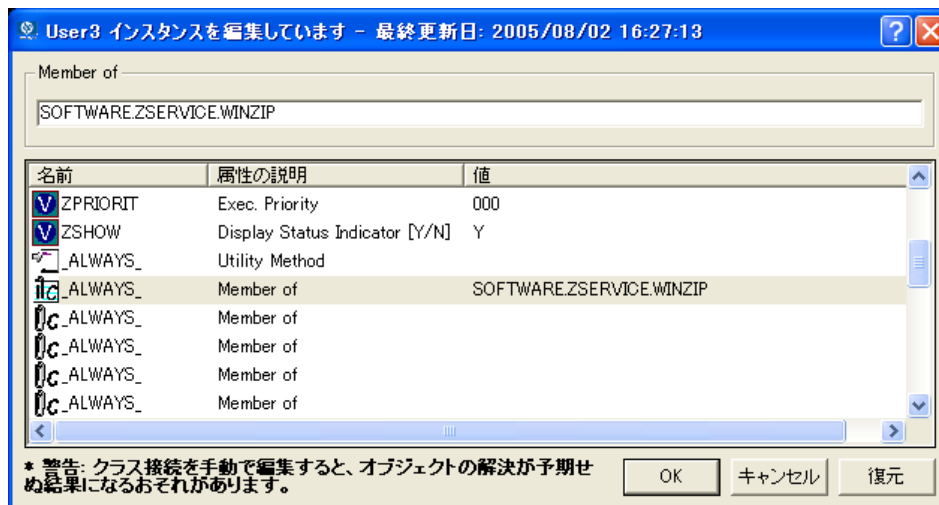


図 3.25 ~ [インスタンス編集] ダイアログ ボックス

ショートカットメニューの [インスタンス編集] をクリックした場合は、インスタンスの最初の属性が編集可能な状態でダイアログ ボックスに表示されます。属性名をダブルクリックした場合は、その属性が編集可能な状態でダイアログ ボックスに表示されます。

ダイアログ ボックスには、インスタンスを構成する属性およびその現在の値の一覧が表示されます。強調表示された属性が、ダイアログ ボックスの上部のデータ入力フィールドで編集可能な状態となっています。

2. ダイアログ ボックスの上部にあるテキスト ボックスに値を入力します。
クラス テンプレートでの属性の説明での指定に基づいて、特定の属性に使用する編集コントロールのタイプを指定する方法については、69 ページの「オプションの属性編集コントロール」を参照してください。
3. 別の属性を選択して強調表示するには、その属性の名前をクリックします。
4. 編集する属性を順次選択し、それぞれに必要な値を入力して、インスタンスの編集を完了します。

5. **[OK]** をクリックして変更を保存し、ダイアログ ボックスを閉じます。
次の確認メッセージが表示されます。

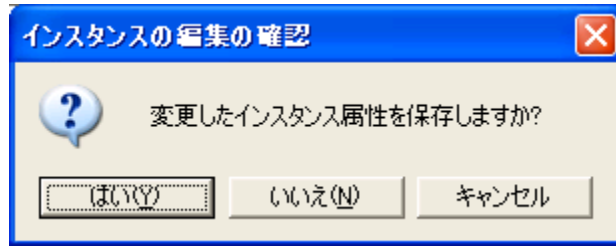


図 3.26 ~ [インスタンスの編集の確認] ダイアログ ボックス

注意

この確認メッセージは、[オプション] ダイアログ ボックスの [インスタンス オプション] タブで [インスタンスを更新する前] チェック ボックスをオンにしている場合に表示されます。[オプション] ダイアログ ボックスについては、32 ページの「[オプション] ダイアログ ボックスを使用して設定を行う」を参照してください。

6. **[はい]** をクリックすると、インスタンスの更新が完了します。
[いいえ] をクリックすると、インスタンスに対する変更が破棄され、Radia System Explorer のメイン ウィンドウに戻ります。
[キャンセル] をクリックすると、[インスタンス編集] ダイアログ ボックスに戻ります。
- 接続属性の編集時には、クラス接続の手動編集についての警告がダイアログ ボックスの下部に表示されます。接続の値の入力は複雑になる場合があり、1 つでも入力ミスがあると、解決の実行時に予期せぬ結果が生じる可能性があります。クラスの属性を接続するときは、ドラッグ アンド ドロップ操作(101 ページの「ドラッグ アンド ドロップ接続」を参照)を行うことをお勧めします。

複数のインスタンスを編集する

Radia System Explorer では、1 回の操作で複数のインスタンスが編集できます。

複数インスタンスの編集は、選択したインスタンスのセットに対して行われます。選択したインスタンスのうち 1 つをテンプレートとして使用します。[インスタンス編集] ダイアログボックスには、テンプレートインスタンスの値が表示されます。テンプレートインスタンスの値を変更すると、選択したインスタンスセット全体にその変更が適用されます。変更は、変更操作を確認してダイアログボックスを終了した後で Radia データベースに保存されます。

複数インスタンスの編集を開始および実行するには

1. [Radia System Explorer] ウィンドウのリストビューで複数のインスタンスを選択します。

インスタンスを 1 つクリックして選択します。

選択したセットにインスタンスを 1 つ追加するには、**Ctrl** キーを押しながらクリックします。複数のインスタンスを範囲指定して選択したセットに追加する場合は、**Shift** キーを押しながらクリック、または **Ctrl** キーと **Shift** キーを押しながらクリックします。

選択したインスタンスは、次のように強調表示されます。

名前	インスタンス名	タイプ
BASE_INSTANCE_	_BASE_INSTANCE_	SOFTWARE.PACKAGE インスタンス
CLASS_BEHAVIORS_FILE_	_CLASS_BEHAVIORS_FILE_	SOFTWARE.PACKAGE インスタンス
CLASS_BEHAVIORS_REGISTRY_	_CLASS_BEHAVIORS_REGISTRY_	SOFTWARE.PACKAGE インスタンス
CLIENT_BEHAVIORS_	_CLIENT_BEHAVIORS_	SOFTWARE.PACKAGE インスタンス
Sads	SSS	SOFTWARE.PACKAGE インスタンス
Amortize_Windows 95/98	AMORTIZE2_W95	SOFTWARE.PACKAGE インスタンス
Amortize_Windows NT/2000/XP	AMORTIZE2_NT	SOFTWARE.PACKAGE インスタンス
Drag & View Windows 95/98	DRAGVIEW2_W95	SOFTWARE.PACKAGE インスタンス
Drag & View Windows NT/2000/XP	DRAGVIEW2_NT	SOFTWARE.PACKAGE インスタンス
GS-Calc Windows 95/98	GSCALC2_W95	SOFTWARE.PACKAGE インスタンス
GS-Calc Windows NT/2000/XP	GSCALC2_NT	SOFTWARE.PACKAGE インスタンス
Radia Behaviors 5/18/99	ADAPT	SOFTWARE.PACKAGE インスタンス
Radia Behaviors Panels	RADIA_BEHAVIORS_PANELS	SOFTWARE.PACKAGE インスタンス
Radia Client Behaviors	CLIENT_BEHAVIORS_237	SOFTWARE.PACKAGE インスタンス
Redbox Organizer Windows 95/98	REDBOX2_W95	SOFTWARE.PACKAGE インスタンス
Redbox Organizer Windows NT/2000/XP	REDBOX2_NT	SOFTWARE.PACKAGE インスタンス
Sales Demo Windows 95/98	SALES2_W95	SOFTWARE.PACKAGE インスタンス
Sales Demo Windows NT/2000/XP	SALES2_NT	SOFTWARE.PACKAGE インスタンス
Sales Update - Microsoft	SALES_MS	SOFTWARE.PACKAGE インスタンス
SER	SER	SOFTWARE.PACKAGE インスタンス
StratusPad Windows 95/98	STRATUSPAD2_W95	SOFTWARE.PACKAGE インスタンス
StratusPad Windows NT/2000/XP	STRATUSPAD2_NT	SOFTWARE.PACKAGE インスタンス
TightVNC	TIGHTVNC	SOFTWARE.PACKAGE インスタンス
Update and Install Behavior August 10, 1998	CLIENT_BEHAVIOR_081098	SOFTWARE.PACKAGE インスタンス
WINZII	WINZII	SOFTWARE.PACKAGE インスタンス
WINZIP	WINZIP	SOFTWARE.PACKAGE インスタンス
WINZIP_0008	WINZIP_0008	SOFTWARE.PACKAGE インスタンス

図 3.27 ~ 複数インスタンスの編集の開始

2. 複数インスタンスの編集操作のテンプレートとして使用するインスタンスを右クリックします。次のショートカットメニューが表示されます。

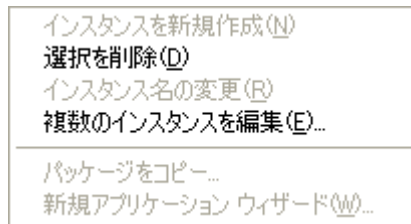


図 3.28 ~ [複数のインスタンスを編集] を選択

3. ショートカットメニューの [複数のインスタンスを編集] をクリックします。次の [インスタンス編集] ダイアログボックスが表示されます。

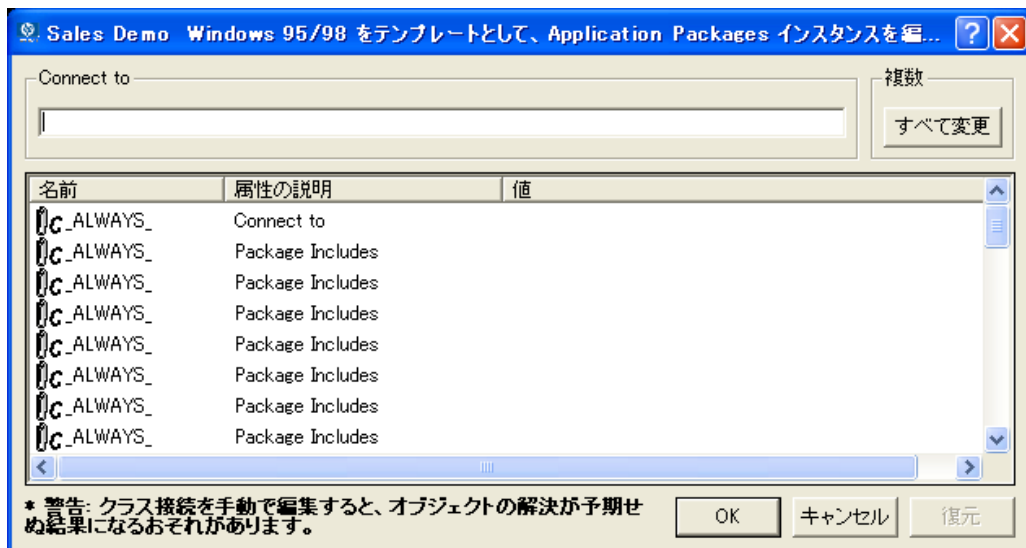


図 3.29 ~ [複数のインスタンスを編集] ダイアログボックス

選択されているインスタンスの数、それらのインスタンスのクラスの簡略名、およびテンプレートインスタンスの簡略名がタイトルバーに表示されます。

4. 選択したインスタンス セットのすべてのインスタンスにコピーする値を持つ変数を、スクロールしてクリックします。
- テンプレート インスタンスの選択した変数に、目的の値が既に設定されている場合、[すべて変更] をクリックして、選択したセットの他のインスタンスにその値をコピーします。
 - 選択した変数に目的の値が設定されていない場合は、値を編集します。
- どちらの場合も、[すべて変更] ボタンの文字が [リセット] に変わります。

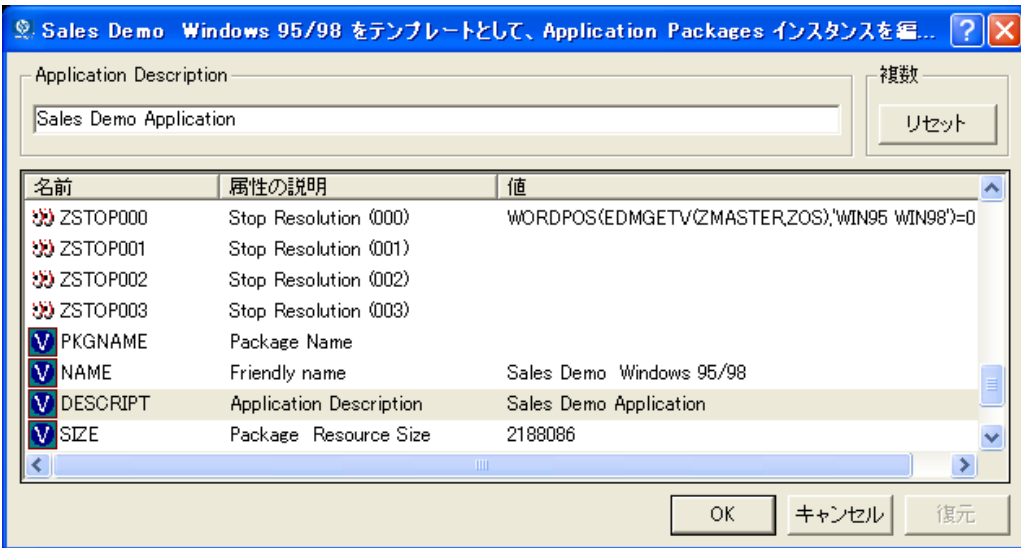


図 3.30 ~ [リセット] ボタンに変わった [すべて変更]

現在選択されている変数の値を元の内容に戻すには、次の操作を行います。

- [リセット] をクリックします。
インスタンスの変数をスクロールするときに、このボタンの文字を参照することにより、選択した変数に変更が行われたかどうかを判別できます。
 - ◆ ボタンの文字が [すべて変更] の場合、現在の [インスタンス編集] ダイアログ ボックス セッションではその変数に対する変更は行われていません。
 - ◆ ボタンの文字が [リセット] の場合、選択した変数に変更が加えられています。

少なくとも1つの変数に変更を行ってから別の変数を選択すると、[復元]が使用可能になります。

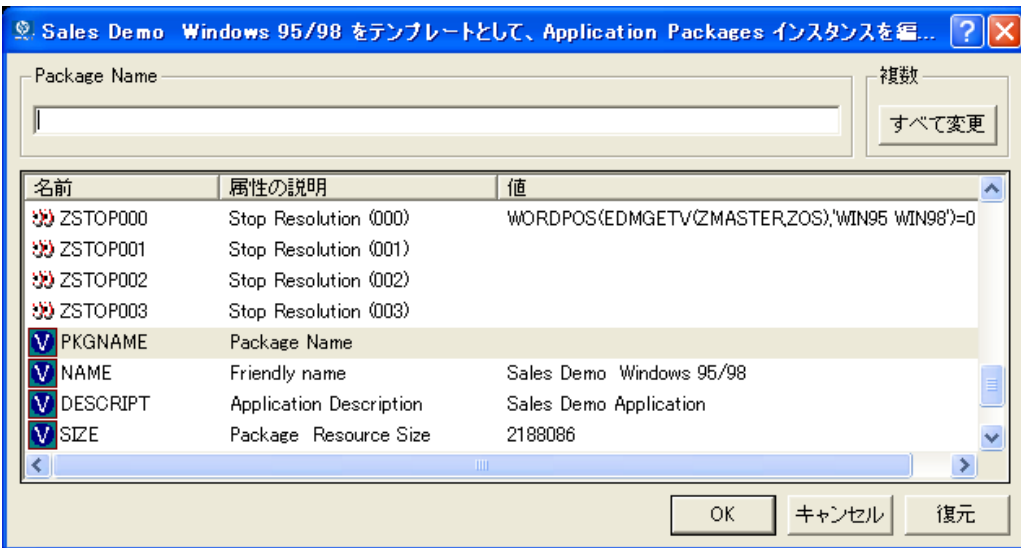


図 3.31 ~ 現在の [インスタンス編集] ダイアログ ボックス セッションでは強調表示されている変数に変更が行われていないことを示す [すべて変更] ボタン

現在の [インスタンス編集] ダイアログ ボックス セッションで行われたすべての変更を元に戻すには

1. [復元] をクリックします。

[復元] をクリックすると、操作確認のメッセージが表示されます。

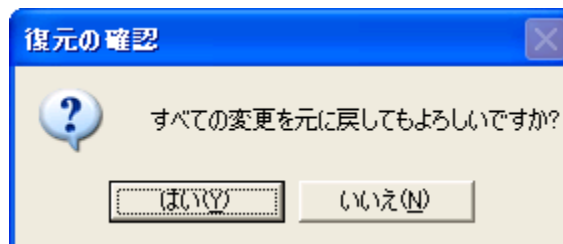


図 3.32 ~ [復元の確認] メッセージ

- 現在の [インスタンス編集] ダイアログ ボックス セッションで行われたすべての変更を元に戻すには、[はい] をクリックします。
[いいえ] をクリックすると、元の値には戻されず、[インスタンス編集] ダイアログ ボックス セッションが再開します。
[インスタンス編集] ダイアログ ボックス セッション中に行われた変更は、[OK] をクリックするまで Radia データベースには保存されません。変更を確認する次のメッセージが表示されます。

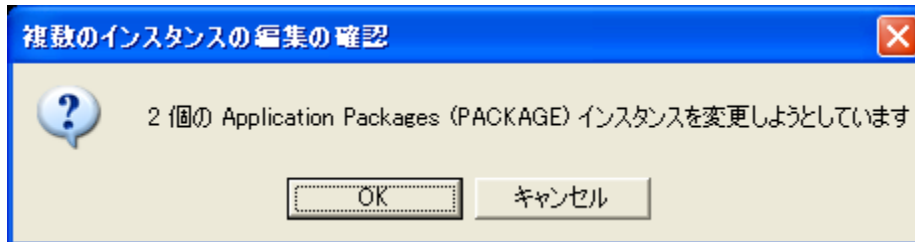


図 3.33 ~ [複数のインスタンスの編集の確認] ダイアログ ボックス

- テンプレート インスタンスで行った変更を選択したすべてのインスタンスに適用して、Radia データベースに変更を保存するには、[OK] をクリックします。
[キャンセル] をクリックすると、[インスタンス編集] ダイアログ ボックス セッションが再開します。
[インスタンス編集] ダイアログ ボックスで [キャンセル] をクリックすると、Radia データベースに変更を保存せずにダイアログ ボックスが終了できます。

インスタンスの名前を変更する

インスタンスの名前を変更する場合は、注意が必要です。インスタンスは、各自に設定されている接続属性を介して相互に接続されています。インスタンスの名前を変更すると、そのインスタンスに接続されている他のインスタンスの接続が無効になります。この結果、解決の実行時に予期せぬ影響が生じる可能性があります。インスタンスの名前を変更する前に、そのインスタンスに接続されているインスタンスを確認し、該当するインスタンスを適切に編集してください。

インスタンスの名前を変更するには

1. ツリー ビューで、名前を変更するインスタンスを右クリックします。
ショートカットメニューが表示されます。
2. ショートカットメニューの [インスタンス名の変更] をクリックします。
[インスタンス名の変更] ダイアログ ボックスが表示されます。

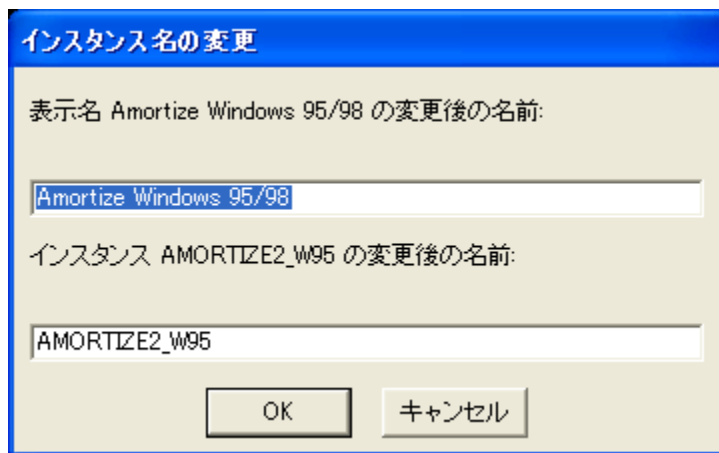


図 3.34 ~ [インスタンス名の変更] ダイアログ ボックス

3. インスタンスの新しい表示名 (簡略名) および新しいインスタンス名を入力し、[OK] をクリックします。

インスタンスを削除する

インスタンスを削除する場合は、注意が必要です。インスタンスは、各自に設定されている接続属性を介して相互に接続されています。インスタンスを削除すると、そのインスタンスに接続されている他のインスタンスの接続が無効になります。この結果、解決の実行時に予期せぬ影響が生じる可能性があります。インスタンスを削除する前に、そのインスタンスに接続されているインスタンスを確認し、該当するインスタンスを適切に編集してください。

インスタンスを削除するには

1. 削除するインスタンスを右クリックします。
ショートカットメニューが表示されます。
2. [インスタンスの削除] をクリックします。
確認メッセージが表示されます。

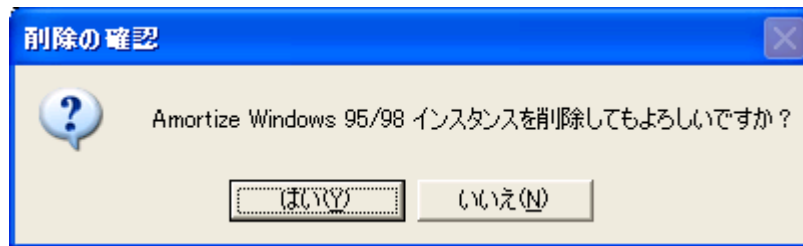


図 3.35 ~ [削除の確認] ダイアログ ボックス

3. インスタンスを削除するには、[はい] をクリックします。
インスタンスを削除せずにダイアログ ボックスを閉じるには、[いいえ] をクリックします。

まとめ

- Radia データベースには配布モデルが格納されます。
- Radia データベースは階層構造となっており、ファイル、ドメイン、クラス、およびインスタンスで構成されています。
- Radia System Explorer のツリー ビューには、セッションが開いている間に行われたナビゲーションの履歴が記録されます。
- 複合名を使用すると、Radia データベース内の多数のインスタンスの管理が容易になります。
- 各クラスのベース インスタンスによって、そのクラスのインスタンスのデフォルト値が提供されます。インスタンスの属性には、特定の値を入力した場合を除き、通常はクラスのベース インスタンスで指定されているその属性の値が設定されます。
- Radia System Explorer のショートカット メニューを使用して、Radia データベース コンポーネントの追加、編集、コピー、名前の変更、および削除を行うことができます。

Radia データベースに配布モデルをビルドする

この章は以下を目的としています。

- POLICY ドメインおよび SOFTWARE ドメインについて理解する。
- POLICY ドメインのインスタンスが作成できるようになる。
- 組織のニーズに合わせたポリシーを作成する方法を習得する。
- ポリシー インスタンスをサービスに接続する各種の方法について理解する。
- Radia Policy Manager とその用途に理解する。

配布モデルをビルドする

企業の配布モデルは、Radia データベースのインスタンス、インスタンスが保持する値、およびインスタンス間の接続によって定義されます。Radia では、大部分の管理作業は次の 2 つのドメインから始めます。

- POLICY ドメイン
- SOFTWARE ドメイン

POLICY ドメイン

Radia で管理される各クライアント コンピュータは、POLICY ドメインの Users クラスのインスタンスによって表されます。ソフトウェアを配布するための準備段階として、このドメインを使用してサブスライバを論理的なグループにまとめます。

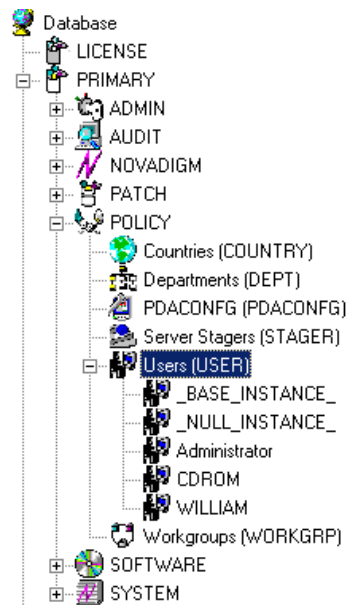


図 4.1 ~ PRIMARY.POLICY.Users クラス

POLICY ドメインには、デフォルト クラスとして Countries (COUNTRY)、Departments (DEPT)Q DACONFG (PDACONFG)、Server Stagers (STAGER)、Users (USER)、および Workgroups (WORKGRP) が含まれています。次の表は、これらのクラスについての説明を示しています。

表 4.1 ~ POLICY ドメイン

クラス	説明
Countries (COUNTRY)	Radia Configuration Server との時刻の同期に使用します。このクラスには、サービスを割り当てないでください。
Departments (DEPT)	サブスクリバを部門別にグループ化するために使用します。
PDACONFG (PDACONFG)	PDA 設定のパラメータを定義するために使用します。管理者は PDACONFG クラスを使用して、解決の実行時に PDA 固有の情報をターゲットとして格納します。
Server Stagers (STAGER)	分散ネットワーク内の Radia Staging Server を定義するために使用します。また、Radia Staging Server コンピュータでの格納場所の定義にも使用します。
Users (USER)	個々のサブスクリバを定義するために使用します。ユーザー レベルでポリシーを作成する場合、USER クラスに各サブスクリバのインスタンスが存在する必要があります。
Workgroups (WORKGRP)	サブスクリバを機能グループ別にグループ化するために使用します。たとえば、プロジェクト チームが、複数の異なる部門のサブスクリバで構成される場合に使用します。

ユーザーは、他の POLICY ドメイン クラス (Departments クラス、Workgroups クラスなど) のインスタンスに接続することによってグループ化できます。グループ化により、ワークグループまたは部門に所属するユーザーに基づいて、クライアント コンピュータのコンテンツを管理することができます。

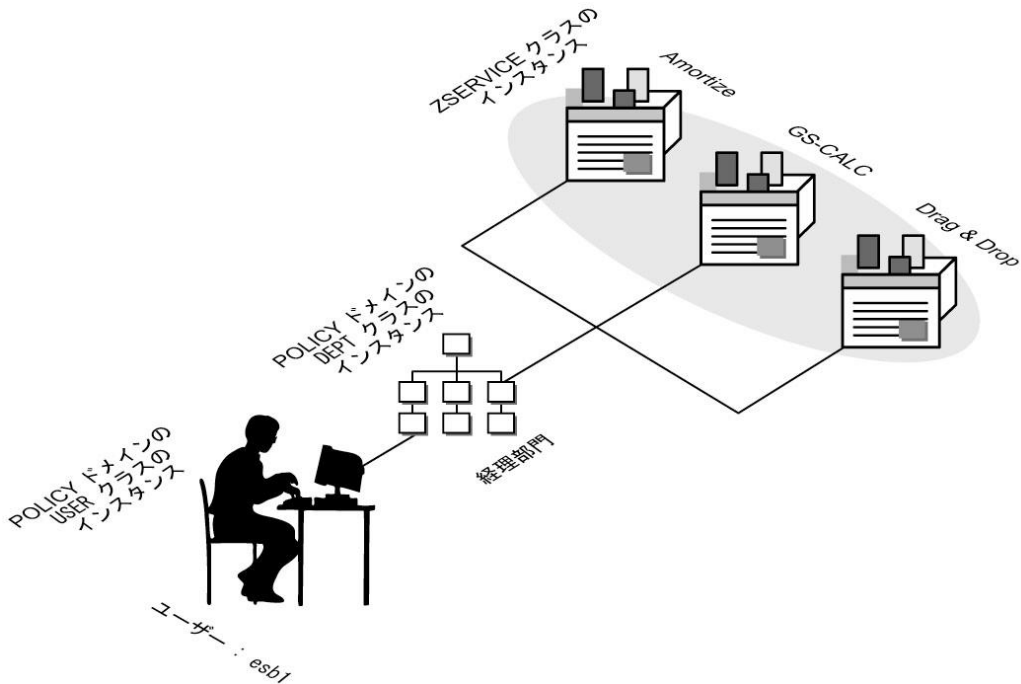


図 4.2 ~ 組織のポリシーの作成

次に、新しいユーザーを作成して配布モデルの作成を開始する方法について説明します。

新しいユーザーを作成するには

1. [スタート] メニューの [すべてのプログラム] をポイントし、[Radia Administrator Workstation] をポイントして、[Radia System Explorer] をクリックします。[Radia System Explorer のセキュリティ情報] ダイアログ ボックスが表示されます。

注意

出荷時のユーザー ID は RAD_MAST です。パスワードは必要ありません。この設定は、インストールの過程で変更されている場合があります。必要に応じて、Radia セキュリティ管理者に確認し、ユーザー ID とパスワードを取得してください。

2. 必要に応じて、ユーザー ID とパスワードを入力し、[OK] をクリックします。
3. Radia System Explorer の起動画面が表示されます。
4. [PRIMARY] をダブルクリックします。

5. [POLICY] をダブルクリックします。
6. [Users (USER)] をダブルクリックして、クラスを展開します。すべての User インスタンスのリストが表示されます。
7. [ユーザー] を右クリックします。ショートカットメニューが表示されます。

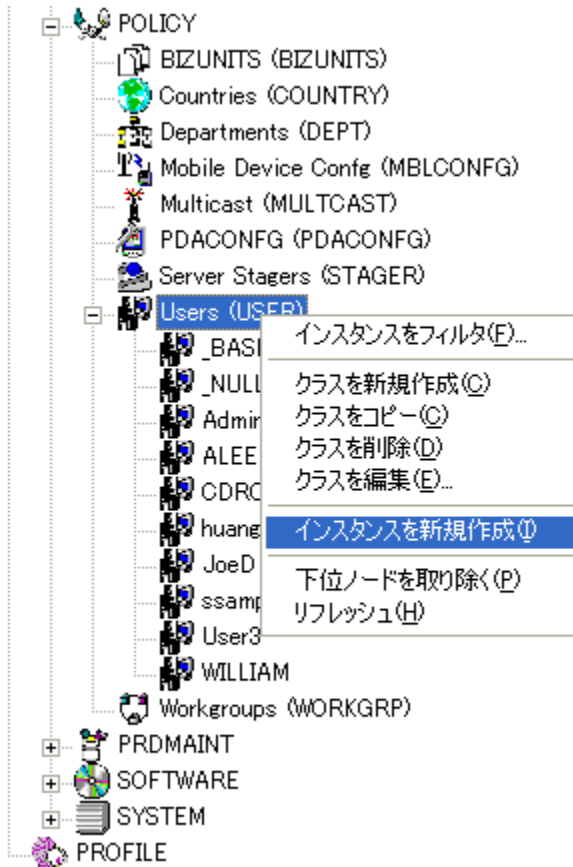


図 4.3 ~ 新しいユーザーを作成するために、Users クラスを右クリックして表示されたショートカットメニューで「インスタンスを新規作成」を選択したところ

- ショートカットメニューの [インスタンスを新規作成] をクリックします。[インスタンスの作成] ダイアログ ボックスが表示されます。

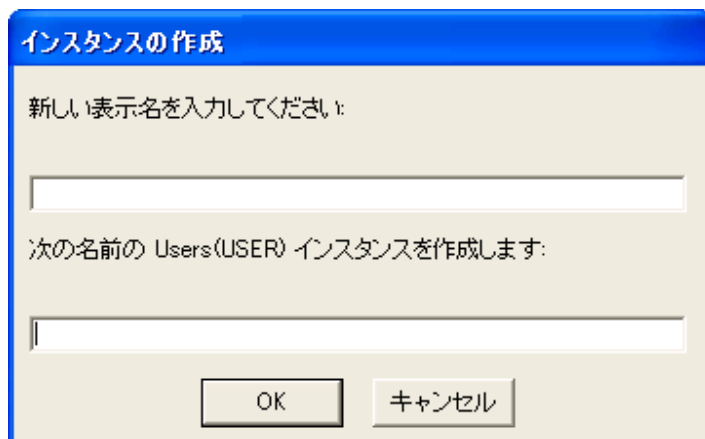


図 4.4 ~ [インスタンスの作成] ダイアログ ボックス

- 新しいユーザーの表示名を入力します。これは、ツリー ビューに表示される簡略名です。一例として、新しいユーザー インスタンス **ESB1** を作成します。
- ユーザーのインスタンス名を入力します。

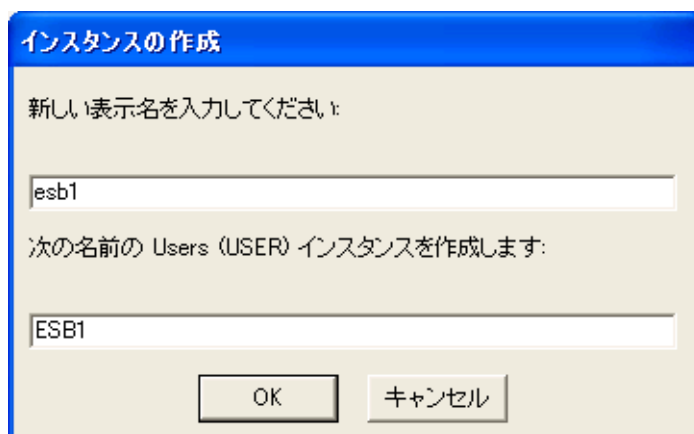


図 4.5 ~ [インスタンスの作成] ダイアログ ボックスへの入力

11. **[OK]** をクリックします。

esb1 という新しいユーザー インスタンスが作成されます。

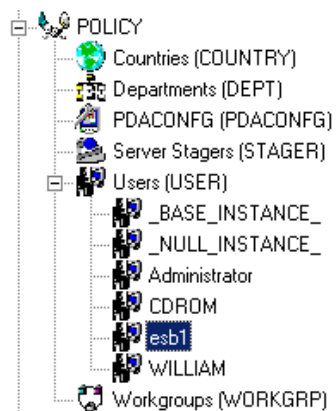


図 4.6 ~ Users クラスに追加された新しいユーザー (esb1)

Radia System Explorer を使用すると、企業のニーズに合わせたユーザー インスタンスの作成、コピー、削除、名前の変更、および編集が可能です。

SOFTWARE ドメイン

SOFTWARE ドメインの Application Packages (PACKAGE) クラスのインスタンスは、クライアントコンピュータで管理される 1 つのソフトウェア アプリケーションまたはその他のコンテンツのユニットを表します。出荷時の Radia データベースには、下の図 4.7 で示すようなサンプルパッケージが格納されています。

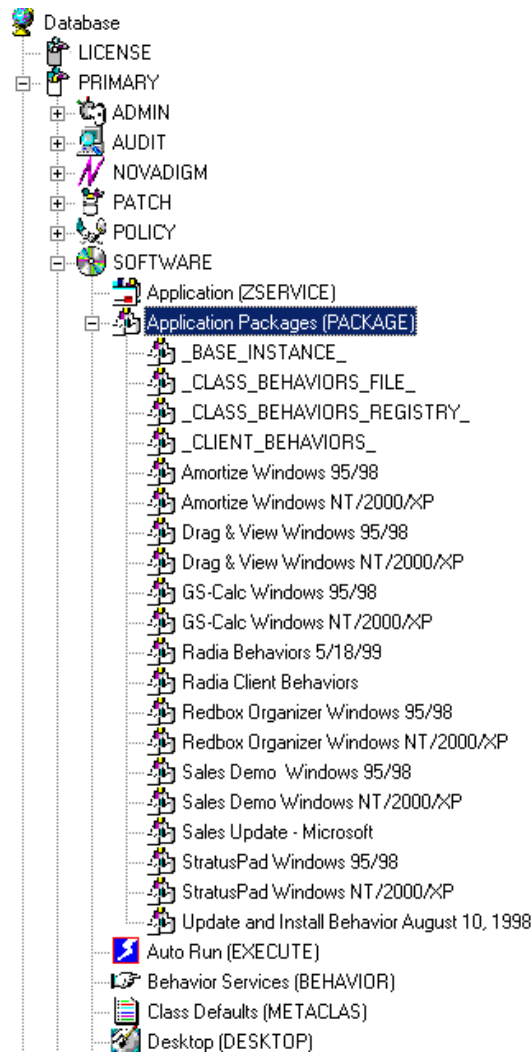


図 4.7 ~ Application Packages (PACKAGE) クラス

管理者は、**Radia Packager** を使用して、コンテンツ (ソフトウェア、テキスト ファイルなど) のパッケージ化および **Radia** データベースへのパブリッシュを行います。これらのパッケージは **Application Packages (PACKAGE)** クラスに格納されます。

パッケージを作成したら、管理者は、エンドユーザーに配布するパッケージの **Application (ZSERVICE)** を作成する必要があります。これをサービスの作成と言います。出荷時の **Radia** データベースには、**PACKAGE** クラスのパッケージ用のサンプル サービスが格納されています。

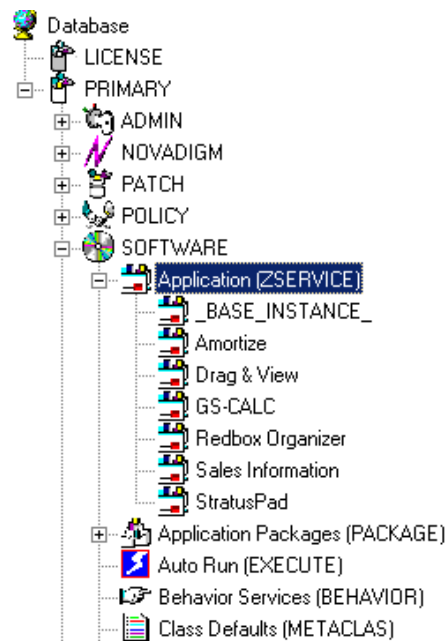


図 4.8 ~ 出荷時の Application (ZSERVICE) クラスのサンプル インスタンス

アプリケーションのパッケージ化およびパッケージのパブリッシュについては、『**Radia Application Manager ガイド**』または『**Radia Software Manager ガイド**』を参照してください。**ZSERVICE** の作成については、122 ページの「**新規アプリケーション ウィザードを実行する**」を参照してください。

管理対象コンテンツのユニットを表す、**ZSERVICE** インスタンスは、多数の他のクラス インスタンスに接続できます。それらのクラス インスタンスを、さらに別のクラス インスタンスに接続することもできます。たとえば、管理対象コンテンツのユニットがソフトウェア アプリケーションの場合、そのアプリケーションの各ファイルは **FILE** クラスのインスタンスによって表されます。その他に、アプリケーションのレジストリ キーを表す **REGISTRY** クラスのインスタンス、インストールしたアプリケーションを呼び出すリンクやショートカットを表す **DESKTOP** クラスのインスタンスなどがあります。**Microsoft Word** のような複雑なアプリケーションの配布モデルの場合、**Radia** データベース内で相互に接続する数千ものインスタンスで構成されることもあります。

Radia System Explorer では、インスタンス間の接続がツリー ビューでグラフィカルに表示されます。これにより、Radia 管理者は、相互に接続されているインスタンスがツリー ビューの一部で操作できます。

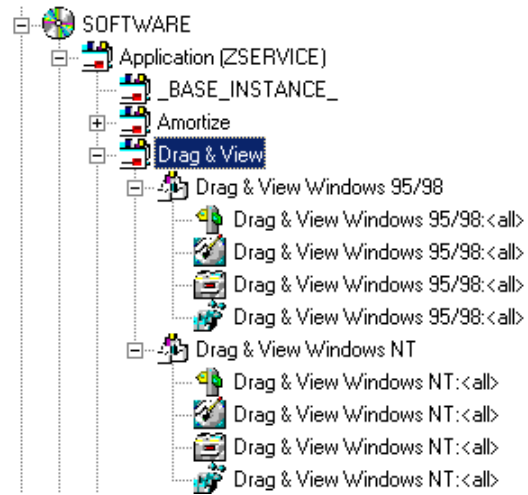


図 4.9 ~ Drag & View サービスとその接続の例

パッケージ間の関係

パッケージ間の関係は、Radia データベースの PACKAGE クラス インスタンス間の接続の種類によって設定されます。

ⓐ ALWAYS_	Package Includes
ⓐ ALWAYS_	Package Includes
ⓐ ALWAYS_	Package Includes
ⓐ ALWAYS_	Package Includes
ⓐ ALWAYS_	Package Includes
ⓐ INCLUDES	Package Includes
ⓐ INCLUDES	Package Includes
ⓐ INCLUDES	Package Includes
ⓐ INCLUDES	Package Includes
ⓐ INCLUDES	Package Includes
ⓐ INCLUDES	Package Includes
ⓐ REQUIRES	Required Package Level
ⓐ REQUIRES	Required Package Level
ⓐ REQUIRES	Required Package Level
ⓐ REQUIRES	Required Package Level
ⓐ REQUIRES	Required Package Level
ⓐ REQUIRES	Required Package Level

図 4.10 ~ 別のパッケージへの接続の設定が可能な各変数

上の例では、それぞれの変数に別のパッケージへの接続が格納できます。

2 つのパッケージの一方が他方を必要とする場合、またはインクルードする場合に、関係が作成できます。

必須接続

あるパッケージが別のパッケージを必要とする場合、必須のパッケージのコンポーネントはそれを必要としているパッケージのコンポーネントに上書きされます。たとえば、パッケージ A がパッケージ B を必要とする場合、パッケージ B のコンポーネントはパッケージ A のコンポーネントに上書きされます。この関係は、インストール済みのアプリケーション ソフトウェアにメンテナンスを配布するときに便利です。この場合、メンテナンス パッケージ A にベース パッケージ B が必要となります。

たとえば、Microsoft Office アプリケーションスイートに、Service Release 1 アップデートを適用する例を考えてみましょう。

Office を導入した当時、Service Release 1 アップデートはありませんでした。Radia 管理者は、Windows 95 および Windows NT 用 Office スイートのコンポーネントをパッケージ化しました。その後、Microsoft Office 用の Service Release 1 アップデートが提供されたときに、コンポーネントのベースインストールと Service Release 1 アップデートの差分に相当する、各コンポーネントおよび各オペレーティングシステム用の新しいパッケージが作成できました。この作業は、Windows 95 および NT 用 Office スイートのパッケージ済みベースインストールが Service Release 1 アップデートに必須であると指定することにより行われました。

インクルード接続

あるパッケージが別のパッケージをインクルードするという Radia パッケージ間の関係を作成する機能により、複数の Radia パッケージで構成されるアプリケーション ソフトウェアが配布できます。

パッケージが別のパッケージをインクルードしている場合は、両方とも配布されます。

この機能は通常、配布するアプリケーション ソフトウェアに、カスタマイズした拡張機能を付加してインストールする必要がある場合に使用します。

たとえば、カスタマイズした Microsoft Word の一連のテンプレートを Word と共に配布する必要があります。Radia 管理者は、各ターゲット プラットフォーム用の個別のパッケージに Microsoft Word をパッケージ化し、さらに、カスタマイズしたテンプレートを個別にパッケージ化することができます。Radia System Explorer を使用して、Microsoft Word パッケージ インスタンスにインクルード接続を作成し、カスタマイズされたテンプレートを表すパッケージ インスタンスに接続します。これにより、サブスクライバが Microsoft Word をインストールするときは必ず、Microsoft Word と共にカスタマイズされたテンプレートも配布されます。

ポリシーを決定する

Radia Packager や Radia System Explorer を使用してサービスを作成したら、サービスの対象者を決める必要があります。つまり、どのユーザーがどのソフトウェアを受信するかを特定するポリシーの設定が必要です。

Radia にポリシーを設定する前に、慎重に組み立てたプランが準備できます。以下の要件を考慮します。

- どのようなグループ ポリシーを作成する必要があるか。
- ユーザーをどのグループに割り当てるか。
- どのソフトウェアをユーザー用に管理するか。

必要に応じて、1 つまたは複数のグループに後から各 USER インスタンスを割り当てます。Radia で管理するコンテンツに従ってサブスクライバがグループ化されていると、ポリシーを管理しやすくなります。

たとえば、営業部門に従業員が 50 人いるとします。各ユーザーに表計算アプリケーションを認可するのではなく、Departments クラスに Sales というインスタンスを作成するとします。こうして、50 人の従業員を Sales 部門インスタンスにグループ化し、50 人全員に対し同時にアプリケーションを認可することも、その認可を取り消すこともできます。

次の例では、Sales という名前の Departments (DEPT) クラス インスタンスを作成します。

Departments (DEPT) クラス インスタンスを作成するには

1. [スタート] メニューの [すべてのプログラム] をポイントし、[Radia Administrator Workstation] をポイントして、[Radia System Explorer] をクリックします。[Radia System Explorer のセキュリティ情報] ダイアログ ボックスが表示されます。

注意

出荷時のユーザー ID は RAD_MAST です。パスワードは必要ありません。この設定は、インストールの過程で変更されている場合があります。必要に応じて、Radia セキュリティ管理者に確認し、ユーザー ID とパスワードを取得してください。

2. 必要に応じて、ユーザー ID とパスワードを入力し、[OK] をクリックします。
3. Radia System Explorer の起動画面が表示されます。
4. [PRIMARY] をダブルクリックします。
5. [POLICY] をダブルクリックします。
6. [Departments (DEPT)] をダブルクリックして、クラスを展開します。
7. [Departments (DEPT)] を右クリックします。ショートカット メニューが表示されます。



図 4.11 ~ ショートカット メニューの [インスタンスを新規作成] を選択したところ

8. [インスタンスを新規作成] をクリックします。
[インスタンスの作成] ダイアログ ボックスが表示されます。
9. 表示名とインスタンス名を、それぞれのフィールドに入力します。この例では「Sales」と入力します。

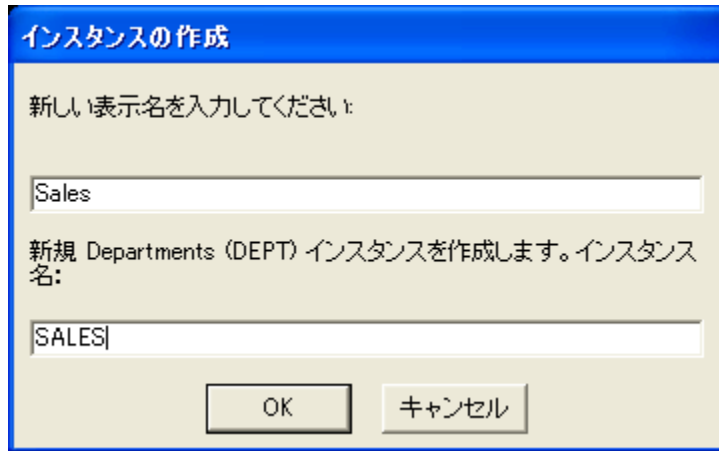


図 4.12 ~ [インスタンスの作成] ダイアログ ボックス

10. [OK] をクリックします。Sales 部門が追加されます。

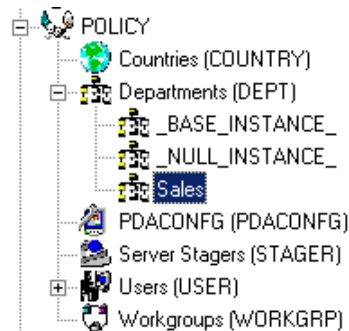


図 4.13 ~ 新しく作成された Departments (DEPT) クラスの Sales 部門インスタンス

次に、ESB1 ユーザーを Sales 部門インスタンスに接続する方法について説明します。

接続のタイプ

Radia データベースのインスタンスを相互に接続する場合、いくつかの方法で実行できます。

手動接続

Connection 属性に、接続に必要なパスを入力することにより、インスタンス間の接続が手動で設定できます。接続のタイプの詳細については、65 ページの表 3.2 を参照してください。

警告

この方法はサポートされていますが、接続を設定する場合は、以下のドラッグ アンド ドロップまたは [接続を表示] ダイアログ ボックスを使用することをお勧めします。

ドラッグ アンド ドロップ接続

Radia System Explorer では、接続可能なクラスのインスタンス間がドラッグ アンド ドロップで接続できます。この機能を使用すると、インスタンス間の接続指定で文字を入力するときに発生する、次の 2 つの主なエラーが回避できます。

- 誤入力
- 接続が禁止されているクラスのインスタンスへの接続の入力

複数の Radia System Explorer ウィンドウ間で、接続をドラッグ アンド ドロップすることも可能です。

ドラッグ アンド ドロップによる接続方法は、接続する各インスタンスが同時にツリー ビュー内に表示されているときに使用すると便利です。

ドラッグ アンド ドロップ メソッドの呼び出しは、インスタンスを 1 つ選択し、ターゲットインスタンスにドラッグしてドロップすることにより簡単に実行できます。ドラッグ操作を始めると、カーソルをツリー ビューで上下に動かしたときにその形が変わります。

斜線付きの丸いカーソルは、そのインスタンスには接続できないことを意味します。

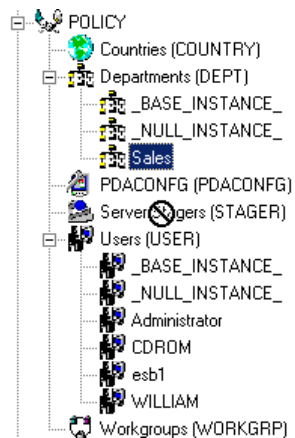


図 4.14 ~ 接続できないことを示す斜線付きの丸いカーソル

ペーパークリップのカーソルは、そのインスタンスに接続できることを意味します。

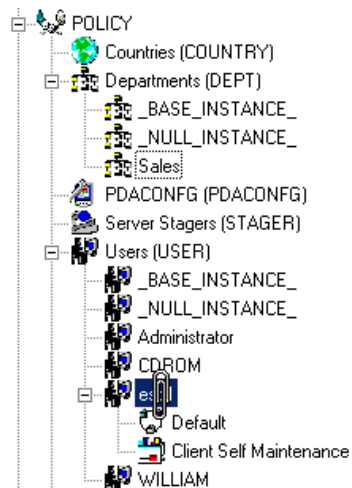


図 4.15 ~ 接続できることを示すペーパークリップのカーソル

ペーパークリップの形のときに左ボタンを離すと、[接続属性の選択] ダイアログ ボックスが表示されます。

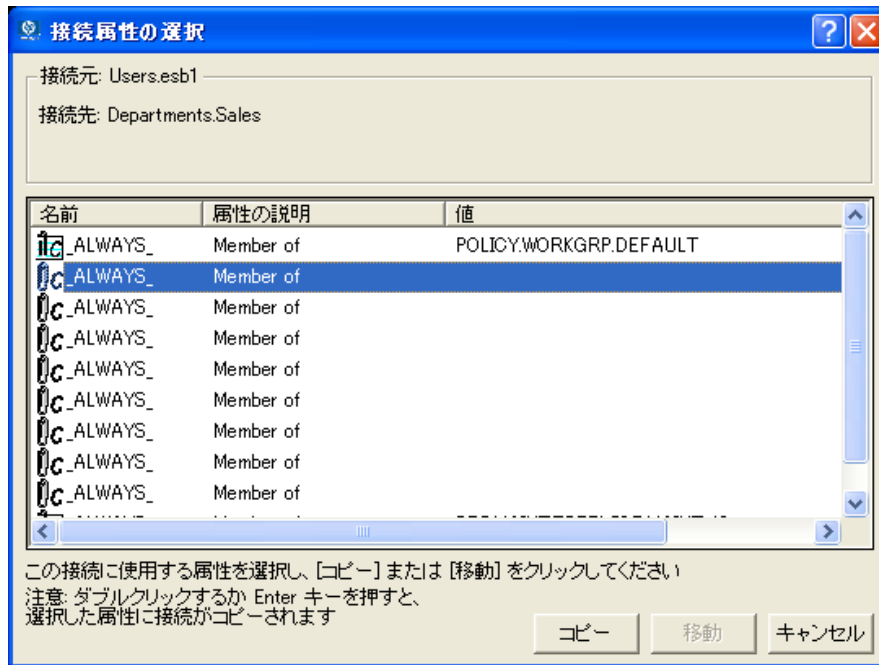


図 4.16 ~ 次の設定可能な接続を表示する [接続属性の選択] ダイアログ ボックス

上の図 4.16 のように、選択したインスタンスの設定可能な最初の接続属性が強調表示されます。この接続属性でなければ、**Enter** キーを押すか、または [**コピー**] をクリックします。別の接続属性を使用する場合は、その属性までスクロールして、ダブルクリックします。

Radia System Explorer のツリー ビューで、接続を保持するインスタンスの直下に、接続されているインスタンスがツリー表示されます。接続されているインスタンスをドラッグしてドラッグアンドドロップ接続を行うと、接続のドラッグ元であるインスタンスから接続を移動することも可能です。

[**移動**] をクリックすると、接続が移動できます。接続指定は、接続のドラッグ元であるインスタンスから削除され、接続のドロップ先であるインスタンスに格納されます。

[**移動**] ではなく [**コピー**] をクリックすると、接続のドラッグ元であるインスタンスには接続指定が残り、接続のドロップ先であるインスタンスにはそのコピーが格納されます。

接続を確定したら、接続操作は終了です。

接続の表示

接続する各インスタンスが離れていて同時にツリー ビュー内に表示できない場合は、**[接続を表示]** ダイアログ ボックスを使用します。

この接続方法を使用するには、インスタンスを右クリックして表示されるショートカット メニューの**[接続を表示]** をクリックします。

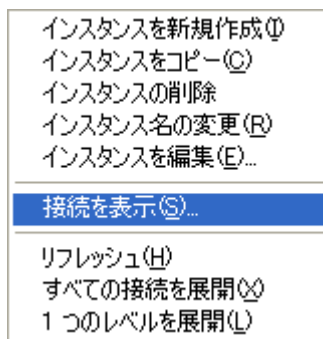


図 4.17 ~ [接続可能なクラスを表示する] ダイアログ ボックスを表示するために [接続を表示] を選択したところ

この機能を使用すると、[接続可能なクラスを表示する]ダイアログ ボックスが表示されます。



図 4.18 ~ [接続可能なクラスを表示する] ダイアログ ボックス

選択したインスタンスの接続が許可されている、同じドメイン内のクラスのリストがダイアログボックスに表示されます。

別のドメインのクラスに接続する場合は、[接続可能なクラスを表示するドメイン] ボックスをクリックすると、ドメインのリストが表示されます。



図 4.19 ~ 接続可能なクラスに対するドメインのリスト

選択したドメインに接続が許可されているクラスがない場合、警告メッセージが表示されます。



図 4.20 ~ 接続が許可されないことを示す警告メッセージ

接続可能なクラスを示す規則は、Radia データベースに格納されています。これらの規則を管理する方法の詳細については、217 ページの「Radia データベース内の接続規則を管理する」を参照してください。

接続可能なクラスを選択すると、そのクラスのすべてのインスタンスがリスト ビューに表示されます。

これで、リスト ビュー (右側) からクラス インスタンスを選択し、接続対象のインスタンス (左側) にドラッグ アンド ドロップすることができます。

ユーザーを Departments (DEPT) クラス インスタンスに接続するには

1. [スタート] メニューの [すべてのプログラム] をポイントし、[Radia Administrator Workstation] をポイントして、[Radia System Explorer] をクリックします。[Radia System Explorer のセキュリティ情報] ダイアログ ボックスが表示されます。

注意

出荷時のユーザー ID は RAD_MAST です。パスワードは必要ありません。この設定は、インストールの過程で変更されている場合があります。必要に応じて、Radia セキュリティ管理者に確認し、ユーザー ID とパスワードを取得してください。

2. 必要に応じて、ユーザー ID とパスワードを入力し、[OK] をクリックします。
3. Radia System Explorer の起動画面が表示されます。
4. [PRIMARY] をダブルクリックします。
5. [POLICY] ドメインを展開します。

6. [Users (USER)] をダブルクリックして、クラスを展開します。

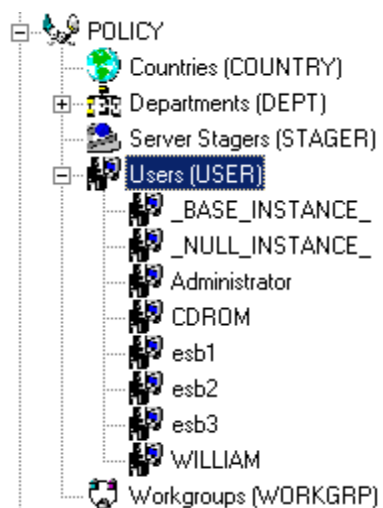


図 4.21 ~ 展開した PRIMARY.POLICY.Users (USER) クラス

7. [esb1] ユーザー インスタンスを右クリックします。ショートカットメニューが表示されます。



図 4.22 ~ ショートカットメニューの [接続を表示] を選択したところ

8. [接続を表示] をクリックします。
[接続可能なクラスを表示する] ダイアログ ボックスが表示されます。

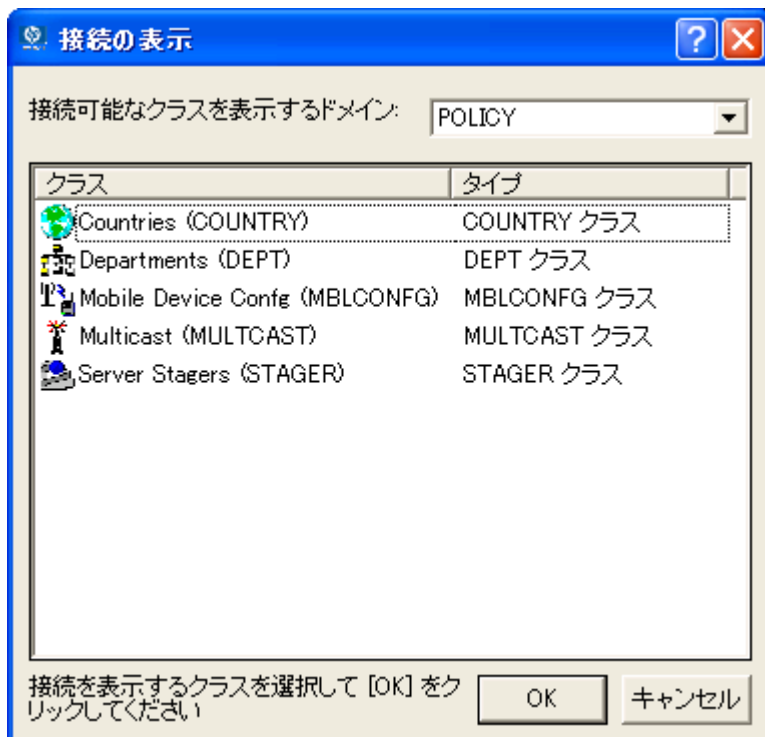


図 4.23 ~ [接続可能なクラスを表示するドメイン] ダイアログ ボックス

9. [Departments (DEPT)] をクリックし、[OK] をクリックします。

Departments (DEPT) クラスのすべてのインスタンスがリスト ビューに表示されます。

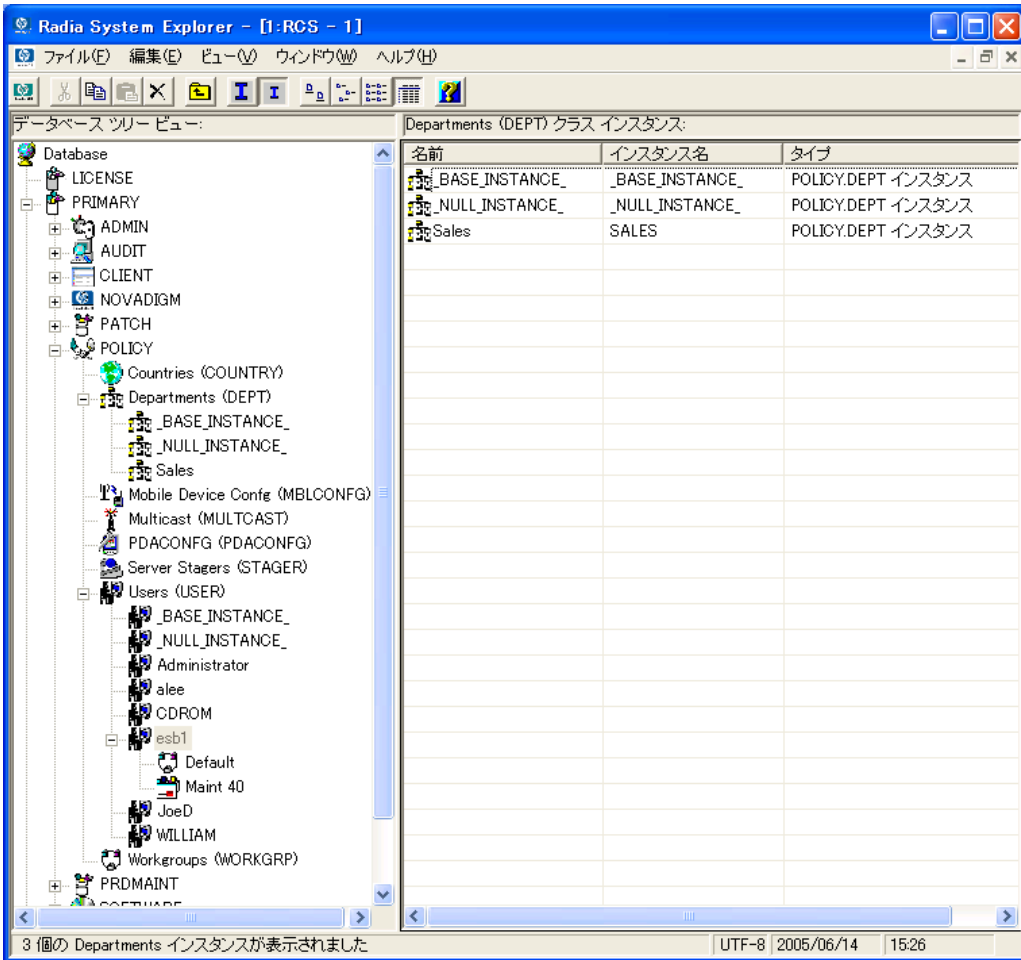


図 4.24 ~ 表示された Departments (DEPT) クラスのすべてのインスタンス

10. リスト ビューの Sales インスタンスをクリックし、ツリー ビューの USER esb1 にドラッグアンドドロップします。[接続属性の選択] ダイアログ ボックスが表示されます。

11. [コピー] をクリックして、接続を完了します。[接続の確認] ダイアログ ボックスが表示されます。

12. 接続プロセスをキャンセルする場合は、[いいえ] をクリックします。

接続を確定する場合は、[はい] をクリックします。[インスタンスの接続] ダイアログ ボックスが表示されます。

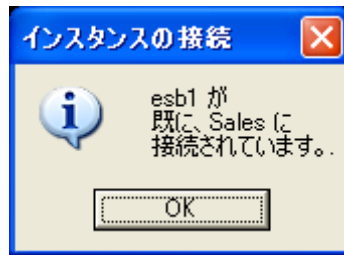


図 4.25 ~ [インスタンスの接続] ダイアログ ボックス

コンポーネント クラスのインスタンスをドラッグ アンド ドロップする

どの方法を使用するかにかかわらず、コンポーネント クラスのインスタンスを PACKAGE クラスのインスタンスにドラッグしたときに、[接続属性の選択] ウィンドウで追加のオプションが選択できます。コンポーネント クラスの例としては、FILE、DESKTOP、REGISTRY などがあります。

次に、FILE インスタンスを PACKAGE インスタンスにドラッグしたときに表示される [接続属性の選択] ウィンドウの例を示します。

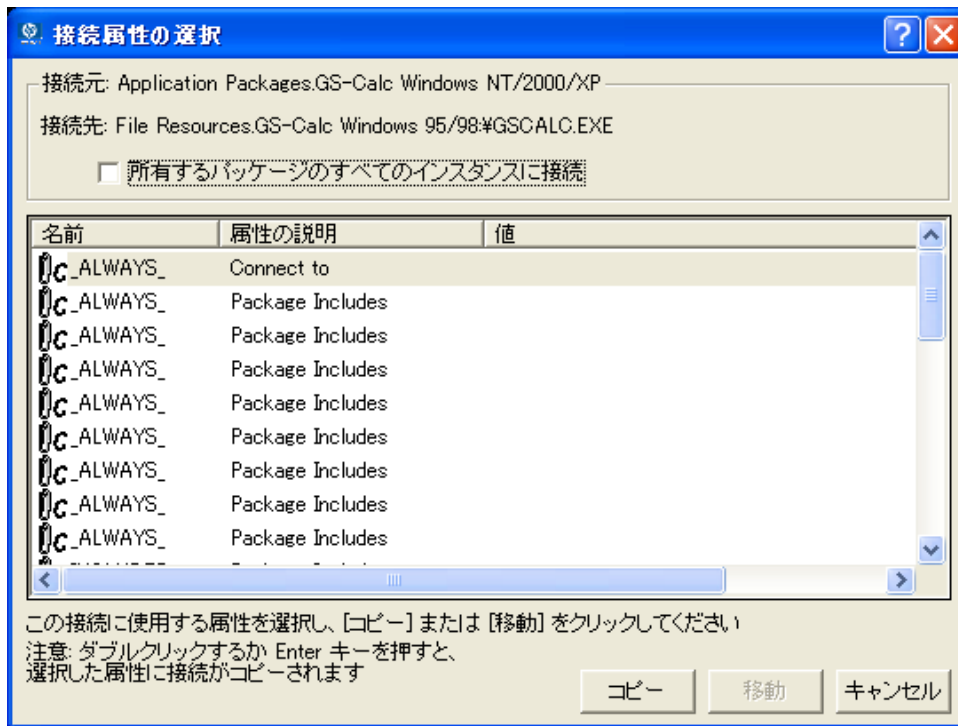


図 4.26 ~ FILE インスタンスを PACKAGE インスタンスにドラッグしたときに表示される [接続属性の選択] ダイアログ ボックス

追加のオプションは、[所有するパッケージのすべてのインスタンスに接続] チェック ボックスです。このチェック ボックスをオンにすると、PACKAGE インスタンスに格納される接続指定にワイルドカードが使用されます。これにより、ドラッグ元のインスタンスと同じアプリケーションに (Radia Packager を使用して) 一緒にパブリッシュされた、ドラッグ元のコンポーネント クラスのすべてのインスタンス (この例では FILE インスタンス) を含めることができます。この例でチェック ボックスをオンにした場合、すべての GS-CALC FILE インスタンスが単一の接続指定で接続されます。このチェック ボックスがオフの場合、接続指定はドラッグ元のインスタンスのみを参照します。この例の場合、GS-Calc Spreadsheet: %GSCALC.EXE インスタンスが参照されます。

サービスをポリシーに接続する

ポリシーを決定してユーザーやグループを設定したら、各ユーザーまたは各グループに対し、配布されるアプリケーションのエントラメントを設定することができます。これを行うには、POLICY クラス インスタンスを Application (ZSERVICE) クラスのインスタンスに接続します。

次の例では、Sales 部門のポリシーを Amortize Application (ZSERVICE) に接続します。

サービスをポリシーに接続するには

1. [スタート] メニューの [すべてのプログラム] をポイントし、[Radia Administrator Workstation] をポイントして、[Radia System Explorer] をクリックします。[Radia System Explorer のセキュリティ情報] ダイアログ ボックスが表示されます。

注意

出荷時のユーザー ID は RAD_MAST です。パスワードは必要ありません。この設定は、インストールの過程で変更されている場合があります。必要に応じて、Radia セキュリティ管理者に確認し、ユーザー ID とパスワードを取得してください。

2. 必要に応じて、ユーザー ID とパスワードを入力し、[OK] をクリックします。
3. Radia System Explorer の起動画面が表示されます。
4. [PRIMARY] をダブルクリックします。
5. [POLICY] ドメインを展開します。
6. [Departments (DEPT)] をダブルクリックして、クラスを展開します。
7. ツリー ビューで Sales インスタンスを右クリックし、[接続を表示] をクリックします。
[POLICY.DEPT 接続] ダイアログ ボックスが表示されます。このダイアログ ボックスには、選択したインスタンスを接続することができるクラスのリストが表示されます。

8. [接続可能なクラスを表示するドメイン] ボックスの一覧の [SOFTWARE] をクリックします。

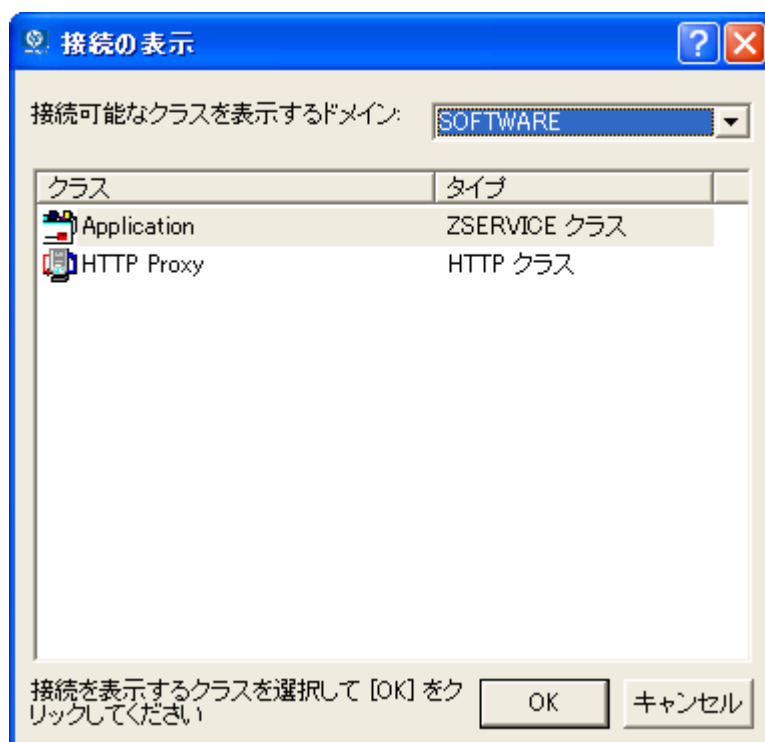


図 4.27 ~ ドロップダウン リストの [SOFTWARE] を選択したところ

9. [Application (ZSERVICE)] をクリックし、[OK] をクリックします。リスト ビューに ZSERVICE クラスのインスタンスが表示されます。

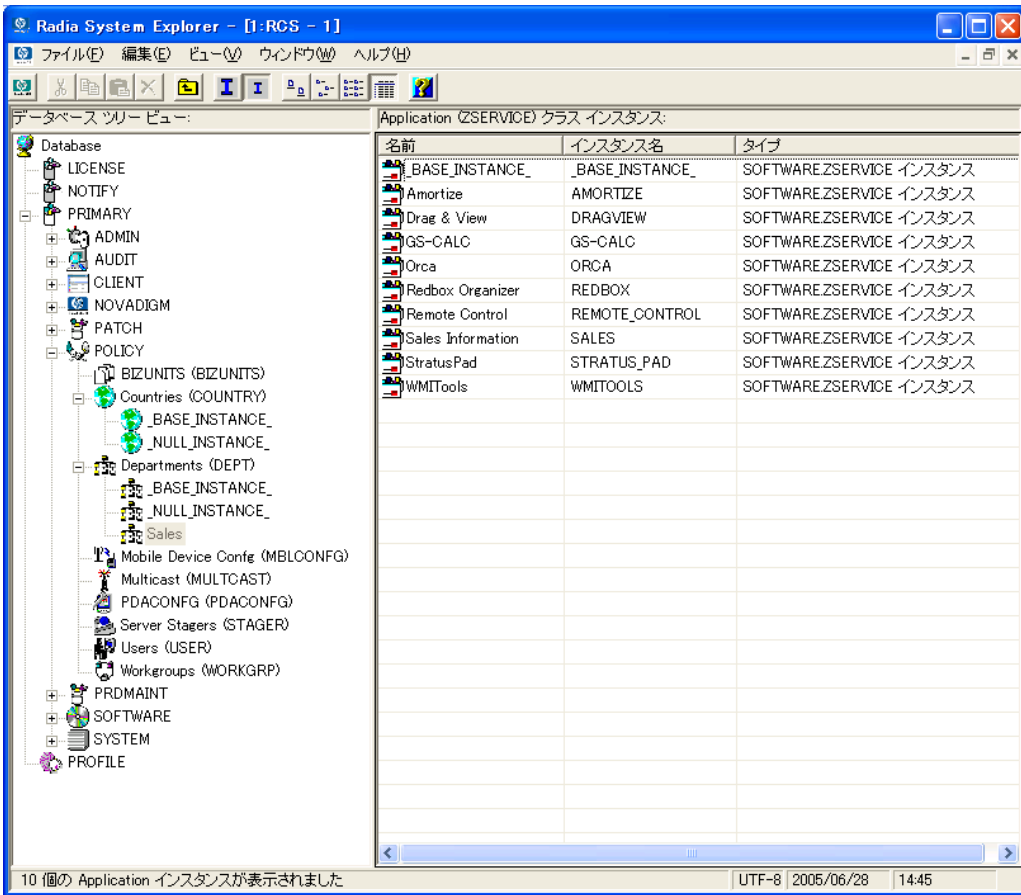


図 4.28 ~ リスト ビューの ZSERVICE

10. リストビューで **Amortize** インスタンスをクリックし、適切な **Departments** クラスのインスタンス (この例では **Sales**) にドラッグします。カーソルがペーパー クリップの形になったらマウス ボタンを離します。

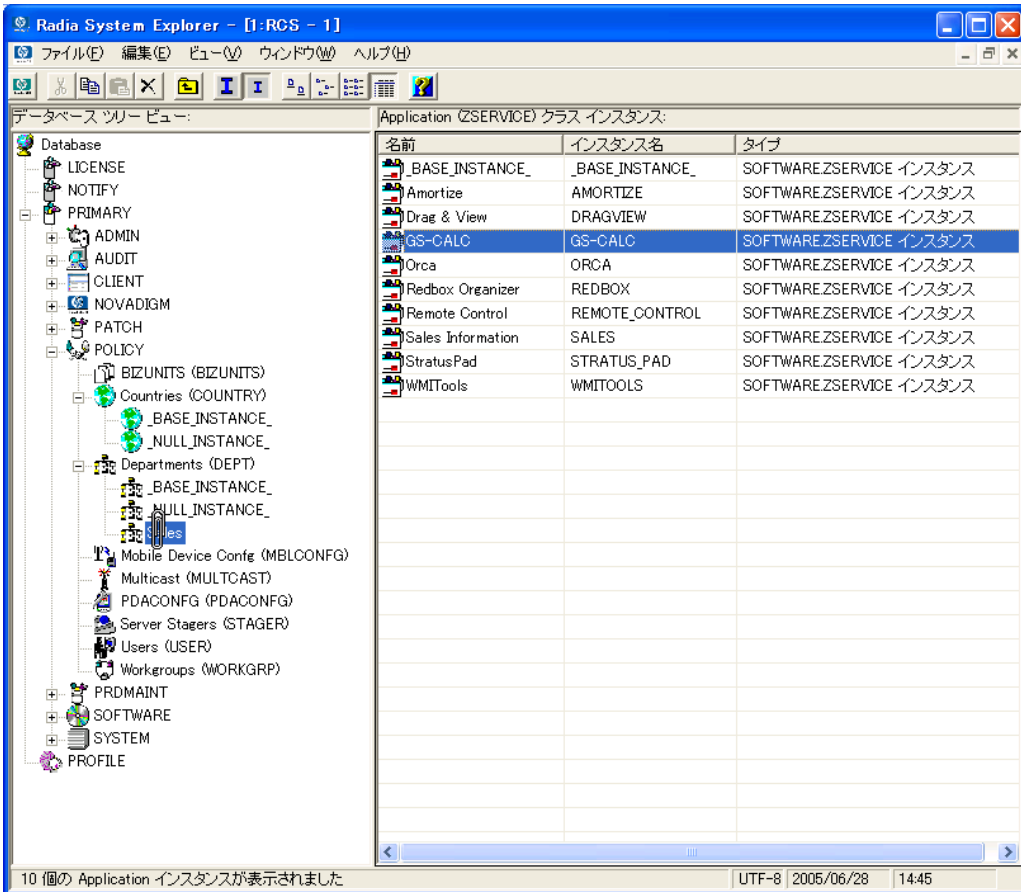


図 4.29 ~ Amortize をクリックして Departments (DEPT) の Sales インスタンスにドラッグアンドドロップしたところ

11. [接続属性の選択] ダイアログ ボックスが表示されます。
12. [コピー] をクリックして、Sales 部門から Amortize への接続を作成します。
13. 接続を確定するには、[はい] をクリックします。

14. "Sales が Amortize へ接続しました。" という確認メッセージが表示されたら **[OK]** をクリックします。

Sales 部門インスタンスの下に Amortize が表示されます。これで、Amortize アプリケーションの受信が Sales 部門全体に認可できました。

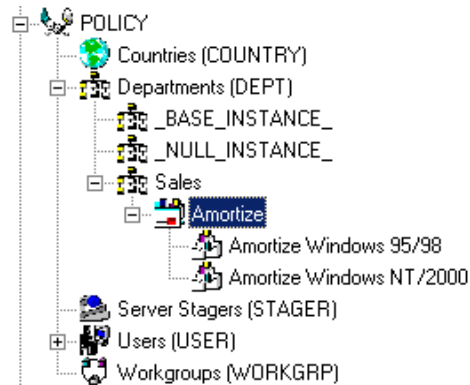


図 4.30 ~ Sales 部門すべてのユーザーが Amortize サービスを受信可能

Radia Policy Server について

Radia Policy Server は、ディレクトリ ツリーでのサービスのユーザーへのマッピングなど、管理目的で使用される Web サーバーです。Policy Server は Radia Configuration Server のアドオンで、Policy Server にクエリを行って現在ログオンしているクライアントに対して配布および管理する必要があるサービスを決定します。

Radia Integration Server のプラグインである Radia Policy Server を使用すると、Radia を使用したソフトウェア管理を行う一方で、ディレクトリ サービスへの投資が活用できます。これにより、お使いの環境の所有コスト全体が大幅に削減できます。つまり、ポリシー管理はディレクトリ サービスで行い、サービスの管理は Radia で行うということです。Radia Configuration Server でユーザーのリストを定義したりメンテナンスしたりする必要がないため、時間が節約できます。

注意

Radia Policy Server および Radia Policy Adapter は、Radia インフラストラクチャ製品セットで利用できるオプション機能です。詳細については、当社の営業担当にお問い合わせください。

まとめ

- 企業の配布モデルは、Radia データベースのインスタンス、およびインスタンス間の接続によって定義されます。
- Radia で管理される各クライアント コンピュータは、POLICY ドメインの Users クラスのインスタンスによって表されます。
- SOFTWARE ドメインの Application Packages (PACKAGE) クラスのインスタンスは、クライアント コンピュータで管理される 1 つのソフトウェア アプリケーションまたはその他のコンテンツのユニットを表します。
- SOFTWARE ドメインの Application (ZSERVICE) クラスのインスタンスは、配布される PACKAGE リソースを表します。ZSERVICE インスタンスには、多数のアプリケーション パッケージが格納できます。
- ポリシーを定義することにより、どのユーザーがどのソフトウェアを受信するかが特定できます。
- Radia データベースのインスタンスを相互に接続するには、複数の方法 (手動接続、ドラッグアンドドロップ接続、**[接続を表示]** ダイアログ ボックスを使用した接続) があります。
- Radia Policy Server は、ディレクトリ ツリーでのサービスのユーザーへのマッピングなど、管理目的で使用される Web サーバーです。

Radia System Explorer の追加機能

この章は以下を目的としています。

- Radia System Explorer の各機能を理解する。
- 新規アプリケーション ウィザードでパッケージのサービスを作成する方法を習得する。
- バージョン グループ エディタで複数のバージョンのサービスを設定する方法を習得する。
- パッチを作成してサービスを最適化する方法を習得する。
- フル オペレーションを実現するために複数のサービス パッケージが必要な製品を管理するために、サービス グループを作成する方法を習得する。
- Radia の通知機能を使用する方法を習得する。
- データベースが大規模な場合に、データをフィルタする方法を習得する。
- アプリケーション サービスの状態ファイルを作成し、Radia アプリケーションナレッジベース にインポートする方法を習得する。

この章では、以下の Radia System Explorer の追加機能について説明します。

- 新規アプリケーション ウィザード
- バージョン グループ エディタ
- サービスの最適化
- Radia サービス グループ
- Radia Notify
- Radia データベースに対するフィルタ機能
- Radia アプリケーションナレッジベースにエクスポートする状態ファイルの作成機能

Radia データベースにコンテンツをパブリッシュする方法については、『Radia Application Manager ガイド』の「*Publishing Applications and Content*」を参照してください。

新規アプリケーション ウィザードを実行する

新規アプリケーション ウィザードでは、PACKAGE クラス インスタンスから Application (ZSERVICE クラス) インスタンスが自動的に作成できます。PACKAGE クラス インスタンスは通常、Radia Packager または Radia Packager for Windows Installer によって作成されます。

ここでは、GS-CALC パッケージを例に手順を説明します。

新規アプリケーション ウィザードを使用して GS-CALC サービスを作成するには

1. Radia System Explorer を起動し、SOFTWARE ドメインの PACKAGE クラスに移動します。
2. 以下の 2 つの GS-Calc パッケージがツリー ビューにあることを確認します (123 ページの図 5.1 を参照)。
 - Windows 95/98 用パッケージ
 - Windows NT 用パッケージ

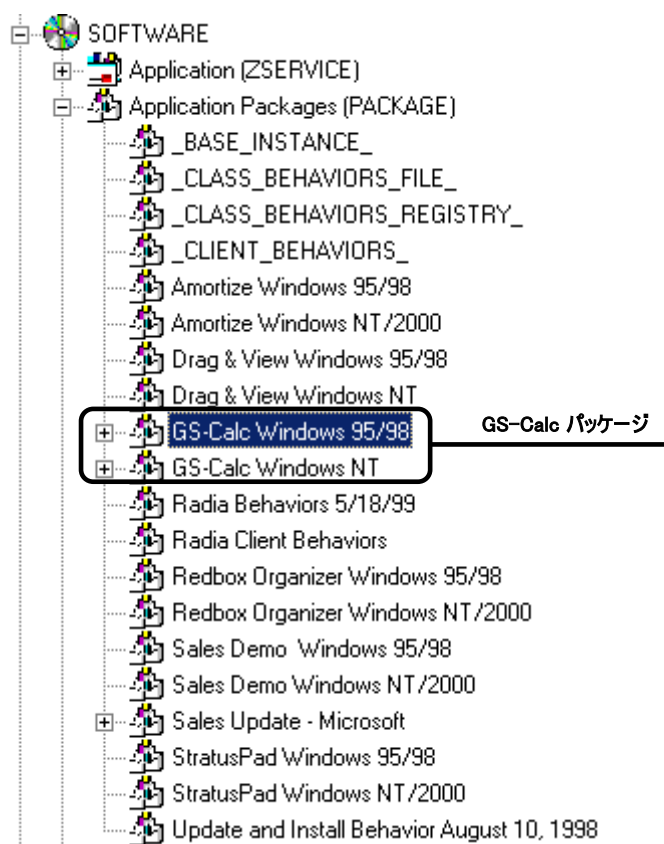


図 5.1 ~ PACKAGE クラスの GS-Calc インスタンス

3. **[GS-Calc Windows 95/98]** パッケージ クラス インスタンス (上図で強調表示されているインスタンス) を右クリックします。

ショートカット メニューが表示されます (下の図 5.2 を参照)。

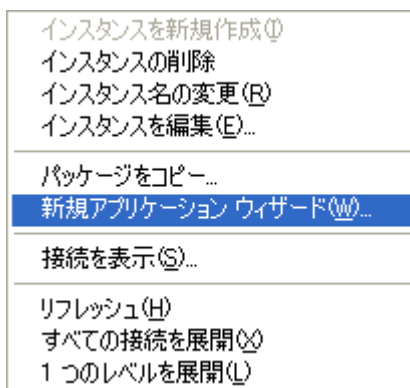


図 5.2 ~ ショートカット メニューの [新規アプリケーション ウィザード] を選択した状態

4. [新規アプリケーション ウィザード] をクリックします。
[新規アプリケーション ウィザード] ダイアログ ボックスが表示されます。

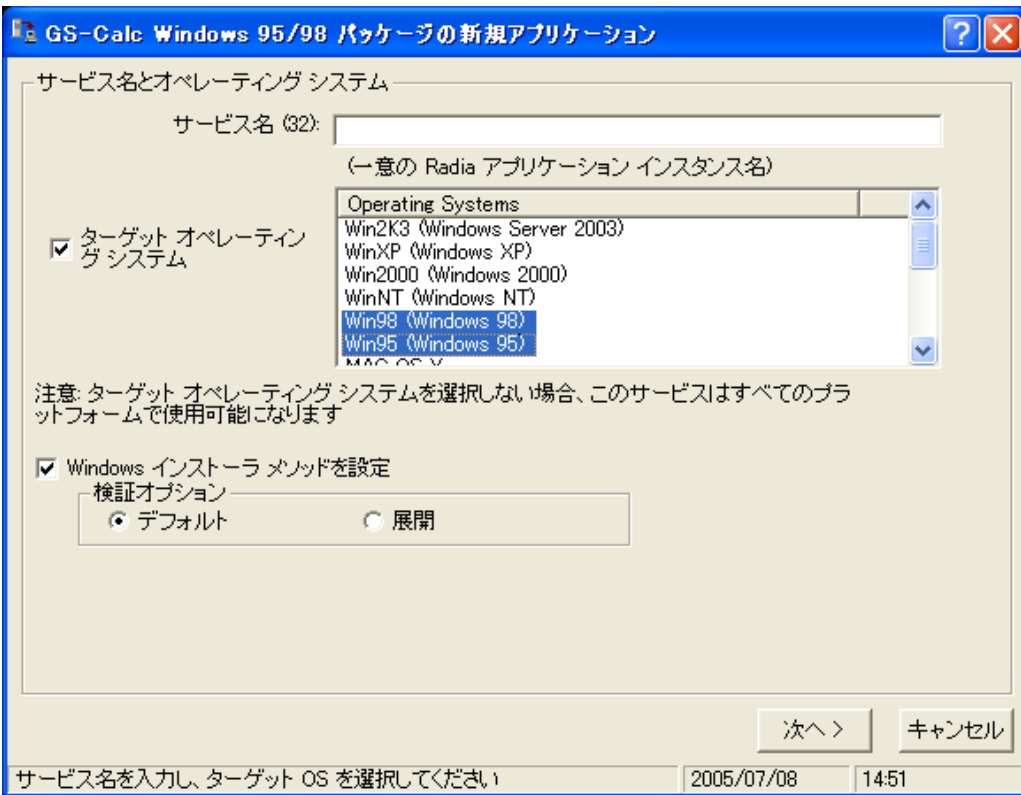


図 5.3 ~[新規アプリケーション ウィザード] ダイアログ ボックス

注意

Radia Packager for Windows Installer で作成したアプリケーションの場合、[新規アプリケーション ウィザード] ダイアログ ボックスの内容は異なります。135 ページの「新規アプリケーション ウィザードで MSI の基本的な動作を定義する」を参照してください。

5. ZSERVICE クラスの SOFTWARE ドメインにあるサービス インスタンス用に、アプリケーション ソフトウェアを表す名前 (最大 32 文字) を [サービス名] ボックスに入力します。

6. アプリケーション パッケージが実行できるオペレーティング システムを指定します。
- [ターゲット オペレーティング システム] チェック ボックスをオフにした場合、特定のオペレーティング システムを選択することはできません。オペレーティング システムに関係なく、すべてのエンド ユーザーがアプリケーションが使用できるようになります。
 - [ターゲット オペレーティング システム] チェック ボックスをオンにした場合は、現在のパッケージを実行する特定のオペレーティング システムを選択する必要があります。クリックするか、Shift キーを押しながらクリックするか、または Alt キーを押しながらクリックするかのいずれかの方法で、複数のオペレーティング システムが選択できます。

注意

パッケージが Radia Packager for Windows Installer で作成されており、Radia データベースで **MSIBASIC** クラスに関連付けられている場合は、**[MSI Basic Behaviors]** が定義できません。135 ページの「新規アプリケーション ウィザードで MSI の基本的な動作を定義する」を参照してください。

7. パッケージが **Radia Packager** で作成されている場合、次の操作を行います。
- **Windows インストーラ対応のアプリケーションの場合**、**[Windows インストーラ メソッドを設定]** チェック ボックスをオンにします。これにより、新規アプリケーション ウィザードで作成されたサービス インスタンスのメソッド変数に値が挿入され、**Windows インストーラ対応アプリケーション用の配布 メソッドおよび管理メソッド**が適切に呼び出されるようになります。
 - **[Windows インストーラ メソッドを設定]** チェック ボックスをオンにした場合は、**[デフォルト検証オプション]** または **[拡張検証オプション]** を選択します。**Radia** では、**Windows インストーラ パッケージ** に対してデフォルト検証も拡張検証も実行できます。
 - ◆ **[デフォルト検証オプション]** を選択すると、**Windows インストーラ パッケージ** でキー ファイルとして指定されているファイル (通常、**MSI インストーラ** で検証されるファイル) のみが検証されます。**INI** など一部のファイル タイプがキー ファイルに指定されていない場合、パッケージに見つからないファイルがそのファイルだけの場合は、修復が実行されません。デフォルトの検証を指定すると、**ZSERVICE.ZVERIFY** が **RadiaMSI /vd** に設定されます。
 - ◆ **[拡張検証オプション]** を選択すると、**Windows インストーラ パッケージ** 内のすべてのファイルが検証されます。したがって、キー ファイルとして指定されていないファイルでも、見つからなかった場合は、修復が開始されます。拡張方式の検証を指定すると、**ZSERVICE.ZVERIFY** が **RadiaMSI /ve** に設定されます。

新規アプリケーション ウィザードを実行すると、対応する **Radia MSI** メソッドへの呼び出しを指定した以下の 4 つの変数が、作成したアプリケーション クラスのインスタンスに格納されます。

表 5.1 ~ 新規アプリケーション ウィザードに格納される変数

変数 (オプション)	挿入されるメソッド呼び出し
ZCREATE	RadiaMSI /I
ZDELETE	RadiaMSI /u
ZUPDATE	RadiaMSI /I
ZVERIFY ([Default Verify Options] を選択した場合)	RadiaMSI /vd
ZVERIFY ([Extended Verify Options] を選択した場合)	RadiaMSI /ve

新規アプリケーション ウィザードで、1 つまたは複数のメソッド変数が見つからないという警告メッセージが表示された場合は、その変数を含めるように **Application** クラス テンプレートを更新します。クラス テンプレートの編集方法については、62 ページの「クラスを編集する」を参照してください。

[Windows インストーラ メソッドを設定] チェック ボックスは、Windows インストーラ対応のサービスの場合にのみオンにします。

8. [次へ] をクリックします。
 [アプリケーションのターゲット タイプ] ダイアログ ボックスが表示されます。

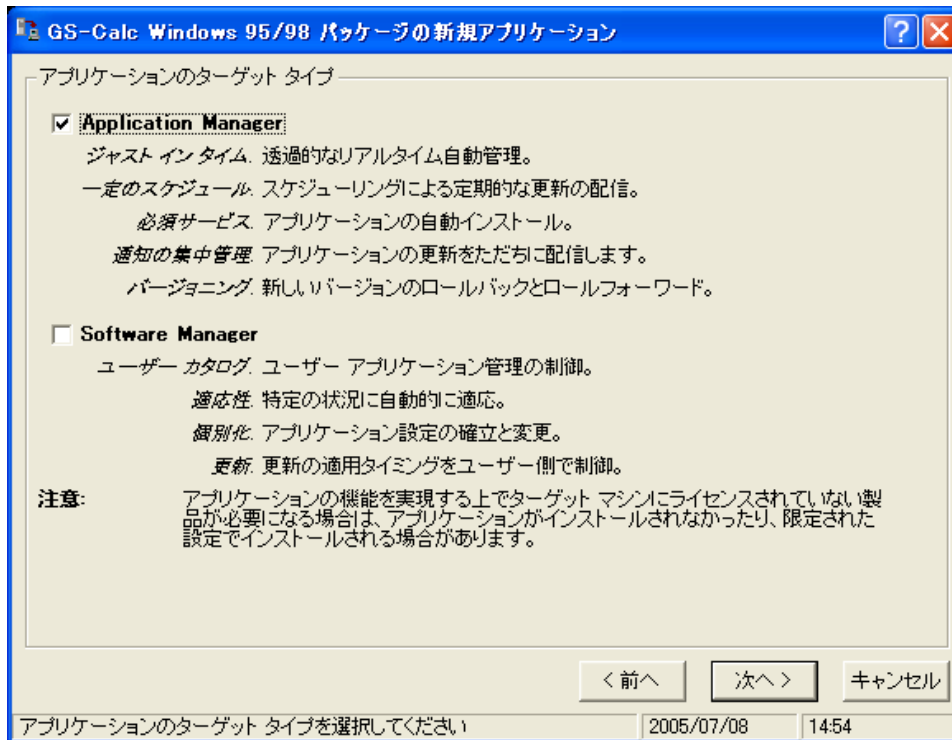


図 5.4 ~ [アプリケーションのターゲット タイプ] ダイアログ ボックス

2 つのチェック ボックスのどちらかをオンにして、現在のアプリケーションに対するサポートのタイプを指定します。Radia Application Manager と Radia Software Manager の違いが、各チェック ボックスの下に表示されています。選択するのは、どちらか一方にしてください。どちらも選択せずに [次へ] をクリックした場合、または 2 つとも選択した場合は、エラー メッセージが表示され、どちらか 1 つを指定し直すように要求されます。

- [Application Manager] をオンにした場合、アプリケーションはエンドユーザーにとって必須になります。このアプリケーションの Application (ZSERVICE) インスタンスの ZSVCMO 変数は **M** に設定され、Radia データベースに格納されます。
- [Software Manager] をオンにした場合、アプリケーションはエンドユーザーにとってオプションになります。このアプリケーションの Application (ZSERVICE) インスタンスの ZSVCMO 変数は **O** に設定され、Radia データベースに格納されます。

9. [次へ] をクリックします。
[アプリケーション プロパティ] ダイアログ ボックスが表示されます。

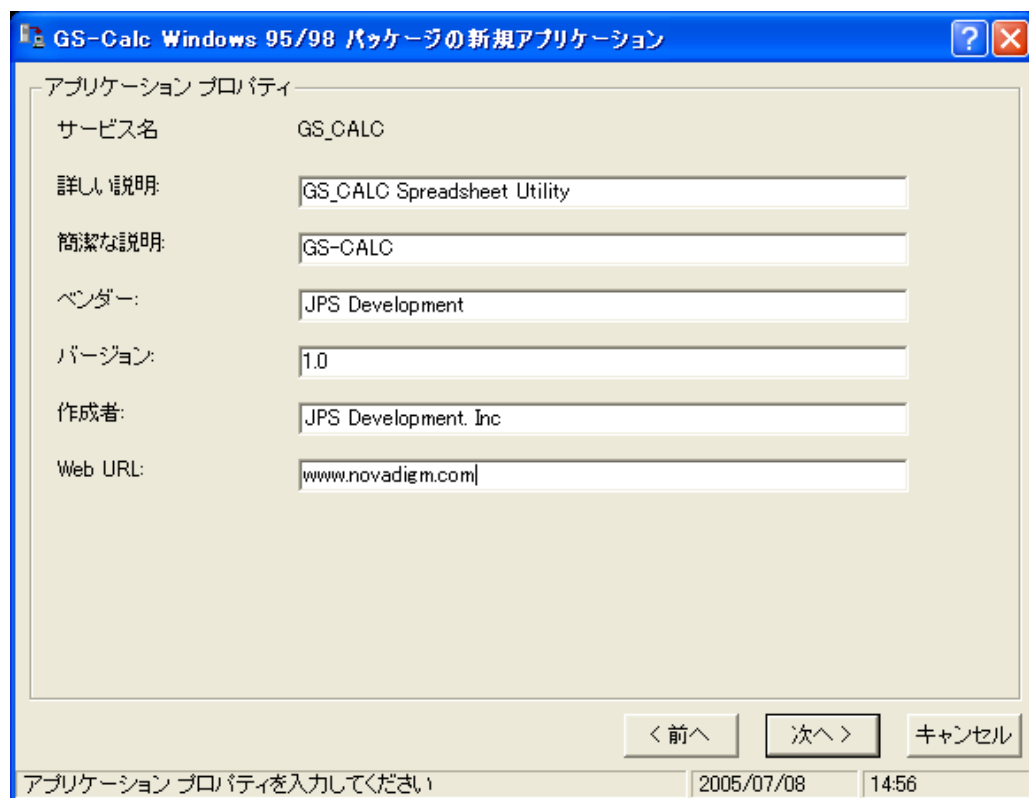


図 5.5 ~ [アプリケーション プロパティ] ダイアログ ボックスの各フィールドにアプリケーション プロパティを入力した状態

下の表 5.2 の説明に従って、各データ入力フィールドに値を入力してください。

表 5.2 ~ [アプリケーション プロパティ] のデータ入力フィールド		
プロパティ	保存先の ZSERVICE 属性	使用方法
[詳細説明]	DESCRIPT	この文字列は、Radia Subscriber Service List に表示されます。
[概要説明]	ZSVCNAME NAME	このプロパティで指定した文字列は、新規アプリケーション ウィザードで作成された Application (ZSERVICE) インスタンスの簡略名として Radia System Explorer のツリー ビューで表示されます。
[ベンダー]	VENDOR	サブスクリイバは、Radia Subscriber Service List にベンダー名を表示するようユーザー インターフェイスが設定できます。このように設定すると、アプリケーションの識別に役立ちます。
[バージョン]	VERSION	サブスクリイバは、Radia Subscriber Service List にアプリケーションのバージョン番号を表示するようユーザー インターフェイスが設定できます。
[作成者]	AUTHOR	サブスクリイバは、Radia Subscriber Service List にアプリケーションの作成者を表示するようユーザー インターフェイスが設定できます。
[Web URL]	URL	サブスクリイバは、Radia Subscriber Service List にアプリケーションの Web URL を表示するようユーザー インターフェイスを設定することができます。アプリケーションの詳細情報を参照するための Web アドレスを指定します。

値をすべて入力すると、129 ページの図 5.5 のようになります。

10. [次へ] をクリックします。

[アプリケーション レベルのイベントレポート] ダイアログ ボックスが表示されます。

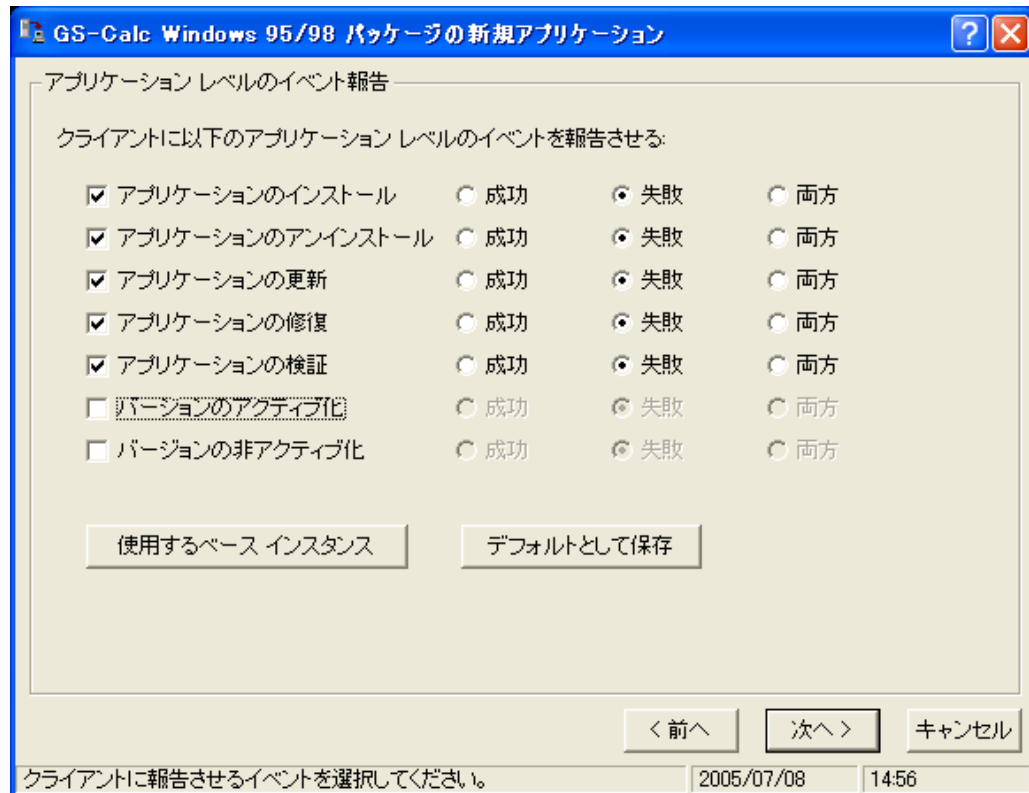


図 5.6 ~ アプリケーション レベルのイベントを Radia Configuration Server にレポートするための [アプリケーション レベルのイベントレポート] ダイアログ ボックス

このダイアログ ボックスでは、Radia Client から Radia Configuration Server にレポートするイベントを指定します。対応するチェック ボックスをオンにすると、各イベントのレポート機能が有効になります。レポート機能が有効になったら、レポートするイベント (成功、失敗、または成功と失敗の両方) をオプション ボタンで指定します。図 5.6 の例では、アプリケーションのインストール、アンインストール、更新、修復、検証の失敗を Radia Configuration Server にレポートするよう指定しています。

また、ダイアログボックスには、[ベース インスタンスを使用する] ボタンと [デフォルトとして保存] ボタンがあります。

- Application (ZSERVICE) のベース インスタンスから設定を継承する場合は、[ベース インスタンスを使用する] をクリックします。
- 現在の設定を [アプリケーション レベルのイベントレポーティング] ダイアログボックスのデフォルト設定として保存する場合は、[デフォルトとして保存] をクリックします。

11. [次へ] をクリックします。

[アプリケーションの概要] ダイアログボックスが表示され、新規アプリケーション ウィザードで指定した項目およびデータが確認できます。



図 5.7 ~ [アプリケーションの概要] ダイアログボックスに、新規アプリケーション ウィザードで指定した項目が表示されている状態

このダイアログ ボックスの一番下にある [イベントレポーティング] には、[アプリケーション レベルのイベントレポーティング] ダイアログ ボックスで指定したイベント タイプのオプションが略字で表示されます。オプションは「キーワード=値」の形式で示され、それぞれがカンマで区切られています。各キーワードが示すイベントは、下の表 5.3 で確認できます。

表 5.3 ~ イベントレポーティング用キーワードとその意味

キーワード	レポーティングするイベント
AI	[アプリケーションのインストール]
AD	[アプリケーションのアンインストール]
AU	[アプリケーションの更新]
AR	[アプリケーションの修復]
AV	[アプリケーションの検証]
VA	[バージョンのアクティブ化]
VD	[バージョンの非アクティブ化]

各キーワードと「=」で結ばれた値は、イベントに対してどのオプション ボタンをクリックしたかを表します。次の表に、各オプションを示します。

表 5.4 ~ イベントレポーティング用キーワードに関連付けられた値

値	選択したオプション ボタン
S	Success (成功)
F	Failure (失敗)
B	Both (成功と失敗の両方をレポーティング)
N	None (成功と失敗のどちらもレポーティングしない)

12. オプションを変更する必要がある場合は、[前へ] をクリックし、レポートのオプションを指定するダイアログ ボックスに戻って、設定を変更します。
- オプションを変更しない場合は、[完了] をクリックすると、アプリケーションのサービス インスタンスが作成され、転送されたパッケージに関連付けられます。完了すると、次のメッセージが表示されます。



図 5.8 ~ アプリケーションが正常に追加された場合に表示されるメッセージ

これで、GS-Calc Windows 95/98 パッケージが ZSERVICE になり、ユーザーに接続して配布される準備が整いました。

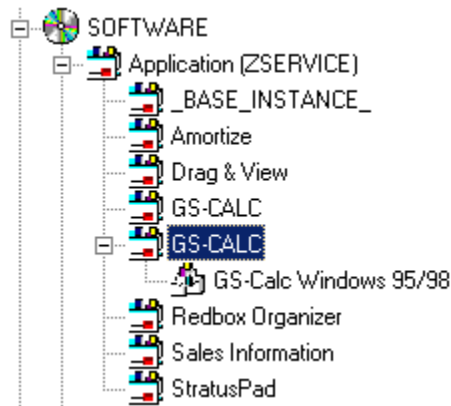


図 5.9 ~ 作成したサービスに GS-Calc パッケージ (強調表示されているアイコン) が追加された状態

新規アプリケーション ウィザードで MSI の基本的な動作を定義する

以下のパッケージの場合は、MSI パッケージのコンポーネントを継続的に管理する Advanced Package Management ではなく、Basic Package Management を使用します。

- 管理インストールをサポートしていないパッケージ。
- Radia ではインストールまたはアンインストールのみを行い、コンポーネントの管理は行わない（つまり、コンポーネントの検証または修復に Radia Client を必要としない）パッケージ。

Radia Packager for Windows Installer で作成したパッケージの場合、**新規アプリケーション ウィザード**で **[MSI Basic Behavior]** が定義できます。これらのパッケージは、Radia データベースの **MSIBASIC** クラスに関連付けられています。

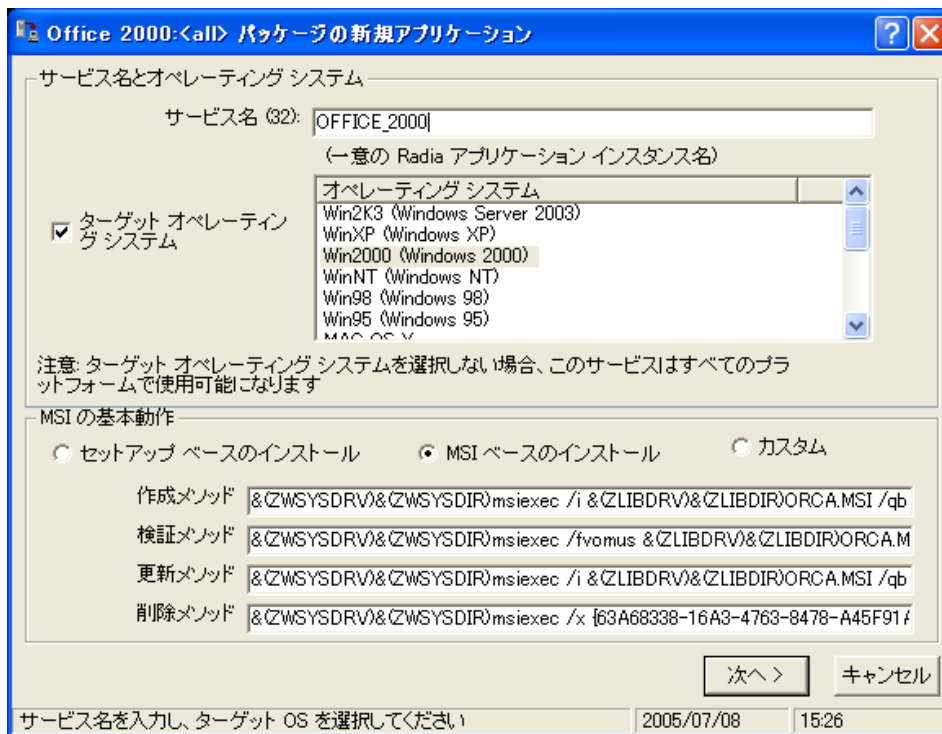


図 5.10 ~ 新規アプリケーション ウィザードで [MSI Basic Behaviors] が表示されている状態

管理インストールが実行できないパッケージでは、Radia による管理機能が使用できない Basic Package Management がデフォルトになっています。**[新規アプリケーション ウィザード]** ダイアログボックスの **[MSI Basic Behaviors]** では、パッケージの管理に使用するインストール タイプおよび MSI のネイティブ モードを指定します。

新規アプリケーション ウィザードで [MSI Basic Behaviors] を定義するには

1. パッケージのインストール方法に関係するインストール タイプを選択します。
 - **[セットアップ ベースのインストール]**
パッケージは **SETUP.EXE** ファイルでインストールされます。インストール時に **MSIEXEC** が呼び出されます。このオプションでは、**MSI** アプリケーションに対してネイティブの **setup.exe** が実行されます。コマンド ライン スイッチ (サイレント インストールを行う **/s** や完全インストールを行う **ADDLOCAL=ALL** など) が **setup.exe** でサポートされている場合は、**[作成メソッド]** にスイッチが追加できます。すべての **MSI** アプリケーションが同じコマンド ライン スイッチをサポートしているわけではありません。**setup.exe** の詳細については、お使いのアプリケーションのドキュメントを参照してください。
 - **[MSI ベースのインストール]**
パッケージは **MSIEXEC** でインストールされます。
 - **[カスタム]**
パッケージは、カスタム インストール メソッドでインストールされます。
2. 基本パッケージ管理用に指定されている **[作成メソッド]**、**[検証メソッド]**、**[更新メソッド]**、**[削除メソッド]** のネイティブ **MSI** のコマンドおよびスイッチを、必要に応じて参照および変更します。

バージョン グループ エディタ

バージョン グループ エディタは、**Radia Application Manager** がインストールされている場合に **Radia System Explorer** で使用できる機能です。バージョン グループ エディタを使用すると、バージョン グループ クラスのインスタンスが作成または編集できます。バージョン グループ エディタの各機能で、バージョン グループの **Version** インスタンスを作成、編集、削除したり、バージョン グループの配布を制御したりすることができます。

バージョングループ インスタンスを作成する

ここでは、アプリケーションの一連のバージョンを表すバージョングループ クラスのインスタンスの作成方法について、例を挙げて説明します。

パッケージのバージョングループ インスタンスを作成するには

1. [スタート] メニューの [すべてのプログラム] をポイントし、[Radia Administrator Workstation] をポイントして、[Radia System Explorer] をクリックします。[Radia System Explorer のセキュリティ情報] ダイアログ ボックスが表示されます。

注意

出荷時のユーザー ID は RAD_MAST です。パスワードは必要ありません。この設定は、インストールの過程で変更されている場合があります。必要に応じて、Radia セキュリティ管理者に確認し、ユーザー ID とパスワードを取得してください。

2. 必要に応じて、ユーザー ID とパスワードを入力し、[OK] をクリックします。
3. Radia System Explorer の起動画面が表示されます。
4. [PRIMARY] をダブルクリックします。
5. [SOFTWARE] ドメインを展開します。
6. [Version Groups (VGROUP)] を右クリックし、ショートカット メニューの [インスタンスを新規作成] をクリックします。
[インスタンスの作成] ダイアログ ボックスが表示されます。

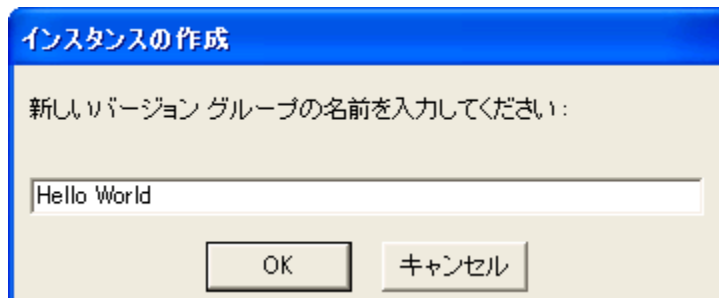


図 5.11 ~ [インスタンスの作成] ダイアログ ボックス

7. 新しいバージョン グループの簡略名 (「Hello World」 など) を入力します。
Radia System Explorer のツリー ビューに、この簡略名が表示されます。
8. **[OK]** をクリックします。
バージョン グループ編集のダイアログ ボックスが表示されます。

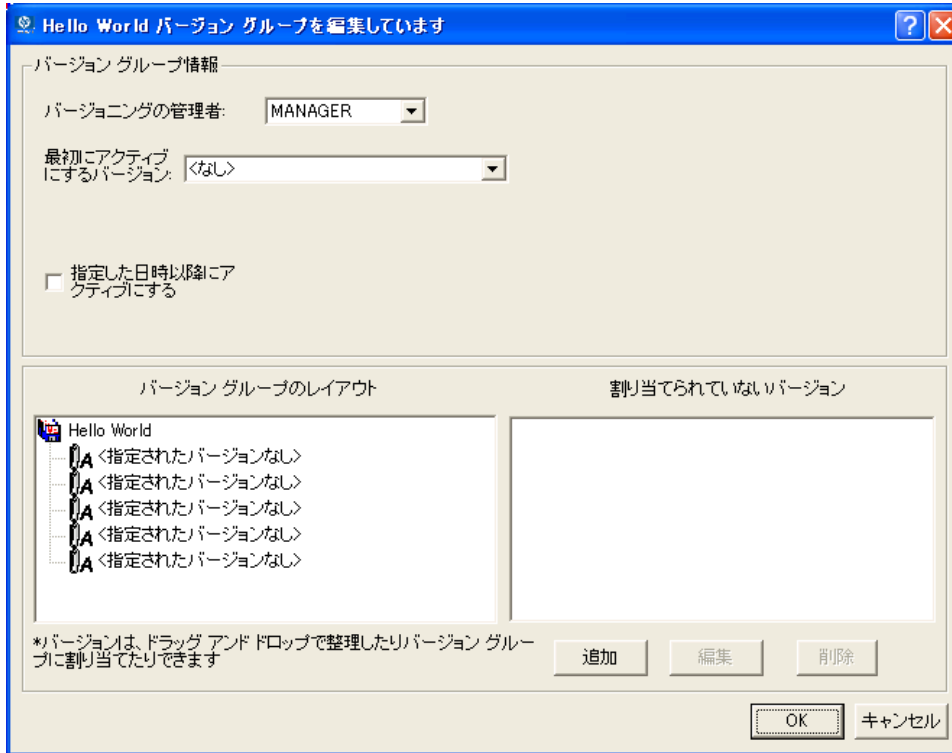


図 5.12 ~ バージョン グループ編集のダイアログ ボックス

バージョン グループ エディタには、コンテンツの管理とバージョン グループの配布に必要なコントロールがすべて含まれています。

9. 以下の説明を基に、このダイアログ ボックスの設定を行います。

- **[バージョンの管理者]** ボックスの一覧
配布するバージョンを Radia の管理者 (**[MANAGER]**) が選択するかエンド ユーザー (**[CLIENT]**) が選択するかを指定します。
 - ◆ Radia の管理者がバージョンを決める場合は、**[MANAGER]** を選択します。Radia Application Manager では、Radia の管理者によるバージョン管理のみがサポートされています。エンド ユーザーがバージョンを管理することはできません。
 - ◆ エンド ユーザーがバージョンを決める場合は、**[CLIENT]** を選択します。**[CLIENT]** に設定すると、バージョンの配布は無効になります。
- **[最初にアクティブにするバージョン]** ボックスの一覧
サブスクリバの Radia Client が次回 Radia Configuration Server へ接続したときに、クライアント コンピュータでどのバージョンをアクティブにするかを指定します。利用可能なバージョンは、バージョン グループ編集のダイアログ ボックスに表示されるバージョンです。
- **[指定した日時以降にアクティブにする]** チェック ボックス
特定の日付および時刻の前にバージョンがアクティブにならないよう、Radia 管理者が設定するための追加コントロールを表示します。このチェック ボックスをオンにすると、ダイアログ ボックスは次のようになります。

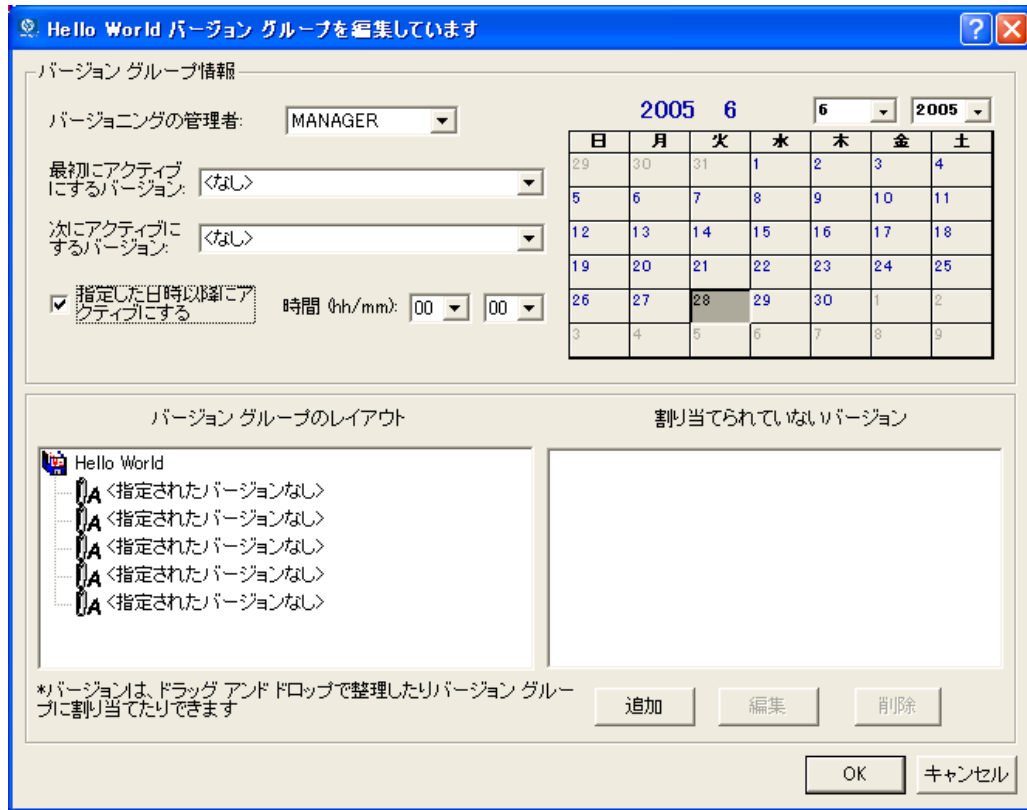


図 5.13 ~ バージョングループ編集のダイアログボックスで[指定した日時以降にアクティブにする] チェックボックスをオンにし、日付および時刻コントロールを表示した状態

[指定した日時以降にアクティブにする] チェック ボックスをオンにすると、以下の追加機能が表示されます。

- **[次にアクティブにするバージョン]**

新しく配布されたバージョンのインストールおよびアクティブ化に失敗した場合、どのバージョンをアクティブにするかをドロップダウン リストで指定します。

- **カレンダーと時刻ボックス**

配布に使用する日付と時刻を指定します。カレンダーと時刻ボックスを使用して、タイマーを設定します。

注意

バージョン グループ エディタを使用して TIMER インスタンスを管理する場合は、以下の点を考慮する必要があります。

- ・ タイマーが作成され、VGROUP に接続されるのは、Radia Configuration Server でバージョンを管理する場合だけです。バージョン グループ エディタの [バージョンニングの管理者] ボックスで [MANAGER] を選択すると、Radia Configuration Server でバージョンが管理できるようになります。また、[MANAGER] を選択した場合は、[指定した日時以降にアクティブにする] チェック ボックスをオンにしてください。このチェック ボックスをオンにすると、カレンダーおよび時刻コントロールが表示され、管理者が次のバージョンの配布時期を設定することができるようになります。
- ・ カレンダーでは、現在より前の日付は選択できません。
- ・ タイマーの詳細については、『Radia Application Manager ガイド』を参照してください。

時刻およびカレンダー コントロールを使用すると、[最初にアクティブにするバージョン] で指定したバージョンが配布可能になる日付と時刻を指定することができます。

ウィンドウの下部にある [バージョン グループのレイアウト] ボックスと関連する各コントロールとを使用すると、必要に応じてバージョン インスタンスを作成して編集し、バージョン グループに割り当てることができます。

10. このダイアログ ボックスの下部にある [追加] をクリックします。
[バージョンの作成] ダイアログ ボックスが表示されます。

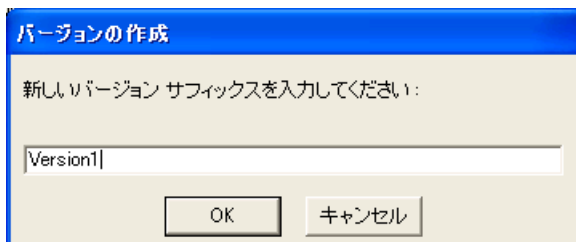


図 5.14 ~ [バージョンの作成] ダイアログ ボックス

11. 新しいバージョン インスタンスの簡略名に対応するサフィックスをボックスに入力します。
バージョン インスタンスの簡略名は、バージョン グループの簡略名と、ここで入力したサフィックスをつなげた形式になります。この例では、「Hello World Version 1」という簡略名が、Radia System Explorer によって現在のバージョン インスタンスに割り当てられます。

12. [OK] をクリックします。

[バージョン エディタ] ダイアログ ボックスが表示されます。

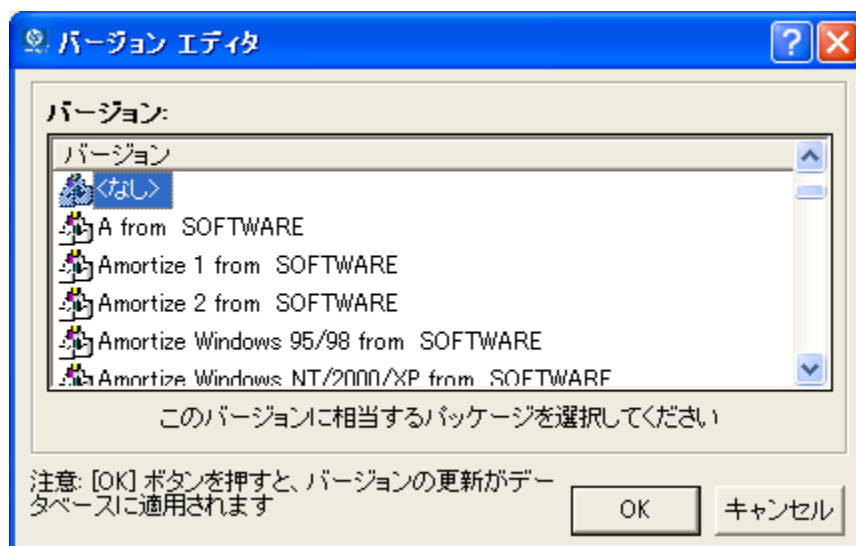


図 5.15 ~ [バージョン エディタ] ダイアログ ボックス

Radia データベースに現在格納されているアプリケーション パッケージ インスタンスの一覧が、[バージョン エディタ] ダイアログ ボックスに表示されます。このダイアログ ボックスを使用して、新しく作成したバージョン インスタンスをアプリケーション パッケージ インスタンスに関連付けます。

13. 一覧内をスクロールして、目的のアプリケーションパッケージインスタンスを表示します。この例では、バージョンインスタンスを **Amortize Windows 95/98** パッケージインスタンスに関連付けます。[**Amortize Windows 95/98**] をダブルクリックするか、クリックして選択してから [**OK**] をクリックします。

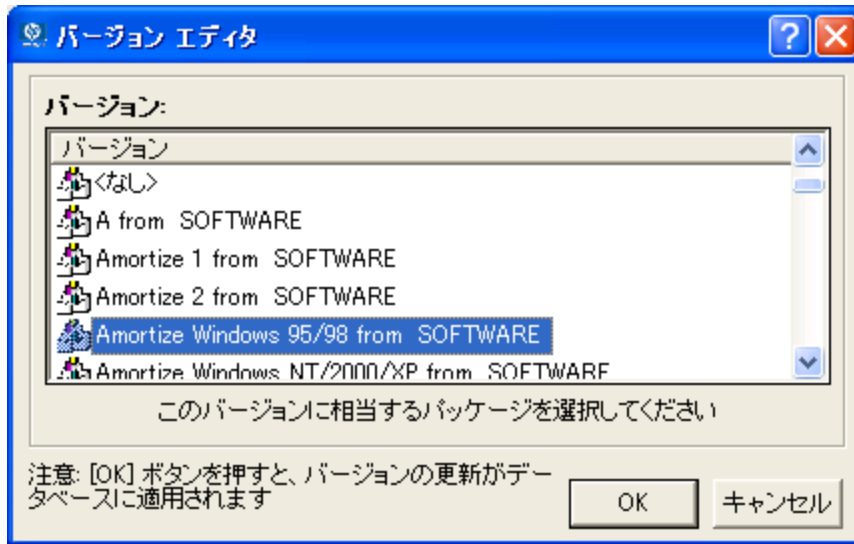


図 5.16 ~ [Amortize Windows 95/98] パッケージと Hello World バージョン グループの関連付け

バージョンインスタンスが作成されます。バージョングループ編集のダイアログボックスに戻ると、作成されたバージョンインスタンスが[割り当てられていないバージョン]ボックスに表示されています。

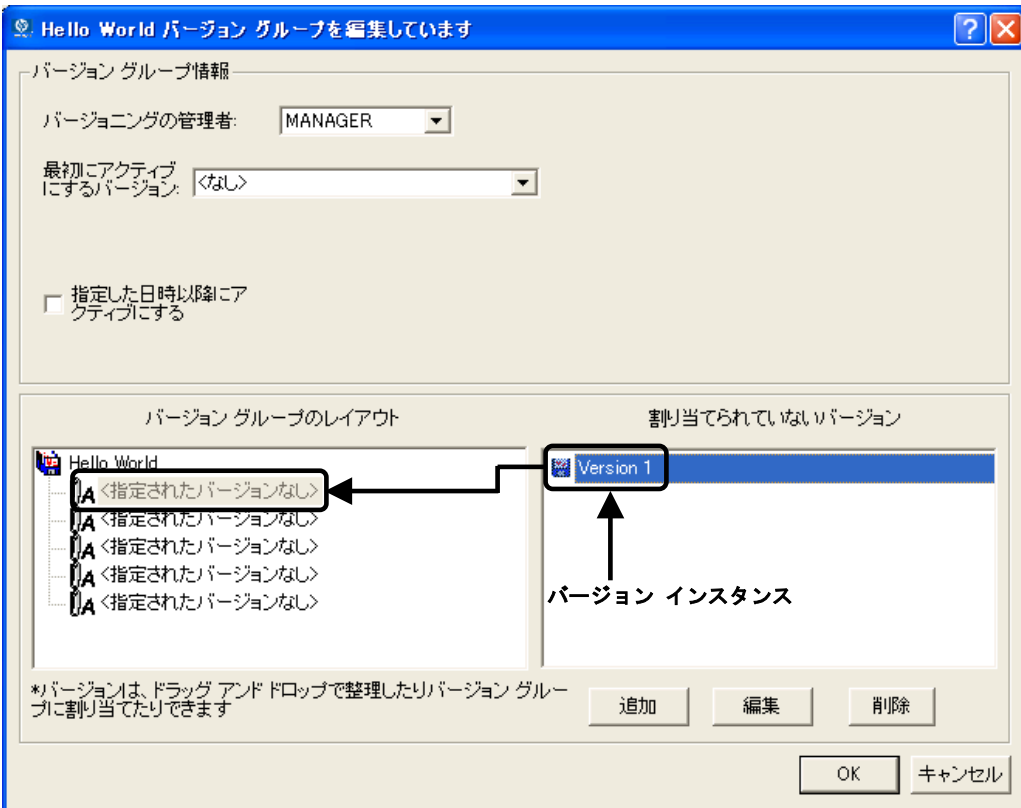


図 5.17 ~ 作成されたバージョンインスタンスが[割り当てられていないバージョン]ボックスに表示されている状態

14. 同じ手順を繰り返して、このバージョングループを使ってエンドユーザーが利用できるようにするアプリケーションソフトウェアのバージョンごとに、バージョンインスタンスを追加します。

バージョングループの割り当て

前の手順では、パッケージのバージョン インスタンスを作成しました。次に、このバージョンをバージョン グループに関連付ける必要があります。

バージョン インスタンスをバージョン グループに割り当てるには

1. [バージョン グループのレイアウト] で [<指定されたバージョンなし>] と表示されている空の割り当て設定のいずれかに、[割り当てられていないバージョン] ボックスのバージョン インスタンス アイコンをドラッグ アンド ドロップします。
 2. この手順を繰り返して、必要なバージョンをすべて割り当てます。
- バージョン グループ編集のウィンドウは、下の図 5.18 のようになります。

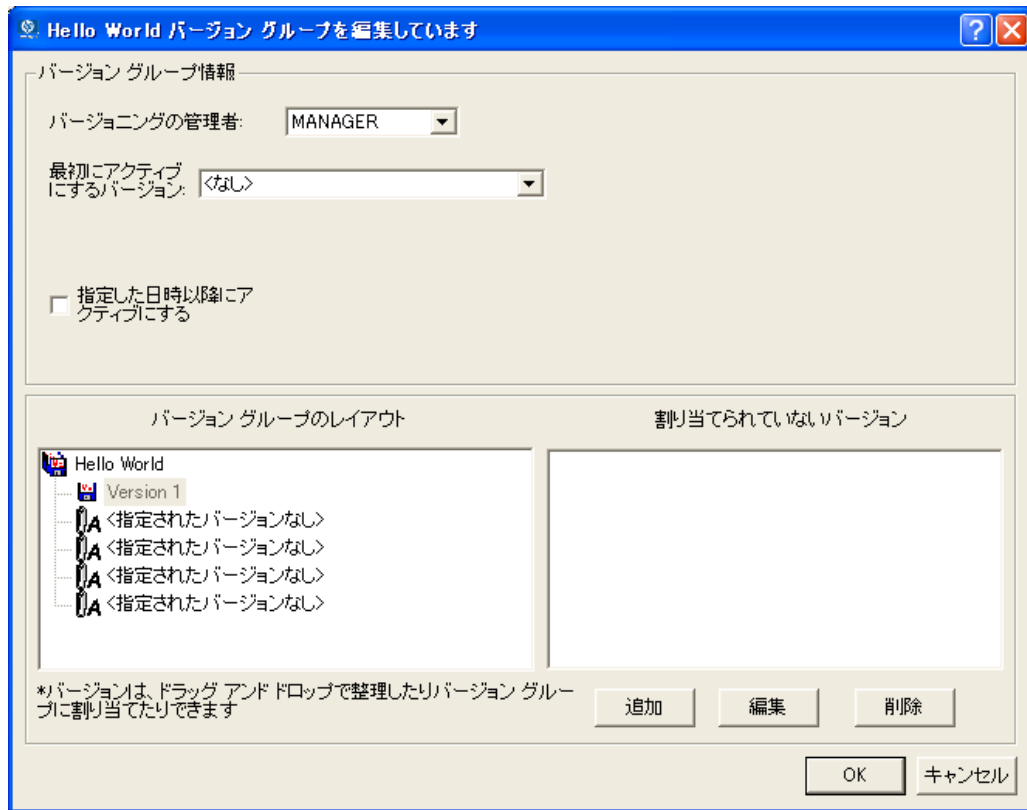


図 5.18 ~ バージョン グループ編集のダイアログ ボックスで [Version 1] が [Hello World] に割り当てられた状態

3. [最初にアクティブにするバージョン] ボックスの矢印をクリックして、割り当てられたバージョンを表示します。配布するバージョンまたは [<none>] を指定します。

Radia Client が Radia Configuration Server に接続すると、割り当てられたすべてのバージョンに関連付けられたパッケージ (ファイル、リンク、ショートカット、レジストリ エントリを含む) が圧縮形式でクライアント コンピュータの格納先に転送されます (クライアント コンピュータにまだ存在しない場合)。転送が完了すると、[最初にアクティブにするバージョン] ボックスで選択したバージョンがクライアント コンピュータにインストールされ、アクティブになります。

配布するバージョンを [最初にアクティブにするバージョン] ボックスで選択すると、そのバージョンが [バージョン グループのレイアウト] ボックスの一覧で強調表示されます (下の図 5.19 を参照)。

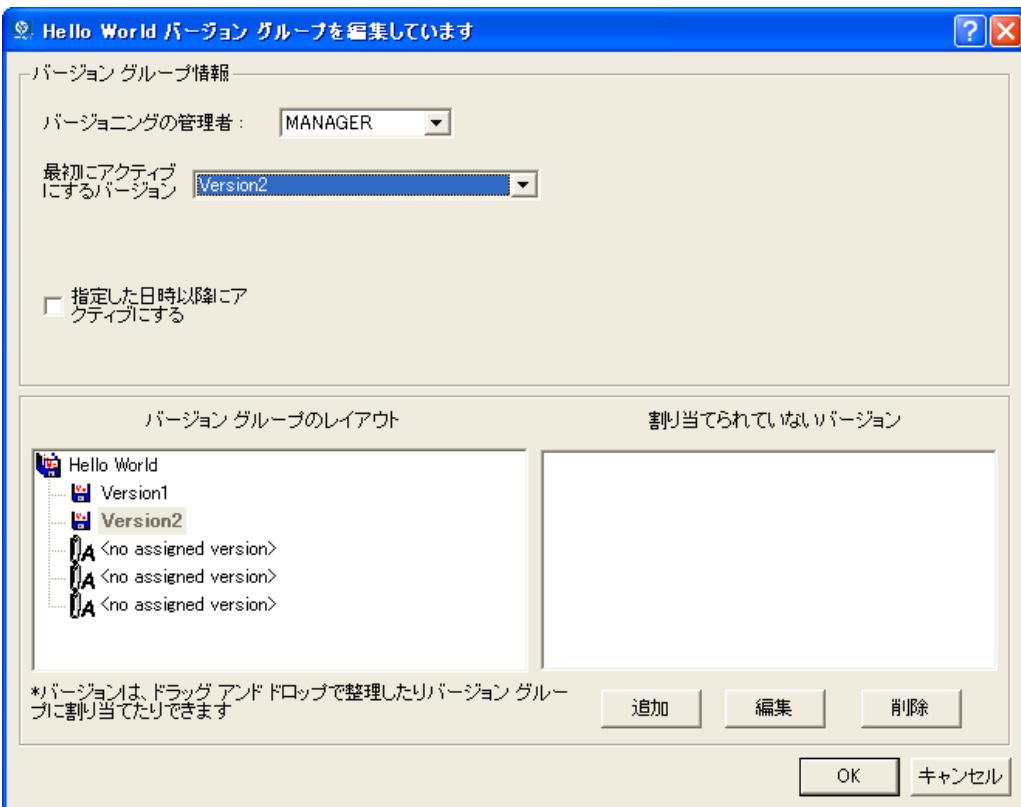


図 5.19 ~ 配布用に選択したバージョン ([Version 2]) が [バージョン グループのレイアウト] ボックスの一覧で強調表示されている状態

[最初にアクティブにするバージョン]が[<none>]に設定されている場合、Radia Client が Radia Configuration Server に接続すると、割り当てられているパッケージのうち、まだ転送されていないものがすべて転送されますが、クライアント コンピュータには何もインストールされません。これは、エンド ユーザーにとって非常にわかりにくい処理かもしれません。たとえば、Radia プラグインをインストールした Web ブラウザで、エンド ユーザーが Radia 管理者の企業の Radia Web ページにアクセスしたとします。そこでクライアント接続が行われ、エンド ユーザーは、アプリケーションの特定のバージョンをサービス リストから選択し、インストールするよう指定します。クライアント コンピュータの格納先にバージョン パッケージが圧縮形式で転送されている間、Radia Software Manager ユーザー インターフェイスに、ファイルのダウンロード状況が表示されます。その後、サービス リストにはアプリケーションのインストールが完了したと表示されますが、[最初にアクティブにするバージョン] コントロールが[<none>]なので、実際にはどのバージョンもアクティブにはなっていません。既に述べたように、この状態はエンド ユーザーにとってわかりづらく、本来なら不要な問い合わせがサポート グループに寄せられる結果になりかねません。

このような事態を避けるには、事前にしっかりとプランニングを行います。複数のバージョンに分かれたアプリケーションを配布する必要があるものの、どのバージョンもすぐにはアクティブにならないようにする場合、バージョンの1つをスタブ アプリケーションにして、エンド ユーザーには現在の状況をただ通知するという方法があります。たとえば、スタブ アプリケーションに、アプリケーションのインストール準備がまだ完了していないと通知するジョブが設定できます。実際のアプリケーションが配布できるようになるまで、[<none>]ではなく、そのスタブ アプリケーションを[最初にアクティブにするバージョン]で選択しておきます。

バージョン グループのバージョン割り当てを解除するには

- [バージョン グループのレイアウト]のバージョン アイコンを[割り当てられていないバージョン] ボックスにドラッグアンド ドロップします。割り当ては解除されます。

バージョン インスタンスをバージョン グループから削除するには

1. 削除するバージョン インスタンスを選択して、[削除] をクリックします。バージョン インスタンスが[割り当てられていないバージョン] ボックスにまだ移動していない場合は移動し、削除されたことを示すために、そのバージョン インスタンスのアイコンが淡色表示されます。

[割り当てられていないバージョン] ボックスに移動したバージョン インスタンスは削除済みと表示されていますが、実際にはバージョン グループ エディタを終了した時点でバージョン グループから削除されます。バージョン グループ エディタがまだ開いている間は、削除済みアイコンをクリックして[削除の復元] をクリックすれば、バージョン インスタンスが復元できます。

2. バージョン グループの設定が完了したら、[OK] をクリックしてウィンドウを閉じます。

バージョン グループを編集するには

1. Radia System Explorer で、バージョン グループ インスタンスを右クリックします。
ショートカット メニューが表示されます。

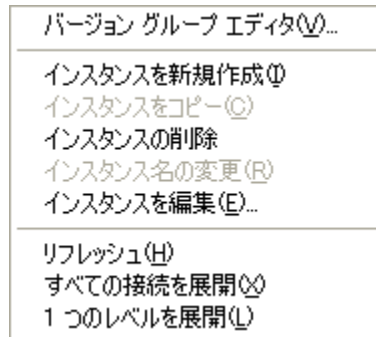


図 5.20 ~ バージョン グループ クラスのショートカット メニュー

2. ショートカット メニューの [バージョン グループ エディタ] をクリックし、上記の各操作を行います。

サービスの最適化

サービスの最適化の目的は、Radia サービスを構成する Radia パッケージの定期的な更新を最も効率的に配布するようにすることです。新しいパッケージには、前のパッケージでパブリッシュされたファイルの改訂部分および追加部分が含まれています。

サービスの最適化では、バイト レベルの差異計算を基にパッチを作成します。

■ バイト レベルの差異計算

バイト レベルの差異計算は、新旧 2 つのデータをバイト レベルで比較し、その差分を特定するプロセスです。アプリケーションのアップグレードまたは修正に必要なバイトが、2 つのパッケージ間の差分として検出されます。

■ パッチ

パッチは、既にパブリッシュされ、クライアント コンピュータにインストール済みのアプリケーションをアップグレードまたは修正する際に必要なデータ (バイト) をパッケージ化してパブリッシュしたものです。パッチに格納されているのはパッケージ間の差分だけなので、配布に必要な時間およびネットワーク バンド幅は少なくなります。パッチは、ファイル変更の際に、ファイルが丸ごと置き換える方法よりも効率的に配布できる場合にのみビルドしてください。

バイト レベルの差異計算機能は、Radia Packager、Radia データベース、Radia System Explorer でサポートされています。

■ **Radia Packager**

Radia Packager は、転送中のファイルのメッセージダイジェスト アルゴリズム (MD5) 署名を計算します。MD5 アルゴリズムでは、メッセージを入力として受け取り、それに対して 128 ビットのフィンガープリント (メッセージ ダイジェスト) が作成できます。この情報は、Radia Configuration Server に圧縮形式で格納されます。MD5 署名の詳細については、次の Web アドレスを参照してください。

<http://www.faqs.org/rfcs/rfc1321.html>

■ **Radia データベース**

PATCH ドメインには、新しい PATCH クラス内の利用可能なパッチのリストが格納されます。パッチのファイル署名は、パッチのデータを格納する関連インスタンスの識別に使用されます。PATCH ドメインの詳細については、『Radia Configuration Server Guide』を参照してください。

注意

ユーザーにパッチを配布する前に、POLICY ドメインにある USER クラスの ZOBJPTCH 変数を N から Y に変更する必要があります。

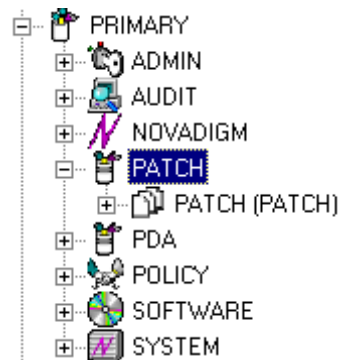


図 5.21 ~ PRIMARY ファイルの PATCH クラス

次の表では、PATCH クラスの属性について説明します。

表 5.5 ~ PATCH クラスの属性

属性名	説明
NAME	簡略名。TO インスタンスの ZRSCCFIL 属性の値です。
STATUS	パッチのステータス。有効な値は、 Queued 、 Rejected 、または Built です。
MESSAGE	ステータスの説明が格納されます。この属性を参照すると、パッチが正常にビルドされたかどうかを判別できます。
PVERSION	パッチ ビルダのバージョン。
POS	パッチがビルドされたオペレーティング システム。
ZRSCDATE	パッチがビルドされた日付。
ZRSCTIME	パッチがビルドされた時刻。
ZRSCSIZE	パッチのサイズ。
ZCMPsize	圧縮後のパッチのサイズ。
ZRSCSIG	内容に基づくパッチ タイプの署名。
ZRSCType	リソースのタイプ。有効な値は PATCH のみです。
ZRSCSTA	パッチ リソースのステータス。有効な値は 999 のみです。
	以下は、パッチの生成に使用するコントロールです。
ZCONTRL1	<ul style="list-style-type: none"> ZSTOPPCT は、パッチがパスのビルドを中止した時点でのターゲットデータの割合です。
ZCONTRL2	<ul style="list-style-type: none"> ZSTOPMAX はパッチの最大サイズです。
ZCONTRL3	<ul style="list-style-type: none"> ZTIMEOUT は、パッチ作成に割り当てられた、作成が中断されるまでの時間です。
	163 ページの「表 5.7」を参照してください。
SIGTYPE	署名タイプ。現時点でサポートされているのは MD5 のみです。
FROMSIG	内容に基づく 接続元ファイルの署名。
FROMSIZE	接続元ファイルのサイズ。この値は、接続元インスタンスの ZRSCSIZE で指定したものです。
FROMFDCI	接続元インスタンスの元のロケーション。
FROMOID	元の接続元インスタンスのオブジェクト ID。
TOSIG	内容に基づく 接続先ファイルの署名。
TOSIZE	接続元ファイルのサイズ。この値は、接続元インスタンスの ZRSCSIZE で指定したものです。
TOFDCI	接続先インスタンスの元のロケーション。
TOOID	元の接続先インスタンスのオブジェクト ID。

■ Radia System Explorer

[サービスの最適化] は、Application (ZSERVICE) インスタンスのショートカットメニューに追加されたオプションです。このオプションを使用すると、選択したアプリケーションコンポーネントのパッチが作成、表示、削除できます。

[サービスの最適化] オプションを使用する

[サービスの最適化] オプションを使用してパッチを作成するには、まず Radia Packager でパッケージを転送させる必要があります。パッケージの転送方法については、『Radia Application Manager ガイド』の「*Publishing Applications and Content*」を参照してください。

注意

- パッチは、署名があるコンポーネントに対してのみ作成可能です。初期設定では、MD5 のみがサポートされています。
- バイトレベルの差異計算によるパッチ生成を有効にするために、パッチの対象となるコンポーネントは、同じロケーション (コンピュータ) からパブリッシュする必要があります。この機能では、インスタンス名のサフィックスにある 8 バイトの CRC が格納されます。

警告

Radia Packager は現在、MD5 署名を計算して使用しています。この署名はパッチ機能に不可欠な要素なので、以前に転送されたコンポーネントに対する下位互換性はありません。

ここでは、以下の手順について詳しく説明します。

- パッチの対象となるパッケージの Application (ZSERVICE) インスタンスを SOFTWARE ドメインに作成します。
- サービス最適化ウィザードを使用してパッチを作成します。

操作を行う際に表示される各画面については、既に説明済みです。

この例では、BLD という一連のテキストファイルを最適化します。これらのテキストファイルは、Radia Packager でパッケージ化され、Radia Configuration Server に転送されています。各ファイルは、SOFTWARE ドメイン内の対応する各 PACKAGE です。

パッケージを転送させたら、ZSERVICE インスタンスを作成する必要があります。

警告

新旧パッケージ間のサイズの違いがあまりにわずかなために、パッチを作成すると、かえってファイルのサイズが増えてしまうケースもあります。その場合は、パッチが作成できません。

注意

この例に必要なファイルは、以下の命名規則でパブリッシュされています。

- bld1.txt ファイルは、最初は bld.txt という名前でパブリッシュされました。
- 2 番目のファイルが、パブリッシュされる際に bld.txt という名前に変えられたので、元の bld.txt ファイルは bld1.txt という名前になりました。
- 3 番目のファイルが、パブリッシュされる際に bld.txt という名前になったので、2 番目のファイルは bld2.txt という名前になりました。

パブリッシュ時に同じファイル名および同じマシンを使用することで、パッチを正しく作成するのに必要な CRC が同じものになります。

サービスの最適化を設定するには

1. ツリービューを展開して、PRIMARY.SOFTWARE.PACKAGE クラスを表示し、BLDTEST パッケージを指定します。

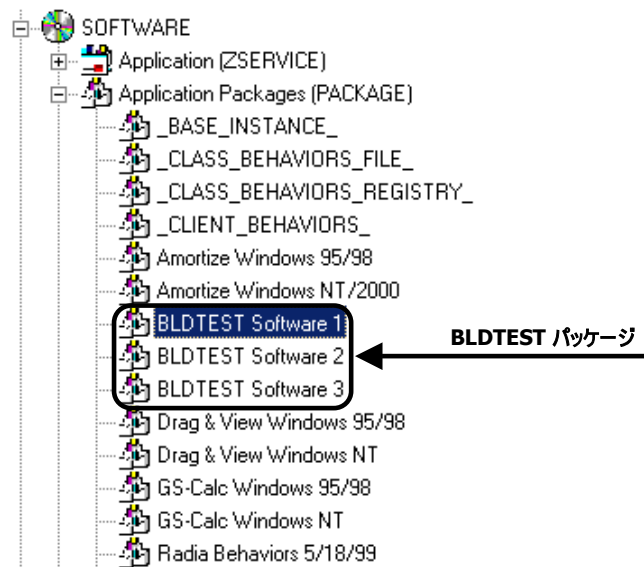


図 5.22 ~ SOFTWARE ドメインの BLDTEST パッケージ

2. [Application (ZSERVICE)] クラスを右クリックします。

ショートカットメニューが表示されます。

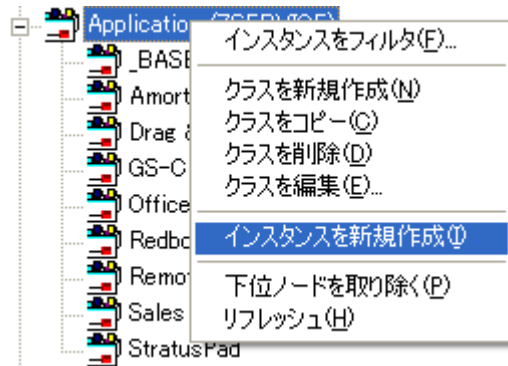


図 5.23 ~ ZSERVICE のショートカットメニュー

3. ショートカットメニューの [インスタンスを新規作成] をクリックします。

4. BLD_CREATE という新しいインスタンスを作成し、[OK] をクリックします。下の図 5.24 のように、[BLD_CREATE] サービスが Radia データベースに追加されます。

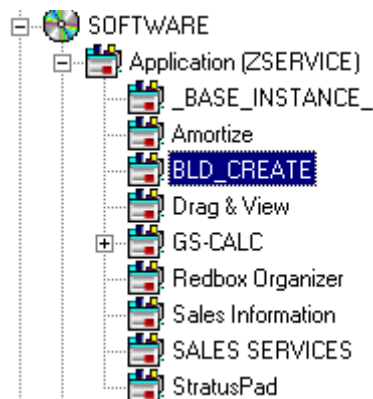


図 5.24 ~ BLD_CREATE ZSERVICE インスタンス

5. [Application (ZSERVICE)] クラスの [BLD_CREATE] インスタンスに BLDTEST1 パッケージをドラッグアンドドロップします。
6. [Application (ZSERVICE)] クラスの [BLD_CREATE] インスタンスに BLDTEST2 パッケージをドラッグアンドドロップします。
7. [Application (ZSERVICE)] クラスの [BLD_CREATE] インスタンスに BLDTEST3 パッケージをドラッグアンドドロップします。

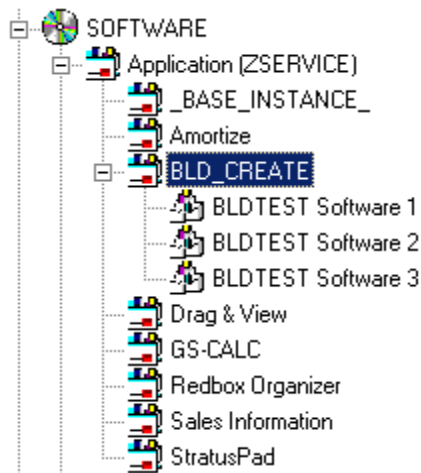


図 5.25 ~ BLD_CREATE ZSERVICE インスタンス

Application Packages (PACKAGE) を格納する Application (ZSERVICE) を作成したら、パッチの作成が開始できます。

ユーザー向けのプランまたはポリシーを作成する場合と同じ方法で、パッチの作成、編集、および削除用のプランを策定することもできます。次に、パッチ作成時に留意する事項をいくつか示します。

- パッチを作成するパッケージのドキュメントの作成方法をまとめる必要があります。小さなデータベース内で異なるパッチをビルドする場合であれば、パッチを作成する接続パスのスキーマは比較的わかりやすいものですが、データベースの規模が大きくなると、パッチクラスおよびそのパッチの対象となるパッケージも扱いにくいものになる可能性があります。
- パッチの対象に指定できるのは、MD5 署名があるパッケージだけです。
- パッチは、バージョンングとは異なります。パッチの配布に失敗した場合でも、旧バージョンに戻すことはできません。

8. [Application (ZSERVICE)] クラスの [BLD_CREATE] を右クリックします。ショートカットメニューが表示されます。

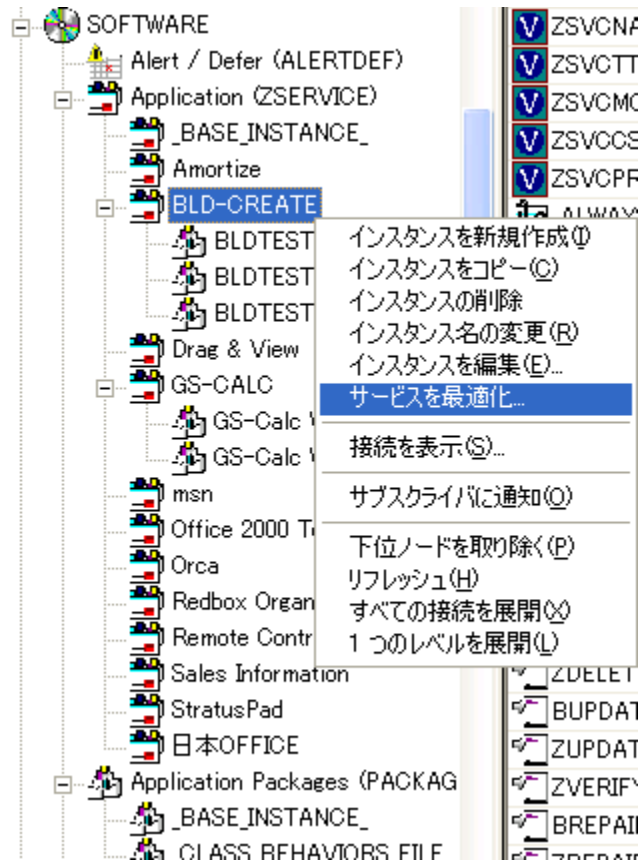


図 5.26 ~ BLD_CREATE ZSERVICE で [サービスを最適化] を選択した状態

9. [サービスを最適化] をクリックします。
サービス最適化ウィザードが表示されます。

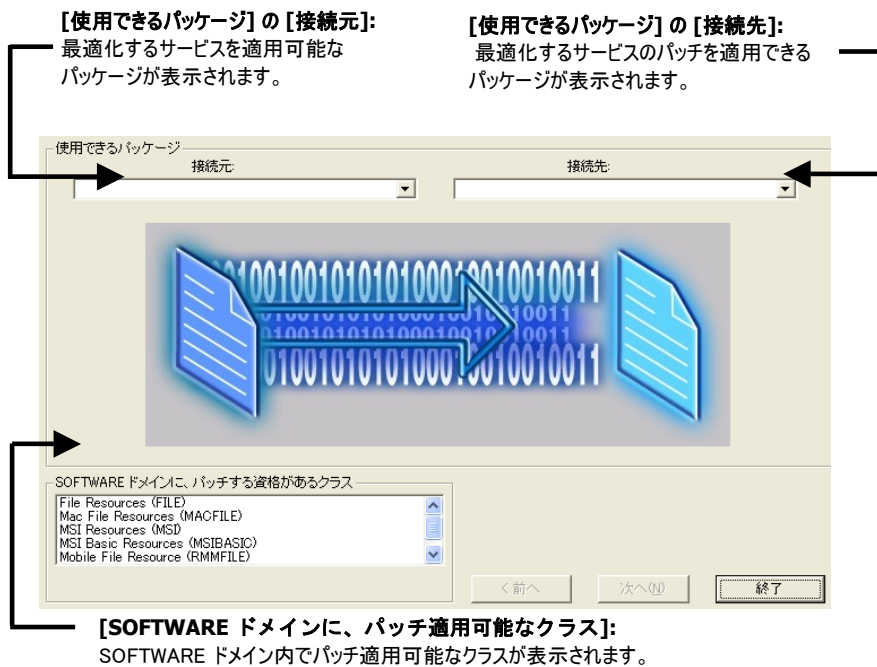


図 5.27 ~ サービス最適化ウィザードの [使用できるパッケージ] ダイアログ ボックス

サービス最適化ウィザードの最初の画面には、以下の 3 つの領域があります。

- **[使用できるパッケージ] の [接続元]**
最適化するサービスを適用できるパッケージが表示されます。[接続元] ボックスの矢印をクリックすると、Application (ZSERVICE) のすべてのパッケージが表示されます。この例では、[接続元] をクリックすると、Application (ZSERVICE) の BLD_CREATE のすべてのパッケージが表示されます。
- **[使用できるパッケージ] の [接続先]**
[接続元] でパッケージを選択すると、最適化するサービスでパッチ可能なパッケージが [接続先] に表示されます。
- **[SOFTWARE ドメインに、パッチ適用可能なクラス]**
SOFTWARE ドメイン内でパッチ適用可能なクラスを選択します。指定可能なクラスは、[File Resources (FILE)]、[MSI Resources (MSI)]、[Unix File Resources (UNIXFILE)] です。

10. [使用できるパッケージ] の [接続元] ボックスの矢印をクリックします。

手順 5 ~ 7 (155 ページの) で選択したサービスを適用するパッケージ (BLD_CREATE) が表示されています。

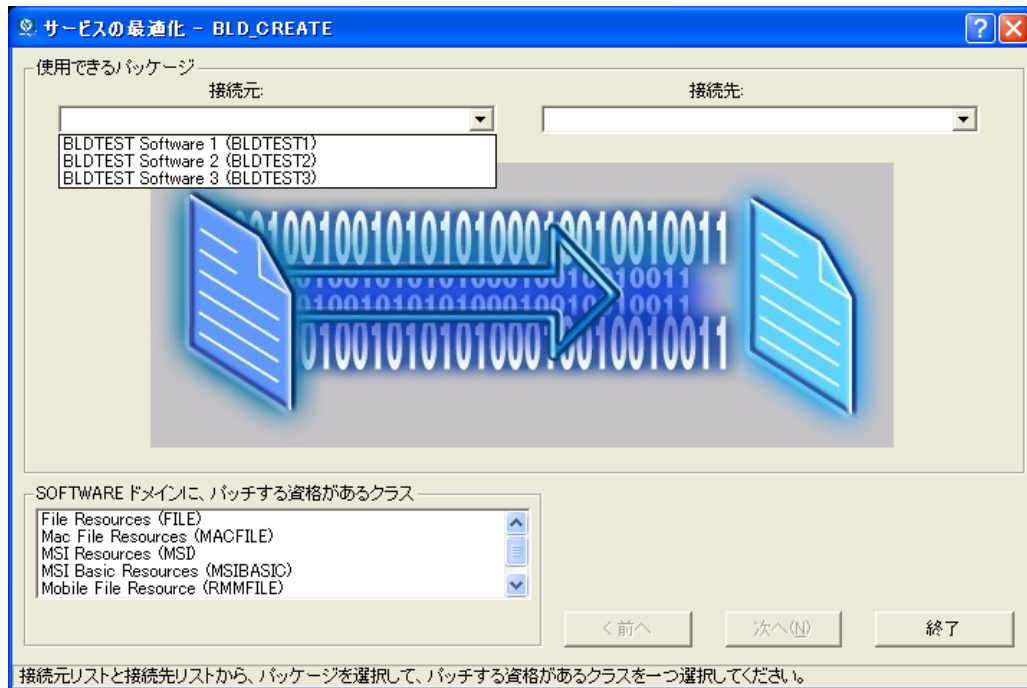


図 5.28 ~ 最適化するパッケージの選択

11. [使用できるパッケージ] の [接続元] ボックスで、[BLDTEST Software 1 (BLDTEST1)] をクリックします。

[使用できるパッケージ] の [接続先] ボックスには、BLD_CREATE サービスでパッチ可能なパッケージが表示されます。

12. [使用できるパッケージ] の [接続先] ボックスで、[BLDTEST Software 2 (BLDTEST2)] をクリックします。

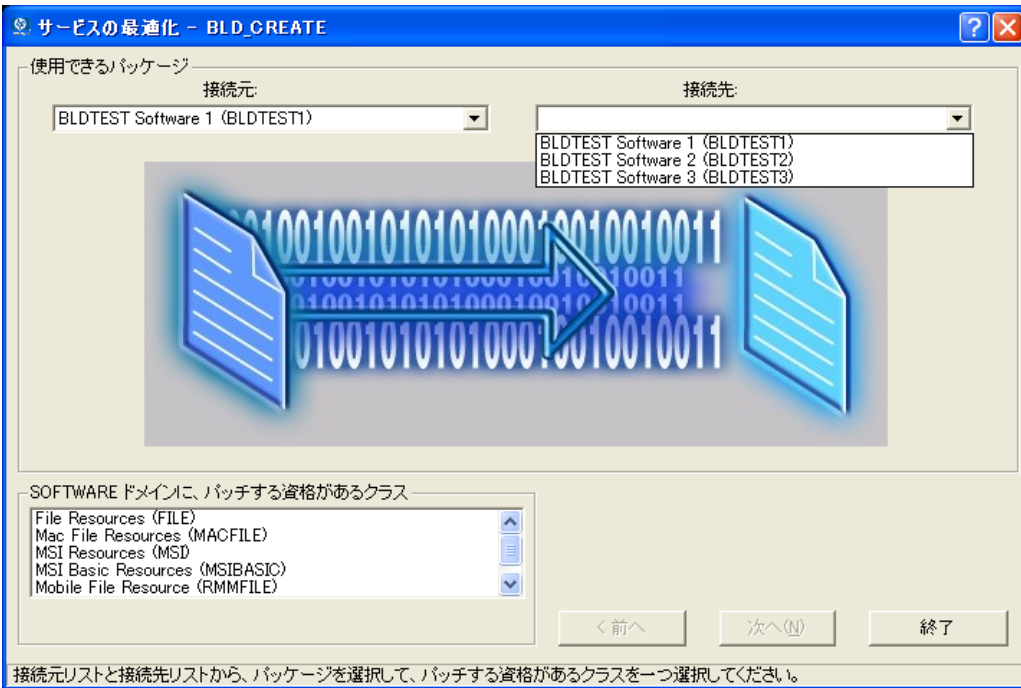


図 5.29 ~ [接続元] で指定したパッケージとの比較対象となるパッケージの選択

13. [SOFTWARE ドメインに、パッチ適用可能なクラス] で、SOFTWARE ドメイン内のパッチ対象クラスをクリックします。パッケージのファイル リソースが格納されているクラスを選択します。

注意

現在、パッチがビルドできるクラスは、[File Resources (FILE)]、[MSI Resources (MSI)]、[Unix File Resources (UNIXFILE)] です。

この例では、パッチ可能なクラスは [File Resource (FILE)] だけです。

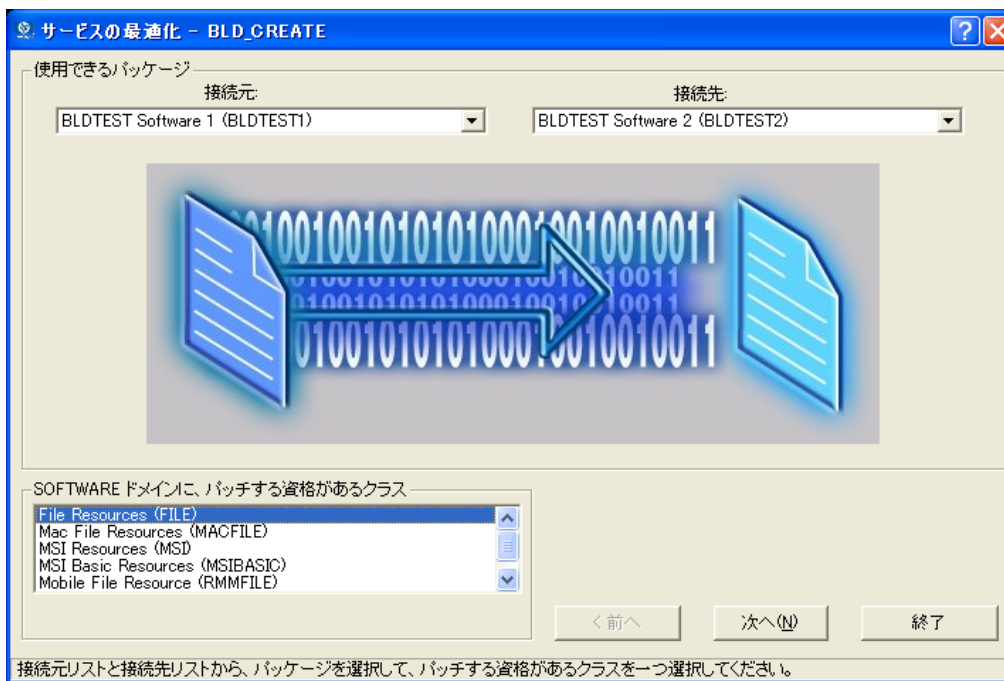


図 5.30 ~ 完了したサービス最適化ウィザード

注意

パッケージ内でどのクラスがパッチ可能かを判別するには、[Application (ZSERVICE)] インスタンスを展開して、属性を表示します。インスタンスを確認すると、パッチ可能なリソースが特定できます。

14. [次へ] をクリックして続行します。
[ファイルと進行状況] ダイアログ ボックスが表示されます。

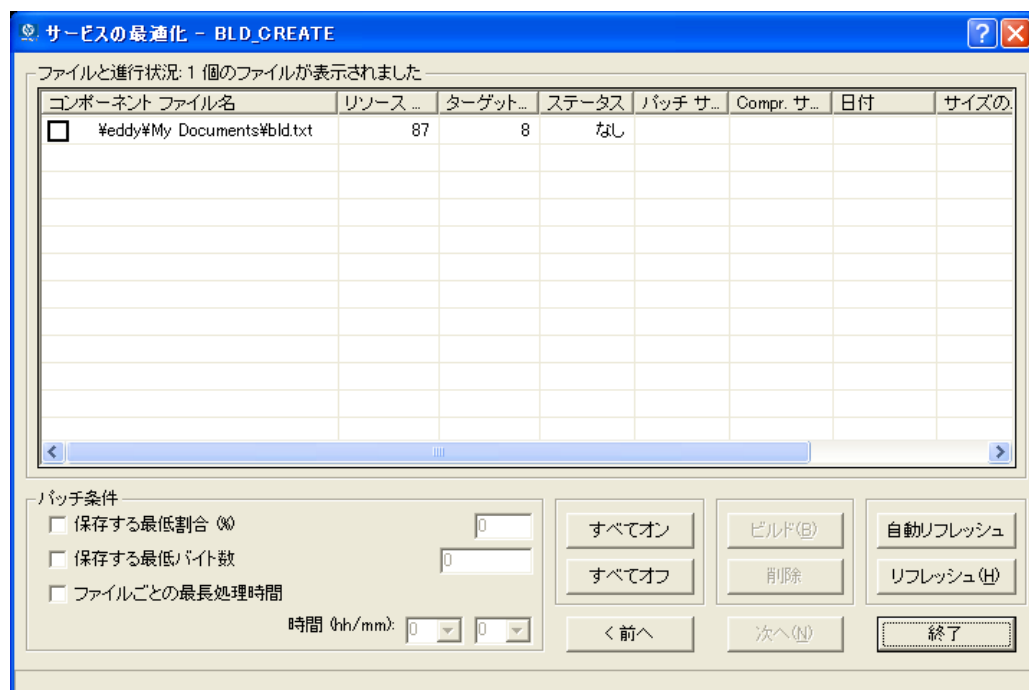


図 5.31 ~ [ファイルと進行状況] ダイアログ ボックス

このダイアログ ボックスには、ファイルと進行状況の情報が表示されます。[使用できるパッケージ] ダイアログ ボックスで指定した内容に基づいて、インスタンスの情報が収集されます。

[ファイルと進行状況] ダイアログ ボックスに表示される情報については、162 ページの「表 5.6」を参照してください。

表 5.6 ~ ファイルと進行状況の情報

カラム	説明
[コンポーネント ファイル名]	作成中のパッチの名前。
[リソース パッケージ サイズ]	オリジナル リソースのパッケージ サイズ。
[ターゲット リソース サイズ]	オリジナルのターゲット リソースのサイズ。
[ステータス]	パッケージのステータス。[なし]、[queued]、[rejected]、[active]、[built] のいずれかです。
[パッチ サイズ]	オリジナルのパッケージ データ (BLD1) と変更されたパッケージ データ (BLD2) を比較した結果です。
[圧縮後のサイズ]	[リソース パッケージ サイズ] に表示されているパッケージの圧縮サイズ。
[日付]	パッケージがパブリッシュおよび転送された日付。
[サイズの制限値]	この情報は、[パッチ条件] の [保存する最低割合 (%)] チェック ボックスをオンにし、テキスト ボックスに入力した値です。この値は、パッチのビルドが完了したときか、パッチ ビルド プロセスが終了するときに表示されます。
[割合の制限値]	この情報は、[パッチ条件] の [保存する最低バイト数] チェック ボックスをオンにし、テキスト ボックスに入力した値です。この値は、パッチのビルドが完了したときか、パッチ ビルド プロセスが終了するときに表示されます。
[時間の制限値]	この情報は、[パッチ条件] の [ファイルごとの最長処理時間] チェック ボックスをオンにし、テキスト ボックスに入力した値です。この値は、パッチのビルドが完了したときか、パッチ ビルド プロセスが終了するときに表示されます。

[パッチ条件] の各テキスト ボックスで、パーセント サイズ、バイト数、時間要素などの値を入力すると、パッチのビルドの制約が指定できます。条件を設定すると、ファイルリスト内でチェック ボックスがオンになっている全ファイルに、その条件が適用されます。これにより、パッチの作成が制御できます。一覧内のファイル数が多い場合は、各ファイルを評価してパッチをビルドするかどうかを指定する手間を省くために、[すべてをチェック] をクリックして一覧内の全ファイルのチェック ボックスをオンにします。次に、[パッチ条件] を設定し、パッチをビルドした方がメリットがありそうなファイルに、パッチのビルドを限定します。

表 5.7 ~ [パッチ条件] の情報

ファイル オプション	説明
[保存する最低割合 (%)]	保存するコンポーネントの最小限の割合 (%) を指定します。この値に達しない場合、パッチはビルドされません。デフォルトの設定は、オフ (チェック マークなし) です。
[保存する最低バイト数]	パッチとして保存する最小限のバイト数を指定します。この値に達しない場合、パッチはビルドされません。デフォルトの設定は、オフ (チェック マークなし) です。
[ファイルごとの最長処理時間]	パッチに対して最長でどのくらいの処理時間をかけられるかを指定します。ドロップダウン リストで、パッチのビルドにかけられる時間の上限を指定します。分または時間と分の組み合わせで設定できます。デフォルトの設定は、オフ (チェック マークなし) です。

コンポーネント ファイルを選択すると、パッチのビルド用ボタンが有効になります (下の図 5.32 を参照)。条件を適用するには、対応するチェック ボックスをオンにします。チェック ボックスの隣のデータ入力フィールドが有効になるので、そのデータ フィールドに条件を入力します。各条件が組み合わさってパッチに適用されます。選択したファイルに対してパッチがビルドされるようになるには、適用したすべての条件が満たされなければなりません。



図 5.32 ~ パッチ ビルド用に有効になった各ボタン

下の表 5.8 では、ボタンの機能について説明します。

表 5.8 ~ ボタンの機能	
ボタン	アクション
[全て選択]	[コンポーネント ファイル名] カラムに表示されている全ファイルが選択されます。
[ビルド]	このボタンをクリックすると、パッチのビルドが開始されます。
[自動リフレッシュ]	[自動リフレッシュ] をクリックすると、[自動リフレッシュ タイマ] ダイアログ ボックスが表示されます (下の図 5.33 を参照)。 [自動リフレッシュ] を使用する場合は、1 ~ 99 分のリフレッシュ間隔を入力します。0 を入力すると、自動リフレッシュがキャンセルできます。
[全て解除]	[コンポーネント ファイル名] カラム内の全ファイルの選択が解除されます。
[削除]	選択したコンポーネント ファイルが削除されます。
[リフレッシュ]	ビルド ステータスがリフレッシュされます。
[前へ]	前の画面に戻ります。
[次へ]	[次へ] が有効な場合、クリックすると次の画面に進みます。
[終了]	[終了] をクリックすると、サービス最適化ウィザードが終了します。

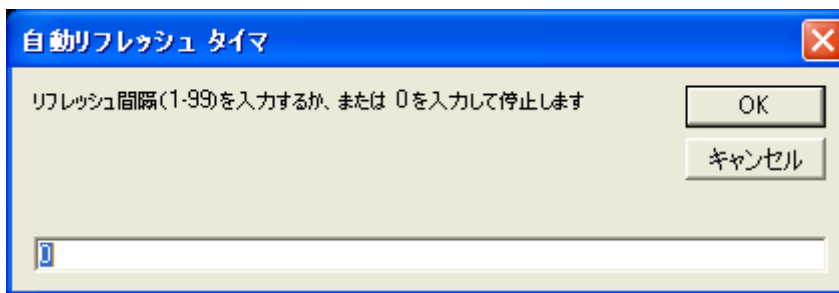


図 5.33 ~ [ステータス] カラムの情報を自動的にリフレッシュする間隔 (分) を入力する [自動リフレッシュ タイマ] ダイアログ ボックス

15. パッチを適用するファイルの横のチェック ボックスをオンにします。

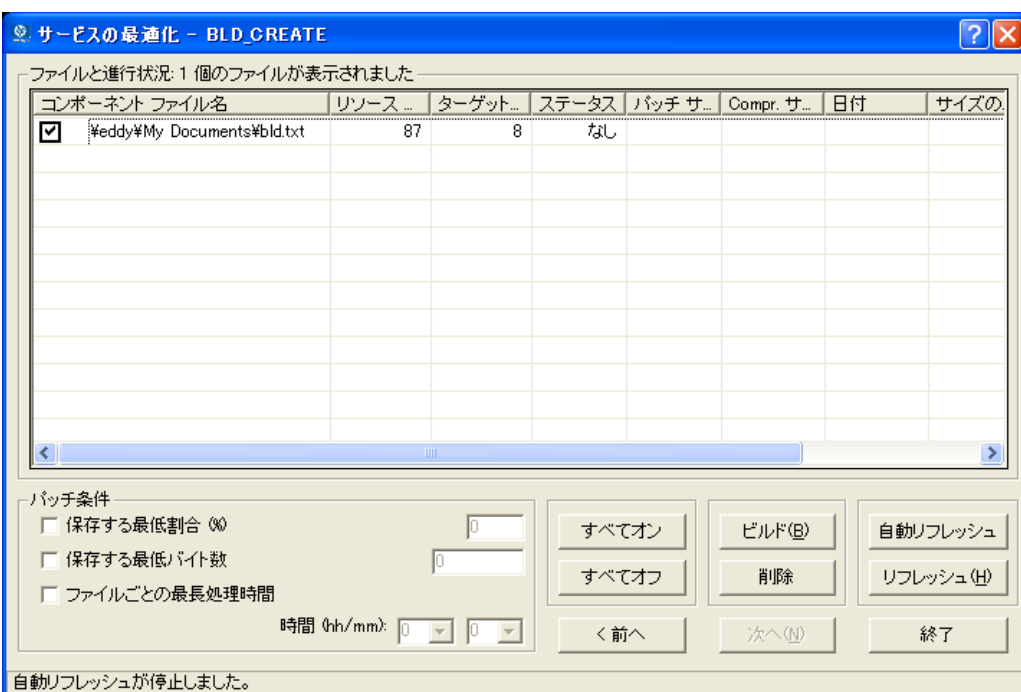


図 5.34 ~ [サービスの最適化] ダイアログ ボックスで、パッチをビルドするファイルを選択した状態

16. [ビルド] をクリックします。
17. 新しいパッチのビルドを確認するメッセージが表示されます。

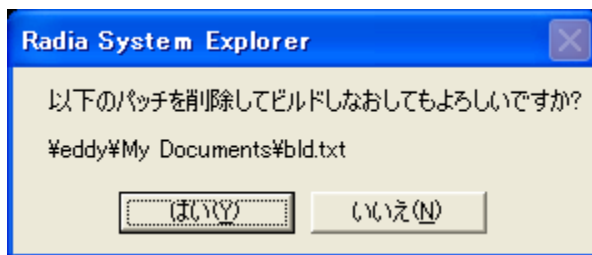


図 5.35 ~ ビルドの確認用ダイアログ ボックス

18. [はい] をクリックして続行します。
または
[いいえ] をクリックして終了します。
[はい] をクリックすると、オリジナルとターゲットのペアの現在のパッチが削除され、選択した各ファイル ペアに対するパッチ作成リクエストが Radia Configuration Server に送信されます。
19. [ステータス] を更新するには、[リフレッシュ] をクリックします。

20. [終了] をクリックすると、サービス最適化ウィザードが終了します。

または

[前へ] をクリックすると、[使用できるパッケージ] ダイアログ ボックスに戻り、追加のパッチがビルドできます。

パッチは、PATCH クラスの下にある PATCH ドメインに格納されます。

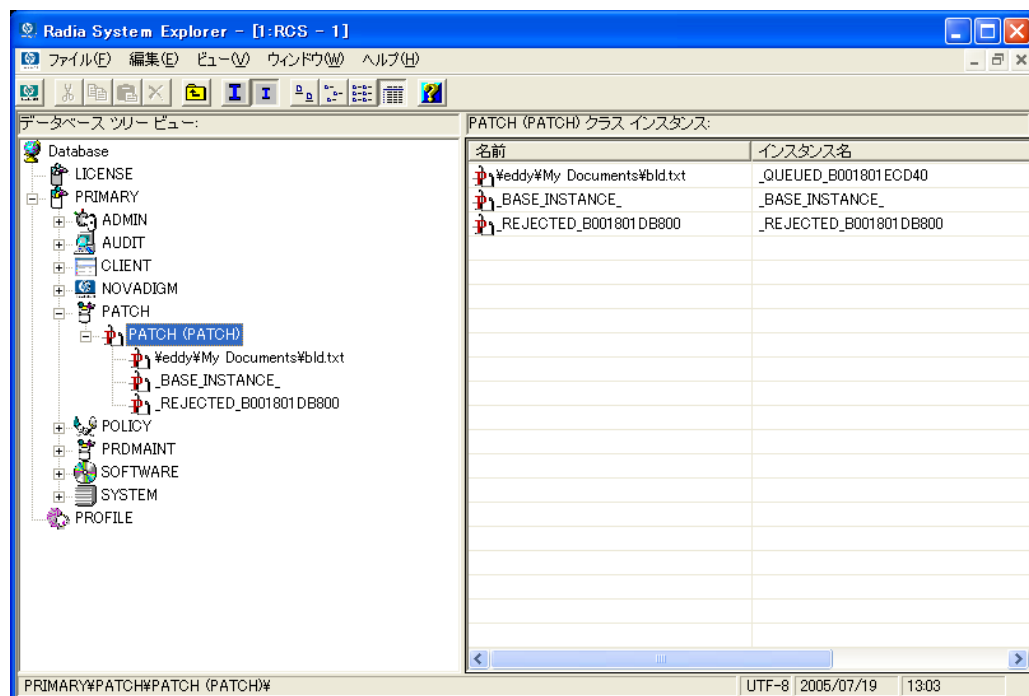


図 5.36 ~ PATCH ドメインの PATCH クラスに格納されたパッチ

PATCH.PATCH を調べて、パッチ インスタンスがビルドされたことを確認します。ビルドが拒否されたパッチを調べて、その理由を確認します。要求されたパッチの現在のステータスを確認するには、MESSAGE 変数を参照します (下の図 5.37 参照)。

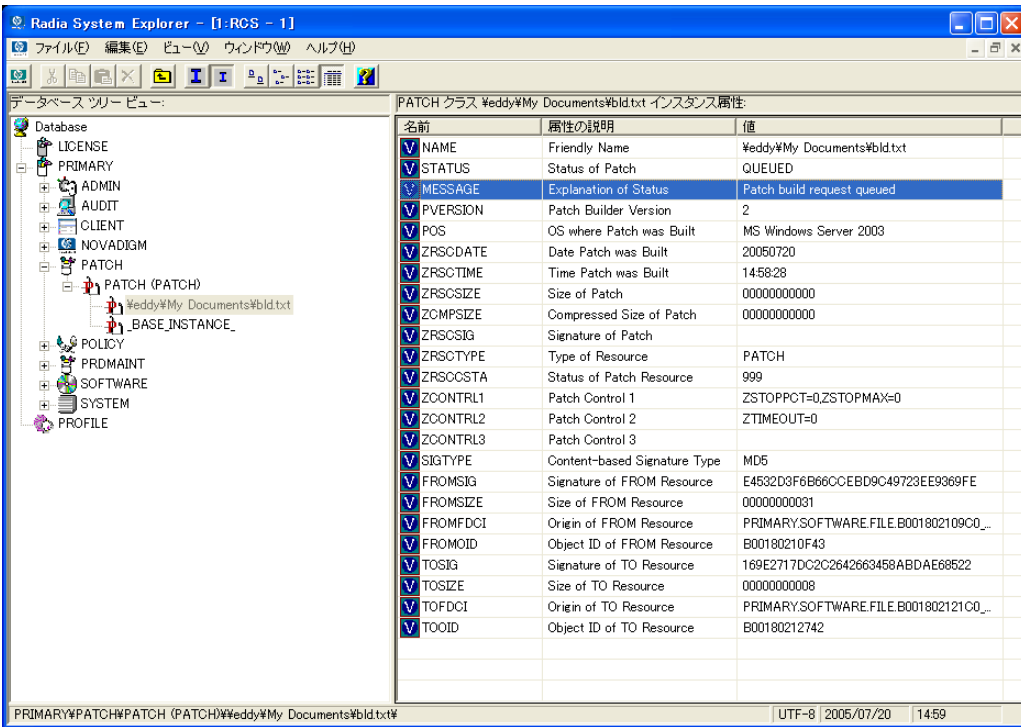


図 5.37 ~ パッチの MESSAGE インスタンス

Radia サービス グループ

Radia では、製品のフル インストールやフル オペレーションを実現するため、複数のサービス パッケージを必要とする製品が管理できます。製品が他のサービス パッケージを必要としている場合、または他のサービスに依存している場合に、Radia サービス グループが使用できます。これには、MSI でパッケージ化された製品も含まれます。この場合は、以下のようなケースが考えられます。

- 複数の MSI サービス パッケージを利用している製品。たとえば、MS Office では、他の言語パック サービスが必要となる場合があります。
- サイズが大きい製品。製品スイートの一部の機能だけをインストールする場合に備えて、いくつかの小さな下位サービスに分割しなければならない場合があります。

サービス グループ機能を使用すると、上位のサービス、つまりマスター サービス単位で複数のサービスがグループ化できます。この操作により、同じタイプのコンポーネントや関連するコンポーネントを論理的にわかりやすくまとめることができます。

Radia 3.x の場合、Radia System Explorer を使用してサービスおよびパッケージを定義し、それをグループ化してマスター サービスを作成します。

注意

通知またはタイマーによる更新などのアクションは、必ずマスター サービスを対象にしてください。マスター サービスに適用したアクションは、すべての下位サービスに適用されます。

コンポーネントの機能拡張

- **Radia Software Manager**
Radia サービスリストには、マスター サービスのみが表示されます。
- **Radia Application Manager**
radskman コマンドには、複数のサービス リクエストを処理するロジックが含まれます。radskman では、個々の下位グループに対するリクエストを実行し、最終結果のレポートをマスター サービスに返します。

サービス グループを設定する際の前提条件

マスター グループを設定する前に、以下の設定を変更または確認する必要があります。

- **Radia Configuration Server (バージョン 4.5 以降)**
EDMPROF.dat ファイルで、以下の項目を確認します。
 - MGR_OBJECT_RESOLUTION セクションの ALLOW_DUPLICATE_INSTANCES が **No** に設定されている。
- **Radia Configuration Server (バージョン 4.5 より前)**
EDMPROF.dat ファイルで、以下の項目を確認します。
 - MGR_OBJECT_RESOLUTION セクションの ALLOW_CIRCULAR_REFERENCE が **Yes** に設定されている。
および
 - MGR_OBJECT_RESOLUTION セクションの ALLOW_DUPLICATE_INSTANCES が **No** に設定されている。
- **Radia Configuration Server データベース**
 - 複数のサービスをまとめて設定する (インストールに際して依存関係にある各サービスをグループ化する) 場合、Application (ZSERVICE) クラスのベース インスタンスに ZSVCGRP という変数を追加する必要があります。ZSVCGRP を ZSERVICE クラスに追加する場合は、次の表を参考に変数を設定します。クラスの編集については、62 ページの「クラスを編集する」を参照してください。

表 5.9 ~ ZSVCGRP 変数

値	動作
Y	Radia Configuration Server に Y (Yes) と指定すると、サービス グループは、インストールの際に無関係なアプリケーションの集まり、または依存関係のないアプリケーションの集まりとして処理されます。
D	Radia Configuration Server に D (Dependent) と指定すると、サービス グループの各サービスがインストールに際して依存関係にあるものとして処理されます。ある下位サービスが失敗すると、残りのサービスはインストールされません。
N	サービス グループがない場合は、 N (No) と指定します。

変数を指定しなかった場合、デフォルト処理は Y に設定されている場合と同じです。

マスター グループを作成する

Radia Configuration Server の EDMPROF.dat を変更したら、マスター グループの作成が開始できます。

マスター グループを作成するには、マスター グループ サービス用に新しい **Application (ZSERVICE)** インスタンスを **Radia System Explorer** で作成します。次に、グループのメンバーになるサービスごとに、メンバー サービスのインスタンスとマスター グループ サービスのインスタンスの間の接続を確立します。サービス メンバーは、いつでもマスター グループ サービスに追加できます。

この例では、「Sales Services」というマスター グループを作成します。このマスター グループには、Radia サンプル データベースで提供されている **[Amortize]** サービスと **[GS-CALC]** サービスが含まれています。

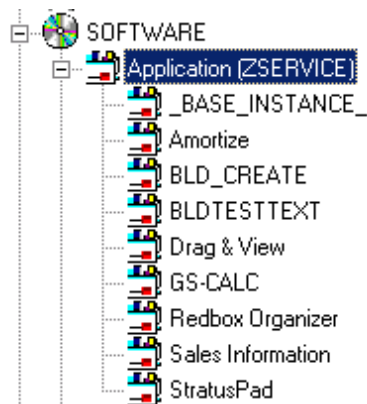


図 5.38 ~ ZSERVICE サンプル サービス

マスター グループを作成するには

1. まだ Radia System Explorer にアクセスしていない場合はアクセスし、**PRIMARY.SOFTWARE.ZSERVICE** クラスに移動します。
2. クラスを展開し、**[Application (ZSERVICE)]** 内のインスタンスを表示します。

3. [Application (ZSERVICE)] を右クリックします。ショートカットメニューが表示されます。

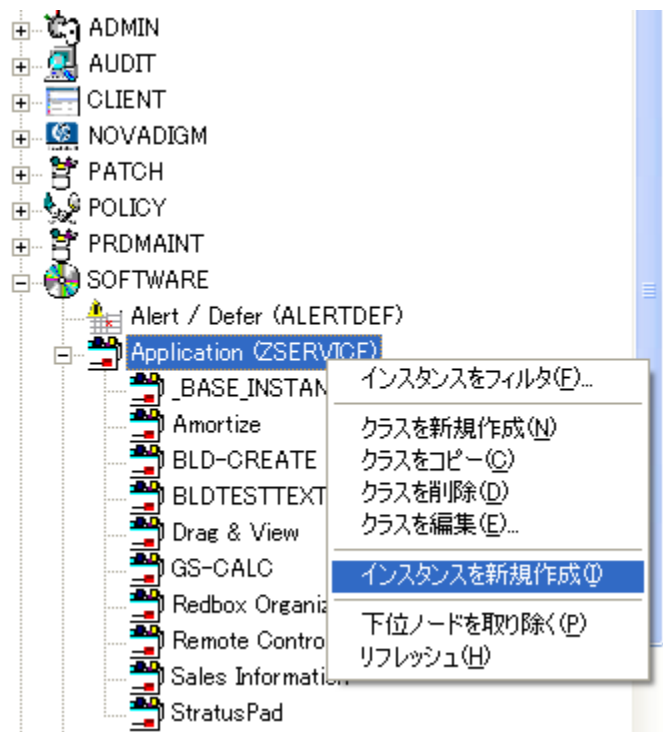


図 5.39 ~ ZSERVICE インスタンスの新規作成

4. ショートカットメニューの [インスタンスを新規作成] をクリックします。[インスタンスの作成] ダイアログ ボックスが表示されます。

5. 新規作成する ZSERVICE インスタンスの名前(ここでは「SALES SERVICES」)を入力します。

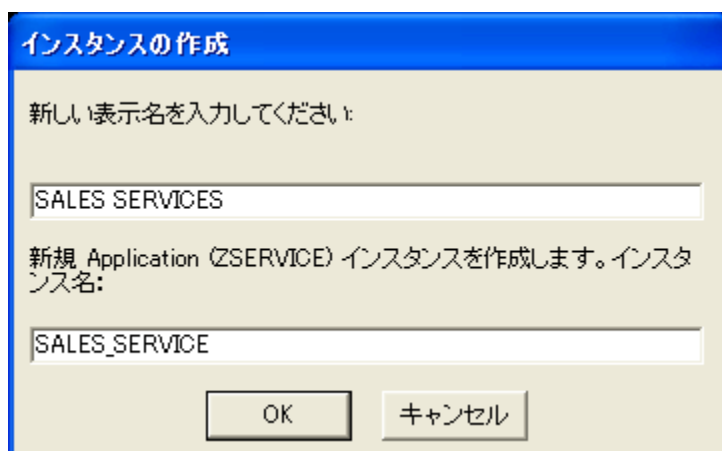


図 5.40 ~ SALES SERVICE インスタンスの新規作成

6. [OK] をクリックして、インスタンスを作成します。[Application (ZSERVICE)] クラスに新しいインスタンスが表示されます。

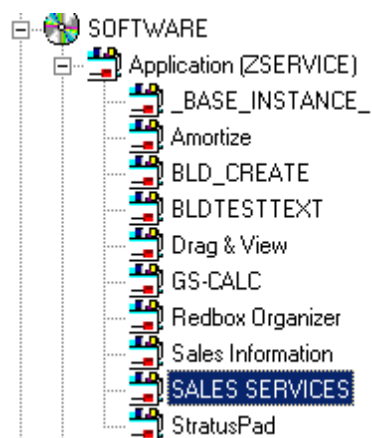


図 5.41 ~ 新規作成された [SALES SERVICES] インスタンス

これで、マスター グループにサービスを追加する準備が整いました。

7. [SALES SERVICES] を右クリックし、ショートカットメニューの [接続を表示] をクリックします。

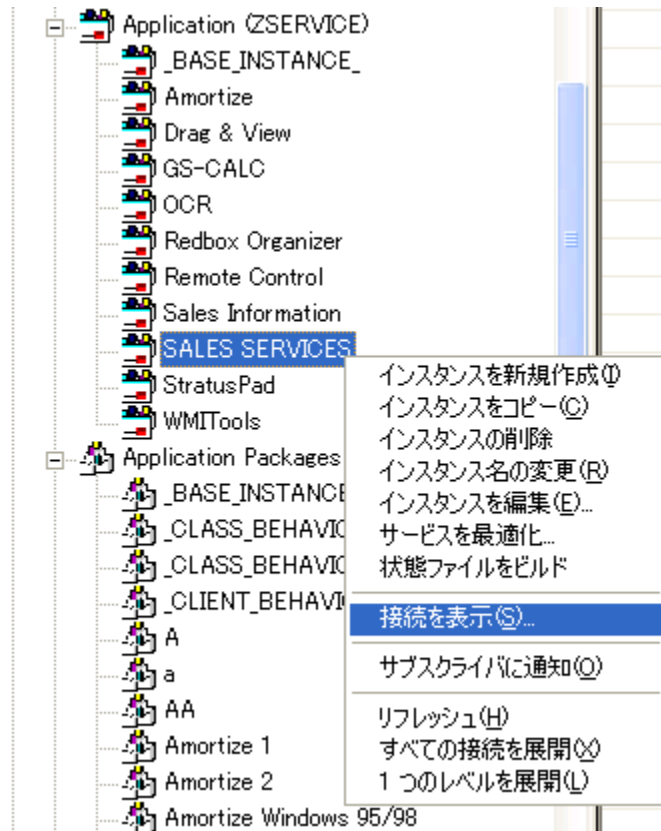


図 5.42 ~ ショートカットメニューの [接続を表示] を選択した状態

[SOFTWARE.ZSERVICE 接続] ダイアログ ボックスが表示されます。

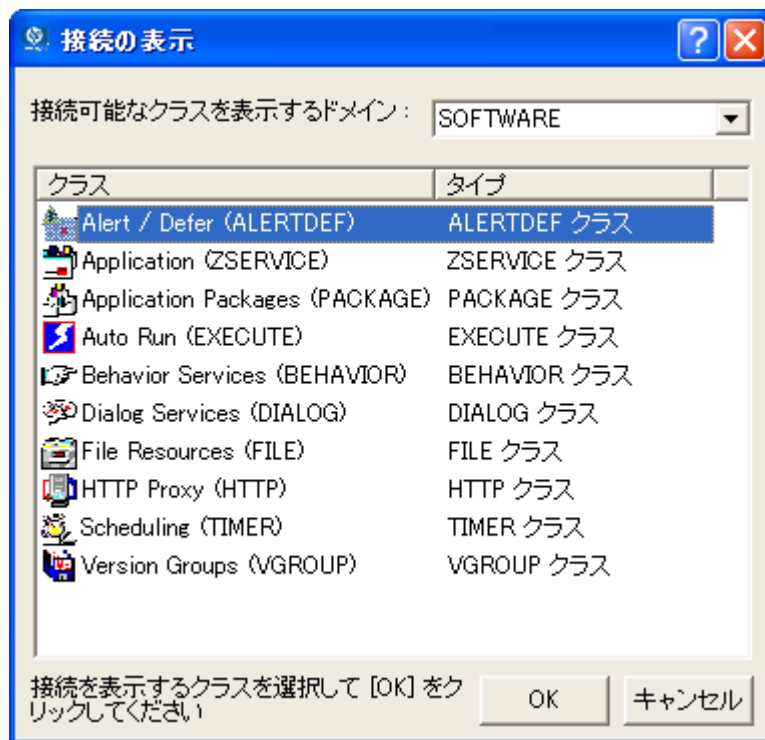


図 5.43 ~ [SOFTWARE.ZSERVICE 接続] ダイアログ ボックス

8. [SOFTWARE.ZSERVICE 接続] ダイアログ ボックスの [Application (ZSERVICE)] をクリックして、[OK] をクリックします。
画面のリスト ビューに、ZSERVICE クラスのインスタンスが表示されます。

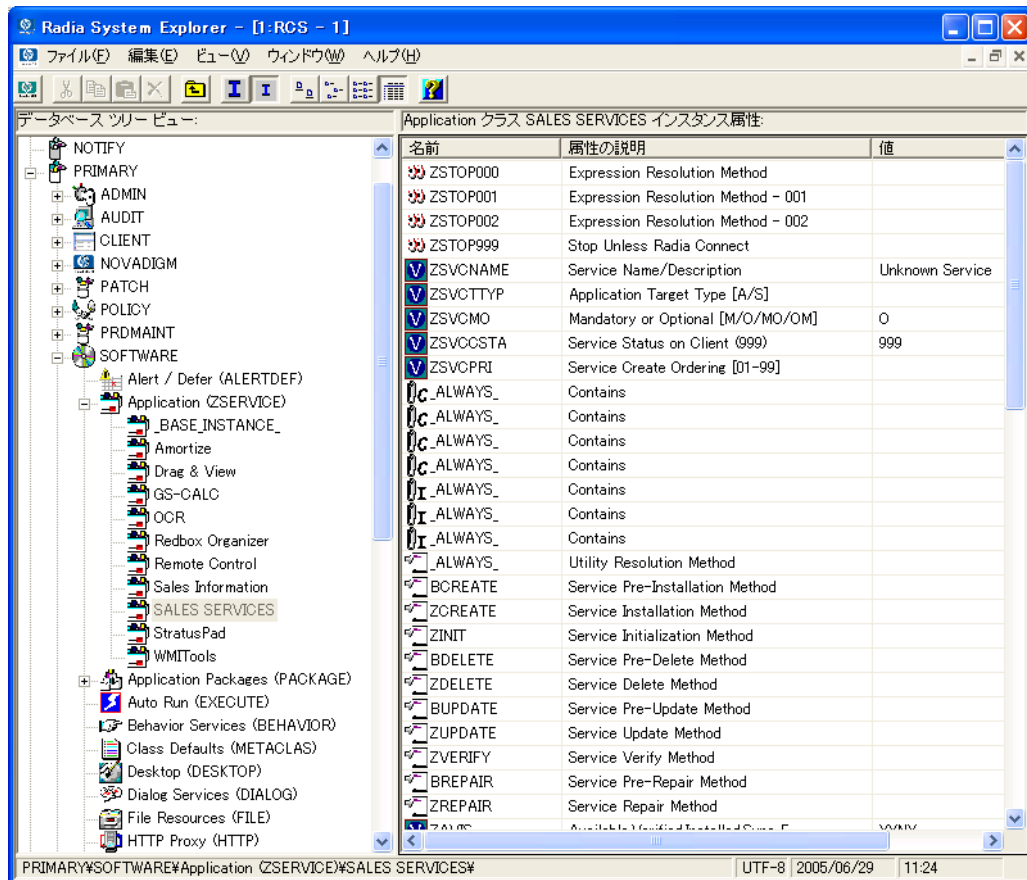


図 5.44 ~ リスト ビューに表示された Application (ZSERVICE) クラスのインスタンス

9. 右側のサービスをクリックし、SALES SERVICES ZSERVICE インスタンスにドラッグします。カーソルがペーパー クリップの形になったら、サービス上にドロップします。
10. 接続を確認します。

11. 上記の手順を繰り返して、サービスを追加します。

これで、マスター グループが完成しました。

注意

サービス グループ内のサービスは「表示順」、つまりデータベース内でマスター サービスに接続した順にインストールされます。サービス グループ内のサービスでは、ZSVCPRI の設定は使用されません。

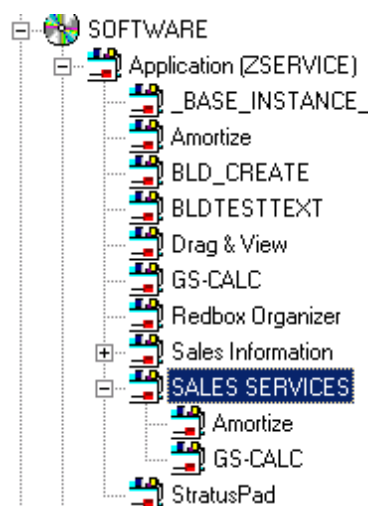


図 5.45 ~ 完成した [SALES SERVICES] マスター グループ

これで、このマスター グループをユーザーに配布する準備が整いました。

Radia Notify

Radia Notify を使用すると、Radia 管理者が 1 つまたは複数のクライアント コンピュータを Radia Configuration Server に接続し、指定したアプリケーションが更新または削除できるようになります。Radia Notify では、Radia がクライアント用に管理しているアプリケーションについて、対象のクライアント コンピュータに電子メール通知を送信することもできます。Radia Notify の要件については、『Radia Application Manager ガイド』の「アプリケーションを配布する」を参照してください。

通知機能では、オーディエンス リスト内のクライアント コンピュータと通信します。クライアント コンピュータは、Radia によってアプリケーションがインストールされたときにオーディエンス リストに追加されます。

通知の使用に際しては、以下のような前提条件があります。

- 通知の前に、サブスクライバが Radia Configuration Server に接続していること。通知機能では、Radia データベースの PROFILE ファイルに情報が格納されているクライアントにのみ通知を行います。
- サブスクライバが Radia を使用してアプリケーションを既にインストールしており、指定したアプリケーションのオーディエンス リストに追加されていること。
- (サブスクライバへの通知に電子メールを使用する場合) サブスクライバの電子メール アドレスが、POLICY ドメイン内の USER クラスにある USER インスタンスの EMAIL 変数に格納されていること。
- Radia Configuration Server が通知用に正しく設定されていること。Radia Configuration Server の設定ファイル EDMPROF.DAT に適切な値を設定する方法については、HP OpenView のサポート Web サイトにある『TECHNOTE: Configuring the Radia Configuration Server for E-mail Notification』(ドキュメント ID: OV-ENKB01129) を参照してください。
- [ビュー オプション] ダイアログ ボックスの [通知] タブで、Radia System Explorer によるクライアント用通知コマンドの生成方法を選択していること。アプリケーションをインストールするようサブスクライバに通知する際の UID 値および STARTDIR 値がカスタマイズできます。詳細については、41 ページの「[通知] タブ」を参照してください。

Radia System Explorer で通知アクションを開始する方法には、以下の 2 種類があります。

- **ポリシー (USER、DEPT、および WORKGRP) クラス インスタンスを Application (ZSERVICE) インスタンスにドラッグする方法**
オーディエンス リストに含まれるクライアントはいずれもポリシー クラス インスタンスのメンバーであり、アプリケーション インスタンスによって示されているアプリケーションを Radia でインストールし、Radia で管理しているコンピュータです。
- **アプリケーション インスタンスのショートカット メニューで [Notify 認証] を選択する方法**
オーディエンス リストに含まれるクライアントは、アプリケーション インスタンスによって示されているアプリケーションを Radia でインストールし、Radia で管理しているコンピュータです。

注意

いずれの方法を使用する場合でも、通知を有効にするには、Radia によって既にアプリケーションがクライアント コンピュータにインストールされている必要があります。

通知が開始されると、Radia System Explorer で通知処理を完了するためのダイアログ ボックスが表示されます。どちらの方法で通知を開始しても、表示されるダイアログ ボックスは同じです。

通知イベントを作成するには

1. まだ Radia System Explorer にアクセスしていない場合はアクセスし、**PRIMARY.SOFTWARE.ZSERVICE** クラスに移動します。
2. **[Application (ZSERVICE)]** クラスを展開します。
3. **PRIMARY.POLICY** クラスに移動し、そのインスタンスを展開します。
4. ドラッグ アンド ドロップするか、メニュー コマンドをクリックして、通知アクションを開始します。
 - **ドラッグ アンド ドロップ通知**
ドラッグ アンド ドロップ通知を開始するには、ポリシー インスタンス (ワークグループ、部門、または単独ユーザー) を選択して、アプリケーション インスタンスにドラッグ アンド ドロップします。
 - **メニュー コマンドによる通知**
メニュー コマンドによる通知を開始するには、アプリケーション インスタンスを右クリックします。次のショートカット メニューが表示されます。

インスタンスを新規作成(N)
 インスタンスをコピー(C)
 インスタンスの削除
 インスタンス名の変更(R)
 インスタンスを編集(E)...
 サービスを最適化...
 接続を表示(S)...
サブスクリバに通知(O)
 リフレッシュ(H)
 すべての接続を展開(O)
 1つのレベルを展開(L)

図 5.46 ~ メニュー コマンドによる通知を行う場合のショートカット メニュー

5. **[サブスクリバに通知]** をクリックします。

通知のダイアログ ボックス

通知の開始方法(ドラッグ アンド ドロップかメニュー コマンド選択か)に関係なく、通知は次のプロセスで処理されます。

通知のオーディエンスを作成するために、通知アクションによって、まずアプリケーションのすべてのサブスクライバが **PROFILE** ファイルから収集されます。次のメッセージが表示されます。

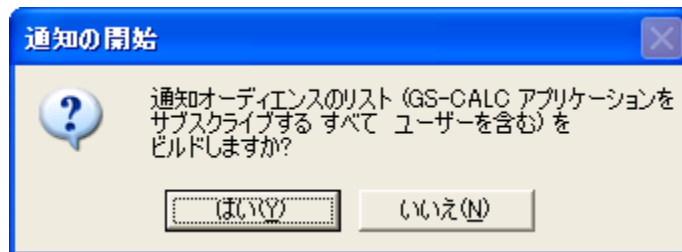


図 5.47 ~ 通知の開始を確認するダイアログ ボックス

6. [はい] をクリックして続行します。

または

[いいえ] をクリックして通知をキャンセルします。

通知アクションによって、**POLICY** ドメインからサブスクライバのセットが取得されます。選択したアプリケーションのサブスクライバがない場合は、次のメッセージが表示されます。

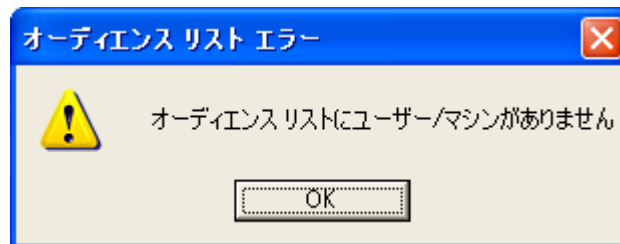


図 5.48 ~ オーディエンス リストのエラー

[Radia Notify Manager] ダイアログ ボックスが表示されます。

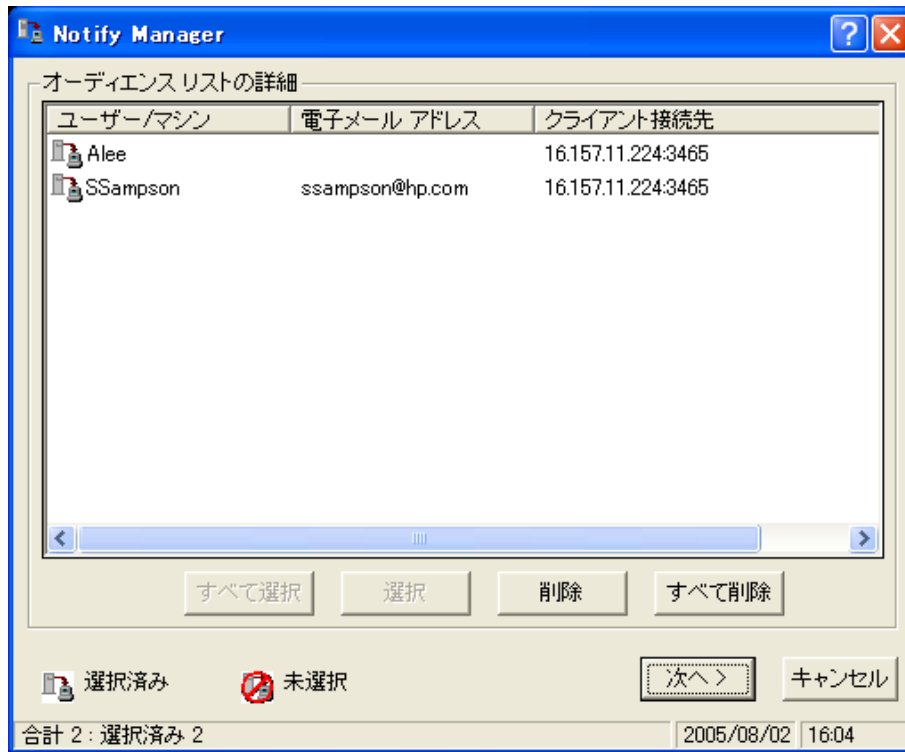


図 5.49 ~ [Radia Notify Manager] ダイアログ ボックス

7. オーディエンス グループ全体に通知する場合は、[すべて選択] をクリックします。これは、オーディエンス リストが最初に表示されたときのデフォルト設定です。

通知オーディエンスをカスタマイズするには、サブスライバに関連する行を選択し、[選択] または [削除] をクリックします。[選択] をクリックする前に、[すべて削除] をクリックすると、オーディエンス リスト内のすべてのクライアント コンピュータの「選択」状態が解除できます。

サブスライバ名の左側のアイコン、およびダイアログ ボックスの左下隅のアイコンは、どのサブスライバが選択されているかを示します。また、ダイアログ ボックスの左下には、オーディエンス リストのクライアント コンピュータの合計数、および現在選択されているクライアント コンピュータの数が表示されます。

8. 通知オーディエンス リストでクライアント コンピュータを選択したら、[次へ] をクリックして続行します。
- ここでは目的の通知アクションのタイプが選択できます。以下のダイアログ ボックスで示すように、3 種類のオプションがあります。

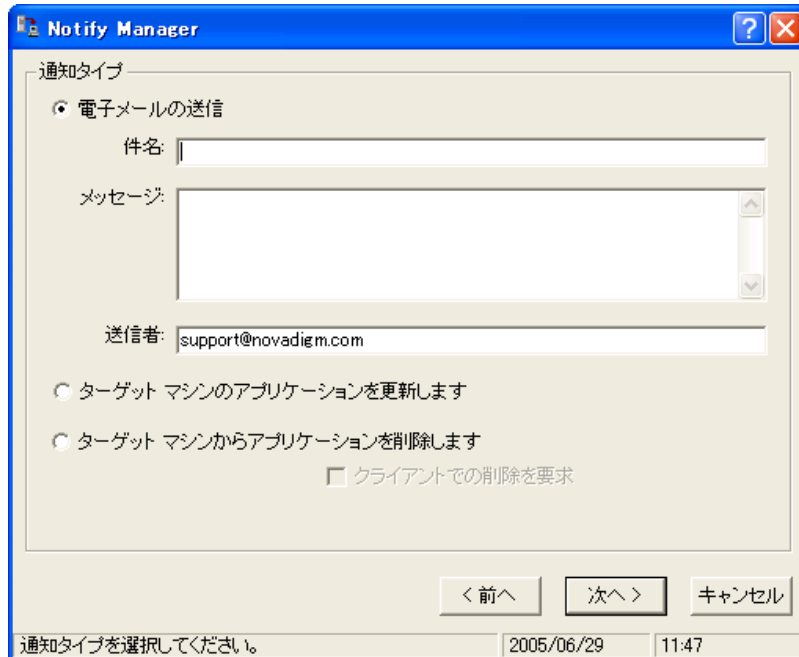


図 5.50 ~ Radia 通知マネージャで指定できる 3 種類の通知オプション

注意

@ マークは、送信者のアドレスの一部として必要です。このマークを入力しなかった場合、エラーが発生します。

- **[電子メールの送信]**
このオプションを選択すると、アプリケーションがどのステータスにあるか、またはそのアプリケーションが使用できるかどうか (必須でない場合) がサブスクライバに通知されます。この機能を使用するには、ユーザー インスタンスにあるサブスクライバの電子メール属性に有効な値が設定されている必要があります。

- **[ターゲット マシンのアプリケーションを更新します]**
このオプションを選択すると、アプリケーションの更新または新規バージョンがインストールされます。この機能を使用するには、更新または新規バージョンが Radia データベースにパブリッシュされている必要があります。
- **[ターゲット マシンからアプリケーションを削除します]**
このオプションを選択すると、指定したデスクトップからアプリケーションが削除されます。指定したアクションは、オーディエンス リストで選択されているすべてのメンバーに適用されます。

通知機能で電子メールを送信する

[電子メールの送信] を選択し、各ボックスに情報を入力すると、ダイアログ ボックスは次のようになります。

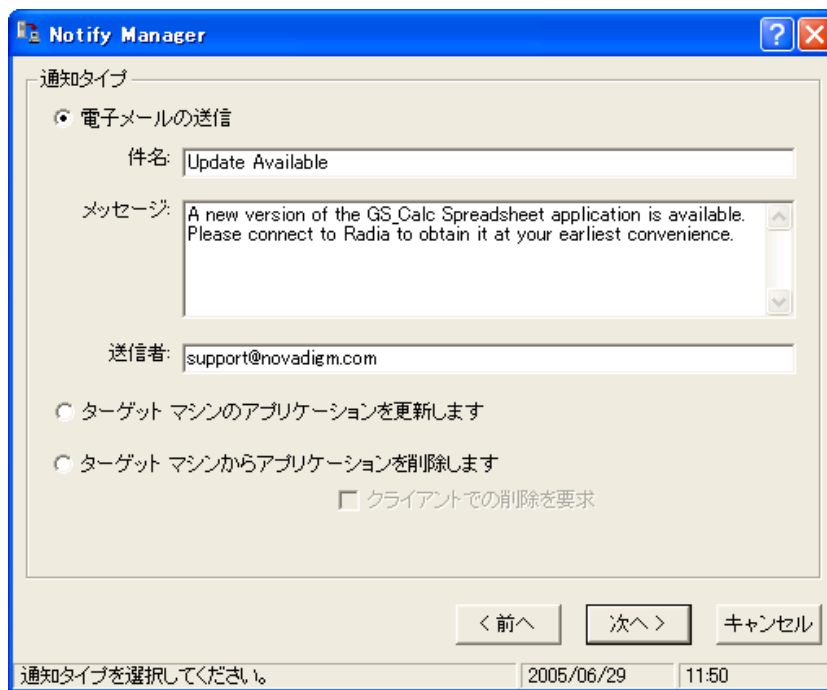


図 5.51 ~ [電子メールの送信] オプションを選択し、各ボックスに情報を入力した状態

通知機能でアプリケーションを更新する

オーディエンス リストで選択されているクライアント コンピュータに対してアプリケーションの更新を実行する場合は、[ターゲット マシンのアプリケーションを更新します] を選択します。

通知機能でアプリケーションを削除する

オーディエンス リストで選択されているクライアント コンピュータからアプリケーションを削除する場合は、[ターゲット マシンからアプリケーションを削除します] を選択します。

このオプションを選択すると、[クライアントでの削除を要求] チェック ボックスが有効になります。通常、オーディエンス リストで選択されているクライアント コンピュータからアプリケーションを削除する場合、エンド ユーザーからの許可は要求されません。そのため、クライアント コンピュータが自動で実行中の場合でも、アプリケーションが削除できます。

エンド ユーザーからの許可を要求する場合は、このチェック ボックスをオンにします。アプリケーションの削除許可を要求するダイアログ ボックスがクライアント コンピュータで表示されます。エンド ユーザーが許可すると、アプリケーションが削除されます。エンド ユーザーが削除を拒否した場合、アプリケーションはそのままクライアント コンピュータに残ります。

- 電子メールの内容の入力が完了したか、または通知タイプを選択したら、[次へ] をクリックして続行します。

[通知の詳細] ダイアログ ボックスが表示されます。

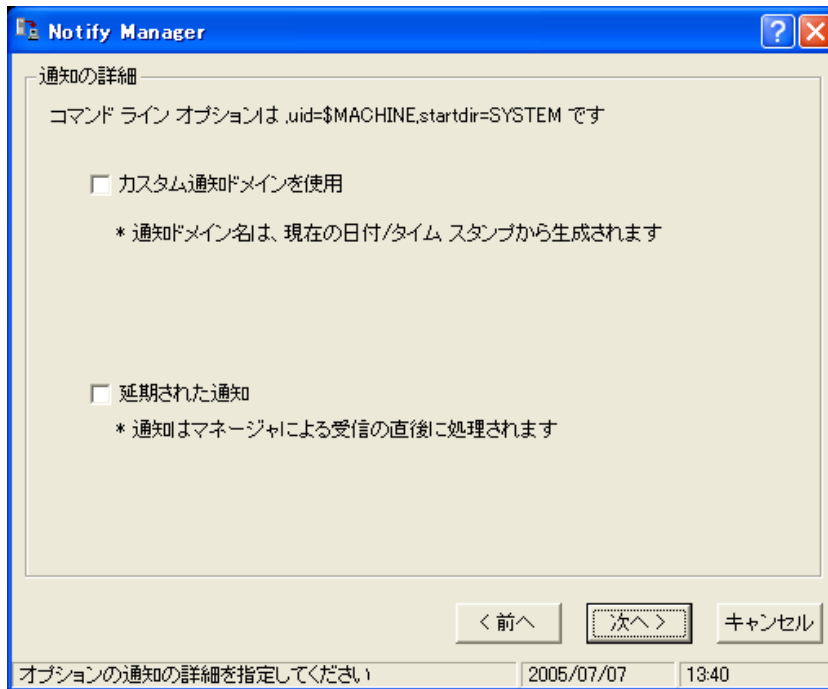


図 5.52 ~ 通知タイプを選択すると表示される [通知の詳細] ダイアログ ボックス

通知の詳細を設定する

[通知の詳細] ダイアログ ボックスの最初の行には、現在の通知コマンドラインで使用する UID および STARTDIR のオプションが表示されています。この 2 つの値は、[System Explorer Options] ダイアログ ボックスの [通知] タブでカスタマイズできます。

注意

通知コマンドの UID または STARTDIR の値を再設定するには、この [Radia Notify Subscriber] ダイアログ ボックスをいったんキャンセルして、[View Options] メニューから UID および STARTDIR の通知オプションを設定し、[Notify Subscribers] の設定を繰り返します。詳細については、41 ページの「[通知] タブ」を参照してください。

[通知の詳細] ダイアログ ボックスでは、現在の通知処理の結果を格納する NOTIFY ファイル内のドメイン名を指定したり、通知処理を行うタイミングを設定したりすることができます。

[通知の詳細] のチェック ボックスは、オフのままでもかまいません。その場合は、以下のデフォルト設定が使用されます。

- 通知ドメイン名 – 現在の日付/時刻のタイム スタンプから生成されます。
- 通知を延期する日付/時刻 – 通知は延期されず、Radia Configuration Server による受信の直後に処理されます。

ドメイン名を指定するには

1. [カスタム通知ドメインを使用] チェック ボックスをオンにします。テキスト ボックスが表示されます。
2. ドメイン名を入力します。

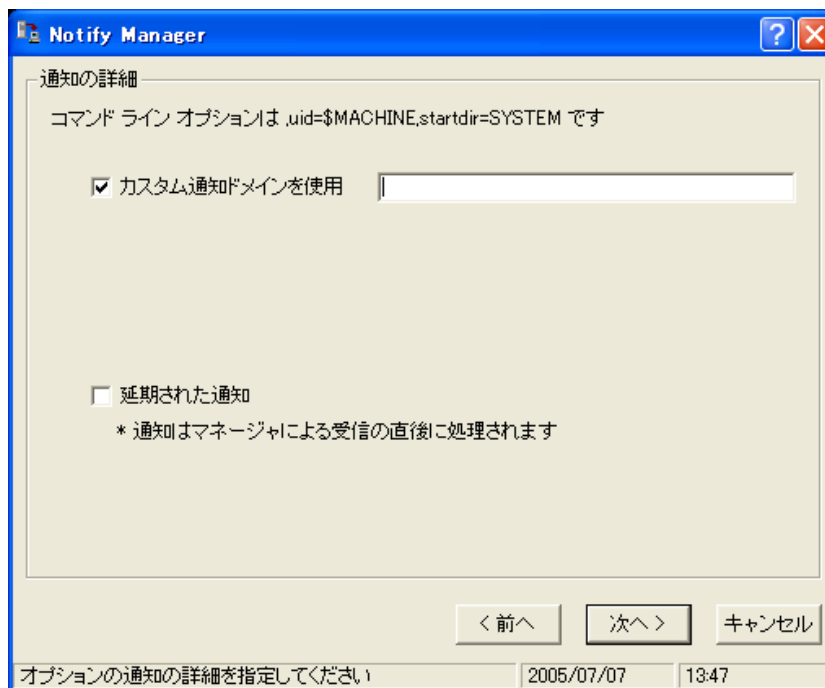


図 5.53 ~ ドメイン名を指定するために [カスタム通知ドメインを使用] チェック ボックスをオンにした状態

通知機能をめったに使用せず、NOTIFY ファイル内のドメイン名によって通知処理の目的を示せばよい場合は、このチェック ボックスをオンにします。詳細については、191 ページの「NOTIFY ファイルの構造」を参照してください。

指定した日付/時刻まで通知を延期するには

1. [通知の詳細] ダイアログ ボックスの [延期された通知] チェック ボックスをオンにします。下の図 5.54 のように、追加コントロールが表示されます。

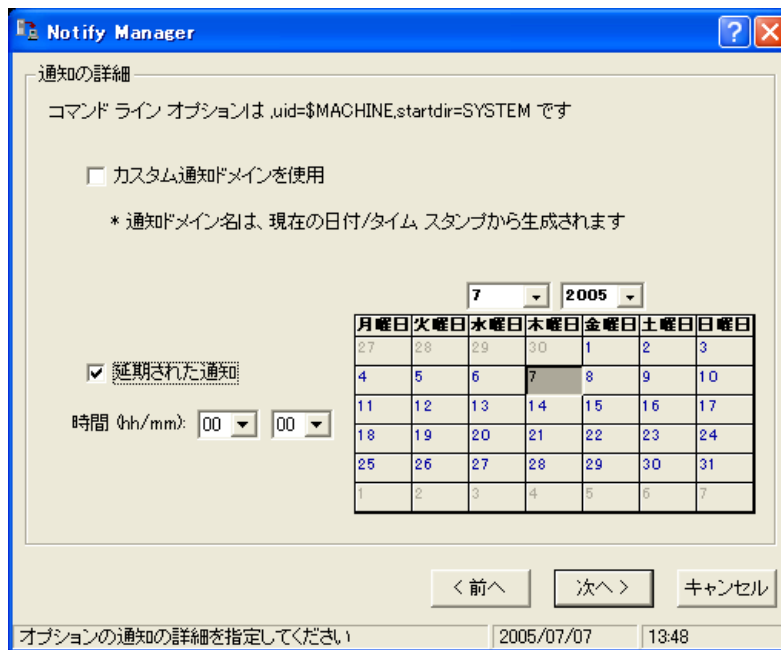


図 5.54 ~ [延期された通知] チェック ボックスをオンにすると表示される日付/時刻コントロール

2. 通知処理を実行する日付と時刻を指定します。通知処理を実行するには、**Radia Configuration Server** が動作している必要があります。**Radia Configuration Server** が動作していない場合、通知処理は、次に **Radia Configuration Server** を起動したときに、指定した日付と時刻に達してから実行されます。

3. [次へ] をクリックします。
[通知の要約] 画面が表示されます (下の図 5.55 を参照)。



図 5.55 ~ 通知のタイプおよび詳細の指定が完了すると表示される通知の概要

4. [完了] をクリックして通知を開始します。
Radia Configuration Server によって通知がスケジュールされ、通知アクションの日付と時刻を基に NOTIFY ファイルにオブジェクトが生成されます。オブジェクト名は、次のダイアログ ボックスで示されているように YYYY_MM_DD_HH_MM_SS という形式になります。

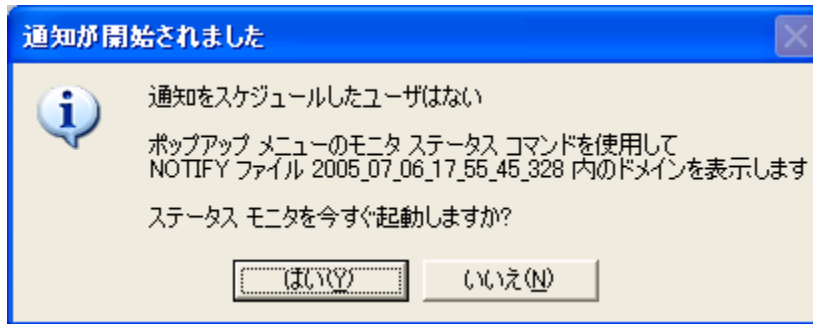


図 5.56 ~ [通知が開始されました] ダイアログ ボックス

- 通知のステータスを表示するには、[はい] をクリックします。
[通知ステータス] ウィンドウが表示されます。

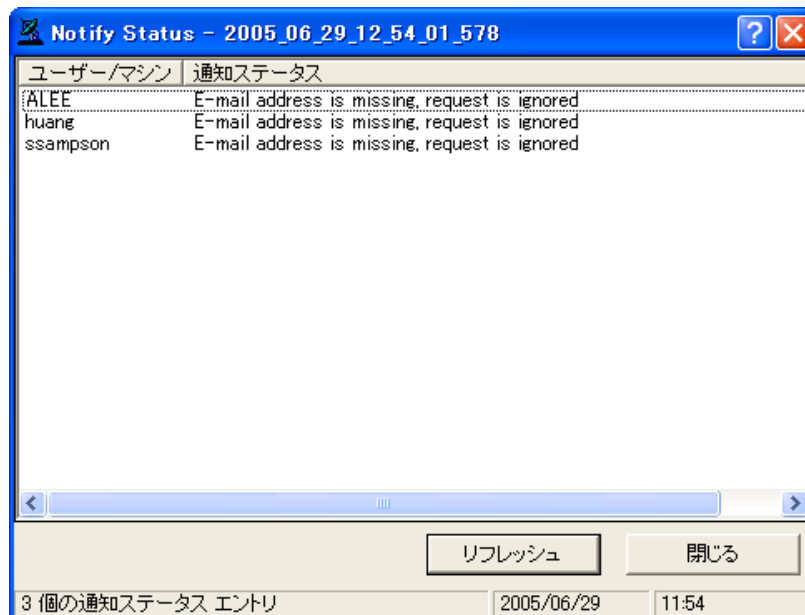


図 5.57 ~ 通知のステータスが表示される [通知ステータス] ダイアログ ボックス

ステータス モニタによって、通知処理の進行状況のスナップショットが提供されます。

6. [リフレッシュ]をクリックしてステータス モニタを更新します。通知が成功する場合も失敗する場合も、オーディエンス リスト内の全メンバーに対する通知処理が完了するまでに時間がかかることがあります。ステータス モニタをリフレッシュすると、最新のステータス情報が表示されます。

表示された情報を基に、すべてのオーディエンスに通知が送信されるよう通知リクエストを修正、再設定、および再生成することができます。通知情報は **Radia Configuration Server** のログに書き込まれるので、そのログでも参照できます。

最初の通知が開始されると、以降の **Radia System Explorer** のツリー ビューには、**NOTIFY** ファイルが **Radia** データベース内の他のファイルと共に表示されます。



図 5.58 ~ 最初の通知後、Radia System Explorer のツリー ビューの [Database] に他のファイルと共に表示される NOTIFY ファイル

Radia System Explorer を使用すると、NOTIFY ファイルのドメイン、クラス、およびインスタンスが確認できます。

7. NOTIFY ファイルのドメインを右クリックします。
次のショートカット メニューが表示されます。

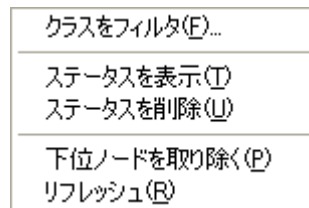


図 5.59 ~ NOTIFY ファイルのショートカット メニュー

- 関連する通知処理のステータスを表示する場合は、[ステータスを表示] をクリックします。
- 通知処理に関連するステータス情報を **Radia** データベースから削除する場合は、[ステータスを削除] をクリックします。

NOTIFY ファイルの構造

NOTIFY ファイルは複数のドメインで構成され、それぞれが 1 つの通知処理となります。ドメイン名の形式は以下のとおりです。

```
YYYY_MM_DD_HH_MM_SS
```

この名前は、通知処理が開始された日付と時刻を示します。190 ページの図 5.58 で開かれている NOTIFY ドメイン名は次のとおりです。

```
1999_01_22_10_01_27
```

このドメインには、1999 年 1 月 22 日の 10:01:27 に開始された通知処理の結果が格納されています。

NOTIFY ファイルのドメインごとに 1 つの NOTIFY クラスがあります。各 NOTIFY クラスに、通知処理のオーディエンス リストで選択されている各メンバーのインスタンスが格納されます。インスタンス名は 8 桁の文字列で、00000001 から順番に、通知処理のオーディエンス リストで選択されているサブスクライバの合計数までの値が付けられます。

各インスタンスには、選択したオーディエンス リストのメンバー、通知処理のタイプ (NTFYCMDL 属性のコマンドラインの req= パラメータで指定されている値)、そのメンバーに関する通知処理の結果 (NTFYMSG 属性と NTFYRC 属性の値) が格納されます。

通知処理を再試行する

通知処理を開始しても、選択したオーディエンス リストの全メンバーに常に問題なく通知されるわけではありません。たとえば、通知の際にサブスクライバがクライアント コンピュータの電源をオフにしていたり、Radia Notify モジュールを実行していなかったり、通常の通信チャンネルでアクセスできない設定にしていたり、クライアント コンピュータが故障していたりすることもあります。通知が失敗すると、NOTIFY ファイルの RETRY ドメインにインスタンスが作成されます。

Radia では、失敗した通知処理に対して自動的に通知が再試行できます。通知を再試行するには、Radia Configuration Server の NVDPROF.DAT ファイル (次の抜粋部分を参照) で、Notify Retry Manager (zrtrymgr モジュール) と共に Radia Configuration Server を起動するよう指定する必要があります。

```
[MGR_ATTACH_LIST]
ATTACH_LIST_SLOTS = 15
RESTART_LIMIT = 7
CMD_LINE=(zutilmgr) RESTART=YES
CMD_LINE=(zrexmgr) RESTART=YES
CMD_LINE=(zsnmpmgr) RESTART=YES
CMD_LINE=(zsmtrmgr) RESTART=YES
CMD_LINE=(zsmtsmgr) RESTART=YES
CMD_LINE=(zntytmgr) RESTART=YES
CMD_LINE=(ztcpmgr) RESTART=YES
CMD_LINE=(zrtrymgr) RESTART=YES
```

通知の再試行を有効にするためにこの行を含めます。

図 5.60 ~ Radia Configuration Server の EDMPROF.DAT ファイルの抜粋

Notify Retry Manager では、NOTIFY ファイルの RETRY ドメインを定期的に検証し、そこで見つかった各インスタンスに対して通知処理を再試行します。再試行のステータスを参照するには、Radia System Explorer で RETRY ドメインの内容を表示します。RETRY ドメインを右クリックし、ショートカットメニューの [ステータスを表示] をクリックします。

Wake-On-LAN クライアントに対するドラッグアンドドロップ通知

Radia では、Wake-On-LAN (WOL) 用に設定されているクライアントコンピュータの電源をリモートでオンにするウェイクアップパケットが送出できます。ドラッグアンドドロップ機能は単純で使いやすく、WOL クライアントを簡単に通知対象にすることができます。Radia System Explorer を使用すると、簡単な操作で通知インスタンスが USER、WRKGRP、DEPT、および SERVICE に接続できます。

ドラッグアンドドロップ機能を使用して WOL 通知用のクライアントを割り当てるには、Radia System Explorer を使用します。Radia System Explorer にアクセスしたら、通知インスタンスを接続対象のインスタンスにドラッグアンドドロップするだけで接続が作成できます。

WOL クライアントをドラッグアンドドロップ通知の対象として設定する方法については、『Radia Application Manager ガイド』を参照してください。Radia Configuration Server の設定ファイルを変更する方法については、『Radia Configuration Server Guide』を参照してください。

フィルタで Radia データベースの表示内容を指定する

配布モデルのサイズが大きくなった場合は、Radia System Explorer で Radia データベースの内容を制限して表示するように設定すると便利です。これにより、ドメイン、クラス、またはインスタンスの検査や編集の際に、ウィンドウ内を上から下までスクロールして探す手間を省くことができます。Radia System Explorer には、ユーザーが定義した条件を基に Radia データベースの表示内容を制限するフィルタ設定機能があります。この機能は、USER クラスや FILE クラスなど、多数のインスタンスがあるクラスに対して特に有効です。

フィルタ仕様は、Radia System Explorer に対してどのドメイン、クラス、インスタンスを表示するかを指示するものです。フィルタは、ドメイン、クラス、またはインスタンスの名前と、指定した条件が一致するかどうかを基に処理されます。

フィルタ仕様には、1 つまたは複数のワイルドカード文字（「*」や「?」）が指定できます。「*」は、フィルタ対象のコンポーネント名にある任意の数の文字を表します。「?」は、フィルタ対象のコンポーネント名にある任意の 1 文字を表します。

次の表では、有効なフィルタ式の例、およびその式によって選択される名前を示します。

表 5.10 ~ 有効なフィルタ式の例

フィルタ仕様	選択される名前
*	ワイルドカードによってすべての文字が一致したと見なされます。現在有効なフィルタがすべて解除されます。
_*	アンダースコアで始まる名前を示します。
_A	プレフィックスがあり、任意のレベルのプレフィックスの後に「A」が続いている名前を示します。
*.?LL	ピリオドでいったん区切られ、その後に任意の 1 文字と「LL」が続いている名前を示します。
-??WORD.HP?	任意の文字列にダッシュが続き、その後に任意の 2 文字と WORD という文字があり、さらに任意の文字列がピリオドまで続き、次に HP 、さらに任意の 1 文字が続く名前を示します。

適用できるフィルタには、Radia System Explorer セッション全体にわたって機能するもの（パーマネントフィルタ）と、現在の [Radia System Explorer] ウィンドウでのみ有効なもの（テンポラリフィルタ）があります。

パーマネント フィルタ

パーマネント フィルタは、現在の Radia System Explorer セッション中であれば、どのウィンドウを開いても適用されます。各クラスには、Radia System Explorer セッションを終了するまで保持される固有のパーマネント フィルタ仕様が指定できます。

パーマネント フィルタの設定または解除は、[フィルタ] ダイアログ ボックスの上部にある [パーマネント フィルタの設定] で行います。

ESB_ というプレフィックスで USER クラスのインスタンスをフィルタするパーマネント フィルタを設定するには

1. ツリー ビューで POLICY ドメインを展開します。POLICY ドメインのクラスが表示されます。
2. ツリー ビューを下にスクロールして、USER クラスを探します。
3. USER クラスを右クリックします。

次のショートカット メニューが表示されます。

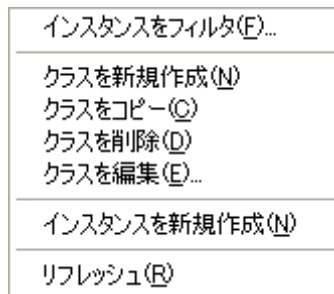
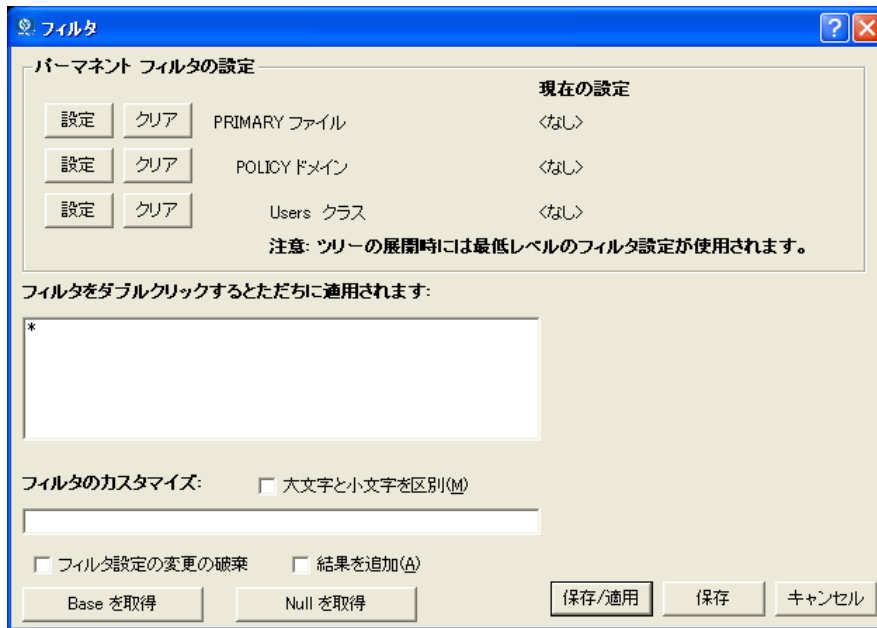
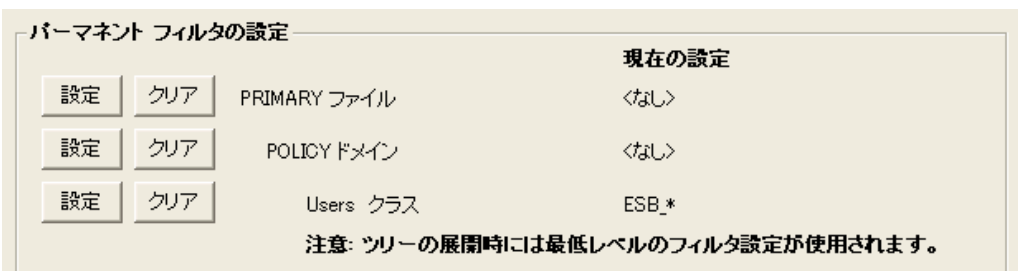


図 5.61 ~ クラスのショートカット メニュー

4. [インスタンスのフィルタ] をクリックして [インスタンスのフィルタ] ダイアログ ボックスを表示します。



5. [フィルタのカスタマイズ] ボックスに「ESB_*」と入力します。
6. [パーマネントフィルタの設定] で、[Users クラス] の横にある [設定] をクリックします。フィルタ仕様が表示されます。



7. フィルタを適用するには、ダイアログ ボックスの下部の **[保存/適用]** をクリックします。
ダイアログ ボックスが閉じ、ツリー ビューはフィルタが適用された状態に更新されます。

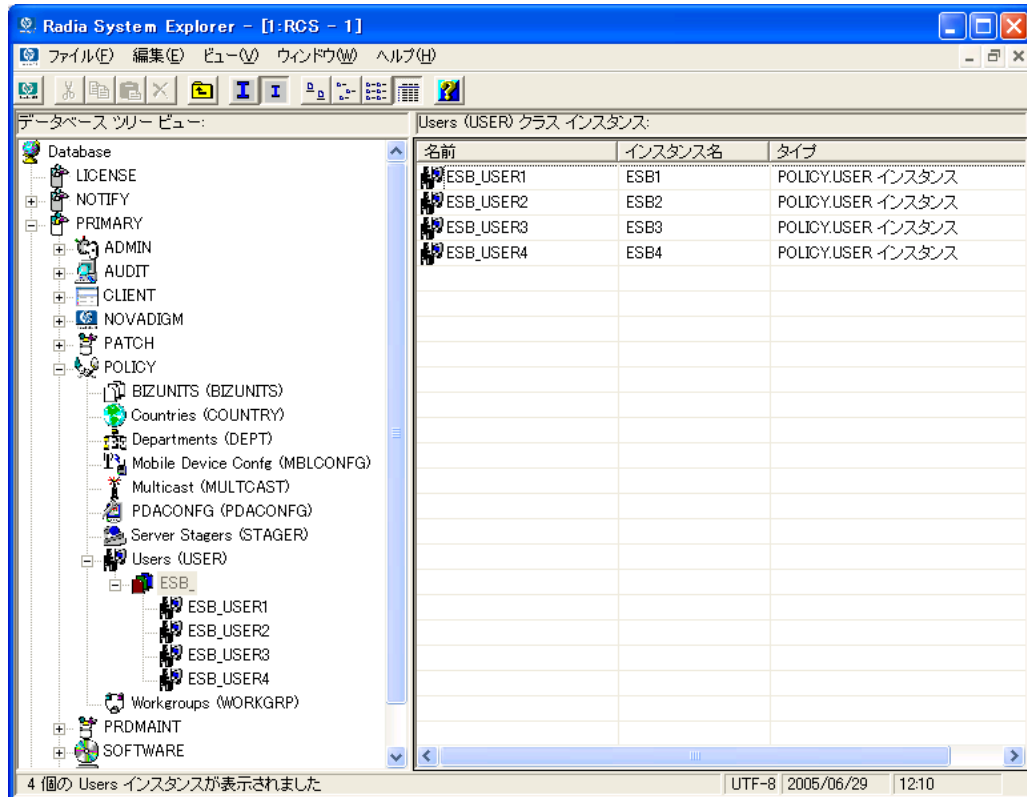


図 5.64 ~ [Users クラス] に適用されたフィルタ

現在の Radia System Explorer セッション内であれば、どのウィンドウを開いても、このフィルタが USER クラスに適用されます。

パーマネント フィルタを削除するには

1. [インスタンスのフィルタ] ダイアログ ボックスで、対応する **[クリア]** ボタンをクリックします。
2. **[保存/適用]** をクリックしてフィルタを削除します。

テンポラリ フィルタ

[インスタンスのフィルタ] ダイアログ ボックスでは、テンポラリ フィルタを適用することもできます。テンポラリ フィルタは、現在の [Radia System Explorer] ウィンドウが開いている間だけ有効になります。テンポラリ フィルタを適用するには、[フィルタのカスタマイズ] フィールドでフィルタ仕様を指定し、[保存/適用] をクリックします。

ESB_ というプレフィックスで USER クラスのインスタンスをフィルタするテンポラリ フィルタを設定するには

1. ツリー ビューで POLICY ドメインを展開します。POLICY ドメインのクラスが表示されます。
2. ツリー ビューを下にスクロールして、USER クラスを探します。
3. USER クラスを右クリックします。
4. ショートカット メニューの [インスタンスのフィルタ] をクリックします。[インスタンスのフィルタ] ダイアログ ボックスが表示されます。
5. [フィルタのカスタマイズ] ボックスに「ESB_*」と入力します。
6. [保存/適用] をクリックします。

テンポラリ フィルタを削除するには

1. フィルタ仕様に「*」を指定します。これはあらゆるドメイン、クラス、インスタンスの名前に一致するので、フィルタを削除することができます。「*」というフィルタ仕様は、高速フィルタリストでよく見かけます。
2. [保存/適用] をクリックしてフィルタを削除します。

ベース インスタンスまたは null インスタンスを表示する

[インスタンスのフィルタ] ダイアログ ボックスでは、クラスのベース インスタンスまたは null インスタンスだけが表示されるように設定することもできます。

ベース インスタンスまたは null インスタンスを表示するには

1. ツリー ビューで POLICY ドメインを展開します。POLICY ドメインのクラスが表示されます。
2. ツリー ビューを下にスクロールして、USER クラスを探します。
3. USER クラスを右クリックします。
4. ショートカット メニューの [インスタンスのフィルタ] をクリックします。[インスタンスのフィルタ] ダイアログ ボックスが表示されます。
5. USER クラスの `_BASE_INSTANCE_` を表示する場合は [Get Base Instance]、USER クラスの `_NULL_INSTANCE_` を表示する場合は [Get Null Instance] をクリックします。
6. [保存/適用] をクリックします。

フィルタ結果を追加する

現在のフィルタ結果の表示内容を保持したまま、追加フィルタを適用することもできます。2つのフィルタ結果を同時に表示するには、195 ページの図5.62 ~ [インスタンスのフィルタ] ダイアログボックスのように、次のフィルタを実行する際に [結果を追加] チェックボックスをオンにします。

コンポーネント クラスのインスタンスをフィルタする

コンポーネント クラスのインスタンス (FILE、DESKTOP、REGISTRY などのクラス of インスタンス) は、接続先の設定 クラスのインスタンスを基にフィルタすることができます。

コンポーネント クラス (この例では、SOFTWARE ドメインの FILE クラス) をフィルタする場合、[インスタンスのフィルタ] ダイアログボックスに、[所有するパッケージ] というスクロールリストが表示されます (下の図 5.65 を参照)。このスクロールリストにパッケージ インスタンスが表示されます。

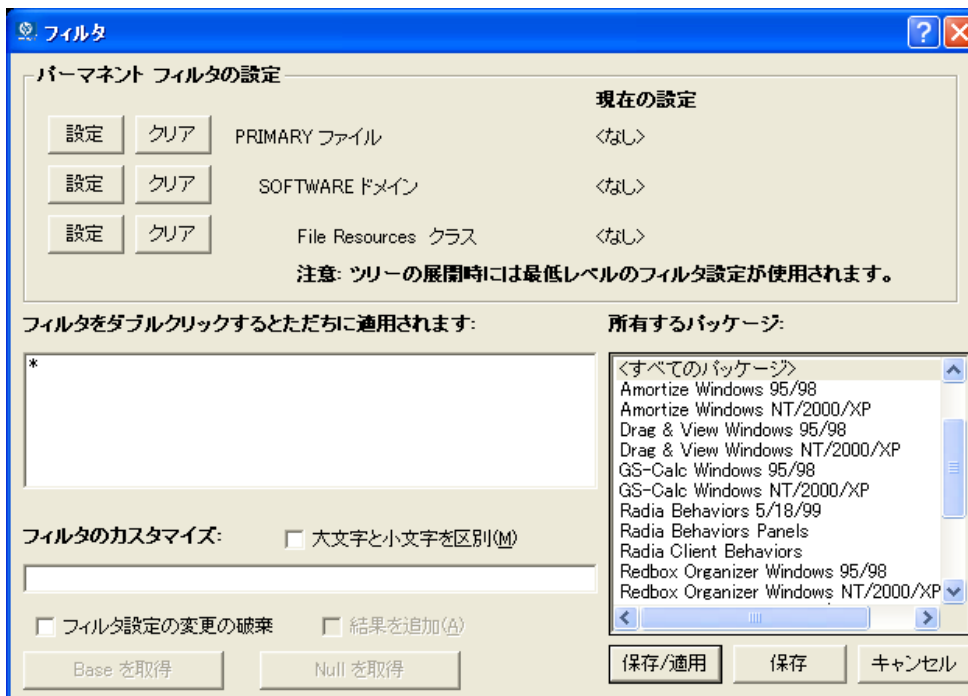


図 5.65 ~ File クラスなどのコンポーネント クラスをフィルタする場合の [インスタンスのフィルタ] ダイアログボックス

FILE インスタンスをフィルタして、特定の **PACKAGE** インスタンスに接続されているものだけを選択するには

- [所有するパッケージ] ボックスの一覧で、所有するパッケージをダブルクリックします。
または
- [所有するパッケージ] ボックスの一覧で、所有するパッケージをクリックし、[保存/適用] をクリックします。

たとえば、[所有するパッケージ] ボックスの一覧で [Amortize Windows 95/98] をクリックし、[保存/適用] をクリックします。[インスタンスのフィルタ] ダイアログ ボックスが閉じ、選択したインスタンスが [Radia System Explorer] ウィンドウのリスト ビューに表示されます。










File Resources (FILE) クラス インスタンス:		
名前	インスタンス名	タイプ
 Amortize Windows 95/98¥Amortize	DABC407A05F8_ADBBF78B	SOFTWARE.FILE インスタンス
 Amortize Windows 95/98¥Amortize¥...	DABC407A05F8_31607370	SOFTWARE.FILE インスタンス
 Amortize Windows 95/98¥Amortize¥...	DABC407A05F8_163AB498	SOFTWARE.FILE インスタンス
 Amortize Windows 95/98¥Amortize¥...	DABC407A05F8_7ACBD39D	SOFTWARE.FILE インスタンス
 Amortize Windows 95/98¥Amortize¥...	DABC407A05F8_46349AC5	SOFTWARE.FILE インスタンス
 Amortize Windows 95/98¥Amortize¥...	DABC407A05F8_A55546ED	SOFTWARE.FILE インスタンス
 Amortize Windows 95/98¥Amortize¥...	DABC407A05F8_7D86B40A	SOFTWARE.FILE インスタンス
 Amortize Windows 95/98¥Amortize¥...	DABC407A05F8_7B4E824A	SOFTWARE.FILE インスタンス
 Amortize Windows 95/98¥Amortize¥...	DABC407A05F8_17BFE54F	SOFTWARE.FILE インスタンス

図 5.66 ~ [所有するパッケージ] ボックスの一覧を基にフィルタされた FILE クラスの全インスタンス

高速フィルタ

[フィルタをダブルクリックするとただちに適用されます] というラベルの下にあるボックスでは、使用頻度が高いと思われるフィルタ仕様が表示されます。このフィルタ仕様は、適切な権限を持つ Radia システムの管理者によってカスタマイズ可能です。

このボックス内にあるフィルタを高速フィルタ仕様といいます。ラベルが示すように、目的のフィルタ仕様をダブルクリックすると、そのフィルタ式がすぐに適用されます。高速フィルタは、現在表示されている [Radia System Explorer] ウィンドウでのみ有効なテンポラリ フィルタです。

高速フィルタをカスタマイズする

高速フィルタを Radia データベースに保存し、必要な接続を確立すると、[インスタンスのフィルタ] ダイアログ ボックスに表示されて選択できる高速フィルタのリストが指定できます。[インスタンスのフィルタ] ダイアログ ボックスを表示したときに、そのダイアログ ボックス固有の高速フィルタのリストが Radia データベースから取得されます。

Radia System Explorer セッションを開始するときに入力したユーザー ID、およびフィルタ対象の Radia コンポーネント (ドメイン、クラス、インスタンス) に基づく解決プロセスで、Radia データベース内の適切なリストが特定されます。205 ページの「解決プロセスについて理解する」を参照してください。

特定のドメインに対する高速フィルタのリストが、PRIMARY ファイル内の ADMIN ドメインにある ZLIST32 クラスのインスタンスから収集されます。ここで、その仕組みを説明します。

RAD_MAST というユーザー ID でログオンしているとします。管理者のユーザー ID に関連付けられている権限およびデフォルト値は、PRIMARY ファイルの ADMIN ドメインに格納されています。ADMINID クラスには、管理者のユーザー ID ごとのインスタンス (ここでは RAD_MAST というインスタンス) があります。

RAD_MAST インスタンスには、ZADMIN クラスのインスタンス (ここでは ZADMIN.MASTER_ADMIN) への接続が設定されています。

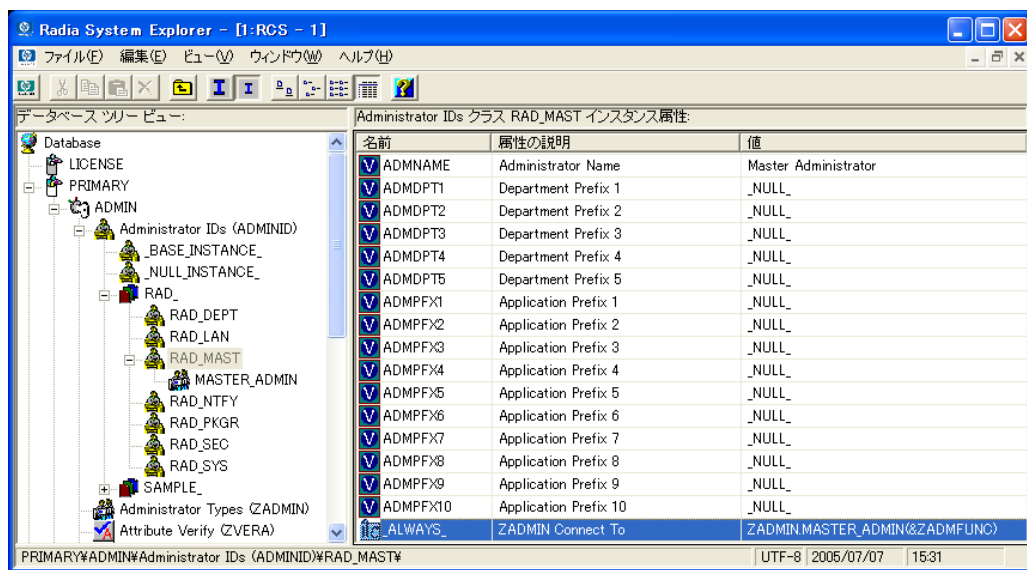


図 5.67 ~ RAD_MAST インスタンスに ZADMIN クラスのインスタンスへの接続が設定されている状態 ([Radia System Explorer] ウィンドウのリストビューで強調表示されている行)

ZADMIN.MASTER_ADMIN への接続属性は、システム メッセージ (&ZADMFUNC) でパラメータを渡します。このシステム メッセージは、次のインスタンスで設定されている接続のうち、どれを実行するかを示します。

ZADMIN.MASTER_ADMIN

特定の解決の実行時に、システム メッセージの値と一致する名前を持つ (または **_ALWAYS_** が指定されている) 接続だけが実際に確立されます。解決を開始する前に、**Radia System Explorer** によってパラメータの値が設定されます。ここでは、[インスタンスのフィルタ] ダイアログ ボックスでインスタンス マスクのリストを取得する必要があるため、**ZADMFUNC** 変数の値 (すなわち、シンボリック置換後はシステム メッセージの値) が **MASKINST** に設定されます。

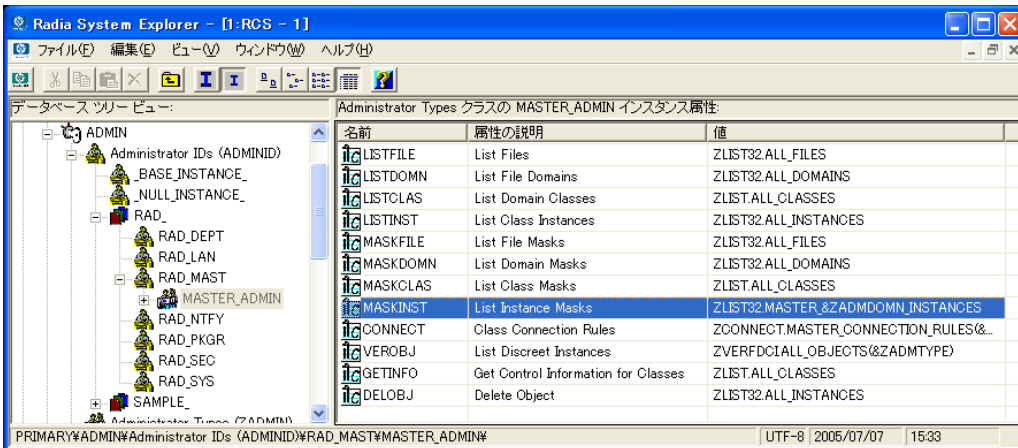


図 5.68 ~ インスタンス マスクのリストを取得するために ZADMFUNC 変数の値が MASKINST に設定されている状態

これによって、フィルタされるドメイン (SYSTEM) を基に ZLIST32 クラスのインスタンスである ZLIST32.MASTER_& ZADMDOMN_INSTANCES への接続が実行されます。ドメインは ZADMDOMN 変数で示され、Radia System Explorer によって動的に設定されます。この変数の値は、管理者がどのクラスを右クリックして [インスタンスのフィルタ] ダイアログ ボックスにアクセスしたかによって決まります。この例では、次のインスタンスに接続されます。

ZLIST32.MASTER_SYSTEM_INSTANCES

解決プロセスによってシンボリック置換が実行された後で、目的のデフォルト高速フィルタ仕様のリストが、このインスタンスに格納されます。

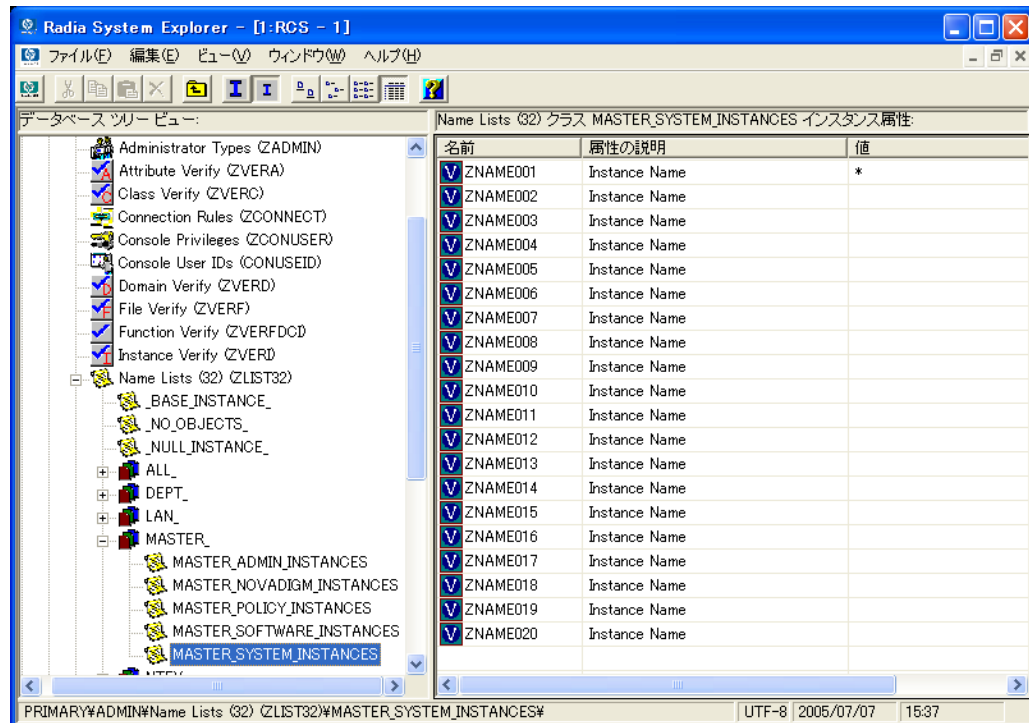


図 5.69 ~ シンボリック変換によって ZLIST32.MASTER_SYSTEM_INSTANCES に対する接続が確立された状態

特定のドメインに対する高速フィルタのリストを変更する場合は、ZLIST32 クラスの対応するインスタンスを編集するだけです。編集内容は、変更した ZLIST32 インスタンスに接続するためのユーザー ID を持つすべての管理者に対して適用されます。

特定の管理者を対象にしたカスタム高速フィルタを設定するには、上記の情報を参考にして、ADMIN.ADMINID クラスにあるその管理者のユーザー ID インスタンスを、目的の高速フィルタ リストを格納する ZLIST32 インスタンスに接続します。

Radia System Explorer を使用してこの変更を行う方法については、73 ページの「インスタンスを追加する」および 76 ページの「インスタンスを編集する」を参照してください。

まとめ

- 新規アプリケーション ウィザードを使用すると、**PACKAGE** クラス インスタンスから **Application (ZSERVICE)** クラス インスタンスを作成する手順が自動化できます。
- バージョン グループ エディタを使用すると、バージョン グループに関連付けられたバージョン インスタンスが作成、編集、および削除できます。バージョン グループ エディタでは、バージョン グループの配布 シーケンスを制御します。
- サービスの最適化では、バイト レベルの差異計算機能とパッチの生成機能を使用して、元のデータを再作成します。
- **Radia** では、製品が機能するためにフル インストールを行う場合、複数のサービス パッケージを必要とする製品が管理できます。製品が他のサービス パッケージを必要としている場合、または他のサービスに依存している場合は、**Radia** サービス グループが作成できます。
- **Radia Notify** を使用すると、**Radia** 管理者が 1 つまたは複数のクライアント コンピュータを **Radia Configuration Server** に接続し、指定したアプリケーションが更新または削除できます。
- **Radia** では、**Wake-On-LAN** 用に設定されているクライアント コンピュータの電源をリモートでオンにするウェイクアップ パケットが送出できます。
- **Radia System Explorer** では、ユーザーが定義した条件を基に **Radia** データベースの表示内容を制限するフィルタを設定したり、フィルタ結果を追加したりすることができます。

解決プロセスについて理解する

この章は以下を目的としています。

- 解決プロセスについて理解する。

解決プロセス

Radia Configuration Server は、*解決プロセス*という手順を使用して、サービス リクエストへの応答として 1 ユニットの作業を完了させます。この作業ユニットは、Radia データベースのコンテンツと、リクエストに含まれるパラメータによって定義されます。つまり、Radia がどのように動作するかは、データベースに格納されている情報と、Radia がアクションを実行するためのリクエストに付随する情報に依存するということです。

たとえば、Radia クライアント接続が Radia Configuration Server にサービス リクエストをサブミットすると、Radia Configuration Server はそれらのリクエストに回答して*解決プロセス*を実行します。

ヒープとオブジェクト

Radia Configuration Server がサービス リクエストを認識するタイミングの 1 つは、オブジェクトを受信したときです。オブジェクトは、レコードやレコードセットを格納するための単純なストレージ構造 (つまり、コンテナ) です。オブジェクトはインスタンス (ヒープ) で構成されています。インスタンスとは、特定の動作をする変数のセットです。単一のインスタンスで構成されるオブジェクト (ZMASTER オブジェクトなど) もあれば、複数のインスタンスで構成されるオブジェクト (FILE オブジェクトなど) もあります。

Radia Client Explorer を使用すると、デスクトップ オブジェクトを検査したり修正したりすることができます。

Radia System Explorer にアクセスするには

- [スタート] ボタンをクリックし、[プログラム] をポイントします。次に、[Radia Administrator Workstation] をポイントし、メニューから [Radia Client Explorer] をクリックします。

Radia Client Explorer が表示されます。

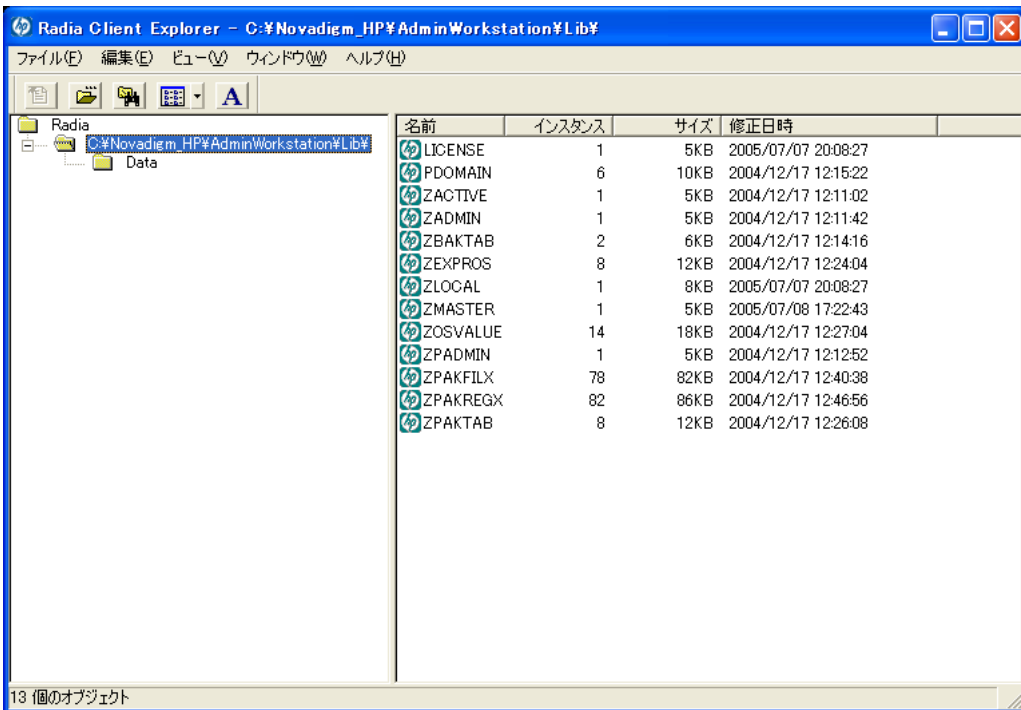


図 6.1 ~ Radia Client Explorer のリスト ビューで、インスタンス名、ヒープまたはインスタンスの数、インスタンスのサイズ、インスタンスの最終修正日時を表示した状態

上の図 6.1 は、Radia Client Explorer で最上位ノードを選択した状態を示しています。Radia Client Explorer は、オブジェクトの表示や編集に使用します。Radia Administrator Workstation がインストールされたマシンを使用しているユーザーは、Radia Client Explorer を診断ユーティリティとして使用し、デスクトップ上のローカル オブジェクトを表示したり、オブジェクトを編集したり、新しいオブジェクトを作成したりすることができます。

解決プロセスについて理解する

インスタンスを表示するには、そのインスタンスをダブルクリックします。インスタンスの情報は、下の図 6.2 のように表示されます。

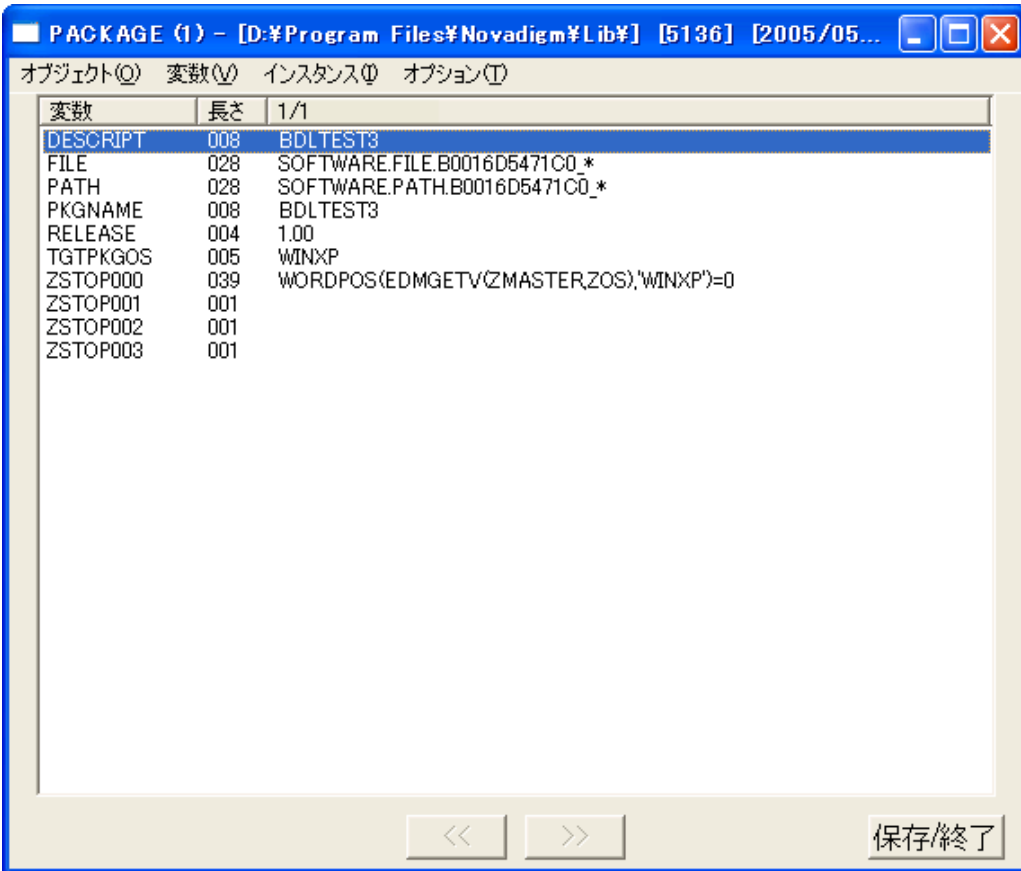


図 6.2 ~ インスタンスをダブルクリックしてオブジェクト内部を表示した状態

解決プロセスでは、各クライアントに格納されているオブジェクトを使用して、それらが要求ステートと一致するようにします。要求ステートとは、Radia が特定のエンドユーザーのコンピュータで管理するコンテンツを具現化したものです。Radia データベースには、各エンドユーザーのコンピュータの要求ステートを表すモデルが格納されています。この要求ステートモデルは、Radia System Explorer を使用して作成および管理します。

解決プロセスの開始

既に説明したように、解決プロセスはクライアント コンピュータが **Radia** に接続した瞬間に開始されます。クライアント接続の実行時には、最初のオブジェクトとして **ZMASTER** オブジェクトが **Radia Configuration Server** に送信されます。**ZMASTER** オブジェクトには、**Radia** が動作するために必要なクライアント コンピュータに関する情報 (サブスライバの **ID**、クライアント コンピュータの **IP** アドレスなど) が格納されています。

Radia Configuration Server は、**ZMASTER** オブジェクトを **グローバル メモリ** という一時的な格納領域に格納します。解決プロセスでは、グローバル メモリ内のオブジェクトに変数属性を定義し、グローバル メモリ内でそれらの属性の現在値を管理します。変数属性の現在値とは、解決プロセスにおいてその属性が最後に参照されたときに保持していた値のことです。

ZMASTER がグローバル メモリに格納されると、**ZMASTER** の **Process** インスタンスが作成されます。これがプロセスのエントリー ポイントです。ロケーションは **SYSTEM.PROCESS.ZMASTER** となります。

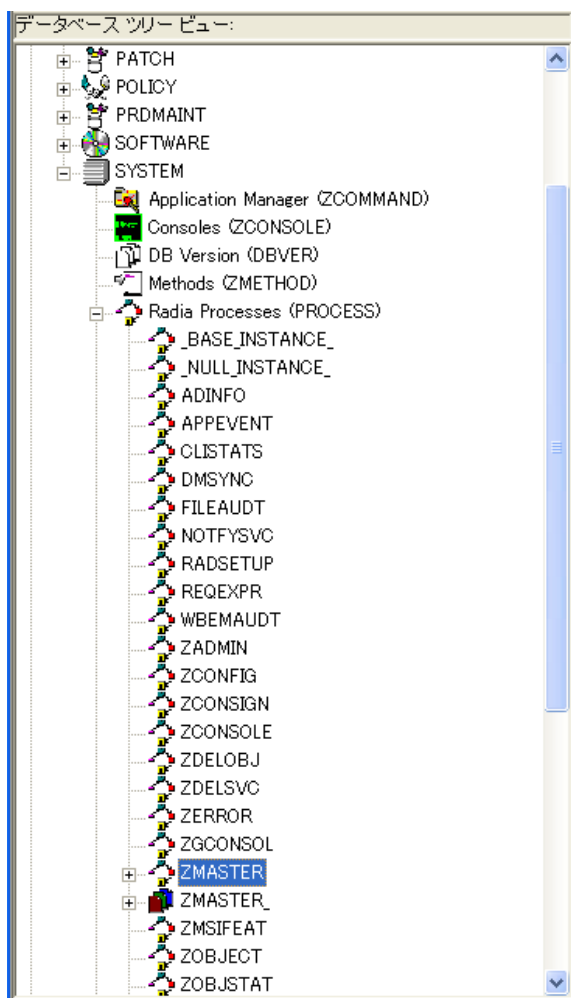


図 6.3 ~ Radia データベースでの ZMASTER オブジェクトの格納場所

Radia Configuration Server は、SYSTEM.PROCESS.ZMASTER の各属性を読み込み、その結果として以下の処理を実行します。

- 変数値の設定。
- 式の評価。
- メソッドの実行。
- 他のインスタンスへの接続。

別のインスタンスへの接続がある場合は、既に接続されているインスタンスが先に処理されます。その後、参照しているインスタンスの接続属性の次の属性で解決プロセスが再開します。

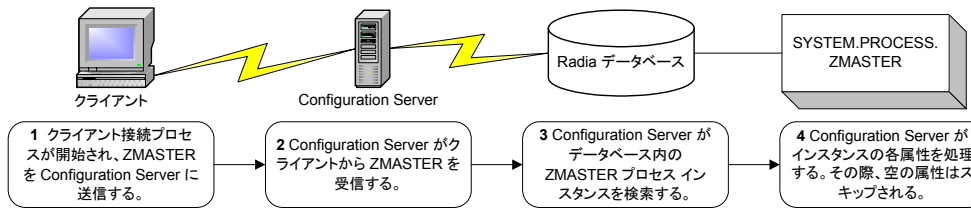


図 6.4 ~ Radia Configuration Server による解決の実行

解決の例

ここでは、クライアントの ZMASTER オブジェクトを解決するプロセスを、例に基づいて説明します。

下の図 6.5 では、最初の接続インスタンスが POLICY.USER.&(ZMASTER.ZUSERID) にリンクしています。POLICY.USER.&(ZMASTER.ZUSERID) の処理後、解決プロセスは PRIMARY.SYSTEM.PROCESS.ZMASTER に戻り、次の属性 (SYSTEM.ZMETHOD.PUTPROF_ZMASTER への接続インスタンス) を処理します。

Radia Processes クラス ZMASTER インスタンス属性:		
名前	属性の説明	値
<input type="checkbox"/> _ALWAYS_	Method	
<input type="checkbox"/> _ALWAYS_	Method	
<input type="checkbox"/> _ALWAYS_	Connect To	
<input checked="" type="checkbox"/> _ALWAYS_	Connect To	POLICY.USER.&(ZMASTER.ZUSERID)
<input type="checkbox"/> _ALWAYS_	Method	SYSTEM.ZMETHOD.PUTPROF_ZMASTER
<input type="checkbox"/> _ALWAYS_	Method	SYSTEM.ZMETHOD.PUTPROF_ZCONFIG
<input type="checkbox"/> _ALWAYS_	Method	
<input type="checkbox"/> _ALWAYS_	Method	
<input type="checkbox"/> _ALWAYS_	Method	
<input type="checkbox"/> _ALWAYS_	Method	
<input checked="" type="checkbox"/> DESCRIPT	Process Description	Processing Client Request for &ZCUROBJ
<input checked="" type="checkbox"/> ZMAXOKRC	Max acceptable method Return Code	008

図 6.5 ~ PRIMARY.SYSTEM.PROCESS.ZMASTER インスタンス

解決プロセスとシンボリック置換

解決の実行中、Radia Configuration Server はシンボリック置換を実行して値の設定および他のインスタンスへの接続を行います。シンボリック置換では、1 つ目の変数の参照を 2 つ目の変数の値で置換します。

シンボリック置換で処理する参照は、先頭のアンパサンドを使用して指定します。

たとえば、SYSTEM.PROCESS.ZMASTER には POLICY.USER.&(ZMASTER.ZUSERID) への常時接続があります。Radia Configuration Server は、グローバルメモリにある ZMASTER オブジェクトの ZUSERID の値で参照を置換します。図 6.6 では、ZUSERID の値は ALEE です。解決プロセスは、POLICY.USER.ALEE に接続して ALEE の解決を開始します。

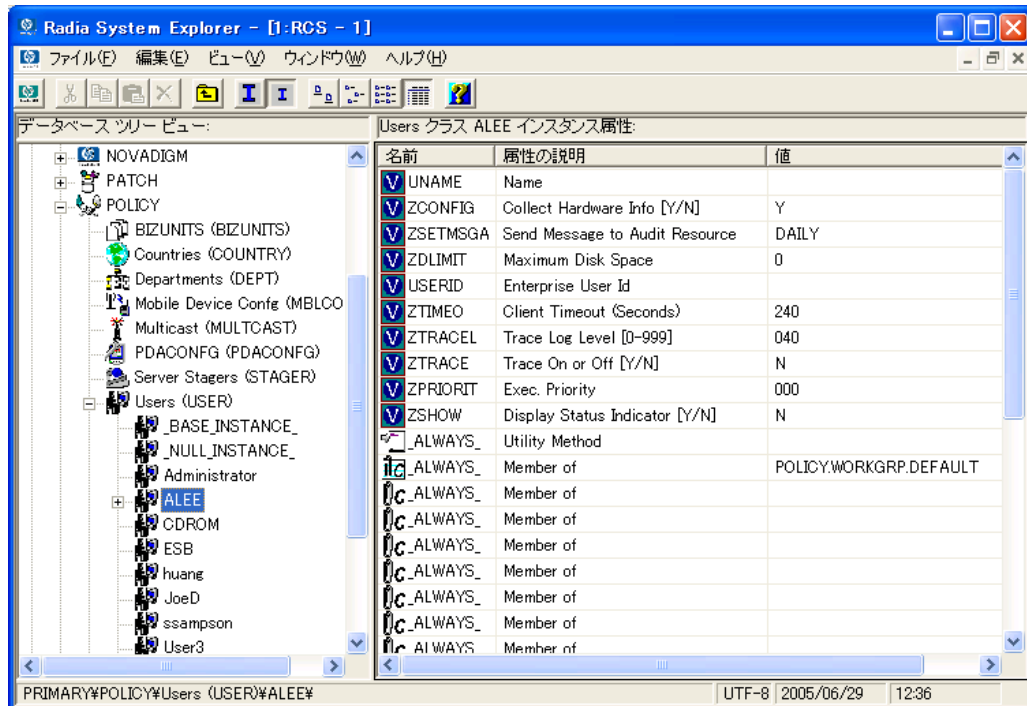


図 6.6 ~ POLICY.USER.ALEE インスタンス

図 6.6 で、いくつかの変数の設定後で最初に接続する属性は **SOFTWARE.ZSERVICE.AMORTIZE** です。実際の実装では、**POLICY** インスタンスの接続先は、サービスに接続するワークグループや部門になります。

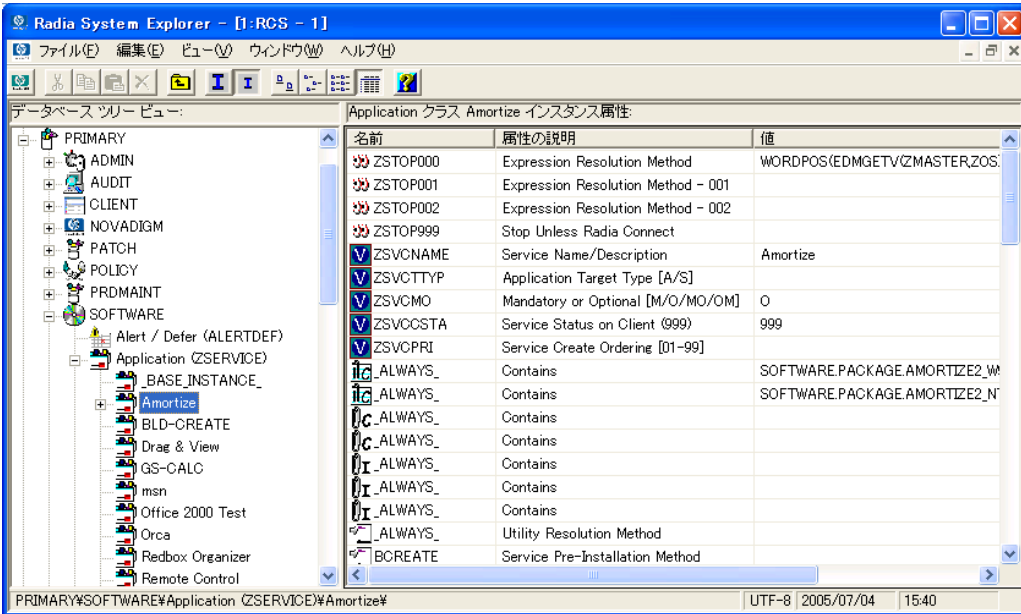


図 6.7 ~ ZSERVICE.AMORTIZE インスタンス

続いて、上の図 6.7 に示すように、**USER** の最初の接続で指定されているサービス インスタンスが処理されます。**Amortize** サービスの解決は、**ZSTOP** 式変数で開始されます。この式変数には、式が **"TRUE"** と評価されると現在のインスタンスの解決を停止する文が格納されています。式は、変数データに基づいて、特定の解決に取り込まれる代替パスを許可します。ここでは、クライアントコンピュータのオペレーティング システムが **Amortize** ソフトウェアに対し許可されていることが確認されます。クライアントコンピュータのオペレーティング システムが **Windows 95** または **Windows 98** の場合、解決プロセスはこのインスタンスで、ファイルインスタンス、レジストリ エントリ、パスインスタンス、およびショートカットへの接続を続行します。その他のオペレーティング システムの場合、解決は **SOFTWARE.ZSERVICE.AMORTIZE** に戻って次の接続インスタンスに接続します。

最終的に、解決プロセスは **User** インスタンスに戻り、このインスタンスを解決してからプロセスのエントリ ポイント **SYSTEM.ZPROCESS.ZMASTER** に戻ります。212 ページの図 6.6 を見ると、次の属性の接続先は **PUTPROF_ZMASTER** メソッドであることがわかります。メソッドとは、特定のパラメータに基づき関数を実行するプログラムです。

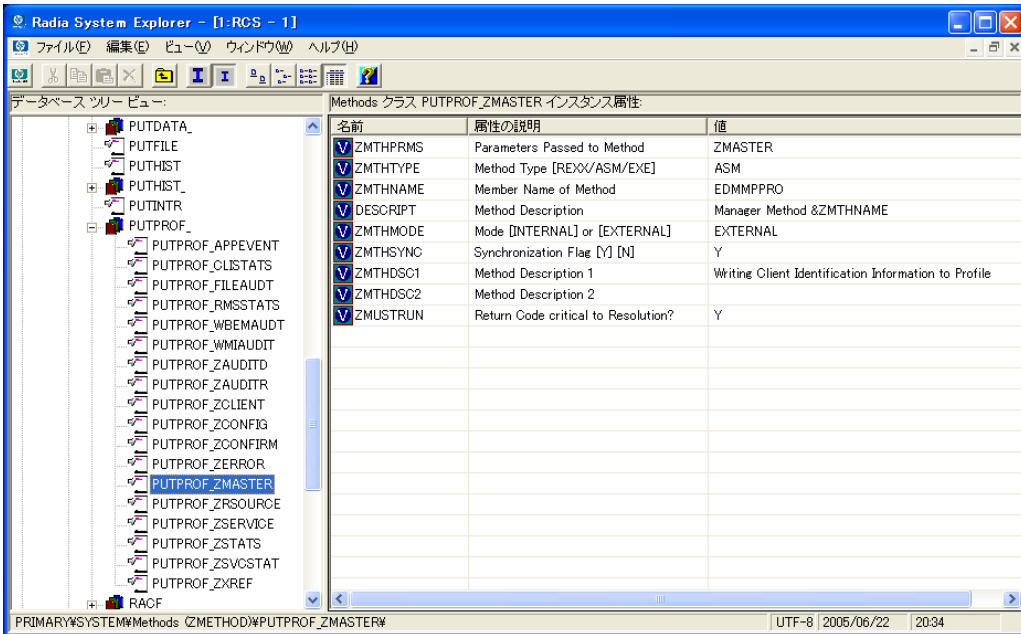


図 6.8 ~ ZMETHOD.PUTPROF_ZMASTER インスタンス

Radia Configuration Server は **EDMMPPRO** メソッドを実行し、パラメータとして **ZMASTER** を渡します。この結果、グローバルメモリ内の **ZMASTER** オブジェクトの内容が、Radia データベースの **PROFILE** ファイルに書き込まれます。

SYSTEM.PROCESS.ZMASTER インスタンスのすべての属性の処理が完了すると、解決は終了します。

まとめ

- **Radia Configuration Server** は、*解決プロセス*という手順を使用して、サービス リクエストへの応答として 1 ユニットの作業を完了させます。
- **Radia Configuration Server** がサービス リクエストを認識するタイミングの 1 つは、オブジェクトを受信したときです。
- **Radia Client Explorer** は、オブジェクトの表示や編集に使用できる 2 つのツールのうちの 1 つです。
- 解決プロセスでは、各クライアントに格納されているオブジェクトを使用して、それらが要求ステートと一致するようにします。
- クライアント接続の実行時には、最初のオブジェクトとして **ZMASTER** オブジェクトが **Radia Configuration Server** に送信されます。
- 解決の実行中、**Radia Configuration Server** はシンボリック置換を実行して値の設定および他のインスタンスへの接続を行います。

Radia データベース内の接続規則を管理する

この章は以下を目的としています。

- 接続規則について理解する。
- 接続規則を有効にする方法を習得する。

はじめに

Radia System Explorer では、クラスのインスタンス同士がドラッグ アンド ドロップで簡単かつ確実に接続できます。接続規則を保持するこれらの接続は、Radia データベースに格納されます。

接続規則の概要

追加したクラスをドラッグ アンド ドロップで操作するには、新しいクラスが従うべき規則を確立する必要があります。こうした接続規則は、PRIMARY.ADMIN ドメインの **Connection Rules (ZCONNECT)** クラスの **MASTER_CONNECTION_RULES** インスタンスに格納されます。

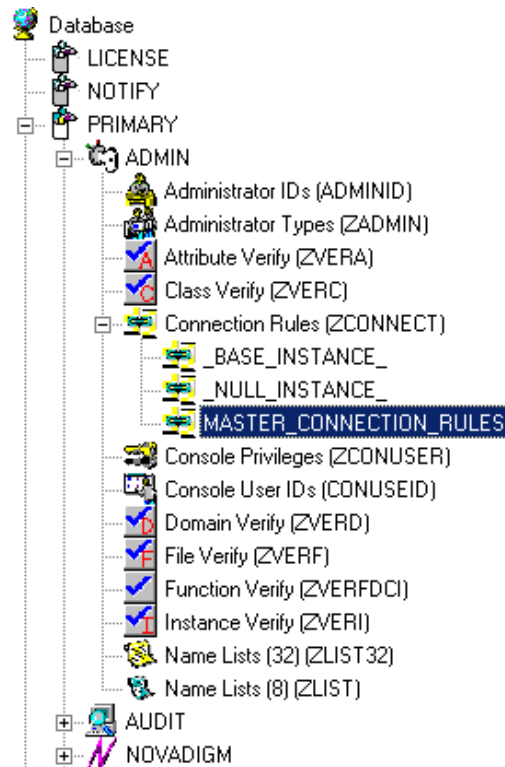


図 7.1 ~ PRIMARY ファイルの ADMIN ドメインで Connection Rules (ZCONNECT) クラスの MASTER_CONNECTION_RULES インスタンスを選択した状態

ZCONNECT クラスには接続規則が收容され、**Name List (ZLIST)** クラスにはすべてのクラスのすべての規則が格納されます。接続規則を作成するには、まず ZLIST クラスに規則を作成する必要があります。次に、その規則を ZCONNECT クラスに追加します。

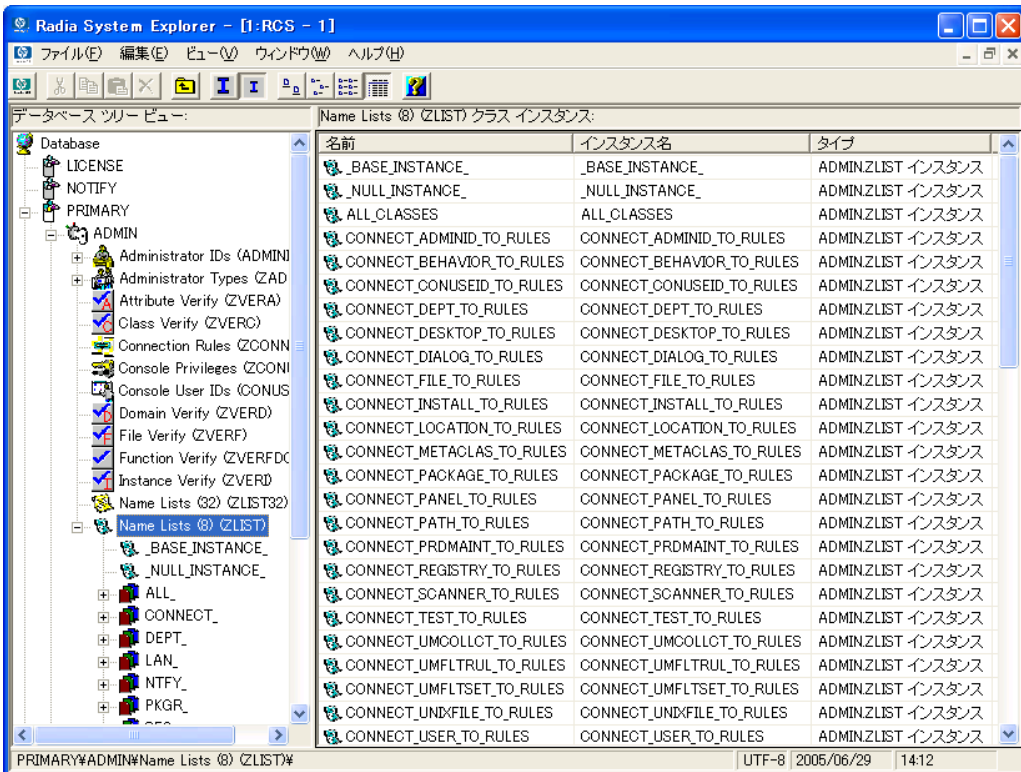


図 7.2 ~ ADMIN ドメインの Name Lists (ZLIST) クラス

Radia System Explorer では、これらの規則に基づいて [接続を表示] ダイアログ ボックスのクラスリストが設定され、ドラッグアンドドロップ接続が制御されます。

ここでは、USER クラスに対して確立された接続規則を例に説明します。まず、下の図 7.3 にある ZLIST.CONNECT_USER_TO_RULES インスタンスを見てください。

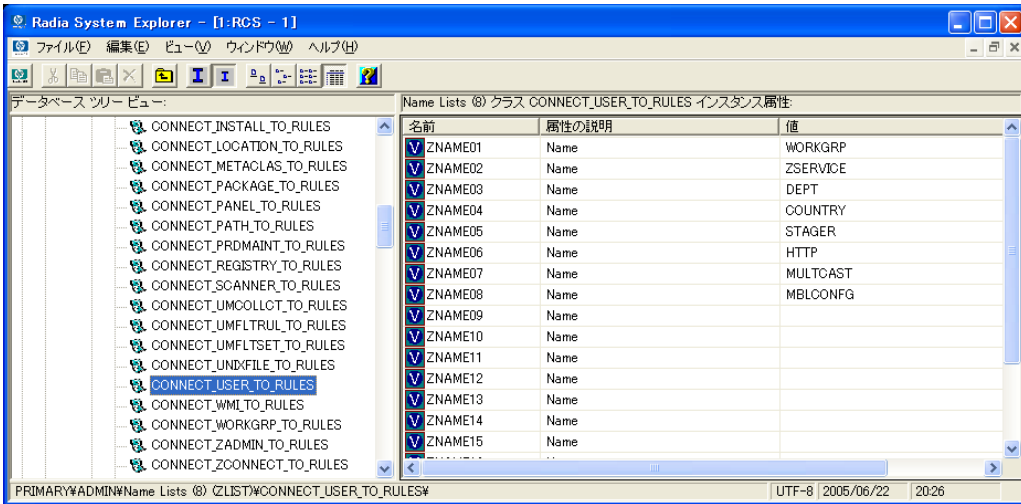


図 7.3 ~ ZLIST.CONNECT_USER_TO_RULES インスタンス

この図に示した USER クラスのインスタンスには、以下のクラスへの接続が格納できます。

WORKGRP	ZSERVICE	DEPT	COUNTRY
STAGER	HTTP	MULTICAST	

ZLIST インスタンスには、ZLIST インスタンスによって表されるクラス (この場合は USER) から接続するクラスのリスト (最大で 20 クラス) が格納できます。このリストを編集して、他のクラスを追加したり、接続規則からクラスを削除したりすることができます。Radia データベース内のクラスから接続できるようにするクラスが 20 を超える場合は、ZLIST クラス テンプレートを編集して、必要な数の ZNAME nn 変数が追加できます。

接続の規則がいったん Name List (ZLIST) クラスで確立されると、その接続タイプが作成されます。ここではドラッグ アンド ドロップの接続規則を作成しているので、Connection Rules (ZCONNECT) クラスにクラス変数を追加します。次に、規則変数を編集して、USER クラスに対して確立できる接続のタイプを定義します。

ここまでの手順を完了すると、新しいクラスに対してドラッグアンドドロップで接続が確立できるようになります。図 7.4 は、USER クラスが格納されている POLICY ドメインの接続可能クラスを示しています。

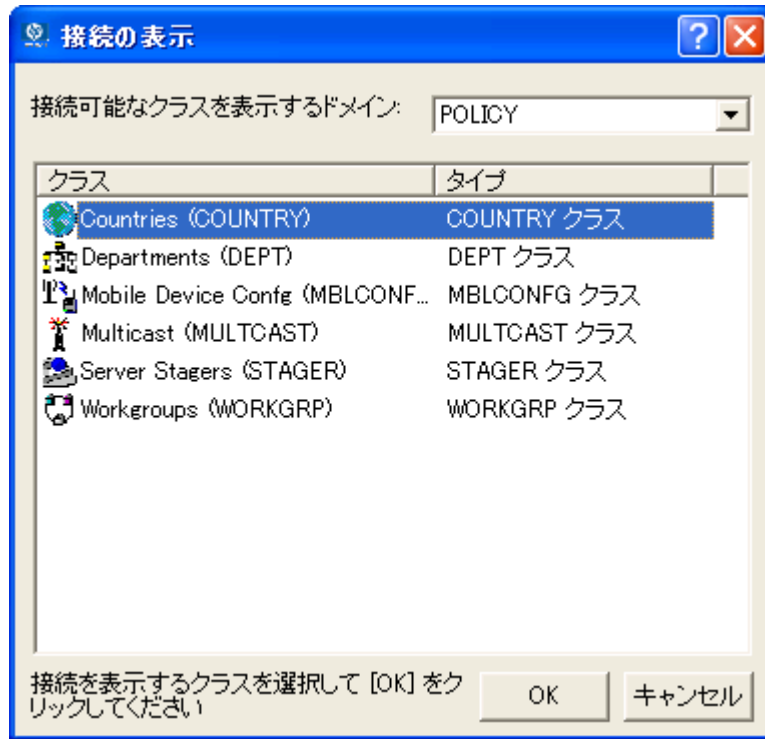


図 7.4 ~ POLICY ドメインの接続可能クラス

新たに追加したクラスで接続を有効にする

他のクラスへの接続が格納できる新しいクラスを Radia データベースに追加した場合は、次の手順を実行する必要があります。

- 新しいクラスを表すインスタンスを **ZLIST** クラス内に作成します。
- 新しい **ZLIST** クラス インスタンスを設定して、接続規則を使用できるようにします。
- **ZCONNECT** クラス テンプレートに新しいクラスを追加します。
- **MASTER_CONNECTION_RULES** で、新しいクラスの変数を設定します。

次の手順では、例として **TEST** という新しいクラスの接続を追加する方法を説明します。

まず、**CONNECT_newclass_TO_RULES** という **ZLIST** インスタンスを作成します。*newclass* には、新たに追加するクラスの名前を指定します。

1. まだ Radia System Explorer にアクセスしていない場合はアクセスし、**PRIMARY.ADMIN.Name Lists (ZLIST)** クラスに移動します。
2. **ZLIST** を右クリックし、[インスタンスを新規作成] をクリックします。ここで、新しいインスタンスの名前を入力します。ここでは、例として **CONNECT_TEST_TO RULES** という新しいクラスを作成することにします。

下の図 7.5 に、ZLIST クラスに CONNECT_TEST_TO_RULES を追加した状態を示します。

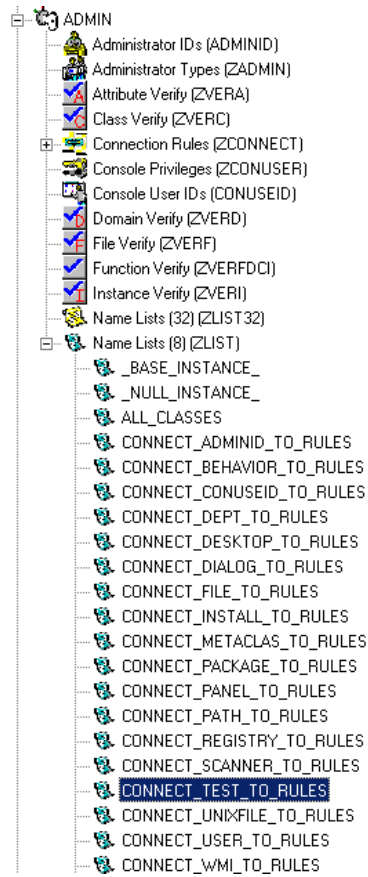


図 7.5 ~ ZLIST クラスの CONNECT_TEST_TO_RULES

- 次に、CONNECT_newclass_TO_RULES インスタンスを編集して、新たに追加したクラスに格納する接続の接続先となるクラスの名前を、それぞれの ZNAME nn 変数に設定します。
ここでは、例として ZSERVICE クラスおよび WORKGRP クラスに接続できるように ZNAME01 変数を設定します。

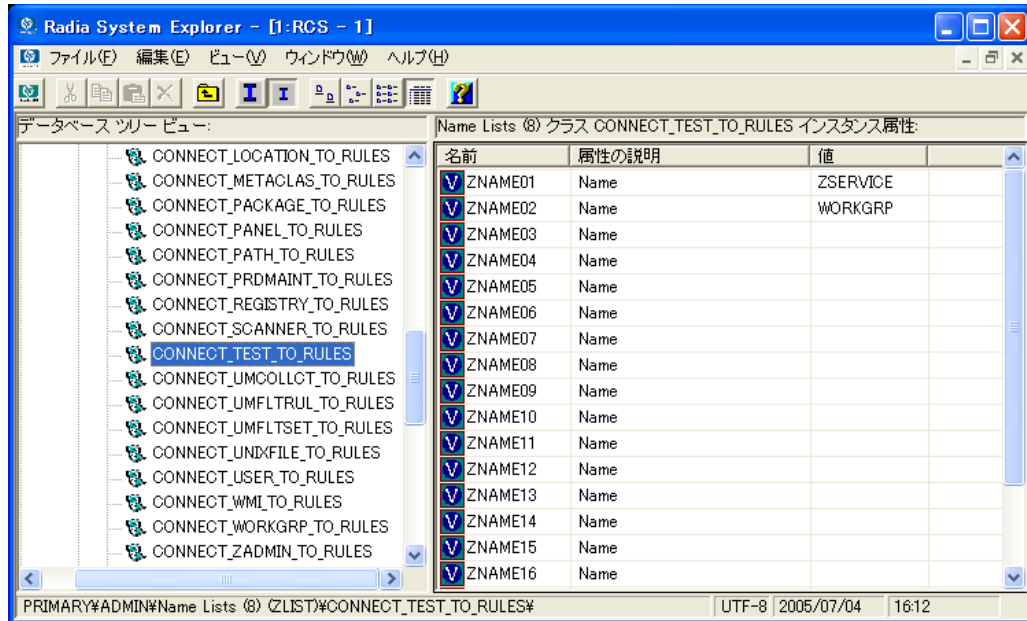


図 7.6 ~ 作成した TEST クラスの接続可能クラス

次に、Connection Rules (ZCONNECT) クラスに接続規則変数を追加する必要があります。

- PRIMARY.ADMIN.ZCONNECT クラスに移動します。
- ZCONNECT クラスを右クリックし、コンテキストメニューで [クラスを編集] をクリックします。

6. 新しいクラス変数を、ZCONNECT クラスのクラス テンプレートに追加します。

この手順例では、ZCONNECT クラスに TEST 属性を追加しています。属性の長さは 50、属性の説明は "Test Connect List" です。

クラスの編集については、62 ページの「クラスを編集する」を参照してください。

注意

ZCONNECT クラスに属性を追加する際は、属性タイプを必ず [クラス接続] に変更してください。下の図 7.7 を参照してください。



図 7.7 ~ Connection Rules クラスの変数のリストに新しいクラスの名前を追加した状態

クラス テンプレートに新しい属性を追加したら、ZCONNECT.MASTER_CONNECTION_RULES インスタンスで新しい属性の値を設定する必要があります。

- リストビュー(画面の右側)で、新しいインスタンスを見つけます。新たに追加した変数の値を `ZLIST.CONNECT_newclass_TO_RULES` に設定します。*newclass* は、新たに追加したクラスの名前です。

インスタンスの編集方法については、76 ページの「インスタンスを編集する」を参照してください。

下の図 7.8 は、TEST 属性の値を設定した状態を示しています。

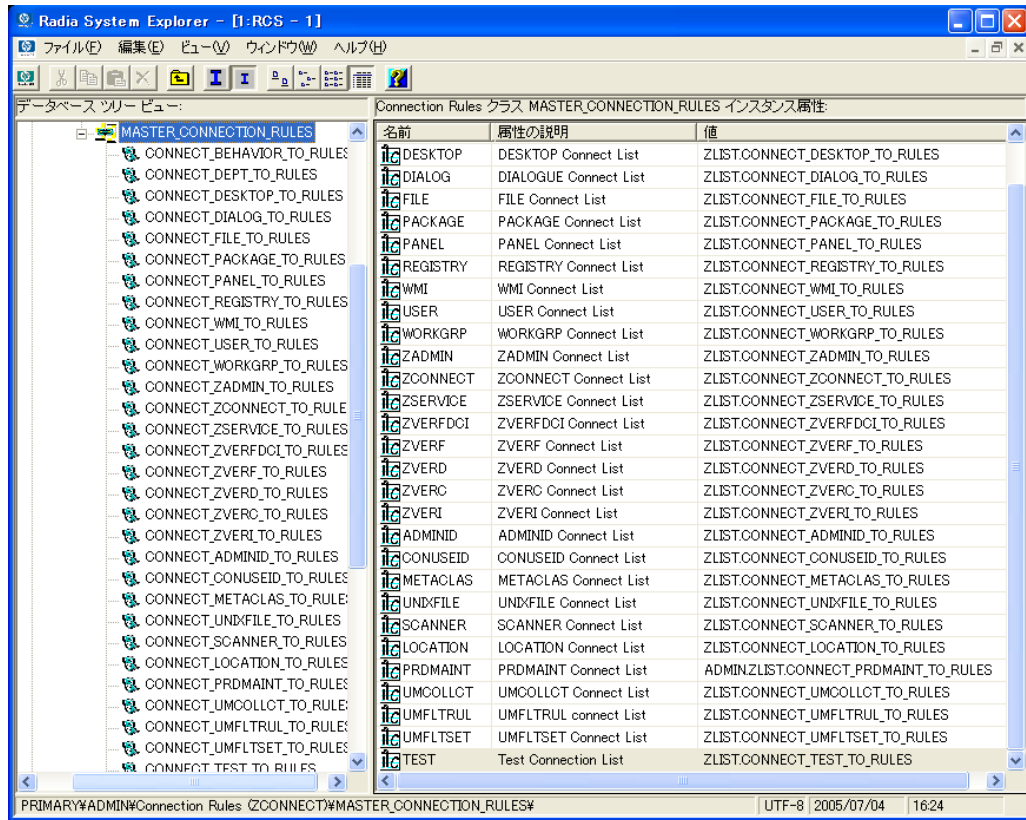


図 7.8 ~ 接続規則で変数を設定した状態

MASTER_CONNECTION_RULES に新しい接続規則が追加できました。これで、新しいクラスの接続がドラッグ アンド ドロップで操作できます。

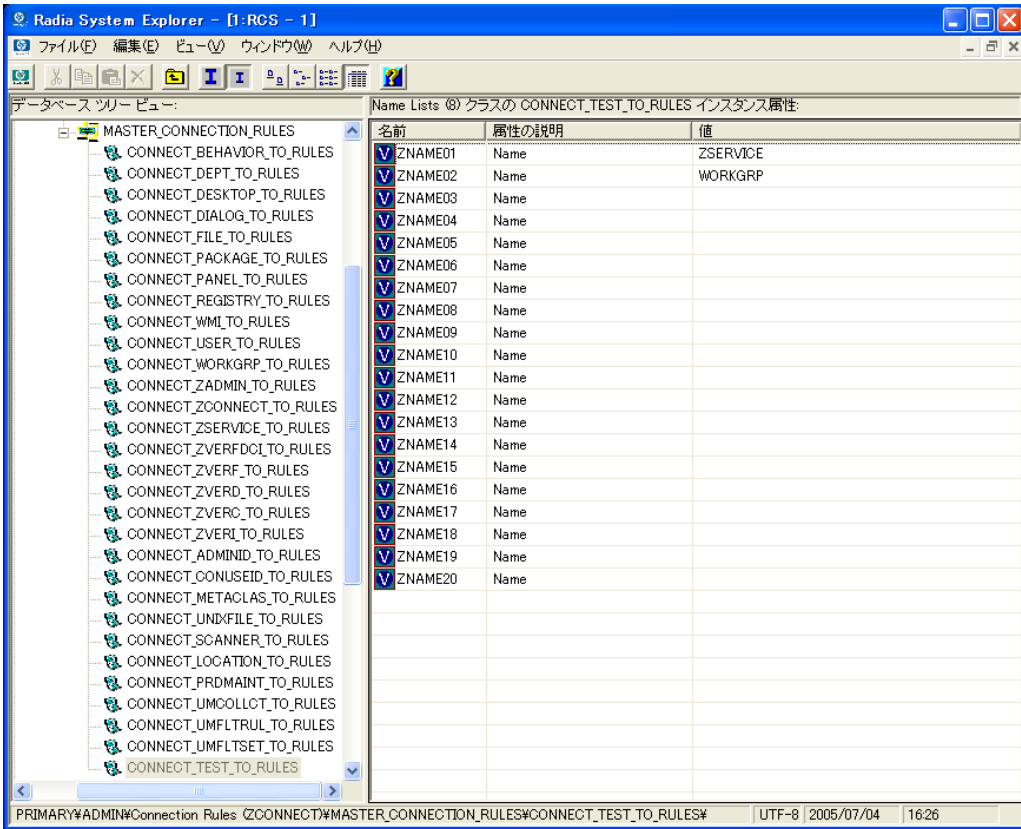


図 7.9 ~ MASTER_CONNECTION_RULES に TEST クラスの接続規則を追加した状態

まとめ

- 追加したクラスをドラッグ アンド ドロップで操作するには、新しいクラスが従うべき規則を確立する必要があります。
- 接続規則は、PRIMARY.ADMIN ドメインの **Connection Rules (ZCONNECT)** クラスの **MASTER_CONNECTION_RULES** インスタンスに格納されます。
- Name List (ZLIST) クラスには、すべてのクラスのすべての規則が格納されます。
- ZCONNECT クラスには、クラス間の接続を有効にするための接続規則が収容されます。
- Radia System Explorer では、これらの規則に基づいて [接続を表示] ダイアログ ボックスのクラスリストが設定され、ドラッグ アンド ドロップ接続が制御されます。

機能セット エディタ

この章は以下を目的としています。

- Radia 機能セット エディタで何ができるかを理解する。
- エディタにアクセスする方法を習得する。
- エディタの機能について理解する。
- 必要に応じてネイティブ MSI モードで機能セットを管理する方法を習得する。

機能セット エディタの概要

Radia 機能セット エディタを使用すると、そのウィザード形式のインターフェイスにより、Radia で管理する Windows インストーラ対応ソフトウェア パッケージの機能が容易に選択および設定できます。Radia 機能セット エディタを使用することで、Radia が提供するパッケージ化および配布のテクノロジーと Windows インストーラのさまざまな機能が同時に使用できます。

Office 2000 のリリース以降の Microsoft 製品には、Windows プラットフォーム上でソフトウェア製品のインストールおよび管理に使用する "Microsoft Windows インストーラ" という新しいテクノロジーが導入されています。Radia 製品では、Windows インストーラ対応のアプリケーションが以下の方法でインストールおよび管理できます。

- Radia Publisher では、Windows インストーラ対応アプリケーションが、基本メソッドと詳細なメソッドでパブリッシュおよび設定できます。

注意

Windows インストーラ対応アプリケーションのパッケージ化の詳細については、『Radia Extensions for Windows Installer Guide』を参照してください。Windows インストーラ対応アプリケーションのパブリッシュの詳細については、『Radia Publisher Guide』を参照してください。どちらのマニュアルも、HP OpenView のサポート Web サイトから入手できます。

- Radia データベースを使用すると、HP 製品に Windows インストーラの機能セットが格納できます。
- Radia を使用すると、ポリシーを管理したり状態データを収集したりすることができます。
- Radia では、Windows インストーラ変換 (MST) ファイルを作成しなくても、MSI パッケージのカスタマイズが制御できます。
- Radia では、以前にインストールされた Windows インストーラを探索し、そのパッケージが管理できます。Radia を使用して配布していない Windows インストーラにも対応しています。

機能セット エディタにアクセスする

機能セット エディタにアクセスするには

1. Radia データベースで、機能を編集したいソフトウェア パッケージを表す Application Packages インスタンスを探します。
2. このインスタンスをダブルクリックして、その MSI と MSIFEATS の接続を表示します。
3. MSIFEATS 接続を右クリックすると、下の図のようなショートカット メニューが表示されます。

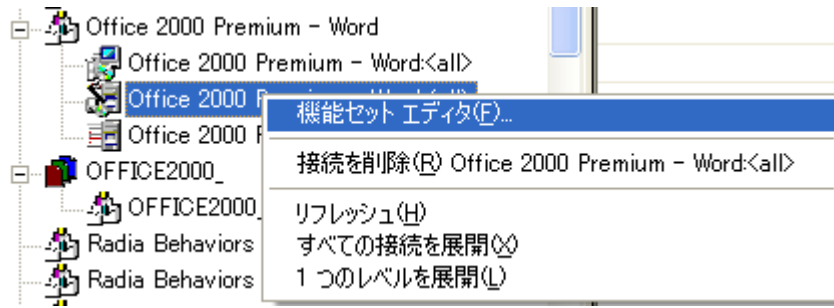


図 8.1 ~ Radia System Explorer のツリー ビューから機能セット エディタにアクセス

4. ショートカット メニューで [機能セット エディタ] をクリックします。
[機能セット エディタ] ダイアログ ボックスが表示されます。

Radia MSI 機能セット エディタについて

下の図 8.2 に示すように、機能セット エディタのインターフェイスは、左側のツリー ビュー、右側のボタン リスト、最下部のパッケージ サイズ情報の 3 つで構成されています。

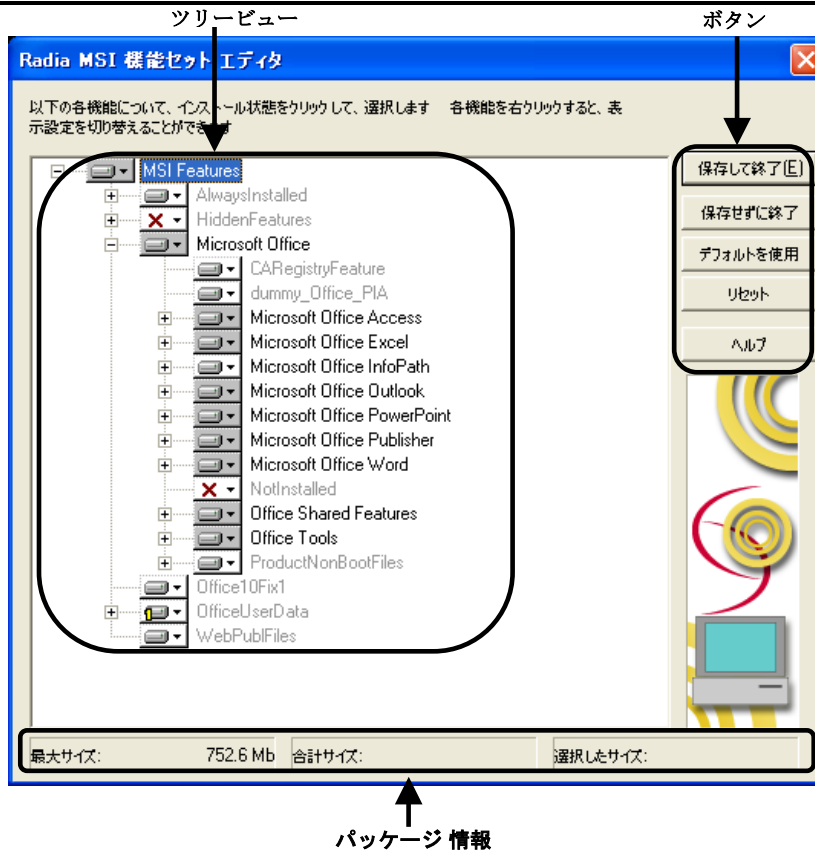


図 8.2 ~ [機能セット エディタ] ダイアログ ボックス

ツリー ビュー

各機能は、ツリー コントロールを使用して移動できるよう階層構造にグループ化されています。上位レベルの機能は、その下位レベルの 2 つ以上の機能 (子機能) で構成されます。

特定の機能を構成する子機能を表示するには、その機能の横にある小さいプラス記号 (+) のボックスをクリックします。下の図のようにプラス記号 (+) がマイナス記号 (-) に変わり、選択した機能の 1 階層下の機能がツリー ビューに表示されます。

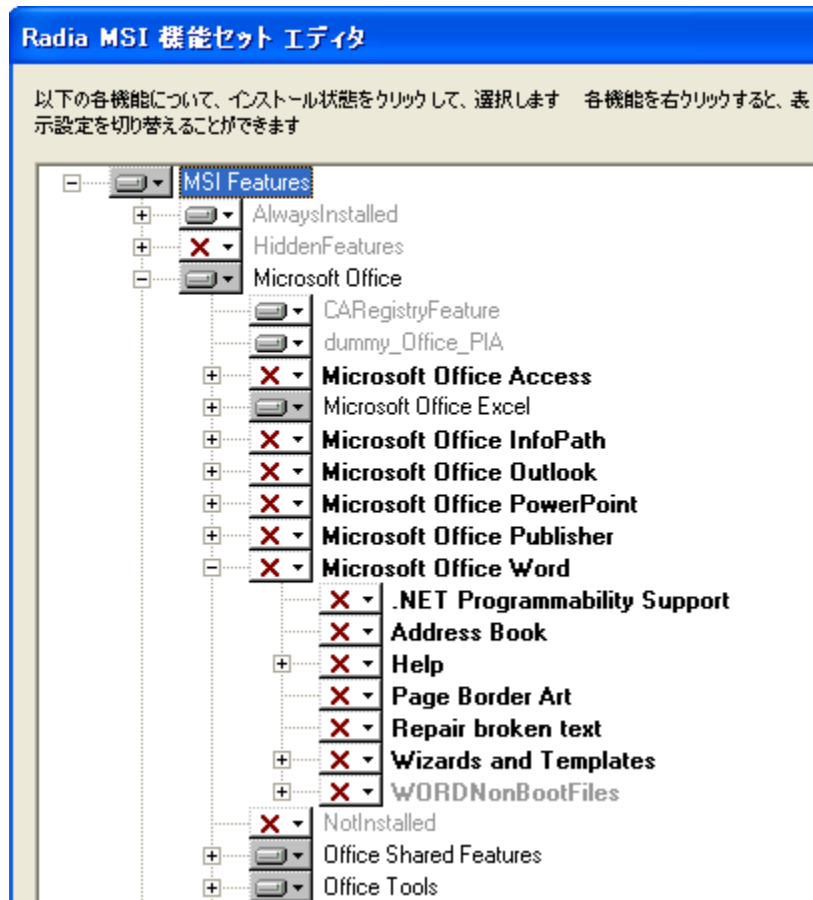


図 8.3 ~ 子機能を表示した状態

特定の機能の子機能を非表示にするには、その機能の横にある小さいマイナス記号 (-) のボックスをクリックします。



図 8.4 ~ Microsoft Word の子機能を非表示にした状態

機能メニュー

各機能の横にあるドロップダウン ボタンをクリックすると、下の図のように機能メニューが表示されます。

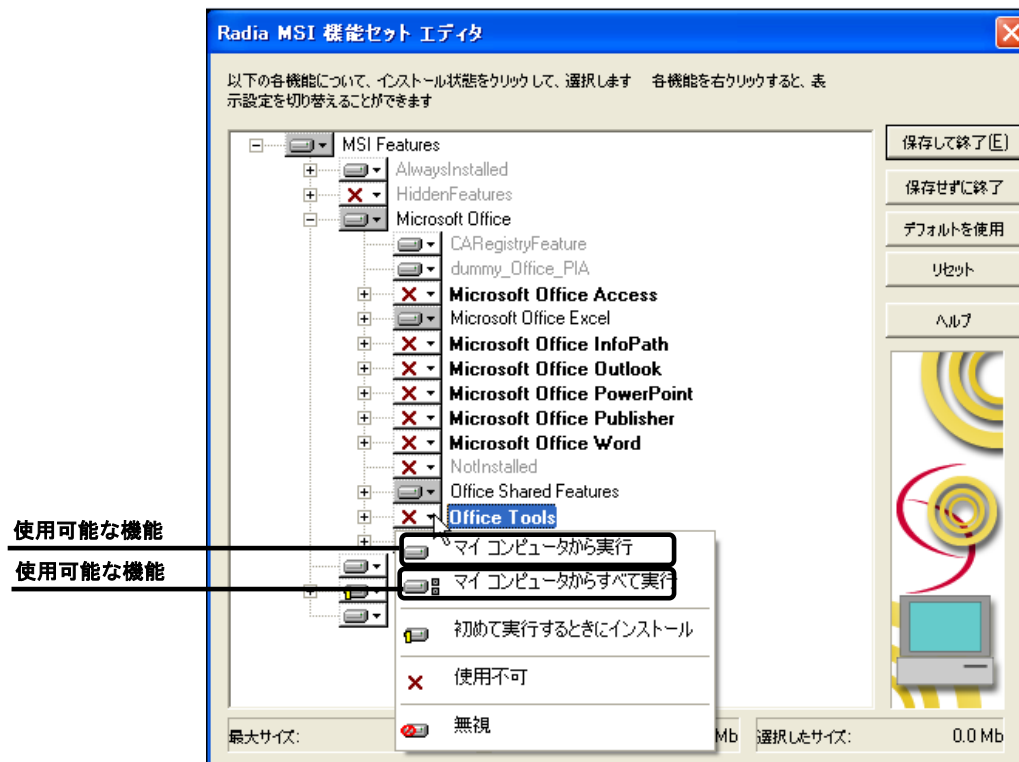


図 8.5 ~ 機能の横にあるドロップダウン ボタンをクリックして機能メニューを表示した状態

各機能の横に表示されるボタンの絵は、その機能に現在割り当てられている属性を示します。各機能には、その機能のインストール方法やメンテナンス方法を判別するための属性が割り当てられています。

通常、上位レベルの機能に属性を設定すると、その機能を構成するすべての子機能にも自動的に適用されます。属性を子機能に伝達するしくみについては、下の表 8.1 にある各属性の説明を参照してください。

表 8.1 ~ 機能メニューのオプション



機能のアイコンと名前	機能の説明
 [マイ コンピュータから実行]	<p>[マイ コンピュータから実行] 属性が設定された機能は、クライアント コンピュータのハード ドライブに物理的にインストールされます。この属性を設定すると、その機能がユーザーのマシンから実行されるため、最適なパフォーマンスを得ることができます。</p> <p>この属性を選択した場合、その機能のすべての子機能に [マイ コンピュータから実行] 属性が自動的に適用されます。ただし、既に属性が [初めて実行するときにインストール] または [使用不可] に設定されている子機能には適用されません。</p> <p>ここで言う子機能とは、ツリー上で特定の機能の下に分岐接続された状態で表示される機能のことです。</p>
 [マイ コンピュータからすべて実行]	<p>[マイ コンピュータからすべて実行] 属性が設定された機能は、クライアント コンピュータのハード ドライブに物理的にインストールされます。その機能のすべての子機能は、属性が [マイ コンピュータから実行] に変更され、それらの子機能もクライアント コンピュータのハード ドライブに物理的にインストールされます。</p> <p>この属性を設定すると、その機能がユーザーのマシンから実行されるため、最適なパフォーマンスを得ることができます。モバイル コンピュータのユーザーは、モバイル環境で使用する際に必要なすべての機能を [マイ コンピュータから実行] または [マイ コンピュータからすべて実行] に設定しておく必要があります。そうしないと、コンピュータのハード ドライブにインストールされていない機能を外出先で使用する場合に、オリジナルのインストール メディアを要求するプロンプトが表示されます。メディアを持ち歩いていない場合は、その機能を使用することができません。</p>

表 8.1 ~ 機能メニューのオプション


機能のアイコンと名前	機能の説明
 [初めて実行するときインストール]	<p>[初めて実行するときインストール] 属性が設定された機能は、エンドユーザーがショートカットやメニューからその機能を使用しようとするまでは、クライアントコンピュータにインストールされません。ショートカットからアクセスできる機能のショートカットは、そのパッケージが初めてインストールされたときに配布されず、エンドユーザーが初めてその機能呼び出すと、機能をサポートするのに必要なファイルがエンドユーザーのハードディスクにインストールされ、その後もインストールされたままとなります。次回その機能を使用するときは、クライアントコンピュータから実行されます。</p> <p>このような機能をインストールするためには、クライアントコンピュータで Radia リダイレクタが動作しており、そのコンピュータから Radia Configuration Server に接続する必要があります。</p> <p>この属性を使用すると、実際に使用する機能のみがハードディスクにインストールされるため、クライアントコンピュータのディスクの使用容量を最小限に抑えることができます。一方、エンドユーザーから見ると、その機能を初めて呼び出したときにインストールが必要になるため、そのことで驚いたり不愉快に感じたりするユーザーがいるかもしれません。</p> <p>この属性を選択した場合、その機能のすべての子機能に [初めて実行するときインストール] 属性が自動的に適用されます。ただし、既に属性が [使用不可] に設定されている子機能には適用されません。</p> <p>詳細については、239 ページの「Office 2000 のインストールに関する Microsoft 社からの重要な注意事項」を参照してください。</p>

表 8.1 ~ 機能メニューのオプション



機能のアイコンと名前	機能の説明
 [使用不可]	<p>[使用不可] 属性が設定された機能はインストールされません。ユーザーからは使用できず、他のサービスに影響を及ぼす可能性があります。すべての子機能の属性も、[使用不可] に設定されます。</p> <p>たとえば、あるサービスを Microsoft Word を配布するように定義し、Office 2000 のその他の機能をすべて [使用不可] に設定します。そして、別のサービスを Microsoft Excel を配布するように定義し、Office 2000 のその他の機能をすべて [使用不可] に設定します。</p> <p>ここで、あるエンドユーザーが Microsoft Word サービスをインストールしたとします。インストールは正常に完了し、Office の他の機能はインストールされていません。その後しばらくして、同じエンドユーザーが Microsoft Excel サービスをインストールしたとします。この場合、Microsoft Excel サービスでは、Office の他の機能がすべて [使用不可] に設定されています。そのため、Microsoft Excel はインストールされますが、一方で <i>Microsoft Word</i> はアンインストールされてしまいます。</p> <p>アンインストールされた機能を必要とするオプションをエンドユーザーが選択すると、もう一度セットアップを実行して機能のインストール状態を変更するよう指示するメッセージが表示されます。しかし、HP 製品で管理されているソフトウェアのエンドユーザーは、通常はセットアップにアクセスできないようになっています。</p> <p>[使用不可] 属性は、エンドユーザーに使用を許可しない機能にのみ割り当てるようにしてください。また、エンドユーザーがメッセージを受け取った場合にどのように対処したらよいかを周知しておく必要があります。</p>

表 8.1 ~ 機能メニューのオプション

機能のアイコンと名前	機能の説明
 [無視]	<p>注意: Radia の機能状態 IGNORE は、下位互換性を確保するためのものです。サービスがどの機能を見捨てるべきかを指定する必要はなくなっています。</p> <p>[無視] 属性が設定された機能はインストールされません。エンドユーザーはこの機能が使用できませんが、そのことが他のサービスに影響を及ぼすこともありません。Radia の管理製品では、その機能が管理対象ソフトウェアのコンポーネントではないかのように扱われます。すべての子機能の属性も [無視] に設定されます。</p> <p>たとえば、あるサービスを Microsoft Word を配布するように定義し、Office 2000 のその他の機能をすべて [無視] に設定します。そして、別のサービスを Microsoft Excel と PowerPoint を配布するように定義し、Office 2000 のその他の機能をすべて [無視] に設定します。この場合、エンドユーザーが両方のサービスをインストールすると、2 番目にインストールしたサービスのインストールが、1 番目にインストールしたサービスによってインストールされた機能に影響を及ぼします。</p> <p>これら 2 つのサービスを、1 つのパッケージから作成して Radia データベースにパブリッシュすることも可能です。その場合は、Radia データベース内でパッケージをコピーして別の名前に変更します。次に、これらのパッケージを機能セット エディタを使用して編集します。</p>

Office 2000 のインストールに関する Microsoft 社からの重要な注意事項

"[初めて実行するときにインストール] は、Windows インストーラのショートカットをサポートするオペレーティング システムでのみサポートされます。ショートカットをサポートするオペレーティング システムには、Windows 98、Internet Explorer 4.01 の Service Pack 1 以上をインストールした Windows 95、Internet Explorer 4.01 の Service Pack 1 以上をインストールした Windows NT 4.0 (Service Pack 3) も含まれます。Windows 95 および Windows NT 4.0 では、Office をインストールする前に、Active Desktop (アクティブ デスクトップ) がインストールされている必要もあります (ただし、有効にする必要はありません)。Windows インストーラのショートカットをサポートしないオペレーティング システムに Office をインストールする場合、[初めて実行するときにインストール] に設定した機能セットは [マイ コンピュータから実行] に変更されます。"

機能の現在の設定

各機能の現在の設定は、機能名の横に表示されているボタンの絵で表されます。現在の設定を表すボタン上の絵は、ボタンをクリックすると表示されるショートカットメニューで、該当の設定の横に表示される絵と一致します。

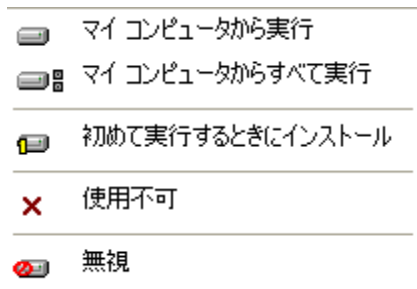


図 8.6 ~ 各機能を表す絵

上の図 8.6 は、そのショートカットメニューです。下の図では、[Microsoft Access for Windows] 機能のボタンに表示されている絵は [使用不可] を、[Text with Layout Converter] 機能のボタンに表示されている絵は [初めて実行するときにインストール] を表します。

このツリー内で機能名が太字で表示されているのは、Radia MSI 機能セット エディタの現在のセッションで属性が変更された機能です。



図 8.7 ~ 属性が変更された機能の名前が太字で表示されている状態

上の図 8.7 では、Access、FrontPage、および Outlook が [使用不可] に変更されており、Word はそのすべての機能が Radia MSI 機能セット エディタの現在のセッションで非表示になるように設定されています。

Hide と Disable 機能

機能名（下図では、Microsoft Word を例として）を右クリックすると、**[Hide]** と **[Disable]** のショートカットメニューが表示されます。

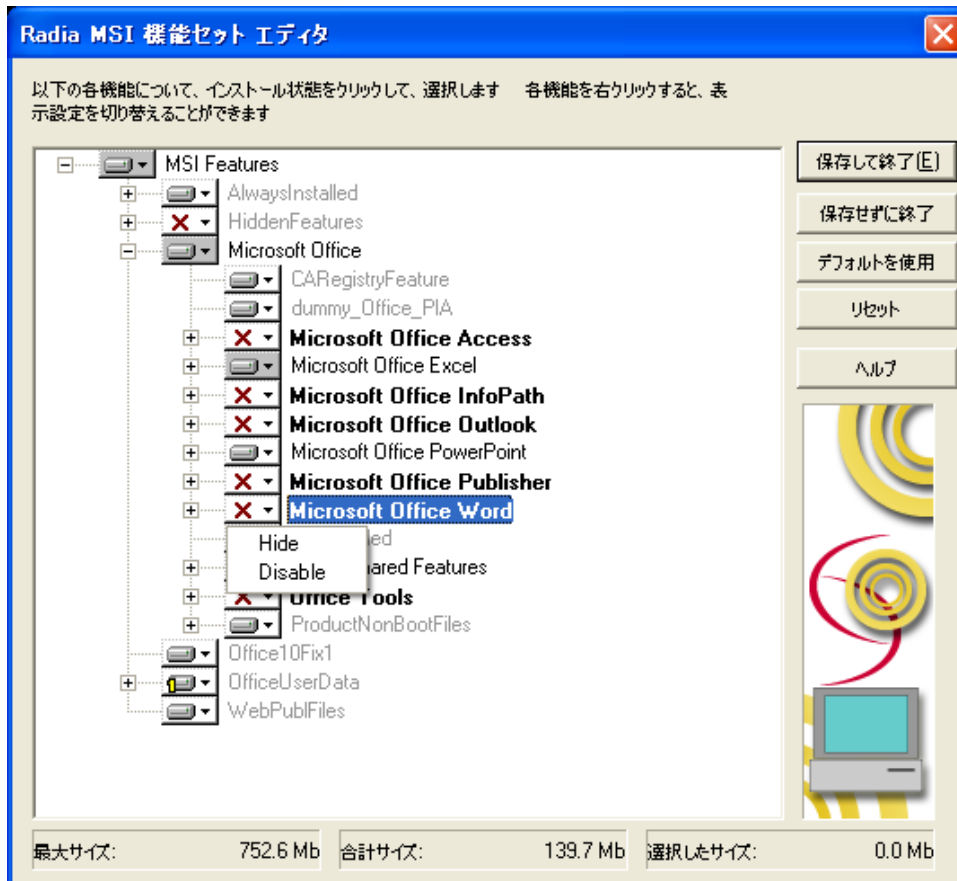


図 8.8 ~ 機能名を右クリックして **[Hide]** と **[Disable]** のショートカットメニューを表示した状態

ショートカットメニューで **[Hide]** をクリックすると、選択した機能とそのすべての子機能が、ネイティブの Microsoft Windows インストーラの **[機能の追加/削除]** ダイアログボックスには表示されなくなります。**[機能の追加/削除]** は、エンドユーザーがコントロールパネルの "プログラムの追加と削除" アプレットを使用してアクセスするダイアログボックスです。

非表示に設定したすべての機能は、Radia MSI 機能セット エディタのツリーでは、機能名の前にプレフィックス **(H)** が追加された状態で表示されます。

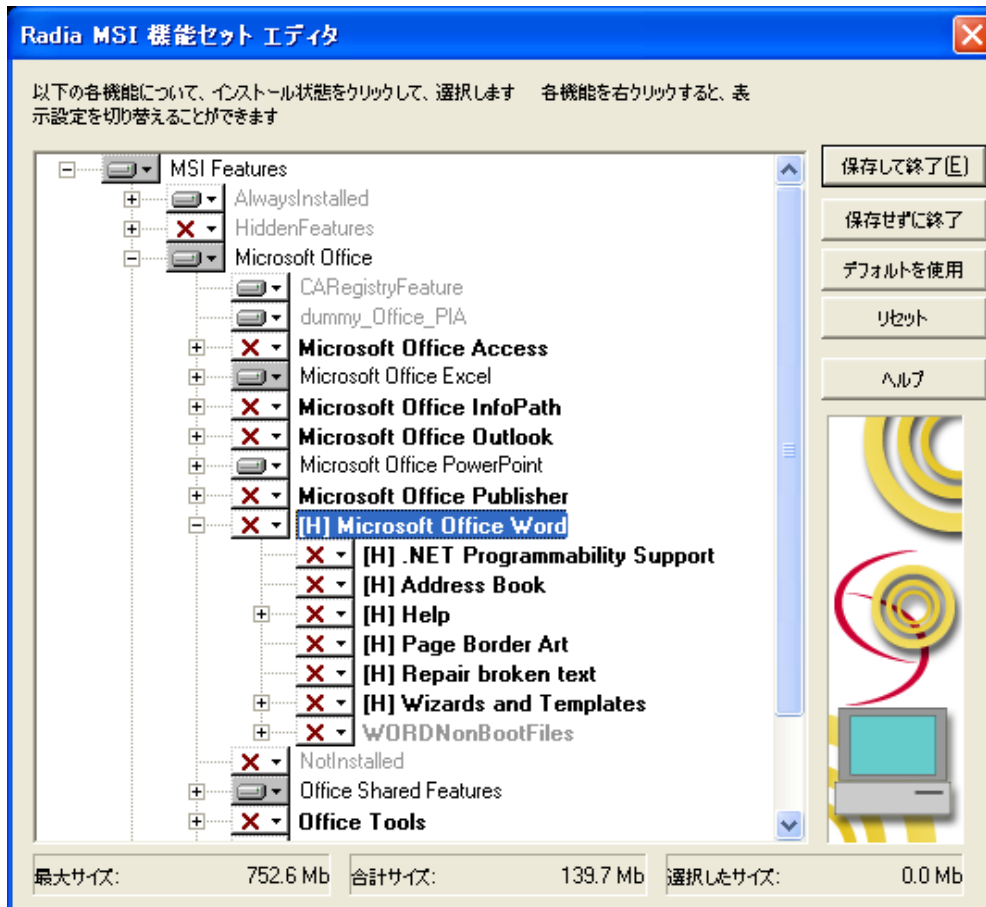


図 8.9 ~ 非表示にした機能の名前にプレフィックス (H) が追加された状態

ショートカットメニューで **[Disable]** をクリックすると、選択した機能とそのすべての子機能が Radia Client によって無視されます。Disable にした機能の値は、Radia インスタンスの値ではなく、MSI ファイルと MST ファイルの組み合わせから Windows インストーラによって決定されます。

無効にしたすべての機能は、Radia MSI 機能セット エディタのツリーでは、機能名の前にプレフィックス (D) が追加された状態で表示されます。

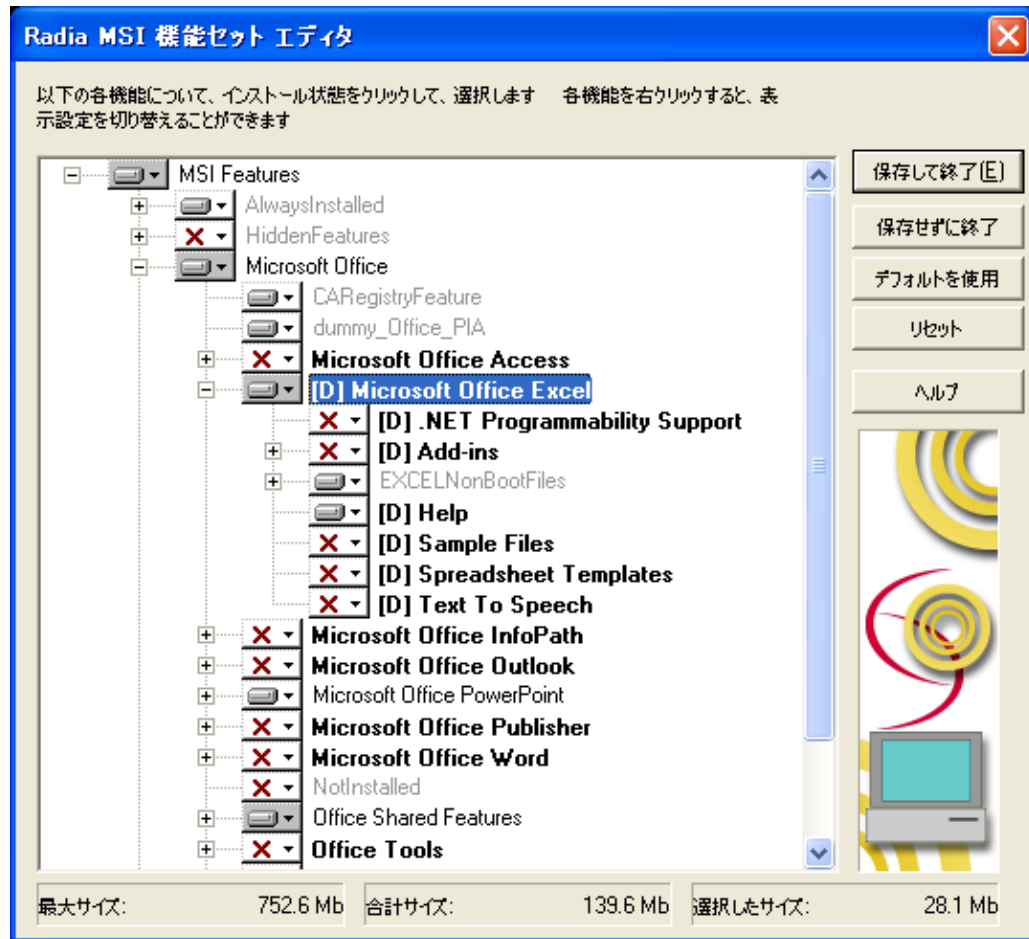


図 8.10 ~ 無効にした機能の名前にプレフィックス (D) が追加された状態

機能セット エディタのボタン

機能セット エディタのボタンは、[機能セット エディタ] ウィンドウの右側にあります。下の表 8.2 で、これらのボタンをクリックしたときに呼び出されるアクションを説明します。

表 8.2 ~ 機能セット エディタのボタン

ボタン	機能の説明
保存して終了	[保存して終了] をクリックすると、ファイルの属性に加えた変更が保存され、機能セット エディタが終了します。機能セット エディタは、右上隅の X をクリックして終了させることもできます。
保存せずに終了	[保存せずに終了] をクリックすると、属性に加えた変更が破棄され、機能セット エディタが終了します。機能セット エディタは、右上隅の X をクリックして終了させることもできます。
デフォルト	[デフォルト] をクリックすると、すべての機能の属性が、そのソフトウェアの出荷時の MSI ファイルに格納されている設定にリセットされます。このデフォルト設定は、[保存して終了] をクリックして機能セットを保存しないと適用されません。
リセット	[リセット] をクリックすると、Radia MSI 機能セット エディタの現在のセッションの開始以降に変更した機能設定が元の設定に戻ります。すべての機能の設定が、Radia データベースから読み込んだ設定にリセットされます。
ヘルプ	[ヘルプ] をクリックすると、Radia System Explorer のヘルプ トピックが表示できます。機能セット エディタに関するヘルプ トピックが自動的に表示されます。

パッケージ情報

パッケージ情報のセクションには、現在設定している Windows インストーラ対応機能のサイズが表示されます。

[最大サイズ]

機能ツリー内のすべての機能をインストールする場合に、クライアント コンピュータで必要になる可能性のあるディスク容量をバイト単位で示します。ツリー内のすべての機能を [マイ コンピュータから実行] 属性または [マイ コンピュータからすべて実行] 属性に設定した場合は、このディスク容量が必要になります。

[合計サイズ]

機能ツリー内で [マイ コンピュータから実行] 属性または [マイ コンピュータからすべて実行] 属性に設定されているすべての機能をインストールする場合に、クライアント コンピュータで必要になるディスク容量をバイト単位で示します。

[選択したサイズ]

その時点で選択 (たとえば、強調表示) されている機能およびその子機能をインストールする場合に、クライアント コンピュータで必要になるディスク容量をバイト単位で示します。このサイズの計算には、[マイ コンピュータから実行] 属性または [マイ コンピュータからすべて実行] 属性に設定されている機能のみが含まれます。

Windows の "プログラムの追加と削除" アプレット

Windows Installer 対応ソフトウェア パッケージをクライアント コンピュータにインストールすると、通常であればコントロール パネルの "プログラムの追加と削除" アプレット が使用して操作できるアプリケーションのリストに追加されます。

Radia 製品を使用すると、Windows 9X、NT、2000、および XP の "プログラムの追加と削除" アプレットのリストに、Windows インストーラ対応ソフトウェア パッケージ が表示されないようにすることもできます。これにより、Radia 製品によるアプリケーションの集中管理は、エンドユーザーによって妨げられないようにすることができます。また、個々の機能をリストに表示しないように設定すると、"プログラムの追加と削除" アプレットからアクセスできないようにすることも可能です。

アプリケーション全体が "プログラムの追加と削除" アプレットのリストに表示されないようにするには、Radia System Explorer を使用して、その Application Packages クラス インスタンスに接続されている DATA1.MSI ファイルで、MSI クラス インスタンスの SHOWINCP 変数の設定を変更します。

下の図のように、SHOWINCP 変数の値を **N** に変更します。

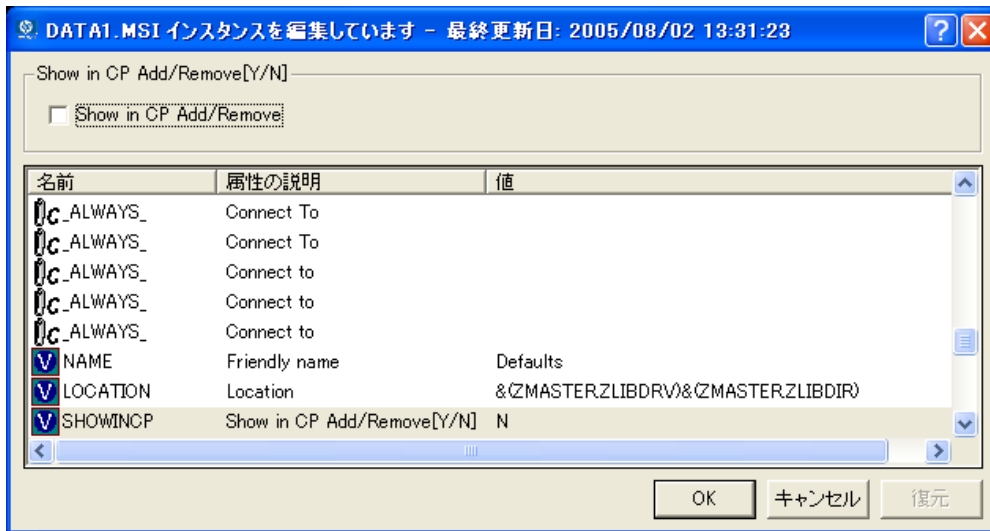


図 8.11 ~ [DATA1.MSI インスタンスを編集] ダイアログ ボックスを使用して SHOWINCP の値を N に変更した状態

エンドユーザーが "プログラムの追加と削除" アプレットで **Windows** インストーラ対応ソフトウェアパッケージを選択して [追加と削除] をクリックすると、**Microsoft Windows** インストーラが呼び出されますが、クライアント コンピュータへのインストールで機能を操作するためのネイティブなユーザー インターフェイスは表示されません。その代わりに、メンテナンス モードのウィンドウが表示されます。

エンドユーザーが [機能の追加/削除] をクリックすると、**Microsoft Windows** インストーラによって [機能の追加/削除] ウィンドウが表示されます。

Radia MSI 機能セット エディタの [Hide] 機能を使用すると、**Microsoft Windows** インストーラの [機能の追加/削除] ダイアログ ボックスに個々の機能は表示されないようにすることができます。Radia 管理製品のこうした機能を使用することで、アプリケーション ソフトウェアの各機能についてエンドユーザーによるインストールが制御でき、エンドユーザーによって不正なインストールが行われるのを防ぐことができます。

Windows インストーラ対応パッケージ

Radia 管理製品を使用して Windows インストーラ対応アプリケーションを管理する重要な利点の 1 つは、種類が多岐にわたるソフトウェア パッケージが容易に特定でき、それらが対象のユーザー層に確実に配布できる点です。

Radia の詳細な機能を使用すると、包括的な管理インストール ポイントを 1 つだけ作成し、これを Radia データベースに転送させるだけで済むことです。多岐にわたる機能セットはすべて、個別のパッケージとして Radia データベース内にカプセル化されます。

新しい機能セットを作成するには

既存のパッケージをコピーしてクローンを作成し、個別にニーズに合わせて編集します。

1. **[Application Packages]** インスタンスを右クリックし、表示されたショートカット メニューで **[パッケージをコピー]** をクリックします。

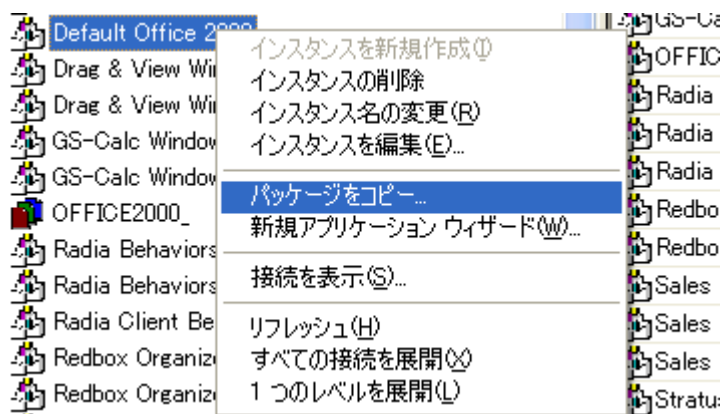


図 8.12 ~ パッケージをコピー

次のダイアログ ボックスが表示されます。

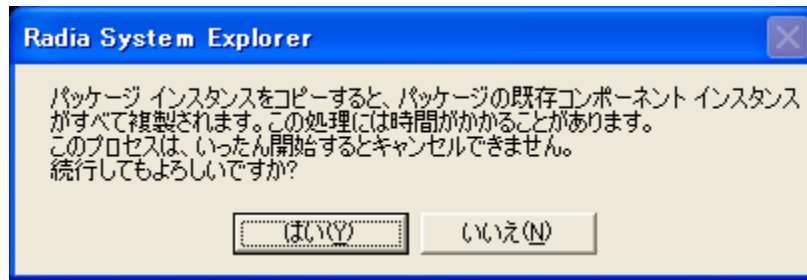


図 8.13 ~ [パッケージをコピー] ダイアログ ボックス

2. [パッケージをコピー] の実行を続行する場合は [はい] をクリックします。[パッケージをコピー] の実行をキャンセルする場合は [いいえ] をクリックします。この例では、[はい] を選択します。

パッケージをコピー

[パッケージをコピー] を実行すると、パッケージ インスタンスと、そのパッケージ インスタンスに属すすべてのコンポーネント クラス インスタンスがコピーされます。複製されたパッケージは、元のパッケージの完全なクローンになります。この操作では、各パッケージがそのコンポーネントに対する制御を引き継ぐことで、Radia データベース内の整合性が維持されます。

3. 下の図のように、新たにコピーしたパッケージの名前を指定します。

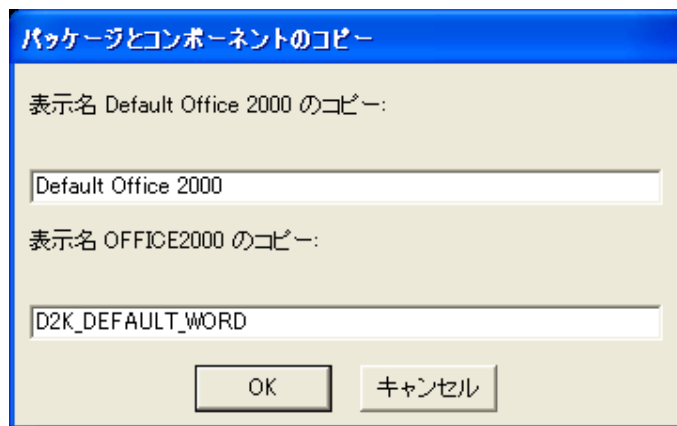


図 8.14 ~ [パッケージとコンポーネントのコピー] ダイアログ ボックス

4. **[OK]** をクリックして進みます。Radia Configuration Server が Radia データベース内のパッケージを複製するまで、多少の時間がかかります。
5. 新たに複製されたパッケージが Radia System Explorer のツリー ビューに表示されたら、パッケージの下に表示される MSIFEATS インスタンスを右クリックし、ショートカットメニューで **[機能セット エディタ]** をクリックします。

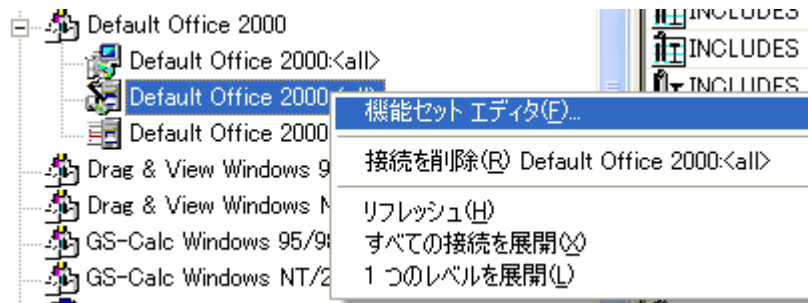


図 8.15 ~ ショートカットメニューから機能セット エディタを起動する

Radia MSI 機能セット エディタが表示されます。

6. 配布しないアプリケーションのプロパティは [無視] に設定します。

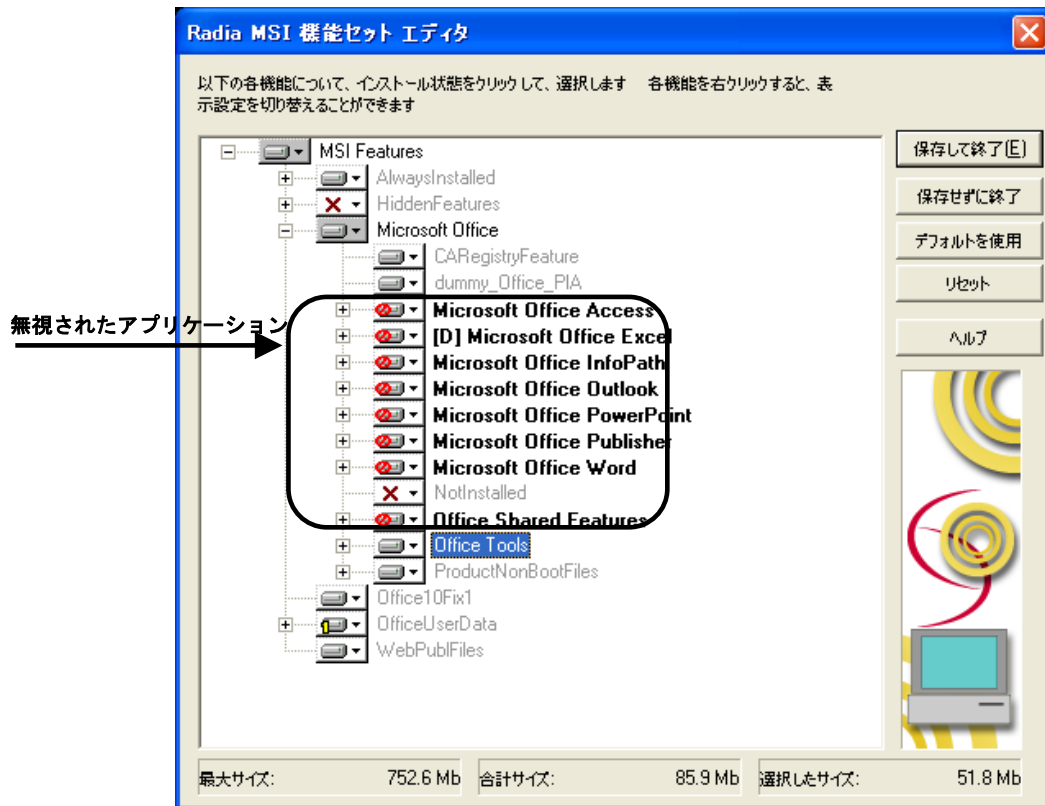


図 8.16 ~ 機能セット エディタに、プロパティを [無視] に設定したアプリケーションが表示されている状態

7. [保存して終了] をクリックすると、パッケージの機能セットが更新されます。このパッケージを適切なポリシー (USER、DEPT、WORKGRP) インスタンスに接続すれば、シングル機能がスタンドアロンアプリケーションとして配布および管理できます。

機能セットをネイティブ モードで管理する

企業によっては、アプリケーションのパッケージ化と Radia の管理を別々の人が担当する場合もあります。Radia MSI 機能セット エディタで変換 (MST) ファイルを編集したくない場合もあるかもしれません。機能セットをネイティブ MSI モードで管理するには、パッケージと MST ファイルを次の手順でパブリッシュします。

1. Radia Publisher を詳細モードで使用し、ACP を作成して Windows インストーラ パッケージをパブリッシュします。
2. パブリッシュ プロセスが完了したら、Radia System Explorer を使用して、Application Packages (PACKAGE) インスタンスから SOFTWARE.MSIFEATS.packageprefix_* への接続を削除します。
3. 複数の MST ファイルがある場合は、Radia Packager をコンポーネント選択モードで使用し、各 MST ファイルを個別のパッケージとして転送させます。これにより、各 MST ファイルの新しい PACKAGE インスタンスが作成されます。
4. MSI PACKAGE インスタンスを、各変換ファイルの PACKAGE インスタンスに接続します。
5. 変換パッケージごとに 1 つずつ Application (ZSERVICE) インスタンスを作成します。
6. サブスクリバを、適切な変換パッケージのサービスに割り当てます。

警告

*.MST ファイルを変更したり置き換えたりすると、そのアプリケーションをアンインストールまたは再インストールするための MSIEEXEC が呼び出されます。

サービスをインストールまたは修正すると、MSIFEATS オブジェクトが存在しないことが検知され、ネイティブ MSI モード (MSIEEXEC) が使用されます。その結果、データの送信元の適切なロケーションで MSIEEXEC がネイティブに呼び出されます。MSIEEXEC が呼び出され、MST ファイルが 1 つしか存在しないことが検知されると、MSIEEXEC を呼び出すコマンドラインに .MST ファイルが追加されます。MSIEEXEC が呼び出され、MST ファイルが複数存在することが検知されると、MSIEEXEC は MSI ファイルに対してのみ実行されます。MSI のネイティブな動作は、検証、修復、および更新に使用します。

警告

Radia 機能セット エディタ (MSIFEATS) ではまだ使用できない機能を、MST ファイルを使用して新しい機能として含めた場合、その MST ファイルからの新しい機能は MSI サービスにも含まれます。一方、MST ファイルに含まれている機能が既に MSIFEATS オブジェクト内に存在する場合は、MSIFEATS に指定されている機能状態が使用され、追加の MST ファイルに含まれている機能は無視されます。MST ファイルのみを使用して MSI パッケージを管理する場合は、この節で説明した手順を使用してください。

まとめ

- 機能セット エディタを使用すると、**Windows** インストーラ対応ソフトウェア パッケージの各機能を選択したり設定したりすることができます。
- 機能セットは、階層構造でグループ化されます。上位レベルの機能は、**2** つ以上の下位機能で構成されます。
- 各機能には、その機能のインストール方法やメンテナンス方法を判別するための属性が割り当てられています。
- 必要に応じて、機能セットをネイティブ **MSI** モードで管理することもできます。

レジストリ ファイル エディタ

この章は以下を目的としています。

- レジストリ ファイル エディタについて理解する。
- レジストリ キー内のデータを編集する方法を習得する。

レジストリ ファイル エディタを使用すると、Radia パッケージに関連付けられたレジストリ キーのプロパティや値が編集できます。

レジストリ ファイル エディタ

Radia Packager を使用してパッケージを作成する場合、そのパッケージのレジストリに対するすべての変更は、**LIB** ディレクトリ内のファイル (拡張子 **.EDR**) に格納されます。このファイルを修正する場合は、レジストリ ファイル エディタを使用します。修正したファイルは Radia Configuration Server に送信 (再転送) され、Radia データベース内のインスタンスが更新されます。

パッケージの作成と転送については、『Radia Application Manager ガイド』を参照してください。

レジストリ ファイル エディタにアクセスする

レジストリ ファイル エディタにアクセスするには

1. Radia データベースで、レジストリ設定を変更したいソフトウェア パッケージを表す Registry Resource インスタンスを探します。
2. ツリー ビューでインスタンスを右クリックします。コンテキスト メニューが表示されます。たとえば、Amortize Windows パッケージのレジストリ インスタンスを探して右クリックします。

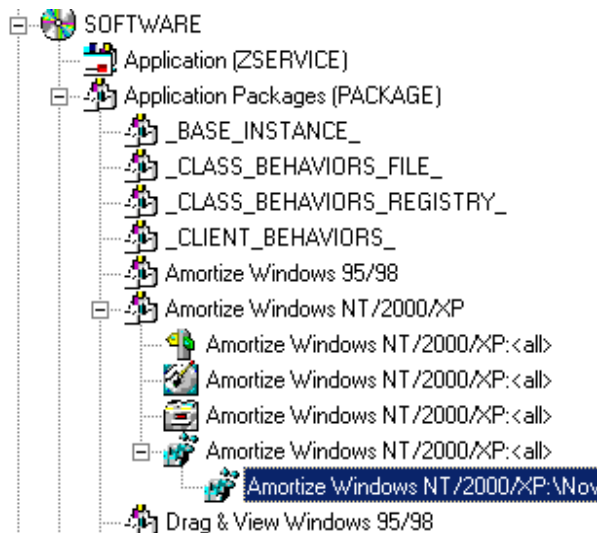


図 9.1 ~ レジストリ ファイル エディタへのアクセス

3. [レジストリ リソースを編集] をクリックします。

インスタンスの削除
 インスタンスを編集(E)...
 レジストリ リソースを編集...

 リフレッシュ(H)
 すべての接続を展開(O)
 1つのレベルを展開(L)

図9.2～コンテキストメニューで[レジストリ リソースを編集] をクリックする

[レジストリ ファイル エディタ] ダイアログ ボックスが表示されます。

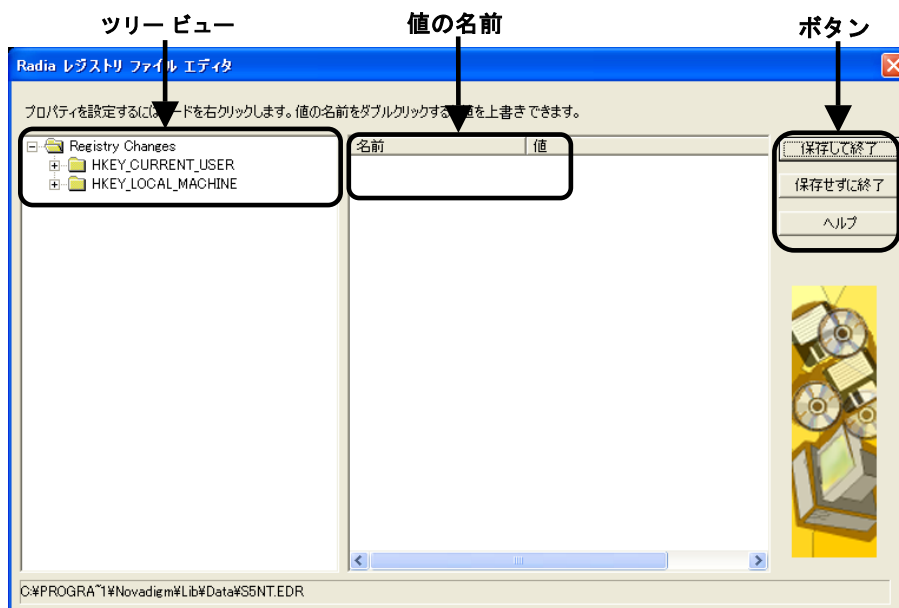


図9.3～レジストリ ファイル エディタ

- ツリー ビュー (左側) には、レジストリ ファイル内のキーを表すノードが表示されます。
- リスト ビュー (中央の [名前] と [値]) には、選択したレジストリ キーのコンテンツが表示されます。
- 右側のボタンを使用すると、保存して (または保存せずに) 終了したり、レジストリ ファイル エディタのヘルプ機能にアクセスしたりすることができます。

ツリーの展開と折りたたみ

ノードは階層構造にグループ化されています。ノードにプロパティを設定すると、ツリー ビューでそのノードから分岐しているすべてのノードに変更が適用されます。

ツリー ビューの分岐を展開すると、下位階層のノードが表示できます。

ツリー ビューの単一ノードを展開するには

- ノードの横にあるプラス記号の小さいボックスをクリックします。
プラス記号がマイナス記号に変わり、選択したノードの次の階層が表示されます。

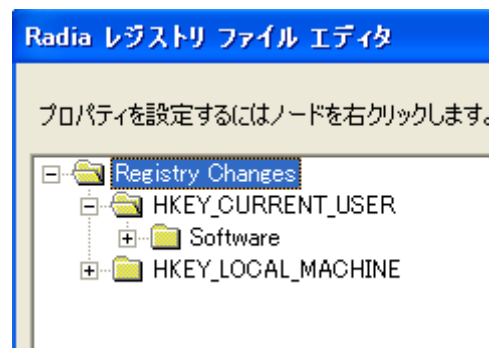


図 9.4 ~ ノードの展開

ツリー内の単一ノードを折りたたむには

- ノードの横にあるマイナス記号の小さいボックスをクリックします。マイナス記号がプラス記号に変わります。

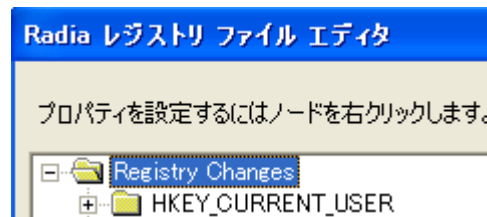


図 9.5 ~ ノードの折りたたみ

プロパティ設定コンテキストメニュー

レジストリ ファイル エディタのツリー ビューでいずれかのノードを右クリックすると、図 9.6 のようなコンテキストメニューが表示されます。

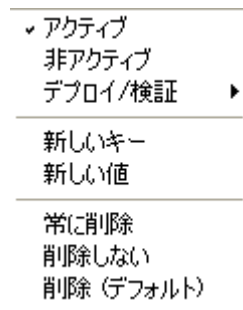


図 9.6 ~ ノード プロパティの設定

このコンテキスト メニューの各オプションについては、下の表 9.1 を参照してください。

表 9.1 ~ レジストリ ファイル エディタのコンテキスト メニューのオプション


アクション	説明
[アクティブ]	[アクティブ] を選択すると、レジストリ キーがパッケージに含まれます。
[非アクティブ]	[非アクティブ] を選択すると、レジストリ キーはパッケージには含まれません。アクティブでないノードは、そのフォルダ上に  が表示されます。
[配布/検証]	<p>[配布/検証] をクリックすると、次のサブメニューが表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [無条件/強制] レジストリ キーは、既にデスクトップに存在する場合でも、サブスライバが Radia Configuration Server に接続するたびに配布されます。この設定では、修正または削除されたレジストリ キーが修復されます。この設定は、アプリケーション ソフトウェアの動作を保証するために変更してはならないレジストリ キーに使用します。 • [無条件/存在] レジストリ キーは、初回の配布の時点か、削除されたときに配布されます。ただし、ユーザーが修正したレジストリ キーの値はリセットされません。この設定がデフォルトです。 • [存在/存在] レジストリ キーは、サブスライバのデスクトップに存在しない場合にのみ配布されます。レジストリ キーが存在するかどうかは、初回の配布の時点、および以降の接続時ごとにチェックされます。この設定では、ユーザーがレジストリ キーの値が完全に制御でき、何らかの理由でレジストリ キーが削除された場合でも再配布されます。
[新しいキー]	[新しいキー] は、レジストリに新しい値を追加する場合に選択します。[新しいキー] をクリックすると、新しいキーの名前を入力するためのダイアログ ボックスが表示されます。[OK] をクリックすると新しいキーが作成され、[キャンセル] をクリックすると Radia レジストリ ファイル エディタに戻ります。

表 9.1 ~ レジストリ ファイル エディタのコンテキスト メニューのオプション

アクション	説明
[新しい値]	<p>[新しい値] は、新たに作成したキーや既存のレジストリ キーに値を追加する場合に選択します。[新しい値] をクリックすると、以下の情報を入力するためのダイアログ ボックスが表示されます。</p> <p>[値の名前] レジストリ キーに追加する値の名前を入力します。この名前は、[Radia レジストリ ファイル エディタ] ウィンドウの中央部分に値名として表示されます。</p> <p>[データ タイプ] このドロップダウン メニューを使用すると、使用可能なデータ タイプのリストからデータ タイプが選択できます。選択できるデータ タイプは以下のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [REG_SZ] 説明的な情報に最も一般的に用いられるテキスト シーケンス。この設定がデフォルトです。 • [REG_DWORD] 4 バイト長の正数で表されるデータ。二進数、十六進数、または十進数で表示されます。 • [REG_EXPAND_SZ] 拡張可能なデータ文字列。このテキストには、アプリケーションからの呼び出しによって置換される変数を含めることができます。 • [REG_MULTI_SZ] ユーザーが判読可能な複数のテキスト エントリを含む文字列。

レジストリ キーを編集する

レジストリ キーの値を変更する場合は、Radia レジストリ ファイル エディタを使用します。レジストリ キーの情報を編集するには、次の手順例に従ってください。

警告

Radia レジストリ ファイル エディタを使用する際は、細心の注意を払って作業を進める必要があります。各レジストリ キーの機能を十分理解せずに編集すると、パッケージやサービスが使用できなくなるおそれがあります。

レジストリ キー内のデータを編集するには

1. [スタート] メニューの [すべてのプログラム] をポイントし、[Radia Administrator Workstation] をポイントして、[Radia System Explorer] をクリックします。[Radia System Explorer のセキュリティ情報] ダイアログ ボックスが表示されます。

注意

ユーザー ID は、HP から出荷された状態では **RAD_MAST** です。パスワードは必要ありません。この設定は、インストールの過程で変更されている場合があります。必要に応じて、Radia セキュリティ管理者に確認し、ユーザー ID とパスワードを取得してください。

2. 必要に応じて、ユーザー ID とパスワードを入力し、[OK] をクリックします。Radia System Explorer の起動画面が表示されます。
3. [PRIMARY] をダブルクリックします。
4. [SOFTWARE] ドメインを展開し、[Application packages (PACKAGE)] クラスを展開します。
5. [Amortize Windows NT/2000/XP] パッケージを展開します。
6. 下の図 9.7 のように、レジストリ インスタンスを展開します。

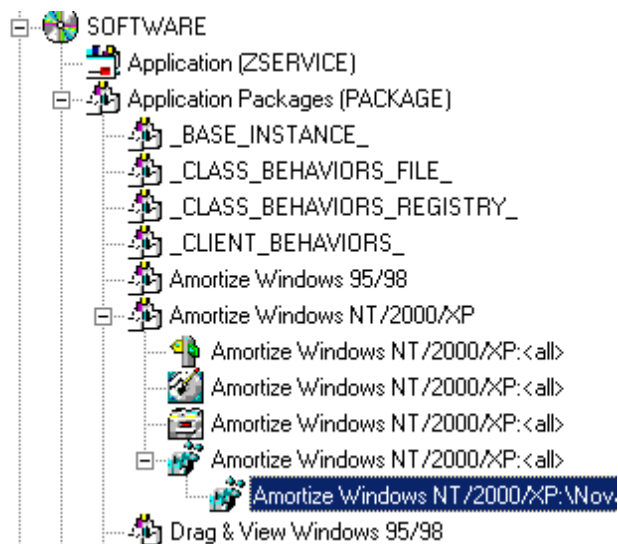


図 9.7 ~ パッケージのレジストリ インスタンスを選択した状態

- レジストリ ファイルを右クリックし、コンテキストメニューで[レジストリ リソースを編集] をクリックします。[Radia レジストリ ファイル エディタ] が表示されます。
- ツリー ビューでノードをクリックして展開し、レジストリ キーのコンテンツを表示します。
- リスト ビューでレジストリ キーの名前をダブルクリックします。

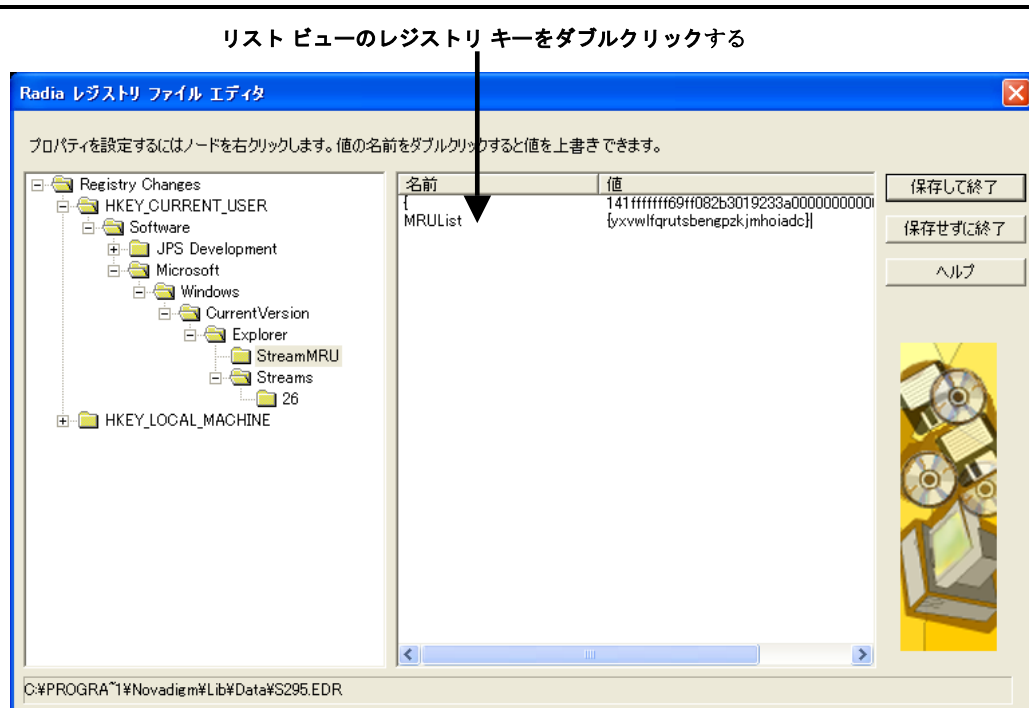


図 9.8 ~ リスト ビューで値名をダブルクリックし、編集するキーを選択した状態

[値を上書き] ダイアログ ボックスが表示されます。

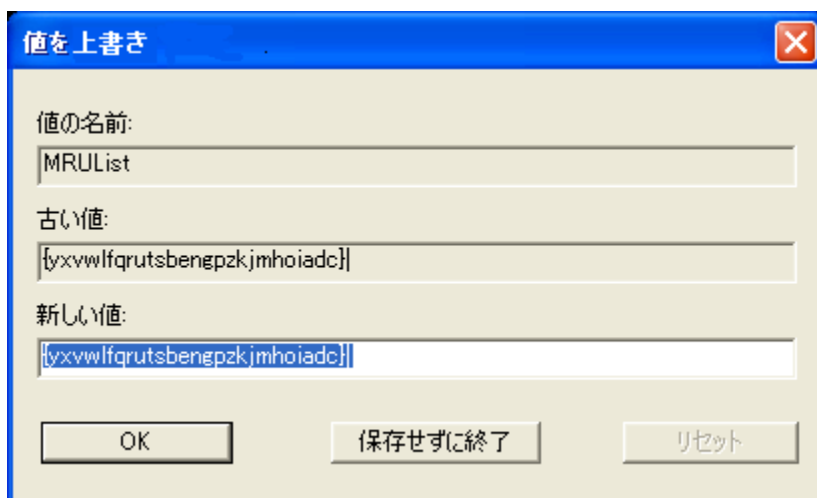


図 9.9 ~ [値を上書き] ダイアログ ボックス

10. [新しい値] ボックスでデータを編集します。
11. [OK] をクリックして変更を保存し、ダイアログ ボックスを閉じます。
または
[キャンセル] をクリックして、変更内容を保存せずにダイアログ ボックスを閉じます。

レジストリ キーのデータを編集するには

1. リスト ビューでレジストリ キーの名前をダブルクリックします。
2. [リセット] をクリックします。
3. [OK] をクリックして変更を保存し、ダイアログ ボックスを閉じます。
または
[キャンセル] をクリックして、変更内容を保存せずにダイアログ ボックスを閉じます。

レジストリ ファイル エディタを閉じる

レジストリ ファイルのインスタンスへの変更が完了したら、レジストリ ファイル エディタを閉じます。

レジストリ ファイル エディタに閉じるには

1. [保存して終了] をクリックして変更を保存し、ダイアログ ボックスを閉じます。
または
[保存せずに終了] をクリックして、変更を保存せずにダイアログ ボックスを閉じます。
2. 次のダイアログ ボックスが表示されたら、変更を保存して閉じる場合は [はい] をクリックします。

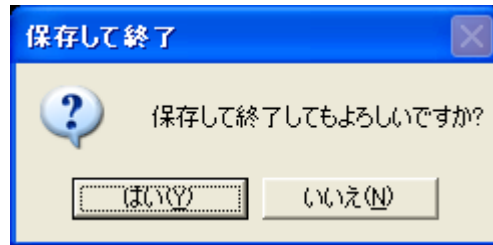


図9.10～レジストリ ファイル エディタの終了を確認するダイアログ ボックス

または

レジストリ ファイル エディタに戻る場合は [いいえ] をクリックします。

まとめ

- レジストリ ファイル エディタを使用すると、**Radia** パッケージに関連付けられたレジストリ キーのプロパティや値が編集できます。
- レジストリ ファイル エディタでの変更内容は、ツリー ビューでそのノードから分岐するすべてのノードに適用されます。
- レジストリ キーのデータを編集した後でも、その元の値を復元することができます。

Radia Inventory Manager のサ ポート

この章は以下を目的としています。

- 監査ドメインについて理解する。
- WBEM と Radia Client について理解する。
- Radia Integration Server に理解する。

Radia Inventory Manager について

Radia Inventory Manager クライアントは、リモート コンピュータの設定情報を探索するために使用するユーティリティです。このユーティリティを使用すると、検出結果を基にした集中管理およびレポートを行うことができます。

Radia Inventory Manager クライアントは、**Radia Integration Server** と共に使用します。**Radia Integration Server** は、検出した情報を ODBC (Open Database Connectivity) 準拠のデータベースに格納して管理します。**Radia Integration Server** からのレポートは、Web ブラウザ インターフェイスで提供されます。

このマニュアルでは、**Radia Inventory Manager** クライアントのインストールおよび使用方法について説明しています。実際のニーズに合わせて、適切な戦略を選択してください。

概要

システム管理者は、**Radia System Explorer** を使用して **Radia** データベースのコンテンツが操作できます。**Radia System Explorer** を使用すると、どのインベントリ管理タスクを実行するかや、そのタスクをどのクライアント コンピュータに実行させるかが指定できます。

インベントリ情報の収集は、**Radia Inventory Manager** のコンピュータで実行します。収集が実行できるようにするため、サブスクリバが **Radia Configuration Server** に接続したときに以下の方法で監査ソフトウェアがインストールされます。

- ユーザーが自身の **Radia Web** ページにアクセスすると、**Software Manager** が監査ソフトウェアをインストールします。
- **Application Manager** は、以下のいずれかの方法で監査ソフトウェアをインストールします。
 - ログオン スクリプトを使用してインストールする。
 - ユーザーがデスクトップの [**Radia Connect**] アイコンをダブルクリックしたときにインストールする。
 - スケジュールに従ってインストールする。
 - **Radia Configuration Server** の通知機能を使用してインストールする。

監査の結果は、**Radia Configuration Server** に送り返されます。

Radia Configuration Server は、これらの監査結果を **Radia** データベースの **PROFILE** ファイルに格納したり、ODBC 準拠データベースに挿入するため **Radia Integration Server** に転送したりします。

ユーザーのコンピュータで検出された不必要なファイルは収集および削除されます。これにより、エンド ユーザーのコンピュータにインストールされた不正なコンテンツ (ゲームなど) が削除できます。

Radia と WBEM

Radia Inventory Management クライアントは、WBEM ネームスペース (つまり、WBEM データベース) に対してクエリを行い、その結果を Radia Configuration Server に送り返します。WBEM によって収集されたすべての情報は、Radia Inventory Manager クライアントから利用できます。収集された情報は、その後 Radia Integration Server に格納されます。

WBEM (Web-Based Enterprise Management) がインストールされているクライアント コンピュータに対しては、Radia Inventory Manager が HP 独自のメソッド (RIMWBEM) を実行して WBEM ネームスペースのクエリを行います。

WBEM がインストールされていないクライアント コンピュータに対しては、Radia Inventory Manager が HP 独自のメソッドを実行して、ハードウェア (Radia Client に組み込まれている ZCONFIG) やファイル システム (RIMSFSCAN) を直接検査します。

Radia Integration Server

Radia Integration Server は、ツール コマンド言語 (Tel: Tool Command Language) ベースの Web サーバーです。Radia Configuration Server と同じコンピュータに常駐させることも、別のコンピュータに常駐させることもできます。Radia Integration Server を使用すると、任意のデータベース製品を選択し、ODBC を介して SQL データベースを構築および更新することができます。

Radia Integration Server をインストールする前に、使用するデータベースの ODBC ドライバをインストールしなければなりません。Radia Integration Server で使用するスペースのアロケート、ユーザー ID やパスワードの設定、といった管理タスクがどの程度必要になるかは、どのデータベースを選択するかによって異なります。

データベースで必要になるテーブルは、Radia Integration Server によって自動的に作成されます。

まとめ

- **Radia Inventory Manager** は、リモート コンピュータの設定情報を探索することで、検出結果に基づいた集中管理およびレポートを可能にします。
- **WBEM** によって収集されたすべての情報は、**Radia Inventory Manager** から利用できます。
- **Radia Inventory Management** は、**WBEM** ネームスペース (つまり、**WBEM** データベース) に対してクエリを行い、その結果を **Radia Configuration Server** に送り返します。
- **Radia Inventory Manager**、**AUDIT** ドメイン、および **Radia** が提供するサービスに関する詳細情報は、**HP OpenView** の **Web** サイトから入手できます。



Radia System Explorer のショートカットメニュー

Radia System Explorer のショートカットメニュー

Radia System Explorer では、Radia データベース コンポーネント (ドメイン、クラス、インスタンス) の追加、編集、名前の変更、および削除を行うことができます。また、インスタンス間を適切に接続するための機能も充実しています。

これらの機能は、**[Radia System Explorer]** ウィンドウで操作対象を右クリックしたときに表示されるショートカットメニューからアクセスできます。表示されるメニューの内容は、右クリックした対象によって異なります。下の表に、右クリックした対象によって、表示されるショートカットメニューがどのように異なるかを示します。

注意

[Prune Below] は、右クリックする対象の下位のツリーが展開されている場合にのみ表示されます。

表 A.1 ~ PRIMARY、ドメイン、クラスのショートカットメニュー

右クリックする対象	コンテキストメニュー
<ul style="list-style-type: none"> ツリー ビュー内の Primary ファイル 	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> ドメインをフィルタ(F)... ドメインを新規作成(N) 下位ノードを取り除く(P) リフレッシュ(R) </div>
<ul style="list-style-type: none"> ツリー ビュー内のすべてのドメイン 	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> クラスをフィルタ(F)... ドメインを新規作成(D) クラスを新規作成(C) 下位ノードを取り除く(P) リフレッシュ(H) </div>
<ul style="list-style-type: none"> ツリー ビュー内すべてのクラス 	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> インスタンスをフィルタ(F)... クラスを新規作成(C) クラスをコピー(C) クラスを削除(D) クラスを編集(E)... インスタンスを新規作成(I) 下位ノードを取り除く(P) リフレッシュ(H) </div>
<ul style="list-style-type: none"> [Radia System Explorer] ウィンドウのリスト ビュー内のすべてのクラス 	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> インスタンスをフィルタ(F)... クラスを新規作成(C) クラスをコピー(C) クラスを削除(D) クラスを編集(E)... </div>

表 A.2 ~ ADMIN インスタンスのコンテキストメニュー

インスタンス名	コンテキストメニュー
<ul style="list-style-type: none"> • Administrator Ids (ADMINID) • Administrator Types (ZADMIN) • Class Verify (ZVERC) • Connection Rules (ZCONNECT) • Console user Ids (CONUSEID) • Domain Verify (ZVERD) • File Verify (ZVERF) • Function Verify (ZVERFDCI) • Instance Verify (ZVERI) 	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>インスタンスを新規作成 (N)</p> <p>インスタンスをコピー (C)</p> <p>インスタンスの削除</p> <p>インスタンス名の変更 (R)</p> <p>インスタンスを編集 (E)...</p> <hr/> <p>接続を表示 (S)...</p> <hr/> <p>リフレッシュ (H)</p> <p>すべての接続を展開 (X)</p> <p>1 つのレベルを展開 (L)</p> </div>
<ul style="list-style-type: none"> • Attribute Verify (ZVERA) • Console Privileges (ZCONUSER) • Name Lists (32) (ZLIST32) • Name Lists (8) (ZLIST) 	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>インスタンスを新規作成 (N)</p> <p>インスタンスをコピー (C)</p> <p>インスタンスの削除</p> <p>インスタンス名の変更 (R)</p> <p>インスタンスを編集 (E)...</p> <hr/> <p>リフレッシュ (H)</p> <p>すべての接続を展開 (X)</p> <p>1 つのレベルを展開 (L)</p> </div>

表 A.3 ~ AUDIT インスタンスのコンテキストメニュー

インスタンス名	コンテキストメニュー
<ul style="list-style-type: none"> Application (ZSERVICE) 	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> インスタンスを新規作成(N) インスタンスをコピー(C) インスタンスの削除 インスタンス名の変更(R) インスタンスを編集(E)... サービスを最適化... 状態ファイルをビルド </div> <hr/> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> 接続を表示(S)... </div> <hr/> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> サブスクリバに通知(O) </div> <hr/> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> リフレッシュ(H) すべての接続を展開(O) 1 つのレベルを展開(L) </div> <p>注意: [Build State File] は、Radia Extensions for Windows Installer がインストールされている場合にのみ使用できます。</p>
<ul style="list-style-type: none"> Audit Packages (PACKAGE) 	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> インスタンスを新規作成(N) インスタンスの削除 インスタンス名の変更(R) インスタンスを編集(E)... コンポーネントを追加... </div> <hr/> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> パッケージをコピー... 新規アプリケーション ウィザード(W)... </div> <hr/> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> 接続を表示(S)... </div> <hr/> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> リフレッシュ(H) すべての接続を展開(O) 1 つのレベルを展開(L) </div>

表 A.3 ~ AUDIT インスタンスのコンテキスト メニュー

インスタンス名	コンテキスト メニュー
<ul style="list-style-type: none"> • Behavior Services (BEHAVIOR) • Desktop (DESKTOP) • File (FILE) • File Scanner (FILESCAN) • File Scanner Filters (FILTER) • Inventory Scanners (SCANNER) • Path (PATH) • WBEM (WBEM) 	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>インスタンスを新規作成(N) インスタンスをコピー(C) インスタンスの削除 インスタンス名の変更(R) インスタンスを編集(E)...</p> <hr/> <p>接続を表示(S)...</p> <hr/> <p>リフレッシュ(H) すべての接続を展開(O) 1 つのレベルを展開(L)</p> </div>
<ul style="list-style-type: none"> • Client Methods (CMETHOD) • Inventory Options (RIMOPTS) • Scheduling (TIMER) • Virtual Mgr Location (MGRVLOC) 	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>インスタンスを新規作成(N) インスタンスをコピー(C) インスタンスの削除 インスタンス名の変更(R) インスタンスを編集(E)...</p> <hr/> <p>リフレッシュ(H) すべての接続を展開(O) 1 つのレベルを展開(L)</p> </div>

表 A.4 ~ NOVADIGM インスタンスのコンテキストメニュー

インスタンス名	コンテキストメニュー
<ul style="list-style-type: none"> Application (ZSERVICE) 	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> インスタンスを新規作成(N) インスタンスをコピー(C) インスタンスの削除 インスタンス名の変更(R) インスタンスを編集(E)... サービスを最適化... 状態ファイルをビルド </div> <hr/> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> 接続を表示(S)... </div> <hr/> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> サブスクリバに通知(O) </div> <hr/> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> リフレッシュ(H) すべての接続を展開(O) 1つのレベルを展開(L) </div> <p>注意: [Build State File] は、Radia Extensions for Windows Installer がインストールされている場合にのみ使用できます。</p>
<ul style="list-style-type: none"> Application Packages (PACKAGES) 	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> インスタンスを新規作成(N) インスタンスの削除 インスタンス名の変更(R) インスタンスを編集(E)... コンポーネントを追加... </div> <hr/> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> パッケージをコピー... 新規アプリケーション ウィザード(W)... </div> <hr/> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> 接続を表示(S)... </div> <hr/> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> リフレッシュ(H) すべての接続を展開(O) 1つのレベルを展開(L) </div>
<ul style="list-style-type: none"> Desktop (DESKTOP) 	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> インスタンスを新規作成(N) インスタンスをコピー(C) インスタンスの削除 インスタンス名の変更(R) インスタンスを編集(E)... </div> <hr/> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> 接続を表示(S)... </div> <hr/> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> リフレッシュ(H) すべての接続を展開(O) 1つのレベルを展開(L) </div>

表 A.4 ~ NOVADIGM インスタンスのコンテキスト メニュー

インスタンス名	コンテキスト メニュー
<ul style="list-style-type: none"> File Resources (FILE) Path (PATH) Unix File Resources (UNIXFILE) 	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>インスタンスを新規作成(N) インスタンスをコピー(C) インスタンスの削除 インスタンス名の変更(R) インスタンスを編集(E)...</p> <hr/> <p>リフレッシュ(H) すべての接続を展開(O) 1 つのレベルを展開(L)</p> </div>
<ul style="list-style-type: none"> Maintenance Location (MAINTLOC) 	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>インスタンスを新規作成(N) インスタンスをコピー(C) インスタンスの削除 インスタンス名の変更(R) インスタンスを編集(E)...</p> <hr/> <p>リフレッシュ(H) すべての接続を展開(O) 1 つのレベルを展開(L)</p> </div>

表 A.5 ~ PATCH インスタンスのコンテキスト メニュー

インスタンス名	コンテキスト メニュー
<ul style="list-style-type: none"> Patch (PATCH) 	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>インスタンスを新規作成(N) インスタンスをコピー(C) インスタンスの削除 インスタンス名の変更(R) インスタンスを編集(E)...</p> <hr/> <p>リフレッシュ(H) すべての接続を展開(O) 1 つのレベルを展開(L)</p> </div>

表 A.6 ~ POLICY インスタンスのコンテキストメニュー

インスタンス名	コンテキストメニュー
<ul style="list-style-type: none"> • Countries (COUNTRY) • Mobile Device Config (MBLCONFIG) • Multicast (MULTICAST) • PDACONFIG (PDACONFIG) • Server Stagers (STAGER) 	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>インスタンスを新規作成(N) インスタンスをコピー(C) インスタンスの削除 インスタンス名の変更(R) インスタンスを編集(E)...</p> <hr/> <p>リフレッシュ(H) すべての接続を展開(O) 1つのレベルを展開(L)</p> </div>
<ul style="list-style-type: none"> • Departments (DEPT) • Workgroups (WORKGRP) 	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>インスタンスを新規作成(N) インスタンスをコピー(C) インスタンスの削除 インスタンス名の変更(R) インスタンスを編集(E)...</p> <hr/> <p>接続を表示(S)...</p> <hr/> <p>リフレッシュ(H) すべての接続を展開(O) 1つのレベルを展開(L)</p> </div>
<ul style="list-style-type: none"> • Users (USER) 	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>インスタンスを新規作成(N) インスタンスをコピー(C) インスタンスの削除 インスタンス名の変更(R) インスタンスを編集(E)...</p> <hr/> <p>接続を表示(S)...</p> <hr/> <p>リフレッシュ(H) すべての接続を展開(O) 1つのレベルを展開(L)</p> </div>

表 A.7 ~ SOFTWARE インスタンスのコンテキストメニュー

インスタンス名	コンテキストメニュー
<ul style="list-style-type: none"> Application (ZSERVICE) 	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>インスタンスを新規作成(N) インスタンスをコピー(C) インスタンスの削除 インスタンス名の変更(R) インスタンスを編集(E)... サービスを最適化... 状態ファイルをビルド</p> <hr/> <p>接続を表示(S)...</p> <hr/> <p>サブスクライバに通知(O)</p> <hr/> <p>リフレッシュ(H) すべての接続を展開(O) 1つのレベルを展開(L)</p> </div>
<ul style="list-style-type: none"> Application Packages (PACKAGE) 	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>インスタンスを新規作成(N) インスタンスの削除 インスタンス名の変更(R) インスタンスを編集(E)...</p> <hr/> <p>パッケージをコピー... 新規アプリケーション ウィザード(W)...</p> <hr/> <p>接続を表示(S)...</p> <hr/> <p>リフレッシュ(H) すべての接続を展開(O) 1つのレベルを展開(L)</p> </div>
<ul style="list-style-type: none"> Auto Run (EXECUTE) HTTP Proxy (HTTP) Install Options (INSTALL) Scheduling (TIMER) SD Dependencies (SDDEP) SRV4 Dependencies (SRV4DEP) 	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>インスタンスを新規作成(N) インスタンスをコピー(C) インスタンスの削除 インスタンス名の変更(R) インスタンスを編集(E)...</p> <hr/> <p>リフレッシュ(H) すべての接続を展開(O) 1つのレベルを展開(L)</p> </div>

表 A.7 ~ SOFTWARE インスタンスのコンテキストメニュー

インスタンス名	コンテキストメニュー
<ul style="list-style-type: none"> • Behavior Services (BEHAVIOR) 	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>インスタンスを新規作成 (N) インスタンスをコピー (C) インスタンスの削除 インスタンス名の変更 (R) インスタンスを編集 (E)...</p> <hr/> <p>接続を表示 (S)...</p> <hr/> <p>リフレッシュ (H) すべての接続を展開 (O) 1 つのレベルを展開 (L)</p> </div>
<ul style="list-style-type: none"> • Class Defaults (METACLAS) • Desktop (DESKTOP) • Dialog Services (DIALOG) 	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>インスタンスを新規作成 (N) インスタンスをコピー (C) インスタンスの削除 インスタンス名の変更 (R) インスタンスを編集 (E)...</p> <hr/> <p>接続を表示 (S)...</p> <hr/> <p>リフレッシュ (H) すべての接続を展開 (O) 1 つのレベルを展開 (L)</p> </div>
<ul style="list-style-type: none"> • File Resources (FILE) • Mac Alias (MACALIAS) • MSI Features (MSIFEATS) • MSI Resources (MSI) • Panel Service (PANEL) • Path (PATH) • SD Package (SD) • Solaris Package (SVR4) • Unix File Resources (UNIXFILE) 	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>インスタンスを新規作成 (N) インスタンスをコピー (C) インスタンスの削除 インスタンス名の変更 (R) インスタンスを編集 (E)...</p> <hr/> <p>リフレッシュ (H) すべての接続を展開 (O) 1 つのレベルを展開 (L)</p> </div>

表 A.7 ~ SOFTWARE インスタンスのコンテキストメニュー

インスタンス名	コンテキストメニュー
<ul style="list-style-type: none"> Registry Resources (REGISTRY) 	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p> インスタンスを新規作成(N) インスタンスをコピー(C) インスタンスの削除 インスタンス名の変更(R) インスタンスを編集(E)... </p> <hr/> <p> リフレッシュ(H) すべての接続を展開(O) 1 つのレベルを展開(L) </p> </div>
<ul style="list-style-type: none"> Version Groups (VGROUP) 	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>バージョン グループ エディタ(V)...</p> <hr/> <p> インスタンスを新規作成(N) インスタンスをコピー(C) インスタンスの削除 インスタンス名の変更(R) インスタンスを編集(E)... </p> <hr/> <p> リフレッシュ(H) すべての接続を展開(O) 1 つのレベルを展開(L) </p> </div>
<ul style="list-style-type: none"> Versions (VERSION) 	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p> インスタンスを新規作成(N) インスタンスをコピー(C) インスタンスの削除 インスタンス名の変更(R) インスタンスを編集(E)... </p> <hr/> <p> リフレッシュ(H) すべての接続を展開(O) 1 つのレベルを展開(L) </p> </div>

表 A.8 ~ SYSTEM インスタンスのコンテキストメニュー

インスタンス名	コンテキストメニュー
<ul style="list-style-type: none"> Application Manager (ZCOMMAND) 	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> コマンドを実行(O) </div> <hr/> インスタンスを新規作成(N) インスタンスをコピー(C) インスタンスの削除 インスタンス名の変更(R) インスタンスを編集(E)...
<ul style="list-style-type: none"> Consoles (ZCONSOLE) Methods (ZMETHOD) Radia Processes (PROCESS) SQLTABLE (SQLTABLE) System Files (ZFILE) 	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> インスタンスを新規作成(N) インスタンスをコピー(C) インスタンスの削除 インスタンス名の変更(R) インスタンスを編集(E)... </div> <hr/> リフレッシュ(H) すべての接続を展開(O) 1つのレベルを展開(L)

表 A.9 ~ ADMIN ドメイン インスタンスのコンテキストメニュー

クラス名	コンテキストメニュー
<ul style="list-style-type: none"> ADMIN ドメイン内のすべてのクラス インスタンス 	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> インスタンスを新規作成(N) インスタンスをコピー(C) 選択を削除(D) インスタンス名の変更(R) インスタンスを編集(E)... </div>

表 A.10 ~ AUDIT ドメイン インスタンスのコンテキスト メニュー

クラス名	コンテキスト メニュー
<ul style="list-style-type: none"> • Application (ZSERVICE) 	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p> インスタンスを新規作成 (N) インスタンスをコピー (C) 選択を削除 (D) インスタンス名の変更 (R) インスタンスを編集 (E)... 複数の状態ファイルをビルド サブスクライバに通知 (Q) </p> </div>
<ul style="list-style-type: none"> • Audit Packages (PACKAGE) 	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p> インスタンスを新規作成 (N) 選択を削除 (D) インスタンス名の変更 (R) インスタンスを編集 (E)... コンポーネントを追加... </p> <hr/> <p> パッケージをコピー... 新規アプリケーション ウィザード (W)... </p> </div>
<ul style="list-style-type: none"> • Behavior Service (BEHAVIOR) • Desktop (DESKTOP) • File (FILE) • File Scanner (FILESCAN) • Path (PATH) • WBEM (WBEM) 	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p> インスタンスを新規作成 (N) インスタンスをコピー (C) 選択を削除 (D) インスタンス名の変更 (R) インスタンスを編集 (E)... </p> </div>
<ul style="list-style-type: none"> • Client Methods (CMETHOD) • Inventory Options (RIMOPTS) • Inventory Scanners (SCANNER) • Scheduling (TIMER) • Virtual Mgr Location (MGRVLOC) 	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p> インスタンスを新規作成 (N) インスタンスをコピー (C) 選択を削除 (D) インスタンス名の変更 (R) インスタンスを編集 (E)... </p> </div>
<ul style="list-style-type: none"> • File Scanner Filters (FILTER) 	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p> インスタンスを新規作成 (N) インスタンスをコピー (C) 選択を削除 (D) インスタンス名の変更 (R) インスタンスを編集 (E)... </p> </div>

表 A.11 ~ NOVADIGM インスタンスのコンテキストメニュー

クラス名	コンテキストメニュー
<ul style="list-style-type: none"> Application (ZSERVICE) 	インスタンスを新規作成(N) インスタンスをコピー(C) 選択を削除(D) インスタンス名の変更(R) インスタンスを編集(E)... 複数の状態ファイルをビルド サブスクライバに通知(Q)
<ul style="list-style-type: none"> Application Packages (PACKAGE) 	インスタンスを新規作成(N) 選択を削除(D) インスタンス名の変更(R) インスタンスを編集(E)... パッケージをコピー... 新規アプリケーション ウィザード(W)...
<ul style="list-style-type: none"> Desktop (DESKTOP) 	インスタンスを新規作成(N) インスタンスをコピー(C) 選択を削除(D) インスタンス名の変更(R) インスタンスを編集(E)...
<ul style="list-style-type: none"> File Resources (FILE) Path (PATH) Unix File Resources (UNIXFILE) 	インスタンスを新規作成(N) インスタンスをコピー(C) 選択を削除(D) インスタンス名の変更(R) インスタンスを編集(E)...

表 A.12 ~ PATCH インスタンスのコンテキストメニュー

クラス名	コンテキストメニュー
<ul style="list-style-type: none"> Patch (PATCH) 	インスタンスを新規作成(N) インスタンスをコピー(C) 選択を削除(D) インスタンス名の変更(R) インスタンスを編集(E)...

表 A.13 ~ POLICY インスタンスのコンテキスト メニュー

クラス名	コンテキスト メニュー
<ul style="list-style-type: none"> POLICY ドメイン内のすべてのクラス インスタンス 	インスタンスを新規作成(N) インスタンスをコピー(C) 選択を削除(D) インスタンス名の変更(R) インスタンスを編集(E)...

表 A.14 ~ SOFTWARE インスタンスのコンテキスト メニュー

クラス名	コンテキスト メニュー
<ul style="list-style-type: none"> Application (ZSERVICE) 	インスタンスを新規作成(N) インスタンスをコピー(C) 選択を削除(D) インスタンス名の変更(R) インスタンスを編集(E)... 複数の状態ファイルをビルド サブスクライバに通知(O)
<ul style="list-style-type: none"> Application Packages (PACKAGE) 	インスタンスを新規作成(N) 選択を削除(D) インスタンス名の変更(R) インスタンスを編集(E)... パッケージをコピー... 新規アプリケーション ウィザード(W)...
<ul style="list-style-type: none"> Auto Run (EXECUTE) Class Defaults (METACLAS) Dialog Services (DIALOG) HTTP Proxy (HTTP) Install Options (INSTALL) Scheduling (TIMER) SD Dependencies (SDDEP) SVR4 Dependencies (SVR4DEP) 	インスタンスを新規作成(N) インスタンスをコピー(C) 選択を削除(D) インスタンス名の変更(R) インスタンスを編集(E)...

表 A.14 ~ SOFTWARE インスタンスのコンテキストメニュー

クラス名	コンテキストメニュー
<ul style="list-style-type: none"> • Behavior Services (BEHAVIOR) • Desktop (DESKTOP) • File Resources (FILE) • Mac Alias (MACALIAS) • MSI Features (MSIFEATS) • MSI Resources (MSI) • Panel Services (PANEL) • Path (PATH) • SD Package (SD) • Solaris Package (SVR4) • Unix File Resources (UNIXFILE) 	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> インスタンスを新規作成(N) インスタンスをコピー(C) 選択を削除(D) インスタンス名の変更(R) インスタンスを編集(E)... </div>
<ul style="list-style-type: none"> • Registry Resources (REGISTRY) 	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> インスタンスを新規作成(N) インスタンスをコピー(C) 選択を削除(D) インスタンス名の変更(R) インスタンスを編集(E)... レジストリ リソースを編集... </div>
<ul style="list-style-type: none"> • Version Groups (VGROUP) 	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> バージョン グループ エディタ(V)... インスタンスを新規作成(N) インスタンスをコピー(C) 選択を削除(D) インスタンス名の変更(R) インスタンスを編集(E)... </div>
<ul style="list-style-type: none"> • Versions (VERSION) 	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> インスタンスを新規作成(N) インスタンスをコピー(C) 選択を削除(D) インスタンス名の変更(R) インスタンスを編集(E)... </div>

表 A.15 ~ SYSTEM インスタンスのコンテキストメニュー

クラス名	コンテキストメニュー
<ul style="list-style-type: none"> • Application Manager (ZCOMMAND) 	コマンドを実行 (X) <hr/> インスタンスを新規作成 (N) インスタンスをコピー (C) 選択を削除 (D) インスタンス名の変更 (R) インスタンスを編集 (E)...
<ul style="list-style-type: none"> • Consoles (CONSOLE) • Methods (ZMETHOD) • Radia Processes (PROCESS) • SQLTABLE (SQLTABLE) • System Files (ZFILE) 	インスタンスを新規作成 (N) インスタンスをコピー (C) 選択を削除 (D) インスタンス名の変更 (R) インスタンスを編集 (E)...



コンポーネント インスタンスを修正する (非プロダクション環境限定)

この付録は以下を目的としています。

- ファイルタイプコンポーネントを追加、編集、置換する際に詳細なオプションを使用する場合の制約について理解する。
- ファイルの配布済みコンテンツは、**System Explorer** 内からダイナミックに編集できるようになる。
- パブリッシュしたパッケージ内のファイルに配信されたデータのコンテンツ全体は、**Radia System Explorer** を使用して置換することができるようになる。
- ソフトウェアパッケージを再パブリッシュすることなく、パッケージのファイルや動作のコンポーネントインスタンスが追加できるようになる。

重要な警告!

この機能は、プロダクション環境ではサポートされません。ユーザーが、プロダクション環境のクライアントにアクティブに配布されているパッケージでこの機能を使用した場合、当社はその結果に対していかなる責任も負うことはできません。このような環境でこの機能を使用すると、不必要なパッケージ更新が大量に配信されるおそれがあります。これは、パッケージの変更が検知されて、認可されているすべてのクライアントにその変更が配信されるためです。

下の「図 B.1 ~ コンポーネントの編集、置換、追加コマンドを含むインスタンス ショートカットメニュー」に、コンポーネント修正のショートカットメニュー コマンドを示します。

インスタンスを新規作成(N)
インスタンスをコピー(C)
インスタンスの削除
インスタンス名の変更(R)
インスタンスを編集(E)...

このコンポーネントを編集...
コンポーネントデータを置換
コンポーネントを追加

リフレッシュ(H)
すべての接続を展開(O)
1つのレベルを展開(L)

図 B.1 ~ コンポーネントの編集、置換、追加コマンドを含むインスタンス ショートカットメニュー

コマンドの使用例

下の「表 B.1 ~ 詳細なコンポーネント編集コマンドの使用例」に、どのような場面でこれらのオプションを使用してコンポーネント インスタンスを修正するかの例を示します。

表 B.1 ~ 詳細なコンポーネント編集コマンドの使用例

コマンド	一般的な使用例
[このコンポーネントを編集]	<ul style="list-style-type: none">ファイルに配布されたシリアル番号を変更する。readme ファイル、ドキュメント、スプレッド シート、ロゴ画像、PDF のコンテンツを編集する。
[コンポーネント データを置換]	<ul style="list-style-type: none">パッケージ内の既存ファイルのコンテンツ全体を、Radia データベース外部の別ファイルのコンテンツで置換する。
[コンポーネントを追加]	<ul style="list-style-type: none">別のパッケージ ファイルをテンプレートとして使用して、新しいファイル インスタンスをパッケージに追加する。

コンポーネントの追加、編集、置換コマンドにアクセスする

下の図に示すように、[オプション] ダイアログ ボックスの [詳細] タブにある [ファイル タイプ コンポーネントの追加、編集、および置換オプションを表示] チェック ボックスを使用します。

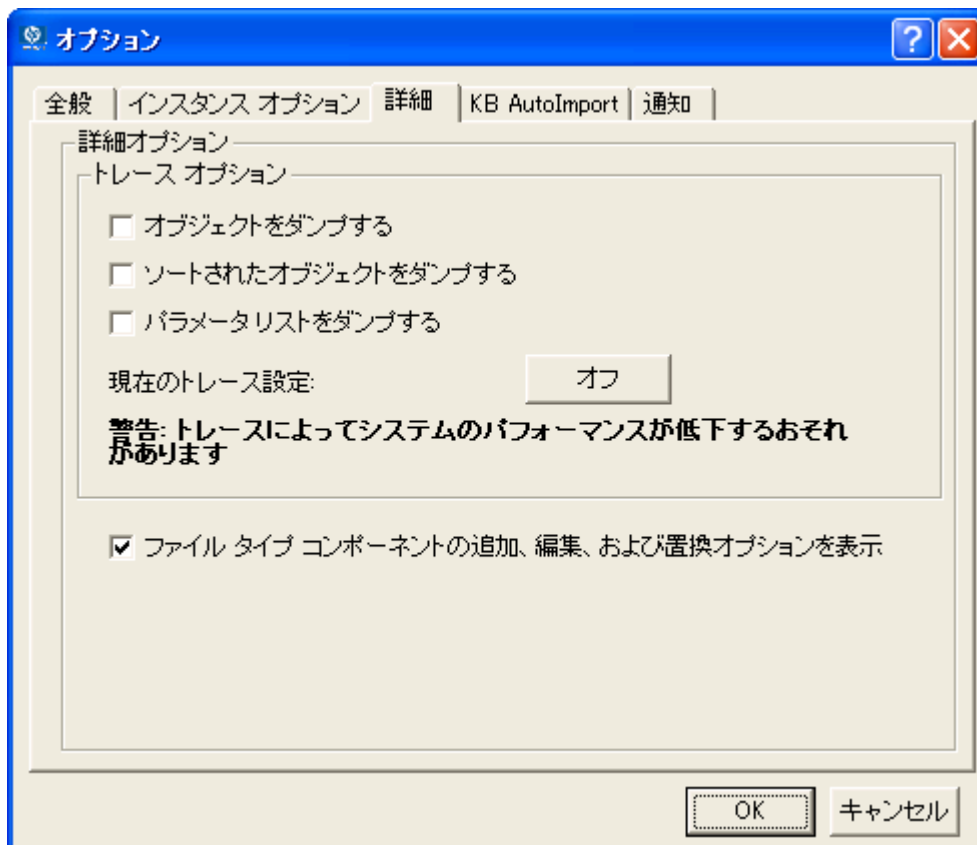


図 B.2 ~ [オプション] ウィンドウの [詳細] タブの [ファイル タイプ コンポーネントの追加、編集、および置換オプションを表示]

適用可能なインスタンスのショートカットメニューでこれらのコマンドを有効にするには、[ファイナルタイプコンポーネントの追加、編集、および置換オプションを表示]チェックボックスをオンにします(この設定は、必ず非プロダクション環境で実施してください)。

重要な警告!

この機能は、プロダクション環境ではサポートされません。ユーザーが、プロダクション環境のクライアントにアクティブに配布されているパッケージでこの機能を使用した場合、当社はその結果に対していかなる責任も負うことはできません。このような環境でこの機能を使用すると、不必要なパッケージ更新が大量に配信されるおそれがあります。これは、パッケージの変更が検知されて、認可されているすべてのクライアントにその変更が配信されるためです。

このオプションを有効にすると、コンポーネントインスタンスのショートカットメニューに以下のコンポーネント修正コマンドが表示されます。

インスタンスを新規作成(N)
 インスタンスをコピー(C)
 インスタンスの削除
 インスタンス名の変更(R)
 インスタンスを編集(E)...

このコンポーネントを編集...
 コンポーネントデータを置換
 コンポーネントを追加

リフレッシュ(H)
 すべての接続を展開(O)
 1つのレベルを展開(L)

図 B.3 ~ コンポーネントの編集、置換、追加コマンドが表示されたショートカットメニュー

コンポーネントを編集する

[このコンポーネントを編集] コマンドを使用すると、任意のエディタを選択して、ファイルインスタンスの配布済みコンテンツがダイナミックに修正できます。ファイルへの変更を保存すると、修正されたファイルが Radia Configuration Server に送信 (再転送) され、Radia データベース内のインスタンスが更新されます。

重要な警告!

この機能は、プロダクション環境ではサポートされません。ユーザーが、プロダクション環境のクライアントにアクティブに配布されているパッケージでこの機能を使用した場合、当社はその結果に対していかなる責任も負うことはできません。上記のような環境でこの機能を使用すると、不必要なパッケージ更新が大量に配信されるおそれがあります。これは、パッケージの変更が検知されて、認可されているすべてのクライアントにその変更が配信されるためです。

たとえば、Radia System Explorer でパッケージ化および表現したコンポーネントインスタンスの配布可能コンテンツが編集できます。編集後のファイルは、必ず元のファイルと同じ名前で作成する必要があります。パッケージ内の既存のファイルは、編集したファイルによって直ちに置換されます。パッケージは Radia System Explorer によって自動的にパブリッシュされるため、手動で再パブリッシュする必要はありません。

元のコンポーネントのコンテンツは、Radia System Explorer には保持されません。

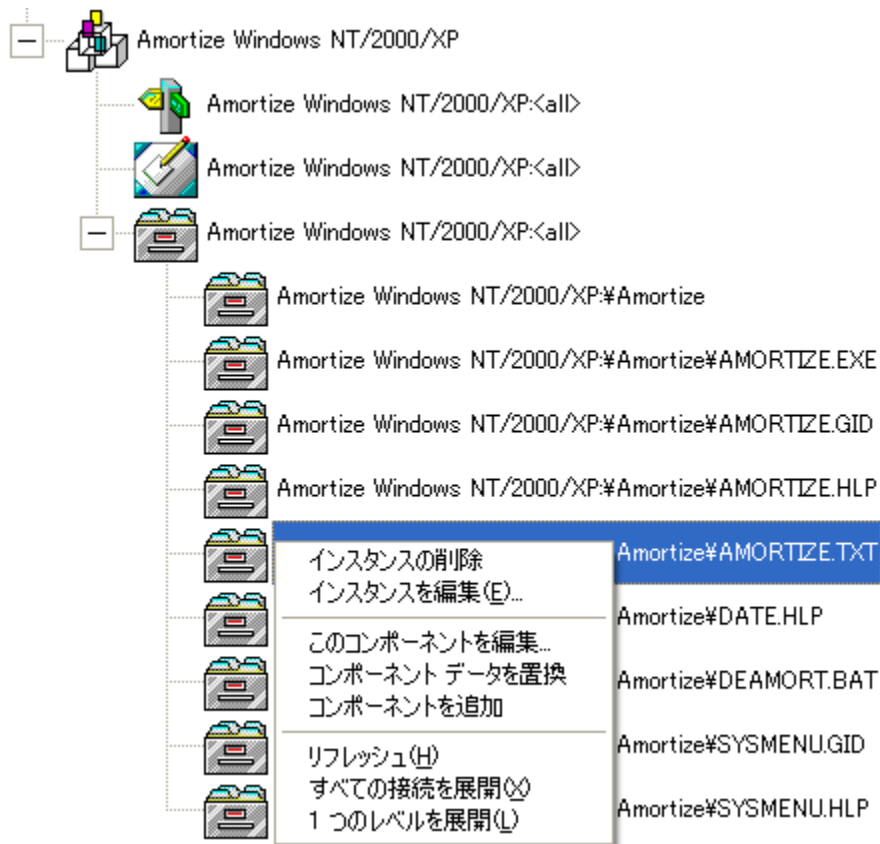
パッケージの作成と転送については、『Radia Application Manager ガイド』を参照してください。

コンポーネントを編集するには

1. Radia System Explorer で [オプション] ウィンドウの [詳細] タブに移動し、[ファイルタイプ コンポーネントの追加、編集、および置換オプションを表示] チェック ボックスをオンにします。
2. Radia データベースで、変更したいコンテンツを含むソフトウェア パッケージに属すファイルインスタンスを探します。

3. ツリービューでインスタンスを右クリックします。コンテキストメニューが表示されます。

下の図B.4～修正するファイルインスタンスを右クリックしてショートカットメニューを表示した状態は、Amortize NT/2000/XP パッケージ内の Amortize.TXT readme ファイルインスタンスのコンテキストメニュー例です。コマンドとして、[このコンポーネントを編集]、[コンポーネントデータを置換]、および[コンポーネントを追加]が表示されています。



図B.4～修正するファイルインスタンスを右クリックしてショートカットメニューを表示した状態

4. ショートカット メニューの [このコンポーネントを編集] をクリックします。
[AMORTIZE.TXT のエディタ セレクタ] ダイアログ ボックスが表示されます。このダイアログ ボックスを使用して、このファイルの修正に常に使用するエディタを選択します。たとえば、AMORTIZE.TXT を Notepad.exe で開くには、[メモ帳] をダブルクリックします。

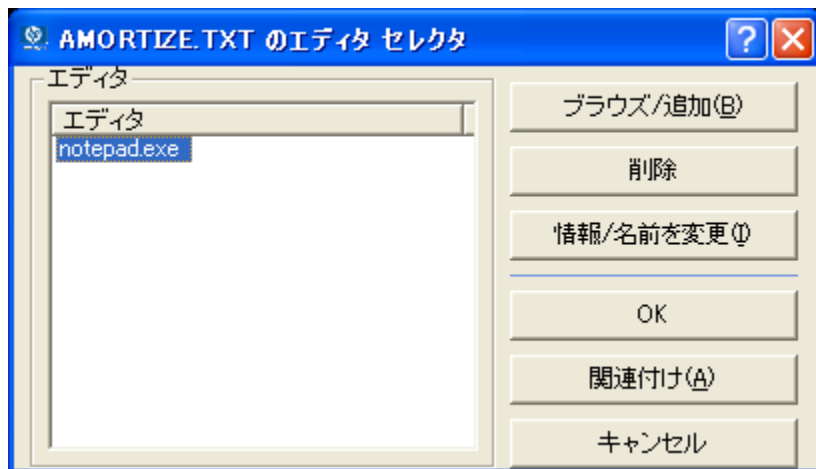


図 B.5 ~ [エディタ セレクタ] ダイアログ ボックス

このダイアログ ボックスの使用方法については、298 ページの「[エディタ セレクタ] ダイアログ ボックスを使用する」を参照してください。

5. [エディタ] ボックスでエディタをダブルクリックします。
選択したエディタが起動し、選択していたファイル コンポーネント インスタンスが開きます。
6. ファイルのコンテンツに必要な変更を加え、元のファイルと同じ名前で保存します。

警告

ファイルを別の名前で保存すると、Radia System Explorer で選択したファイルに加えられた変更は元のファイルには反映されません。

7. エディタを閉じます。

8. 必要に応じて、[OK] をクリックしてインスタンスへの変更を保存し [エディタ セレクタ] ダイアログ ボックスを閉じます。

[ファイルの再転送] ダイアログ ボックスが表示され、データベースで選択したインスタンスへの変更を確定するかどうかを尋ねるダイアログ ボックスが表示されます。

- 変更を保存し、変更したファイルのパブリッシュとデータベースへの転送を実行する場合は [はい] をクリックします。
- 変更内容を破棄し、編集セッションを終了する場合は [いいえ] をクリックします。この場合、データベース内のインスタンスは変更されません。

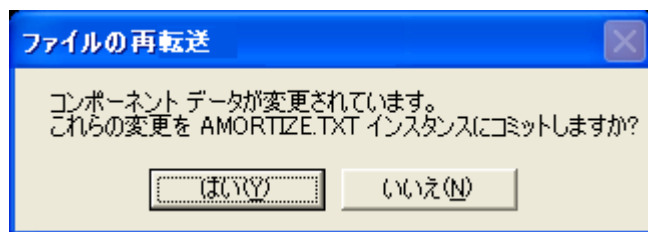


図 B.6 ~ コンポーネント データの編集を確定するための [ファイルの再転送] ダイアログ ボックス

変更を確定すると、ZRSCDATE、ZRSCTIME、および ZRSCSIZE のインスタンス属性に、編集後のファイルのサイズと日付が反映されます。

名前	属性の説明	値
ZRSCNAME	Resource Name	&ZRSCFIL
ZRSCFIL	Resource File Name	%Amortize%AMORTIZE.TXT
ZRSCMO	Mandatory/Optional on Client [M/O]	O
ZRSCVERFY	Verify Resource File on Connect	Y
ZRSCCONF	Confirm File Download [Y/N]	Y
ZRSCRASH	DOS File Attribute [R/A/S/H]	N
ZRSCSTYP	Server File Type [BINARY/TEXT]	BINARY
ZRSCMEM	PDS Member Name	
ZRSCDATE	Resource Date Stamp - From Promote	20050623
ZRSCTIME	Resource Time Stamp - From Promote	15:05:17
ZRSCSIZE	Resource Size - From Promote	00000001155
ZRSCVERS	Resource Version - From Promote	
ZRSCCSTA	Client File Status	999
ZRSCCKPT	Resource Checkpoint	
ZRSCCRC	Resource CRC	
ZRSCRSTR	Restart [Y/N]	N
ZRSCOBJN	Persistent Object Name	

図 B.7 ~ 編集セッションでの変更を反映したファイルのインスタンス属性 (日付、時刻、およびサイズ)

[エディタ セレクタ] ダイアログ ボックスを使用する

[エディタ セレクタ] ダイアログ ボックスを使用すると、ダイアログ ボックス名に名前が表示されているファイルの編集に常に使用するエディタが選択できます。

エディタを選択するには、[エディタ] リストのいずれかのエントリを選択します。また、[関連付け] をクリックして、Windows でそのファイル拡張子に関連付けられているデフォルトのエディタを使用することもできます。

[エディタ] リストに表示されるエディタを追加、削除、またはその名前を変更するには、右上にある 3 つのボタンを使用します。

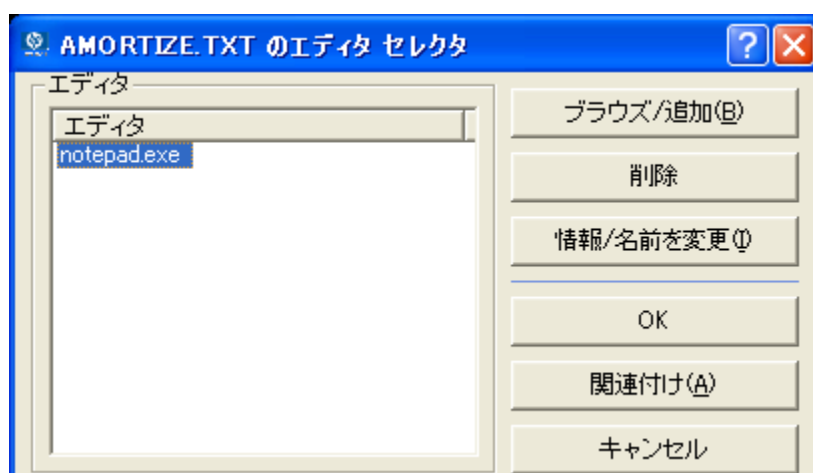


図 B.8 ~ コンポーネントの編集で使用する [エディタ セクタ] ダイアログ ボックス

下の「表 B.2 ~ [エディタ セクタ] ダイアログ ボックスのボタン」に、[エディタ セクタ] ダイアログ ボックスの各ボタンのアクションをまとめます。

表 B.2 ~ [エディタ セクタ] ダイアログ ボックスのボタン

ボタン	アクション
[ブラウザ/追加]	[ファイルをブラウザ] ダイアログ ボックスが表示されます。このダイアログ ボックスを使用すると、エディタのリストに追加するプログラムが選択できます。[ブラウザ] ダイアログ ボックスで選択したエントリは、[エディタ] リストで強調表示していたエントリのすぐ下に追加されます。
[削除]	選択した (強調表示されている) プログラムが [エディタ] リストから削除されます。
[情報/名前を変更]	現在選択しているエディタ プログラムのプログラム名やパスを記載したダイアログ ボックスが表示されます。このダイアログ ボックスを使用すると、[エディタ] リストに表示される簡略名をそのプログラムに割り当てることができます。
[OK]	選択した (タイトル バーに名前が表示されている) ファイルを、現在強調表示されているエディタで開きます。 [エディタ] リストのエントリをダブルクリックしてファイルを開くこともできます。
[関連付け]	選択した (タイトル バーに名前が表示されている) ファイルを、Windows でそのファイルタイプに関連付けられているデフォルトのエディタで開きます。関連付けがない場合は、再び [エディタ セクタ] ダイアログ ボックスが表示され、そこでエディタを指定するか、編集をキャンセルすることができます。
[キャンセル]	選択したコンポーネントまたはパッケージに変更を加えずに [このコンポーネントを編集] このコンポーネントをへんしゅう コマンドをキャンセルします。

コンポーネント データを置換する

[コンポーネント データを置換] コマンドは、パッケージ化済みファイルのコンテンツ全体を、データベース外部の既存のファイルのコンテンツで完全に置換する必要がある場合に使用します。たとえば、新しい **Readme.TXT** があり、そのコンテンツ全体を置換したいとします。その場合はまず、改訂後の **Readme.TXT** ファイルを **Radia System Explorer** の外部に準備します。次に、**Radia System Explorer** 内から [コンポーネント データを置換] コマンドを使用して、既存の **Readme.TXT** のコンテンツを新しい **Readme.TXT** のコンテンツで置換します。[コンポーネント データを置換] コマンドを使用した場合は、パッケージ化済みファイルの配信済みコンテンツのみが置換され、そのプロパティは置換されません。

重要な警告!

この機能は、プロダクション環境ではサポートされません。ユーザーが、プロダクション環境のクライアントにアクティブに配布されているパッケージでこの機能を使用した場合、当社はその結果に対していかなる責任も負うことはできません。上記のような環境でこの機能を使用すると、不必要なパッケージ更新が大量に配信されるおそれがあります。これは、パッケージの変更が検知されて、認可されているすべてのクライアントにその変更が配信されるためです。

"すべての" コンポーネント データを置換するには

1. **Radia** データベース内のパッケージ化済みコンポーネントを置換するため、その置換データを表すコンテンツを格納したファイルを **Radia System Explorer** の外部で準備します。準備するファイルの名前は、どのような名前でも構いません。

警告

[コンポーネント データを置換] コマンドを使用すると、**Radia System Explorer** から選択したファイルのデータ コンテンツ全体が、準備したファイルのコンテンツによって置換されます。この手順を進める前に、準備したファイルのコンテンツを十分に検証してください。

2. **Radia System Explorer** で [オプション] ウィンドウの [詳細] タブに移動し、[ファイルタイプ コンポーネントの追加、編集、および置換オプションを表示] チェック ボックスをオンにします。
3. **Radia** データベースで、置換したいデータを格納するソフトウェア パッケージのファイル インスタンスを探します。

4. ツリービューでインスタンスを右クリックします。コンテキストメニューが表示されます。

下の図は、Amortize NT/2000/XP パッケージ内の Amortize.TXT readme ファイルインスタンスのコンテキストメニューです。コマンドとして、[このコンポーネントを編集]、[コンポーネントデータを置換]、および [コンポーネントを追加] が表示されています。

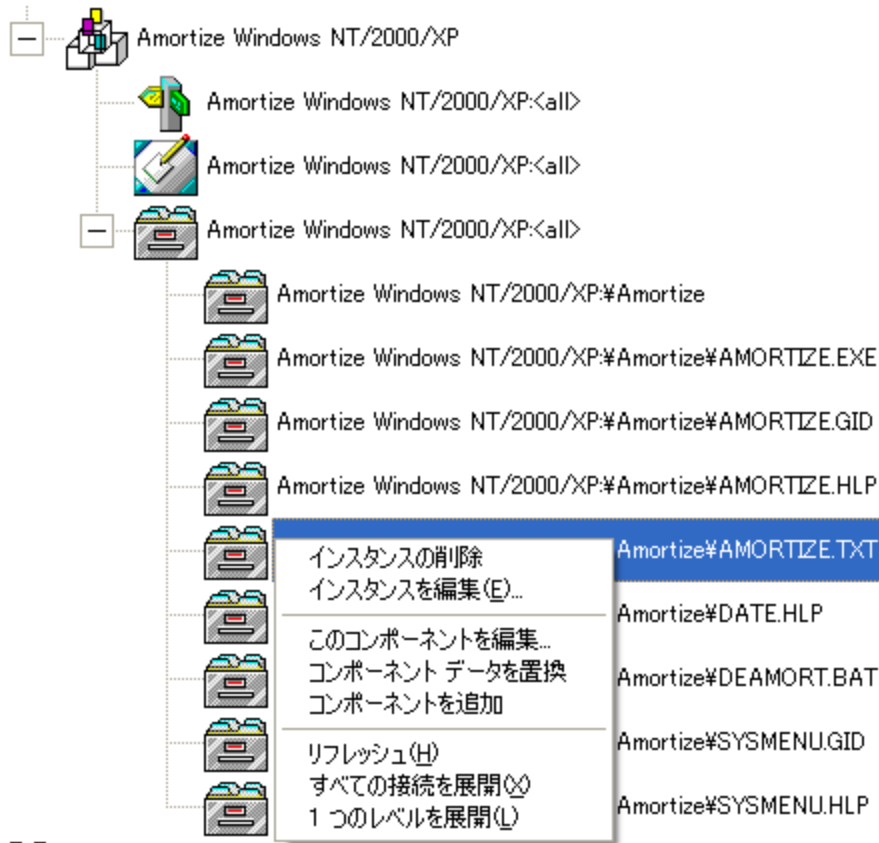


図 B.9 ~ データを置換するファイルインスタンスを右クリックして、ショートカットメニューの [コンポーネントデータを置換] をクリックする

5. ショートカットメニューの [コンポーネントデータを置換] をクリックします。

Windows の標準の [ファイルを開く] ダイアログボックスが表示されます。

- 準備したファイル (Radia System Explorer から選択したファイルのデータを置換するためのコンテンツを格納するファイル) の格納場所に移動します。
たとえば、AMORTIZE2.TXT という名前のファイルを準備した場合であれば、下の図のようにその格納場所に移動します。

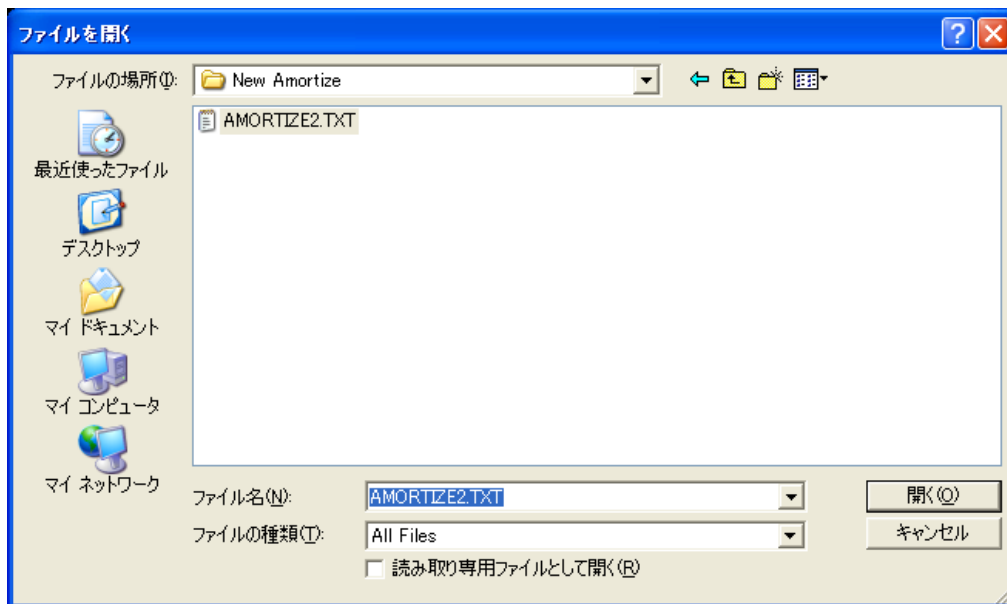


図 B.10 ~ AMORTIZE.TXT のデータを置換するコンテンツを格納したファイルを選択する

- 置換データを格納するファイルを選択して [開く] をクリックします。
データの置換を確認するため、次のようなダイアログ ボックスが表示されます。

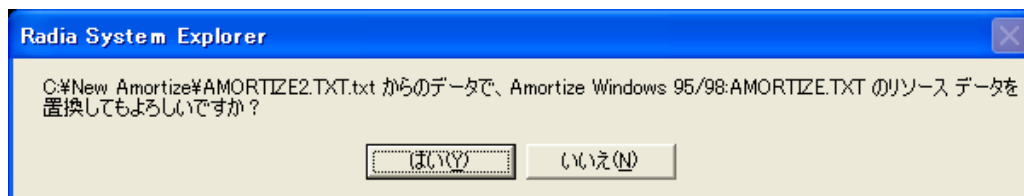


図 B.11 ~ コンポーネント内のデータの置換を確認するダイアログ ボックス

8. データを置換する場合は **[はい]** を、データの置換を中止する場合は **[いいえ]** をクリックします。
- **[はい]** をクリックすると、データのコンテンツ全体が選択したファイルのデータで置換され、そのパッケージが自動的に再パブリッシュされます。
ZRSCDATE、ZRSCETIME、ZRSCSIZE のインスタンス属性には、298 ページの「[図B.7 ~ 編集セッションでの変更を反映したファイルのインスタンス属性\(日付、時刻、およびサイズ\)](#)」で示したように、新しいファイルのサイズと日付が反映されます。
 - **[いいえ]** をクリックすると、置換コマンドがキャンセルされます。

コンポーネントを追加する

[コンポーネントを追加] コマンドは、ファイル コンポーネントおよび動作コンポーネントに対してのみ使用できます。ファイルは常に所有するパッケージに属しているため、多くの場合、追加コマンドはパッケージの接続から実行することになります。新しいファイルを追加するには、既存のパブリッシュ済みファイルのプロパティをコピーします。ファイルをまったくゼロの状態から (つまり、**Radia Packager** から転送されていないファイルから) 作成することはできません。

重要な警告!

この機能は、プロダクション環境ではサポートされません。ユーザーが、プロダクション環境のクライアントにアクティブに配布されているパッケージでこの機能を使用した場合、当社はその結果に対していかなる責任も負うことはできません。上記のような環境でこの機能を使用すると、不必要なパッケージ更新が大量に配信されるおそれがあります。これは、パッケージの変更が検知されて、認可されているすべてのクライアントにその変更が配信されるためです。

新しいファイルを追加するには、テンプレートとして使用するインスタンスを選択します。新しいインスタンスのパスは、テンプレートの **LOCATION** 変数から継承されます。テンプレートを選択したら、そのテンプレートを右クリックしてコンテキストメニューの **[コンポーネントを追加]** をクリックします。**[ファイルを開く]** ダイアログ ボックスが表示され、パッケージに追加するファイルが選択できます。最後の確認ダイアログでは、必要に応じてプロセスを中止することもできます。**[はい]** をクリックした場合は、**[ファイルを開く]** ダイアログ ボックスで選択したファイルが転送されます。これで、パッケージに新しいファイルが格納されたこととなります。

コンポーネントをパッケージに追加するには

1. Radia System Explorer で [オプション] ウィンドウの [詳細] タブに移動し、[ファイル タイプ コンポーネントの追加、編集、および置換オプションを表示] チェック ボックスをオンにします。
2. 追加するコンポーネントのテンプレートとして使用するため、適切な LOCATION 変数が格納されているソフトウェア パッケージのファイル インスタンスを探します。
3. ツリー ビューで、そのテンプレート ファイルのインスタンスを右クリックします。コンテキスト メニューが表示されます。

下の図は、Amortize NT/2000/XP パッケージ内の Amortize.TXT readme ファイル インスタンスのコンテキスト メニューです。コマンドとして、[このコンポーネントを編集]、[コンポーネント データを置換]、および [コンポーネントを追加] が表示されています。

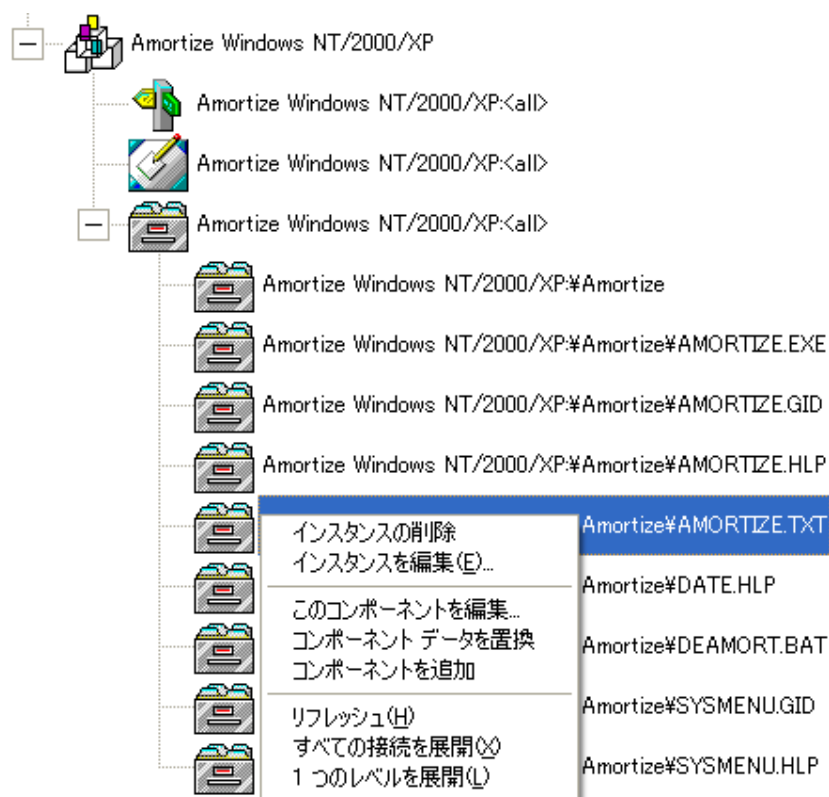


図 B.12 ~ 追加するコンポーネントのロケーションのテンプレートとして使用するファイル インスタンスを右クリックし、ショートカット メニューの [コンポーネントを追加] をクリックする

4. ショートカットメニューの[コンポーネントを追加]をクリックします。

Windows の標準の[ファイルを開く]ダイアログボックスが表示されます。

5. パッケージに追加するために準備したファイルの格納場所に移動します。

たとえば、AMORTIZE2.TXT という名前のファイルを準備した場合であれば、下の図のようにその格納場所に移動します。ここでは、このコンポーネントをパッケージに追加します。

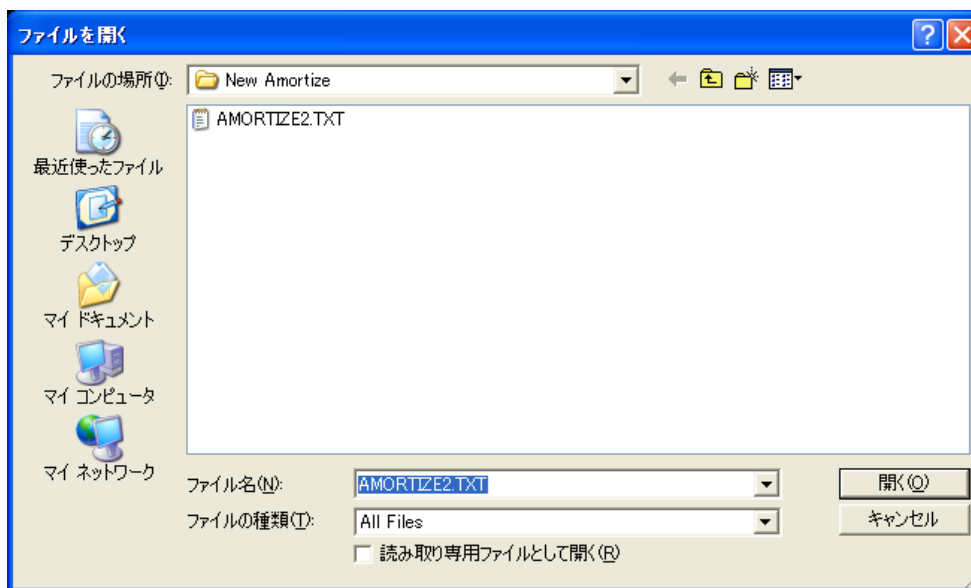


図 B.13 ~ パッケージに追加するファイルの格納場所に移動した状態

6. テンプレート ファイルと同じ LOCATION 変数を格納するファイルが追加するには、準備したファイルを選択して [開く] をクリックします。
ファイルの追加を確認するため、次のようなダイアログ ボックスが表示されます。

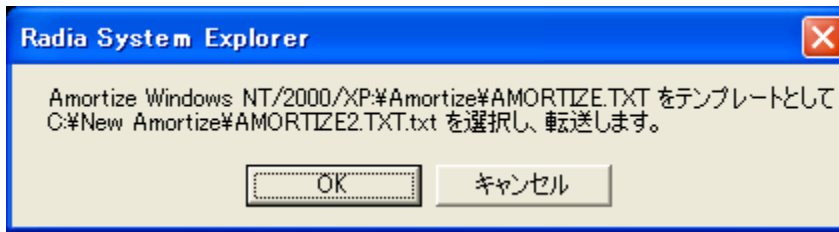


図 B.14 ~ コンポーネント インスタンスの追加を確認するダイアログ ボックス

7. [OK] または [キャンセル] をクリックします。
 - [OK] をクリックすると、追加したファイルが転送され、パッケージが再パブリッシュされます。
追加したファイルの LOCATION のインスタンス属性には、テンプレート ファイルのロケーションが反映されます。
 - [いいえ] をクリックすると、[コンポーネントを追加] コマンドがキャンセルされます。

まとめ

- 詳細なオプションを使用すると、*非プロダクション環境*でのみ、ファイルタイプ コンポーネントを追加、編集、置換することができます。
- **[このコンポーネントを編集]** コマンドを使用すると、パッケージ全体を再パブリッシュすることなく、**Radia System Explorer** 内からコンポーネントの配布済みコンテンツをダイナミックに修正することができます。
- **[コンポーネント データを置換]** コマンドを使用すると、コンポーネント インスタンスのすべての配布済みコンテンツを、**Radia** データベース外部に準備したファイルのコンテンツで置換することができます。このコマンドを使用した場合も、パッケージを再パブリッシュする必要はありません。
- **[コンポーネントを追加]** コマンドを使用すると、ファイルの転送とパッケージのパブリッシュを行うことなく、パッケージにインスタンスを追加することができます。追加するコンポーネントのパス **LOCATION** の設定には、既存のインスタンスをテンプレートとして使用することができます。

コンポーネント インスタンスを修正する (非プロダクション環境限定)

リスト



図 2.1 ~ Radia System Explorer の起動	23
図 2.2 ~ [Radia System Explorer のセキュリティ情報] ダイアログ ボックス	23
図 2.3 ~ [Radia System Explorer] ウィンドウ	24
図 2.4 ~ 枠のクリック アンド ドラッグによるウィンドウの表示の操作	25
図 2.5 ~ [ファイル] メニュー	26
図 2.6 ~ [編集] メニュー	27
図 2.7 ~ [ビュー] メニュー	28
図 2.8 ~ [ウィンドウ] メニュー	29
図 2.9 ~ [ヘルプ] メニュー	30
図 2.10 ~ [Radia System Explorer] ツール バー	31
図 2.11 ~ Radia System Explorer の [オプション] ダイアログ ボックスの [全般] タブ	32
図 2.12 ~ [オプション] ダイアログ ボックスの [インスタンス オプション] タブ	35
図 2.13 ~ [オプション] ダイアログ ボックスの [詳細] タブ	38
図 2.14 ~ [オプション] ダイアログ ボックスの [KB AutoImport] タブ	40
図 2.15 ~ [オプション] ダイアログ ボックスの [通知] タブ	42
図 3.1 ~ Radia データベースの LICENSE ファイルと PRIMARY ファイル	46
図 3.2 ~ ツリー ビュー構造の表示	48
図 3.3 ~ マイナス記号をクリックして下位レベルのツリーを閉じたところ	49
図 3.4 ~ コンポーネントの下、下位ノードを取り除く機能（以前に開いたノードの履歴を 破棄する）	50
図 3.5 ~ ツリー ビューのノードとその下位ノードの表示を再ビルドするリフレッシュ機能	51
図 3.6 ~ 複合名を使用した多数のインスタンスの管理	53
図 3.7 ~ Application クラスの BASE_INSTANCE_ の例	54

図 3.8 ~ [ドメインの作成] ダイアログ ボックス	55
図 3.9 ~ [クラスのコピー] ダイアログ ボックス	56
図 3.10 ~ [クラスのコピー時にクラス エディタを開く] オプション選択時に表示される [クラス編集] ダイアログ ボックス	57
図 3.11 ~ [クラスの編集の確認] ダイアログ ボックス	58
図 3.12 ~ [クラスの作成] ダイアログ ボックス	59
図 3.13 ~ [クラス編集] ダイアログ ボックス	60
図 3.14 ~ [クラスの編集の確認] ダイアログ ボックス	61
図 3.15 ~ [クラス編集] ダイアログ ボックス	62
図 3.16 ~ [Y/N] が最後に付加された ZSVCCONF 変数の [属性の説明] (フラグ属性であることが示さ れる)	69
図 3.17 ~ 角かっこで囲まれたスラッシュ区切りの複数の単一文字オプションが最後に付加された [属 性の説明] (フラグ セットが表示される)	70
図 3.18 ~ 角かっこで囲まれたスラッシュ区切りの複数のオプションが最後に付加された [属性の説明] (属性の編集にドロップダウン リストが表示される)	71
図 3.19 ~ [復元の確認] ダイアログ ボックス	71
図 3.20 ~ 空の属性フィールドに対する警告のダイアログ ボックス	72
図 3.21 ~ [クラスの編集の確認] ダイアログ ボックス	72
図 3.22 ~ クラスを削除するときの [削除の確認] ダイアログ ボックス	73
図 3.23 ~ [インスタンスのコピー] ダイアログ ボックス	74
図 3.24 ~ [インスタンスの作成] ダイアログ ボックス	75
図 3.25 ~ [インスタンス編集] ダイアログ ボックス	76
図 3.26 ~ [インスタンスの編集の確認] ダイアログ ボックス	77
図 3.27 ~ 複数インスタンスの編集の開始	78
図 3.28 ~ [複数のインスタンスを編集] を選択	79
図 3.29 ~ [複数のインスタンスを編集] ダイアログ ボックス	79
図 3.30 ~ [リセット] ボタンに変わった [すべて変更]	80
図 3.31 ~ 現在の [インスタンス編集] ダイアログ ボックス セッションでは強調表示されている変数に 変更が行われていないことを示す [すべて変更] ボタン	81
図 3.32 ~ [復元の確認] メッセージ	81
図 3.33 ~ [複数のインスタンスの編集の確認] ダイアログ ボックス	82
図 3.34 ~ [インスタンス名の変更] ダイアログ ボックス	83
図 3.35 ~ [削除の確認] ダイアログ ボックス	84
図 4.1 ~ PRIMARY.POLICY.Users クラス	88

図 4.2 ~ 組織のポリシーの作成	90
図 4.3 ~ 新しいユーザーを作成するために、Users クラスを右クリックして表示されたショートカットメニューで [インスタンスを新規作成] を選択したところ	91
図 4.4 ~ [インスタンスの作成] ダイアログ ボックス	92
図 4.5 ~ [インスタンスの作成] ダイアログ ボックスへの入力	92
図 4.6 ~ Users クラスに追加された新しいユーザー (esb1)	93
図 4.7 ~ Application Packages (PACKAGE) クラス	94
図 4.8 ~ 出荷時の Application (ZSERVICE) クラスのサンプル インスタンス	95
図 4.9 ~ Drag & View サービスとその接続の例	96
図 4.10 ~ 別のパッケージへの接続の設定が可能な各変数	97
図 4.11 ~ ショートカットメニューの [インスタンスを新規作成] を選択したところ	99
図 4.12 ~ [インスタンスの作成] ダイアログ ボックス	100
図 4.13 ~ 新しく作成された Departments (DEPT) クラスの Sales 部門インスタンス	100
図 4.14 ~ 接続できないことを示す斜線付きの丸いカーソル	102
図 4.15 ~ 接続できることを示すペーパークリップのカーソル	102
図 4.16 ~ 次の設定可能な接続を表示する [接続属性の選択] ダイアログ ボックス	103
図 4.17 ~ [接続可能なクラスを表示する] ダイアログ ボックスを表示するために [接続を表示] を選択したところ	104
図 4.18 ~ 接続可能なクラスを表示するダイアログ ボックス	105
図 4.19 ~ 接続可能なクラスに対するドメインのリスト	106
図 4.20 ~ 接続が許可されないことを示す警告メッセージ	106
図 4.21 ~ 展開した PRIMARY.POLICY.Users (USER) クラス	108
図 4.22 ~ ショートカットメニューの [接続を表示] を選択したところ	109
図 4.23 ~ [接続可能なクラスを表示するドメイン] ダイアログ ボックス	110
図 4.24 ~ 表示された Departments (DEPT) クラスのすべてのインスタンス	111
図 4.25 ~ [インスタンスの接続] ダイアログ ボックス	112
図 4.26 ~ FILE インスタンスを PACKAGE インスタンスにドラッグしたときに表示される [接続属性の選択] ダイアログ ボックス	113
図 4.27 ~ ドロップダウンリストの [SOFTWARE] を選択したところ	115
図 4.28 ~ リスト ビューの ZSERVICE	116
図 4.29 ~ Amortize をクリックして Departments (DEPT) の Sales インスタンスにドラッグアンドドロップしたところ	117
図 4.30 ~ Sales 部門すべてのユーザーが Amortize サービスを受信可能	118
図 5.1 ~ PACKAGE クラスの GS-Calc インスタンス	123

図 5.2 ~ ショートカット メニューの [新規アプリケーション ウィザード] を選択した状態.....	124
図 5.3 ~ [新規アプリケーション ウィザード] ダイアログ ボックス.....	125
図 5.4 ~ [アプリケーションのターゲット タイプ] ダイアログ ボックス	128
図 5.5 ~ [アプリケーション プロパティ] ダイアログ ボックスの各フィールドにアプリケーション プロパティを入力した状態.....	129
図 5.6 ~ アプリケーション レベルのイベントを Radia Configuration Server にレポートするための [アプリケーション レベルのイベントレポート] ダイアログ ボックス.....	131
図 5.7 ~ [アプリケーションの概要] ダイアログ ボックスに、新規アプリケーション ウィザードで指定した項目が表示されている状態.....	132
図 5.8 ~ アプリケーションが正常に追加された場合に表示されるメッセージ	134
図 5.9 ~ 作成したサービスに GS-Calc パッケージ (強調表示されているアイコン) が追加された状態134	134
図 5.10 ~ 新規アプリケーション ウィザードで [MSI Basic Behaviors] が表示されている状態	135
図 5.11 ~ [インスタンスの作成] ダイアログ ボックス	137
図 5.12 ~ バージョン グループ編集のダイアログ ボックス.....	138
図 5.13 ~ バージョン グループ編集ダイアログ ボックスで [指定した日時以降にアクティブにする] チェック ボックスをオンにし、日付および時刻コントロールを表示した状態	140
図 5.14 ~ [バージョンの作成] ダイアログ ボックス.....	142
図 5.15 ~ [バージョン エディタ] ダイアログ ボックス	143
図 5.16 ~ [Amortize Windows 95/98] パッケージと Hello World バージョン グループの関連付け .144	144
図 5.17 ~ 作成されたバージョン インスタンスが [割り当てられていないバージョン] ボックスに表示されている状態	145
図 5.18 ~ バージョン グループ編集のダイアログ ボックスで [Version 1] が [Hello World] に割り当てられた状態	146
図 5.19 ~ 配布用に選択したバージョン ([Version 2]) が [バージョン グループのレイアウト] ボックスの一覧で強調表示されている状態	147
図 5.20 ~ バージョン グループ クラスのショートカット メニュー.....	149
図 5.21 ~ PRIMARY ファイルの PATCH クラス.....	150
図 5.22 ~ SOFTWARE ドメインの BLDTEST パッケージ.....	153
図 5.23 ~ ZSERVICE のショートカット メニュー	154
図 5.24 ~ BLD_CREATE ZSERVICE インスタンス.....	154
図 5.25 ~ BLD_CREATE ZSERVICE インスタンス.....	155
図 5.26 ~ BLD_CREATE ZSERVICE で [サービスを最適化] を選択した状態	156
図 5.27 ~ サービス最適化ウィザードの [使用できるパッケージ] ダイアログ ボックス.....	157
図 5.28 ~ 最適化するパッケージの選択	158
図 5.29 ~ [接続元] で指定したパッケージとの比較対象となるパッケージの選択.....	159

図 5.30 ~ 完了したサービス最適化ウィザード.....	160
図 5.31 ~ [ファイルと進行状況] ダイアログ ボックス	161
図 5.32 ~ パッチ ビルド用に有効になった各ボタン.....	163
図 5.33 ~ [ステータス] カラムの情報を自動的にリフレッシュする間隔 (分) を入力する [自動リフレッシュ タイマ] ダイアログ ボックス	164
図 5.34 ~ [サービスの最適化] ダイアログ ボックスで、パッチをビルドするファイルを選択した状態.....	165
図 5.35 ~ ビルドの確認用ダイアログ ボックス.....	166
図 5.36 ~ PATCH ドメインの PATCH クラスに格納されたパッチ	167
図 5.37 ~ パッチの MESSAGE インスタンス.....	168
図 5.38 ~ ZSERVICE サンプル サービス.....	171
図 5.39 ~ ZSERVICE インスタンスの新規作成.....	172
図 5.40 ~ SALES SERVICE インスタンスの新規作成.....	173
図 5.41 ~ 新規作成された [SALES SERVICES] インスタンス	173
図 5.42 ~ ショートカットメニューの [接続を表示] を選択した状態.....	174
図 5.43 ~ [SOFTWARE.ZSERVICE 接続] ダイアログ ボックス	175
図 5.44 ~ リスト ビューに表示された Application (ZSERVICE) クラスのインスタンス.....	176
図 5.45 ~ 完成した [SALES SERVICES] マスター グループ	177
図 5.46 ~ メニュー コマンドによる通知を行う場合のショートカット メニュー	179
図 5.47 ~ 通知の開始を確認するダイアログ ボックス.....	180
図 5.48 ~ オーディエンス リストのエラー.....	180
図 5.49 ~ [Radia Notify Manager] ダイアログ ボックス	181
図 5.50 ~ Radia 通知マネージャで指定できる 3 種類の通知オプション.....	182
図 5.51 ~ [電子メールの送信] オプションを選択し、各ボックスに情報を入力した状態	183
図 5.52 ~ 通知タイプを選択すると表示される [通知の詳細] ダイアログ ボックス	185
図 5.53 ~ ドメイン名を指定するために [カスタム通知ドメインを使用] チェック ボックスをオンにした状態	186
図 5.54 ~ [延期された通知] チェック ボックスをオンにすると表示される日付/時刻コントロール.....	187
図 5.55 ~ 通知のタイプおよび詳細の指定が完了すると表示される通知の概要	188
図 5.56 ~ [通知が開始されました] ダイアログ ボックス.....	189
図 5.57 ~ 通知のステータスが表示される [通知ステータス] ダイアログ ボックス	189
図 5.58 ~ 最初の通知後、Radia System Explorer のツリー ビューの [Database] に他のファイルと共に表示される NOTIFY ファイル.....	190
図 5.59 ~ NOTIFY ファイルのショートカット メニュー	190
図 5.60 ~ Radia Configuration Server の EDMPROF.DAT ファイルの抜粋.....	192

図 5.61 ~ クラスのショートカット メニュー	194
図 5.62 ~ [インスタンスのフィルタ] ダイアログ ボックス	195
図 5.63 ~ [Users クラス] に対するフィルタ仕様が [現在の設定] の下に表示されている状態	195
図 5.64 ~ [Users クラス] に適用されたフィルタ	196
図 5.65 ~ File クラスなどのコンポーネント クラスをフィルタする場合の [インスタンスのフィルタ] ダイアログ ボックス	198
図 5.66 ~ [所有するパッケージ] ボックスの一覧を基にフィルタされた FILE クラスの全インスタ ンス	199
図 5.67 ~ RAD_MAST インスタンスに ZADMIN クラスのインスタンスへの接続が設定されている状 態 ([Radia System Explorer] ウィンドウのリスト ビューで強調表示されている行)	200
図 5.68 ~ インスタンス マスクのリストを取得するために ZADMFUNC 変数の値が MASKINST に設 定されている状態	201
図 5.69 ~ シンボリック変換によって ZLIST32.MASTER_SYSTEM_INSTANCES に対する接続が確 立された状態.....	202
図 6.1 ~ Radia Client Explorer のリスト ビューで、インスタンス名、ヒープまたはインスタンスの 数、インスタンスのサイズ、インスタンスの最終修正日時を表示した状態	207
図 6.2 ~ インスタンスをダブルクリックしてオブジェクト内部を表示した状態.....	208
図 6.3 ~ Radia データベースでの ZMASTER オブジェクトの格納場所	210
図 6.4 ~ Radia Configuration Server による解決の実行.....	211
図 6.5 ~ PRIMARY.SYSTEM.PROCESS.ZMASTER インスタンス	211
図 6.6 ~ POLICY.USER.ALEE インスタンス	212
図 6.7 ~ ZSERVICE.AMORTIZE インスタンス.....	213
図 6.8 ~ ZMETHOD.PUTPROF_ZMASTER インスタンス.....	214
図 7.1 ~ PRIMARY ファイルの ADMIN ドメインで Connection Rules (ZCONNECT) クラスの MASTER_CONNECTION_RULES インスタンスを選択した状態	218
図 7.2 ~ ADMIN ドメインの Name Lists (ZLIST) クラス.....	219
図 7.3 ~ ZLIST.CONNECT_USER_TO_RULES インスタンス	220
図 7.4 ~ POLICY ドメインの接続可能クラス	221
図 7.5 ~ ZLIST クラスの CONNECT_TEST_TO_RULES	223
図 7.6 ~ 作成した TEST クラスの接続可能クラス.....	224
図 7.7 ~ Connection Rules クラスの変数のリストに新しいクラスの名前を追加した状態	225
図 7.8 ~ 接続規則で変数を設定した状態.....	226
図 7.9 ~ MASTER_CONNECTION_RULES に TEST クラスの接続規則を追加した状態.....	227
図 8.1 ~ Radia System Explorer のツリー ビューから機能セット エディタにアクセス	231
図 8.2 ~ [機能セット エディタ] ダイアログ ボックス	232

図 8.3 ~ 子機能を表示した状態	233
図 8.4 ~ Microsoft Word の子機能を非表示にした状態	234
図 8.5 ~ 機能の横にあるドロップダウン ボタンをクリックして機能メニューを表示した状態	235
図 8.6 ~ 各機能を表す絵	240
図 8.7 ~ 属性が変更された機能の名前が太字で表示されている状態	241
図 8.8 ~ 機能名を右クリックして [Hide] と [Disable] のショートカット メニューを表示した状態	242
図 8.9 ~ 非表示にした機能の名前にプレフィックス (H) が追加された状態	243
図 8.10 ~ 無効にした機能の名前にプレフィックス (D) が追加された状態	244
図 8.11 ~ [DATA1.MSI インスタンスを編集] ダイアログ ボックスを使用して SHOWINCP の値を N に変更した状態	247
図 8.12 ~ パッケージをコピー	248
図 8.13 ~ [パッケージをコピー] ダイアログ ボックス	249
図 8.14 ~ [パッケージとコンポーネントのコピー] ダイアログ ボックス	249
図 8.15 ~ ショートカット メニューから機能セット エディタを起動する	250
図 8.16 ~ 機能セット エディタに、プロパティを [無視] に設定したアプリケーションが表示されている状態	251
図 9.1 ~ レジストリ ファイル エディタへのアクセス	256
図 9.2 ~ コンテキスト メニューで [レジストリ リソースを編集] をクリックする	257
図 9.3 ~ レジストリ ファイル エディタ	257
図 9.4 ~ ノードの展開	258
図 9.5 ~ ノードの折りたたみ	259
図 9.6 ~ ノード プロパティの設定	259
図 9.7 ~ パッケージのレジストリ インスタンスを選択した状態	262
図 9.8 ~ リスト ビューで値名をダブルクリックし、編集するキーを選択した状態	263
図 9.9 ~ [値を上書き] ダイアログ ボックス	264
図 9.10 ~ レジストリ ファイル エディタの終了を確認するダイアログ ボックス	265
図 B.1 ~ コンポーネントの編集、置換、追加コマンドを含むインスタンス ショートカット メニュー	290
図 B.2 ~ [オプション] ウィンドウの [詳細] タブの [ファイル タイプ コンポーネントの追加、編集、および置換オプションを表示]	292
図 B.3 ~ コンポーネントの編集、置換、追加コマンドが表示されたショートカット メニュー	293
図 B.4 ~ 修正するファイル インスタンスを右クリックしてショートカット メニューを表示した状態	295
図 B.5 ~ [エディタ セレクタ] ダイアログ ボックス	296
図 B.6 ~ コンポーネント データの編集を確定するための [ファイルの再転送] ダイアログ ボックス	297

リスト

図 B.7 ~ 編集セッションでの変更を反映したファイルのインスタンス属性 (日付、時刻、およびサイズ).....	298
図 B.8 ~ コンポーネントの編集で使用する [エディタ セレクタ] ダイアログ ボックス	299
図 B.9 ~ データを置換するファイル インスタンスを右クリックして、ショートカット メニューの [コンポーネント データを置換] をクリックする.....	301
図 B.10 ~ AMORTIZE.TXT のデータを置換するコンテンツを格納したファイルを選択する.....	302
図 B.11 ~ コンポーネント内のデータの置換を確認するダイアログ ボックス	302
図 B.12 ~ 追加するコンポーネントのロケーションのテンプレートとして使用するファイル インスタンスを右クリックし、ショートカット メニューの [コンポーネントを追加] をクリックする.....	304
図 B.13 ~ パッケージに追加するファイルの格納場所に移動した状態	305
図 B.14 ~ コンポーネント インスタンスの追加を確認するダイアログ ボックス.....	306

表

表 P.1 ~ スタイル	7
表 P.2 ~ 用法.....	7
表 P.3 ~ 用語 *	8
表 1.1 ~ 主要な Radia 用語	18
表 2.1 ~ マウス アクションの概要.....	22
表 2.2 ~ [編集] メニュー	27
表 2.3 ~ [ビュー] メニュー.....	28
表 2.4 ~ [ウィンドウ]メニュー	29
表 2.5 ~ [ヘルプ] メニュー.....	30
表 2.6 ~ [Radia System Explorer] ツール バー	31
表 2.7 ~ [全般] タブの設定とその機能.....	33
表 2.8 ~ [インスタンス オプション] タブの設定	36
表 2.9 ~ [詳細] タブの設定.....	39
表 2.10 ~ [通知] タブの設定.....	42
表 3.1 ~ [クラス情報] のプロパティ	63
表 3.2 ~ クラスの属性のタイプとその機能	65
表 3.3 ~ マネージャ プロパティとその機能	66
表 4.1 ~ POLICY ドメイン.....	89
表 5.1 ~ 新規アプリケーション ウィザードに格納される変数.....	127
表 5.2 ~ [アプリケーション プロパティ] のデータ入力フィールド.....	130
表 5.3 ~ イベントレポート用キーワードとその意味	133
表 5.4 ~ イベントレポート用キーワードに関連付けられた値.....	133
表 5.5 ~ PATCH クラスの属性.....	151
表 5.6 ~ ファイルと進行状況の情報	162
表 5.7 ~ [パッチ条件] の情報	163
表 5.8 ~ ボタンの機能.....	164
表 5.9 ~ ZSVCGRP 変数.....	170
表 5.10 ~ 有効なフィルタ式の例	193
表 8.1 ~ 機能メニューのオプション	236
表 8.2 ~ 機能セット エディタのボタン	245
表 9.1 ~ レジストリ ファイル エディタのコンテキスト メニューのオプション	260

リスト

表 A.1 ~ PRIMARY、ドメイン、クラスのショートカット メニュー.....	272
表 A.2 ~ ADMIN インスタンスのコンテキスト メニュー	273
表 A.3 ~ AUDIT インスタンスのコンテキスト メニュー	274
表 A.4 ~ NOVADIGM インスタンスのコンテキスト メニュー	276
表 A.5 ~ PATCH インスタンスのコンテキスト メニュー.....	277
表 A.6 ~ POLICY インスタンスのコンテキスト メニュー	278
表 A.7 ~ SOFTWARE インスタンスのコンテキスト メニュー	279
表 A.8 ~ SYSTEM インスタンスのコンテキスト メニュー	282
表 A.9 ~ ADMIN ドメイン インスタンスのコンテキスト メニュー	282
表 A.10 ~ AUDIT ドメイン インスタンスのコンテキスト メニュー	283
表 A.11 ~ NOVADIGM インスタンスのコンテキスト メニュー	284
表 A.12 ~ PATCH インスタンスのコンテキスト メニュー	284
表 A.13 ~ POLICY インスタンスのコンテキスト メニュー	285
表 A.14 ~ SOFTWARE インスタンスのコンテキスト メニュー	285
表 A.15 ~ SYSTEM インスタンスのコンテキスト メニュー	287
表 B.1 ~ 詳細なコンポーネント編集コマンドの使用例.....	291
表 B.2 ~ [エディタ セレクタ] ダイアログ ボックスのボタン.....	299

手順

Radia System Explorer を開くには	23
[サポート情報管理 AutoImport のオプション] を指定するには.....	41
ツリー構造を表示するには.....	48
下位ノードの取り除く機能を使用するには.....	50
ツリー ビューでノードとその下位ノードを再ビルドするには.....	51
ファイルにドメインを追加するには	55
既存のクラスをコピーするには.....	56
クラスを新規作成して追加するには	59
クラスを編集するには.....	62
クラスとそのすべてのインスタンスを削除するには	73
既存のインスタンスをコピーするには.....	74
インスタンスを新規作成して追加するには.....	75
インスタンスを編集するには	76
複数インスタンスの編集を開始および実行するには	78
現在の [インスタンス編集] ダイアログ ボックス セッションで行われたすべての変更を 元に戻すには.....	81
インスタンスの名前を変更するには	83
インスタンスを削除するには	84
新しいユーザーを作成するには.....	90
Departments (DEPT) クラス インスタンスを作成するには.....	99
ユーザーを Departments (DEPT) クラス インスタンスに接続するには	107
サービスをポリシーに接続するには	114
新規アプリケーション ウィザードを使用して GS-CALC サービスを作成するには.....	122
新規アプリケーション ウィザードで [MSI Basic Behaviors] を定義するには	136
パッケージのバージョン グループ インスタンスを作成するには	137
バージョン インスタンスをバージョン グループに割り当てるには.....	146
バージョン グループのバージョン割り当てを解除するには	148
バージョン インスタンスをバージョン グループから削除するには.....	148
バージョン グループを編集するには	149
サービスの最適化を設定するには	153
マスター グループを作成するには	171

リスト

通知イベントを作成するには	179
ドメイン名を指定するには	186
指定した日付/時刻まで通知を延期するには	187
ESB_ というプレフィックスで USER クラスのインスタンスをフィルタするパーマネント フィルタ を設定するには	194
パーマネント フィルタを削除するには	196
ESB_ というプレフィックスで USER クラスのインスタンスをフィルタするテンポラリ フィルタを 設定するには	197
テンポラリ フィルタを削除するには	197
ベース インスタンスまたは null インスタンスを表示するには	197
FILE インスタンスをフィルタして、特定の PACKAGE インスタンスに接続されているものだけを選 択するには	199
機能セット エディタにアクセスするには	231
新しい機能セットを作成するには	248
レジストリ ファイル エディタにアクセスするには	256
ツリー ビューの単一ノードを展開するには	258
ツリー内の単一ノードを折りたたむには	259
レジストリ キー内のデータを編集するには	262
レジストリ キーのデータを編集するには	264
レジストリ ファイル エディタに閉じるには	265
コンポーネントを編集するには	294
"すべての" コンポーネント データを置換するには	300
コンポーネントをパッケージに追加するには	304

索引

A

ADMIN ドメイン, 47
Application Management クライアント, 268
[Association] ボタン, 299

B

[Browse/Add] ボタン, 299

D

DATA1.MSI, 246

H

[Hide] と [Disable] のショートカットメニュー, 242

I

IGNORE 機能状態, 239
[Info/Rename] ボタン, 299

K

[KB AutoImport] タブ, 39

L

LICENSE ファイル, 47

M

MD5 署名, 150, 152
MSIEXEC, 252
MSIFEATS, 231, 250, 252
MSI でパッケージ化された製品, 169
MST, 252

N

NAME 属性, 19
NOTIFY
 ファイル構造, 191
NOVADIGM ドメイン, 47

O

[OK] ボタン, 299

P

PATCH クラス, 47, 150, 167
PATCH ドメイン, 47, 150, 167
POLICY ドメイン, 47
PRIMARY ファイル, 18
 ADMIN ドメイン, 47
 NOVADIGM ドメイン, 47
 PATCH ドメイン, 47
 POLICY ドメイン, 47
 SOFTWARE ドメイン, 47
 SYSTEM ドメイン, 47
 ドメイン, 49
PRIMARY ファイル、説明, 47
PROFILE ファイル、説明, 47

R

Radia
 カスタマイズ, 19
 マウス アクション, 22
 用語, 18

- Radia データベース
 - 追加
 - ファイル, 303
- Radia Integration Server, 268, 269
- Radia Inventory Manager, 268
- Radia MSI メソッド, 127
- [Radia System Explorer]
 - ウィンドウの表示, 25
 - サイズの変更, 26
- Radia System Explorer
 - オプション, 32
 - KB AutoImport オプション タブ, 40
 - [インスタンス オプション] タブ, 35
 - 詳細なオプション タブ, 38
 - 通知オプション タブ, 42
 - 管理機能, 32
 - 機能, 16
 - コンテキスト メニュー, 55, 271
 - ツリー構造の表示, 48
 - データベース、ツリー ビューの変更, 48
 - データベースに対するフィルタ, 193
 - 開く, 23, 206
 - ポップアップ メニュー, 271
- Radia データベース
 - 構造, 18
- Radia サービス グループ, 169
 - マスター サービス, 169
- Radia データベース
 - PRIMARY ファイル, 18
 - SYSTEM ドメイン, 18
 - USER クラス, 18
 - インスタンス, 18
 - インスタンスの削除, 84
 - インスタンス名の変更, 83
 - オプション編集, 69
 - 階層, 24
 - クラス, 18
 - クラス インスタンス, 18
 - クラスの削除, 73
 - コンテンツ, 46
 - 属性, 19
 - 属性値, 19
 - 追加
 - インスタンス, 73
 - コピー, 74
 - 新規作成, 75
 - クラス, 56
 - コピー, 56
 - 新規作成, 59
 - クラス属性, 68
 - ドメイン, 55
 - ツリー構造の表示, 48
 - ツリー ビュー, 24
 - ツリー ビューの変更, 48
 - ドメイン, 18
 - ドロップダウン リスト, 71
 - ナビゲーション履歴, 50
 - [下位ノードを取り除く], 50
 - 破棄, 50
 - バージョン グループ
 - バージョン インスタンスの削除, 148
 - バージョン インスタンスの追加, 142
 - バージョン インスタンスの割り当て, 146
 - バージョン割り当ての解除, 148
 - 編集, 149
 - ファイル, 18
 - フィルタ, 193
 - フラグ セット属性, 70
 - フラグ属性, 69
 - 編集, 55, 271
 - インスタンス, 76
 - クラス, 62
 - マネージャ プロパティの表, 66
- Radia のカスタマイズ, 19
- Radia の用語, 18
- Radia レジストリ ファイル エディタ, 「レジストリ ファイル エディタ」を参照
- radskman, 169
- Registry Resource インスタンス, 256
- RIMSFSCAN, 269
- RIMWBEM, 269

S

SHOWINCP 変数, 246, 247
 Software Management クライアント, 268
 SOFTWARE ドメイン, 47, 49
 System Explorer, 「Radia System Explorer」を参照
 SYSTEM ドメイン, 18, 47

U

USERID 属性, 19
 USER クラス, 47
 説明, 18

W

WBEM ネームスペース, 269, 270
 [Windows インストーラ メソッドを設定] チェック
 ボックス, 126

Z

ZOBJPTCH 変数, 150
 ZRSCDATE 属性, 298
 ZRSCSIZE 属性, 298
 ZRSCTIME 属性, 298
 ZSERVICE インスタンス, 47

あ

[値を上書き] ダイアログ ボックス, 264
 [新しいクラスが追加されたとき] チェック ボックス, 33
 アプリケーション インスタンス、作成, 122

い

一時クラス, 63
 イベントのレポート
 キーワード, 133
 イベントのレポート, 131
 インクルード接続, 65
 インスタンス
 コピー, 74
 削除, 84
 新規作成して追加, 75

追加, 73
 名前の変更, 83
 複合名, 52
 プレフィックス付きの名前, 52
 編集, 76

[インスタンス オプション] タブ, 36
 [インスタンスのフィルタ] ダイアログ ボックス,
 195, 198
 [インスタンス編集] ダイアログ ボックス, 37, 76
 インスタンス名、プレフィックス, 52
 [インスタンス名の変更] ダイアログ ボックス, 83

え

エイリアス名, 68
 [エディタ セレクタ] ダイアログ ボックス, 296
 [エディタ セレクタ] ダイアログ ボックス
 使用, 298
 [エディタ セレクタ] ダイアログ ボックス
 ボタン, 299
 [エディタ] ボックス, 296

お

オプションのアプリケーション, 128

か

解決プロセス
 説明, 206, 215
 停止式の評価, 213
 下位ノードを取り除く, 50
 [拡張] 検証オプション, 126
 カスタマー サポート, 4
 管理インストール ポイント, 248

き

機能セット エディタ
 現在の設定, 240
 [使用不可], 238
 ショートカット メニュー, 231
 ダイアログ ボックス, 232
 ツリー内の移動, 233

[初めて実行するときにインストール], 236
プログラムの追加と削除, 246, 247
[無視], 239
機能の現在の設定, 240
[キャンセル] ボタン, 299

く

クライアント プロパティ
[実行], 66
[保護], 66
クラス
コピー, 56
削除, 73
新規作成して追加, 59
接続タイプ, 65
属性のタイプ
式, 65
接続, 65
メソッド, 65
変数, 65
追加
インスタンス, 73
属性, 68
ファイル, 303
定義, 18
編集, 62
クラス インスタンス、定義, 18
クラス エディタ, 57
[クラスがコピーされたとき] チェック ボックス, 33
クラス情報、プロパティの表, 63
クラス接続, 65
クラスのタイプ
none, 64
値, 64
コンポーネント, 64
設定, 64
ポリシー, 64
[クラス編集] ダイアログ ボックス, 33, 62

け

継承, 54
ベース インスタンス, 54
[検証オプション], 126

こ

高速フィルタ
カスタマイズ, 200
説明, 199
[このコンポーネントを編集]
使用例, 291
説明, 294
[ファイルの再転送] ダイアログ ボックス, 297
コンテキスト メニュー, 55, 271
コンポーネント
パッケージへの追加, 304
編集, 294
[コンポーネント データを置換]
使用例, 291
[コンポーネント データを置換]
説明, 300
コンポーネント クラス, 198
フィルタ, 198
例, 112
コンポーネント クラスのインスタンス, 198
コンポーネント データ、置換, 300
コンポーネントの編集, 294
[コンポーネントを追加]
使用例, 291
説明, 303

さ

サービス グループ、作成, 170
サービスの最適化, 149, 152
使用, 152
設定, 153
[削除] ボタン, 299

し

式属性タイプ, 65
 常時接続, 65
 [使用不可], 238
 所有するパッケージ, 198
 新規アプリケーション ウィザード, 122
 変数, 127

せ

セキュリティ ダイアログ ボックス, 23
 接続
 コンポーネント クラス インスタンスのドラッグ ア
 ンド ドロップ, 112
 有効化, 222
 接続属性タイプ, 65

そ

属性
 エイリアス, 68
 定義, 19
 属性値、説明, 19
 [属性にインスタンスのエイリアス名を含める], 68
 属性のタイプ
 式, 65
 接続, 65
 変数, 65
 メソッド, 65
 [存在/存在], 260

つ

通知
 Retry Manager, 192
 STARTDIR を指定, 41
 UID を指定, 41
 アプリケーションの更新, 184
 アプリケーションの削除, 184
 オーディエンスの作成, 180
 開始, 178
 再試行, 191

失敗, 191
 ステータス ウィンドウ, 189
 説明, 178
 電子メールの送信, 183
 ドラッグ アンド ドロップ, 179
 マシン名で, 41
 メニュー コマンドの選択, 179

[通知] タブ, 41

通知の延期, 187
 ツール チップ、説明, 25
 ツリー ビュー、操作, 48

て

停止式, 213
 データベース、「Radia データベース」を参照
 テクニカル サポート, 4
 [デフォルト] 検証オプション, 126
 電子メール通知, 178
 テンポラリ フィルタ
 削除, 197
 設定, 197
 説明, 197

と

ドメイン
 追加, 55
 定義, 18
 ドメイン名の指定, 186
 ドラッグ アンド ドロップ接続
 エラーの回避, 101
 コンポーネント クラス インスタンス, 112
 ドラッグ アンド ドロップ通知, 179

ね

ネイティブ モード, 252

は

バージョン グループ
 バージョン インスタンスの削除, 148
 バージョン インスタンスの追加, 142

索引

バージョンインスタンスの割り当て, 146

バージョン割り当ての解除, 148

編集, 149

バージョン グループ エディタ、説明, 136

パーマネント フィルタ

削除, 196

設定, 194

説明, 194

バイト レベルの差異計算によるバッチ生成, 152

配布モデル

説明, 17

要素

アプリケーション, 17

アプリケーション ファイル, 17

配布先, 17

配布元, 17

ユーザー, 17

[初めて実行するときにインストール], 237, 239

パッケージ、複製, 249

[パッケージとコンポーネントのコピー] ダイアログ
ボックス, 249

パッケージのコピー, 249

バッチのビルド, 163

バッチのビルドの制約, 162

ひ

必須接続, 65

必須のアプリケーション, 128

ふ

ファイル

追加, 303

定義, 18

ドメインの追加, 55

[ファイルと進行状況] ダイアログ ボックス, 161

[ファイルの再転送] ダイアログ ボックス, 297

フィルタ, 193

テンポラリ

設定, 197

説明, 197

パーマネント

削除, 196

設定, 194

説明, 194

フィルタ仕様

サンプルの表, 193

説明, 193

有効な式, 193

複合名

インスタンスに使用, 52

プレフィックス, 52

複数インスタンス

選択, 78

編集, 78

複数のインスタンス

[インスタンス編集] ダイアログ ボックス, 79

プレフィックス、複合名で使用, 52

プログラムの追加と削除アプレット, 246, 247

[分割バーを画面右側に固定], 34

へ

ベース インスタンス

継承, 54

説明, 54

変換ファイル, 252

変数属性タイプ, 65

ほ

ポップアップ メニュー、表示方法, 271

ま

[マイ コンピュータから実行], 236

[マイ コンピュータからすべて実行], 236

マウス

アクションの表, 22

使用, 22

マスター グループ、作成, 171

マスター サービス, 169

マネージャ プロパティ、表, 66

む

[無視], 239

[無条件/強制], 260

[無条件/存在], 260

め

メソッド属性タイプ, 65

メッセージダイジェストアルゴリズム, 150

メニュー コマンドによる通知, 179

れ

レジストリ キー、編集, 262

[レジストリ ファイル エディタ]

ダイアログ ボックス, 257

レジストリ ファイル エディタ, 256

アクセス, 256

ダイアログ ボックスをとじる, 265

ツリー内の移動, 258

ろ

ログオン ダイアログ ボックス, 23

